

パーラーの紳士
The Gentleman in the Parlour

ウィリアム・サマセット・モーム^{*1} 序文：ポール・セロー^{*2}
訳：山形浩生^{*3}

2014年4月4日

^{*1} 翻訳権消失

^{*2} ©2009

^{*3} ©2013 山形浩生 禁無断転載、無断複製。

目次

序文

一九二二年にウィリアム・サマセット・モームは劇作家、短編作家、長編作家、さらには社交家まがいとして大成功をおさめていたが、突然姿を消してかなり厳しいことも多い長旅に出た。それが本書に記録された旅だ。イギリスからセイロンに船ででかけ、そこで出会った男にビルマの北東部辺境にあるシャン州チェントンは楽しいと聞かされた。これに触発されて、彼はラングーン経由でマンガレーに旅をして、そこからロバに乗ってこの不思議なはずの場所に向かった。旅には二六日かかった。彼はその地の美点をノートに記録すると、さらにタイ国境まで来てくと進み、そこにフォード車が迎えに来てバンコクにまで彼を運んだ。その後はカンボジアへ船旅、アンコールヘトレッキング、さらに川旅でサイゴンに向かい、沿岸小旅行でフエ経由でハノイへと進んだ。本はそこで終わるが、実は彼は太平洋を渡り、アメリカを横断し、大西洋を渡ってロンドンに戻ると、著作業に社交を再開した。だが本書を書きはじめたのは、その七年後になってからで、この迂遠で選択的な旅行記を評価するときにはこの事実を考慮する必要があると思う。

旅行後から本書執筆までには、かなりの著作をものしている。『五彩のヴェール』(1925)、そしてシンガポールとマラヤに別の旅行をしてからは、『カジュアリーナ・トリー』(1926)の強力な短編群、『アシェンデン』の諜報物語(1928)、そして少なくとも二本の長編戯曲を書いた。この時期に彼は少なくとももう一回訪米しており、一九二七年にはリヴィエラに大邸宅を買ってモーレスク邸と名付けた。ここで豪勢な暮らしを送りつつ彼は長編『お菓子と麦酒』を書き上げ、やっと『パーラーの紳士』を書いた。この二作はどちらも同年、一九三〇年に刊行され、伝記作者の一人によればこれはモームのキャリアの頂点だったという。『パーラーの紳士』は奥歯にももののはさまったような、ねたましげと言えなくもないような書評を受けた。モームはそういう書評を受けるのが常で、それを書く批評家たちはモームが金持ちで作家として成功しており、コネもある一種のスノップで、華やかな暮らしも送っていることを十分に承知しており、したがって特にモームをほめる気にもならなかったのだった。

モームは困難な旅に耐えたことについてまったく賞賛を受けなかったが、この旅行の一部はかなりつらいものだった。彼はビルマのパガンにある一大寺院建築群を旅したので、イラワディ川を下らざるを得ず、ほぼ一ヶ月近くをロバの背に乗ってチェントンに向かったのだ。カンボジアではトンレサップ川を帆船で上り、大きな湖を横切って、当時は僻地だったアンコールの地区を見物した。そこは当時、ジャングルの中にあるおとぎ話のような無人の廃墟でしかなかったのだ。

だが旅と本の間での遅れに注目したい。旅行記を書きたいと思う人は、旅に出てその直後に本を書くのが通例だ。顕著な例外はパトリック・リー・ファーマーで、彼はオランダからコンスタンチノーブルまで徒歩でヨーロッパ横断を一九三三―三四年になしとげたが、

その旅行記を書いたのは何十年も後 『贈物の時』(1977)と『遙かなるドナウ』(1980)でのことだった。この二冊は実に新鮮で書き込みも詳細だから、書くまでにそんなに時間がたっているとはまったく気がつかないほどだ。

モームの場合、この休憩は良かれ悪しかれちがいをもたらした。帰国してすぐに書いたら、こんな本にはならなかったと思う。本書の語り口と構造は、時間がたったせいだ。本書はその結果としてあまり細かくはなく、省察的で入念で技巧的であり、入り組んでいるとさえいえる。話はまとめられており、旅行者の真の人物像や性向についてはあまり明かすのを避けている。本書の佳境といえば、ビルマ北部のロバ旅行、バンコクでの一時期、そしてアンコールの記述だろう。

本書の中で、モームは旅行したいという願いと旅行者の性質を分析している。こうした観察は、それがモーム自身にあてはまる点で雄弁だ。「[旅行者が] 旅に乗り出すとき、置いていくべき唯一の人物は自分自身である」。本書は実はこれを実行していない。そして旅行記の性質についての話では「もし言語がそれ自体として好きで、自分に最も満足のいく順番で言葉を紡ぎ、美的効果を生み出すのがおもしろいと思うなら、その機会を与えてくれるのはエッセイか旅行記である」。この主張もまた私には怪しく思える。旅行記は文体披露の正反対であるべきで、むしろ世界のありのままの姿を見る私的な方法であるべきだろう。

「いろいろ旅はしてきたが、私はあまりよい旅行者ではない」とモームは別のところで述べている。「よい旅行者は驚きという才能を持っている」と。モームは、自分にはそれが欠けているのだと続ける。習俗については、そういうものかと思って受け入れるだけだ。旅は解放してくれるもので、気分転換だと考えている。「旅をするのは、あちこち移動するのが好きだからで、それが与えてくれる解放感が楽しいから」と述べ、この調子で続けて次のように終える。「私はしばしば自分に退屈しており、旅をすることが己の個性の足しとなり自分を少し変えられると思っている。旅から連れ帰る自分は、出発したときに持ち出したのとはちがう自分なのだ」。

こうした記述はすばらしく直裁だし率直に思えるが、実はこの旅行記でモームがかなりの改変を行っているのがわかっている。そして、モームは生涯にわたり、隠蔽とごまかしの名手であったことも。

『パーラーの紳士』は相当部分が短編集だ 旅人の物語を集めている。モーム自身の物語ではなく、彼の出会う人々の話だ。本書には、独自で上手い話が詰まっている。ジョージとメイベルの結婚を巡るマンガレーでの物語、タジではマスターソンとビルマ人の愛人との変わった結びつき、モンピンでは神父の孤独の物語、ロップリではコンスタンチン・フォールコンの物語、バンコクでは九月王女のおとぎ話、フランス総督の嫁探しなど船上でのいろいろな物語、そして少なくともあと二編、一つは旧友のグロスリーをめぐるもので、もう一つはアメリカ人エルフェンペインについてのものだ。

物語はどれも、出会った人々が話してくれたような書きぶりだ。あるいは「九月王女」の場合には、バンコクでのマラリア重症中の譫妄時に想像したもののようなようだ。だがこうした物語の一部は、旅に出る前に書かれていた 時には何年も前に。「九月王女」は、一九二二年にメアリー女王の人形の家図書館用の小さな本のために書いたものだ。香港への船上で聞いたことになっているお話は、一九〇六年に書かれて同年の『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』に掲載された「便宜上の結婚」だ。ビルマの町タジで子供三人を生ませたという現地女性との情事を語ったとおぼしきイギリス人のマスターソンは、『イ

ンターナショナルマガジン』一九二九年一二月号に短編として登場している。そしてこれは後に『モーム短編集』に「マスターソン」なる題名で収録されているのだ。

かなり長々とした(そしてどうみてもマラリアからの着想には思えない)「九月王女」を除けば、どの物語も魅力的な人物描写であり、現地色(放蕩の植民地、大酒飲み、婚外情事)が加わってモームの短編、特にその彼方の人物たちにスパイスを効かせている。またそれらは、短編「マスターソン」(そして第10章)におけるモームの以下の主張も裏付けているようだ。「私は通りすがりの知り合いで、これまで会ったこともなく、おそらくはこの先会うこともないだろう(中略)私はこのようにして、その人物について十年に及び知己として学べたよりはるかに多くのことを、一夜のうちに(ソーダ何本かとウィスキーを飲みつつ、アセチレン灯の範囲外にある険悪で説明しがたい世界に取り囲まれて)学んできたのだ」。

だがモームは、見知らぬ相手と二人きりでウィスキーを傾けたりしたことはあまりない。モームはもともと無口だった。どもりのせいであまり話上手ではない。同性愛のせいで、私生活や嗜好について話したがない。本書の中で彼が隠している重要な事実は、一人旅ではなかったということだ。恋人にして伴侶のジェラルド・ハクストンが同行していたのだ。彼は一八歳年下で、飲んだくれでごろつきじみた人物だったが、人々とうちとけたり、地元の人々と会ったりするときには有用だったし、道中の多くの手配も行って、多くの点でモームの内縁の夫といったところだ。『サミング・アップ』でモームはこう説明している。「私は見知らぬ人と知り合いになるのが苦手だが、旅行のときには幸運にもかなりの社交的な才能を持った同伴者[ハクストン]がいて、彼は立派な社交の才を有していた。人好きのする性格で、きわめて短時間で船やクラブ、酒場、ホテルなどで人と仲良くなれ、おかげで彼を通じて私は大量の人々と容易に接触を持てたが、そうでなければ遠巻きにその人々を観察するだけだっただろう」。

だが本書では、モームが一人きりで見知らぬ相手を焚きつけて話をさせ、不明に立ち向かい苦境と闘い、輸送や切符の問題を解決するなど、時に旅を実に無味乾燥な退屈事にしてしまう各種の面倒を処理していたような印象を受ける。初めて本書を読んだとき、私はモームのスタミナと、孤独に耐える能力に感嘆した。そして伝記を何冊か読んでみたところで、実はモームは一人ではなく、しばしばかなりの御大尽旅行をしていたことに気がついたのだ。

著書の中で孤独なさまよい人として描かれていた旅行者が(訳注:実は違う、というのが欠けている模様)明かされるというのは、実はそんなに珍しいことではない。ブルース・チャトウィンは、自分がほぼ必ず友人と旅をしていたことは決して言わなかったし、V・S・ナイポールも自分が決して一人きりでは旅をせず、必ず(伝記作者が示したように)妻や昔からの愛人マーガレットと旅をしていたことは明かさなかった。グレアム・グリーンは車も運転できずタイプライターも使えなかったので、絶えず同伴者がいなければほとんど身動きとれない状態だったし、決して一人では旅しなかったウィルフレット・テシガーについても同様だ。集団で旅をしていた旅行者が、自分自身を孤独なさまよい人として描く例は他にもたくさんある。これは別に恥ずかしいことではない。とはいえ、おかげで本当の孤独なさまよい人、たとえば『無人のアラビア』における空虚区域ことルプアルハリ砂漠をラクダに乗って旅したドーティなどが英雄めいて見えてくるのではあるが。

というわけで、モームは友人兼愛人と旅をしていた。そして道中で本書の大半を彼に後述したとも語っている。旅の最後の部分(香港からロンドンへ)は割愛した。すでに書き

ためてあった材料を使い回した。そして書いたものの一部は、本書ではノンフィクションとして登場したのに、別のところではフィクションとして発表されている。だがそれでも、こうした操作のために、本書はモームのもっとも満足のいく旅行記とすらいえる。

『中国の屏風』の全集版序文で、モームは『パラーの紳士』は『中国の屏風』とはちがいで、偶然の産物ではないと書いている……「私はもう一度こうした主題に手を染めてみたいと思ったが、それをもっと入念な規模で、私が明確なパターンを課せるような形式で行いたいと思ったのだ。文体練習だったのだ」。この「文体」ははっきりとはわからない、構造的に（訳注：ここも原文がちょっと変）。旅程こそモーム自身のものだが、ありがちな旅行記ではある。そして操作されてはいても、こうした国外在住者たちの物語はすばらしいものだ。

一貫して自分のことを書いているようなのに、彼は自分のことをほとんど明かさない。ある部分で、彼はカッとなる（部屋が準備できていなかったのだ）が、すぐに気を鎮める。自分の飲酒癖についてちょっと語る。一度アヘンをやったことがあると明かす。自分があまりおもしろくない人物だと固執する多くの作家と同様、モームはきわめて観察力が鋭い。彼のアンコール描写は私がこれまで読んだ中で最高のものの一つだし、タイ宮廷の記述は精妙だ　アジア王家のインサイダー的視点だ。そして（感激していないと言いつつも）フランス式の都市ハノイを見事に描き出している。語り手たるモームには何の情熱もないが、彼の出会う人々やその騒々しい人生には情熱が脈打っている。モームの声は、彼の小説を語る人物の声だ。かの凝視する作家で、ユーモアはないが信頼できる。この物語を語る人物と、モーの小説を語る三人称のナレーションとにはほとんど何のちがいもない。ごくたまに、ちょっとした偏見のかけらが出てくる。たとえば靴下セールスマンのエルフェンベインについて、彼はこう書く。「彼のようなユダヤ人を見ると、ポグロム（ロシアでのユダヤ人虐殺）もうなずける」。かなりひどい書き方だ。だがエルフェンベインはモームにとってある初体験が起こった小説でもある。「肩にチップのついた（ケンカを売られやすい）」という用例の、おそらくは最初期のものの一つなのだ。エルフェンベインについてモームはこう書く。「彼は肩にチップのついた（ケンカを売られやすい）人物だった。だれもが、彼を小馬鹿にしたり傷つけたりしようという陰謀に参加しているかのようだった」。

モーム自身もチップがついていた　それも一つならず。だが一般に彼は、旅行中には禁欲的で、ときに不敵でさえあった。彼の辺境の旅は、本書を非凡なものにしているだけでなく（私にとっては旅行記の最高の属性である）価値ある歴史的文書にもしているのだ。

この不思議で活発で、はしゃいだような人生の一時期において、極東と太平洋を旅し、盗み聞きをしてはメモと取りつつ、彼は水を得た魚のようであり、また最も幸福な時期でもあったかもしれない。人がこんな旅に乗り出すのは、何か新しいものを見つける自信と希望があるときだけだ。孤独な人物だったモームは、他人の孤独にも敏感で、自分自身の限界も痛いほど承知していた。旅は自分自身を孤立させる手段だったし、旅があまりに面倒になると、モームはモーレスク邸での独自の素晴らしい孤立の中で、幸せではなくとも安堵を得ることができた。そこで彼は本書を書き、道中のもっとも幸せだった時期を回想していたのだ。

はじめに

小説家にとって、ときどき小説書きから休息を取るのはとてもよいことだと思う。多くの著者は、毎年の食い扶持を稼いだり、書かずにいると忘れられるのではと恐れるために、年に一本長編を書かざるを得ないのだが、これは気の滅入る稼業だ。いかに想像力が肥沃だろうと、いますぐに表現を求めているようなテーマが内心に常にあって、どうしても書かざるをえないなどということはなかなかない。また、これまで自分では使ったことのない、新鮮で鮮明な登場人物を作り出せるというのも、やはり考えにくい。物語を語る才能を持ち、自分の稼業をわきまえていれば、たぶんそこそこの小説は書き上げられるだろう。でもそれ以上のものになるのは、かなりのツキがあった場合だけだ。作家が生み出すあらゆる作品は、彼自身の精神的な冒険の記録であるべきだ。これは完璧さの忠告だ。千行作家は必ずしも常にそれに従えるとは期待できず、職人めいた作品を生み出すというもっと小さな美德で満足せねばならないことが多いのだが、それでもこの忠告を念頭に置いておくのは本人にとってよいことだ。人間の性質は無限の多様性を持ち、したがって作家が登場人物のモデルとすべき人物に事欠くなど決してあり得ないように思えても、人はその中で自分自身の気質に合ったものしか扱えないものだ。作家は自分自身が登場人物の身になってみる。だが、身になれないような人物もいる。そうした人々は作家にとってあまりに異質なもので、手がかりがまったくないのだ。そうした人々を描くときには外から描くしかなく、共感の伴わない観察が生きた存在を生み出せることは滅多にない。だからこそ小説家は同じようなタイプの登場人物ばかり繰り返し生み出しがちとなる。抜け目なく性別を変えたり、立場や年齢、外見などは変える。でもよく観察すれば、同じ人物が衣装だけ変えて登場しているのがわかる。偉大な小説家であれば、その偉大さの分だけ創り出せる人物の数も増えるだろうが、最高の小説家ですら、登場人物の数は自分自身の制約により限られてしまう。この困難な状況にある程度の対処を行う方策は一つしかない。自分自身を変えればいい。ここで時間こそは主要な要因となる。時間が自分に対して大きな変化を引き起こし、目の前にあるものを新鮮でちがったまなざしで見られるようになれば、その作家は幸運だ。作家自身が変数となり、その量が変化すれば、その人物が等号で結ばれている記号の値も変わってくるのだ。だが場面を変えるのも、条件は一つあるが、大きく役に立つ。冒険旅行をした作家たちを知っているが、その人々はロンドンの自宅や友人たち、イギリス的な興味やその評判を旅行に連れて行ってしまった。そして家に帰ってみると、すべてが出発したときと同じなので驚いてしまったのだ。そのような形では、作家は旅から利益を得ることはできない。旅に乗り出すとき、必ず置いていくべき人物は自分自身なのだ。

本書は『中国の屏風』のような偶然の産物ではない。本書にある旅行を行ったのは、そうしたかったからだ。だが当初から私は、それについて本を書くつもりだった。『中国の

『屏風』を書くのは楽しかった。私はもう一度そうした主題に手を染めてみたいと思ったが、それをもっと入念な規模で、私が明確なパターンを課せるような形式で行いたいと思ったのだ。文体練習だったのだ。長編では、文体は必然的に内容に影響されるし、均質な書きぶりはほとんどの場合に現実的ではない。心の状態の記述は、ある出来事の記述とはちがった表現様式を要求する。そして対話は、少なくとも進行中の発言という印象をそれなりに与えるはずだが、効果の均質性を排除せずにはおかない。悲劇的な下りもやはり喜劇的なものとはちがった書きぶりが求められる。時にはナレーションが会話調を必要とし、そうなれば俗語を気ままに使ったり、意図的に軽率な言葉遣いをしたりする必要もある。時には、可能な限り重々しい部分も求められる。結果はどうしてもごった煮となる。ことばの美しさをあまりに重視したがる作家もあり、その場合の美しさというのは、残念ながら、一般に華麗な語彙と名文を意味するようで、そのために彼らはその主題の性質などお構いなしに、それを均一な型に押し込めてしまうのだ。時にはそうした作家は会話ですらそれにあわせようとして、話者たちがお互いにバランスの取れた、きちんとした構文の文章で語り合うような会話を読めと要求する。すると生気がなくなってしまふ。空気感がなくなって息がつまる。こうした形ではお笑いなど問題外だが、それでも彼らはまるで気にしない。というのも彼らはユーモアのセンスなど滅多に持ち合わせていないからだ。それどころか、ユーモアは彼らが顔をしかめる性質だ。長編においてもっといいやり方は、内容が形式を決めるに任せることだ。長編の文体が最高なのは、身なりのいい人物の服装と同じように、それがまったく意識されないときだ。だがもし言語がそれ自体として好きで、自分に最も満足のいく順番で言葉を紡ぎ、美的効果を生み出すのがおもしろいと思うなら、その機会を与えてくれるのはエッセイか旅行記である。そこでの散文はそれ自体のために練り上げることができる。材料を操作して、お望みの調和をもっともらしく見せることもできる。文体は幅の広い静かな川のように流れることができるし、読者は安全にそこに包み込まれて運ばれる。浅瀬も、逆流も、瀬も岩だらけの峡谷もない。危険はもちろん、読者が眠りに引き込まれてしまい、見せようと思っていた川岸の素敵な光景すら見逃してしまうことだ。本書で私がそれを避けられたかどうかは、読者自身の判断にお任せしよう。私としては、英語ほど執筆のむずかしい言語はないということを忘れないでいただきたいと懇願するばかりだ。英語について学ぶべき事をすべて学べる人物などいない。英文学の長い歴史において、英語をまったく欠陥なしに書けた人物は、六人以上はなかなか見つからないのだ。

1935 年

第1章

チャールズ・ラムについて、彼が読者の多くに引き起こすような愛情を感じられたことは一度もない。私の気性には意地悪な面があって、他人が夢中になっているものは軽蔑してしまい、内面の崇拜能力から血潮が退いてしまうのだ（これは自分自身の意に反してのことだ、というのも天に誓って、私は自分の冷淡さにより回りの人々の熱意に水を差したいなどとはつゆほども思っていないのだから）。あまりに多くの批評家が平凡きわまる言葉でチャールズ・ラムについて書いており、おかげで私は居心地の悪さをおぼえずにラムを読めなくなってしまった。ラムはまるであまりに豊かな心を持っていて、まるでこちらに大災厄がふりかかるのを待って、すかさずその同情心でこちらを包み込もうと待ち構えているかのように思える人々にも似ている。そういう人の腕は、こちらが転んだときには実に素早くさしのべられるので、すりむいた肌をさすりつつも、自分がつまずいたあの石を道に置いたのはまさかあの人自身ではあるまいな、とついつい思ってしまうのだ。私はあまりに魅力ある人々がこわい。そういう連中はこちらを食い尽くす。気がつけば、こちらは連中のすばらしい才能と不誠実ぶり実行の生け贄にされている。また私は、当人の魅力が主たる資産であるような作家もあまり評価しない。それでは不十分なのだ。私は自分が食らいつけるものが欲しい。そしてローストビーフとヨークシャーピングを頼んだときには、パンとミルクを与えられても満足できない。優しきエリアのまっとうぶりには赤面させられる。一世代にわたり、ルソーがあらゆる作家の心をわしづかみにしており、当時はまだ感情たっぷりに書くのが流行ではあったが、それでもラムの感情は私には、アル中の安直な涙もろさを思わせることが多すぎる。ついつい、彼の優しさは禁酒に青錠剤と黒溶液（訳注：青錠剤と黒溶液は民間便秘薬）でかなり改善されたのではないかと思ってしまうほどだ。もちろん同時代人が彼について書いた記述によれば、優しきエリアは感傷主義者たちの発明品だということがわかる。彼は人々が仕立て上げたよりもずっと頑健で怒りっぽく短気な人物であり、自分の描かれ方を見れば（正当にも）笑ったことだろう。ベンジャミン・ハイドンの酒場で夜に出くわしたら、お目にかかるのは無精なチビで、いささか酒浸りでかなり退屈で、冗談を飛ばしたにしても半分くらいはひどいものだっただろう。実はそれは優しきエリアではなくチャールズ・ラムだったはずだ。そして『ロンドンマガジン』で彼のエッセイをその朝読んでいたら、それは納得のいく小篇だと思っただろう。その素敵な一篇がいつの日か、教養人たちの気慰みの口実として使われるなどとは思っても寄らなかつたはずだ。その時には、それを正しい精神で読んだことになる。というのもそれならばその記事を生きたものとして読んだことになるからだ。作家が直面する不幸として、存命中にはあまりに賞賛を受けることなく、死んだときには賞賛されすぎるといふものがある。批評家たちは、マキャベリが書いたような古典を正装して読めと強制する。だが実はそれらを、自分の同時代人として部屋着のままで読む方がずっとよいのだ。

そしてラムを世間の見方に従うのではなく逆らう形で読んだために、私はハズリットなどまったく読まないことにしていた。緊急に読むよう送られてくる無数の本がある中で、他の人が見事にやったことを凡庸に（と思っていた）やっただけの作家など無視しても構わないという結論に達したのだ。そして優しきエリアには退屈させられた。ラムについて何かを読むたびに、必ずハズリットについても冷やかすと軽蔑に出くわす。フィッツジェラルドはかつてハズリットの生涯について書くつもりだったが、その人物に対する嫌悪でプロジェクトを中止したというのは聞いていた。彼は意地悪で野蛮で険悪な小人物であり、ラム、キーツ、シェリー、コールリッジ、ワーズワースが実にまばゆい輝きをもって光る一団の中では分不相応な評価を受けているらしい。かくも才能がなく人物的にも不快な作家で時間をわずかでも無駄にする必要はなさそうだった。だがある日、長い旅に出ようとしているとき、バンパス書店をうろついて旅に携える本を探しているとき、ハズリットのエッセイ集の一角にやってきた。それは緑の表紙のすてきな小型本で、印刷もきれいで値段も安く手にも軽いし、これまで悪評ばかりを呼んできた著者について真相を知りたいという好奇心から、私は自分の本の山にそれをのせたのだった。

第2章

パガンにむかうイラワディ川を上る船上に落ち着くと、私は道中で読むため小さな緑の本を袋から取り出した。船は現地人だらけだった。自分のベッドに横たわり、大量の小さな荷物に囲まれて、一日中食べてはゴシップに興じている。その中には黄色のローブを着て頭を剃った僧もたくさんいて、だまって両切り葉巻を吸っている。ときどきその上には小さな草葺きの家が建った、チークの丸太製の筏とすれちがう。筏は川を下ってラングーンに向かうところで、その上に住む一家が忙しく食事の支度をしたり、ぬくぬくとそれを食べているのがちょっと見えた。穏やかな生活を送っているようで、長い休憩時間と、気まぐれな好奇心を活動させるだけの余暇もたっぷりあるようだ。川は幅広で濁っており、川岸は平らだ。ときどきパゴダが見えた。ときにはピカピカで白かったが、こなごなに崩壊しかけているほうが多かった。そしてたまに、大きな緑の木々の間にちんまりおさまっている、川辺の村にやってくるのだ。船着き場には、騒々しく身ぶりの大仰な群集が、明るい服を着て密集し、まるで市場の屋台にある花のように見える。多くの小さな人々が所有物をいっぱい抱えて折り、そして別の小さな人々の群れが、これまた荷物をいっぱい持って乗ってくるにつれ、騒動と混乱、怒鳴り声、慌ただしさと小走りが生じる。

川の旅行は単調で気分がいい。世界のどこにしようと、これは同じだ。自分は何の責任も負わない。人生は楽だ。長い日中は、食事によってきちんと区分され、かなりはやい時期に、自分が最早個人性を持たないという感覚を身につける。自分はある寝台を占拠している乗客であり、会社の統計によれば自分はこの季節にある決まった年数だけその寝台を占拠し、その会社の株がしっかりした投資になるだけの長きにわたりそれを続けるのだ。

私は持ってきたハズリットを読み始めた。驚愕した。そこにいたのはしっかりした作家で、もったいぶったところもなく、勇敢にはっきりと物を言い、まっとうな意見をわかりやすく述べ、芸術に対する情熱は大げさでもわざとらしくもなく、多様で、身の回りの生活に興味を持ち、巧みで、こうした著作としては十分に深遠だが、重たい虚飾はなく、ユーモアがあり、繊細だった。そしてその英語も気に入った。自然で痛快、雄弁が必要なときは雄弁、読みやすく、明瞭かつ簡潔、話題に負けてしまうほど軽々しくもなく、高尚な言い回しで見かけ倒しの荘重さを出そうともしない。芸術というのが個性という媒体を通じて自然を見たものだとすれば、ハズリットは偉大な芸術家だ。

私は熱狂した。かくも長いこと生きてハズリットを読まずにいた自分が許せず、エリアを崇拜する連中が、その愚かさ故に私からかくも鮮烈な体験を奪ってきたことで、そいつらに激怒した。ここにあるのは決して魅惑ではないが、なんと堅牢な心、正気で明晰で快活、そして何という活力！　すぐに私は「旅に出ること」と題された豊かなエッセイにたどりつき、そして以下のような一節に出くわした。「ああ！　世界と世間の評判という束縛をふりほどくのはすばらしいことだ　しつこく、苦しめる、果てしない個人のアイデ

ンティティを自然界のなかに解き放ち、その場限りの生物となってあらゆるしがらみから逃れるのだ。宇宙とは甘いパンの皿だけでつながり、借りといえば夕方に払うツケのみ。そして最早賞賛を求めて軽蔑にあうこともなく、『パーラーの紳士』という肩書きだけで知られるようになる！」この一節で、ハズリットが音引きをもっと控えてくれればと思う。音引きには、何か粗野で出来合いで無計画なものがあり、それが神経を逆なでする。音引きをエレガントなセミコロンのや慎ましいカッコでうまく置き換えられない文章にはほとんどお目にかかったことがない。だがこの言葉を読んだがはやいか、ここに旅行記の題名として実に見事なものがあると思ひあたり、そしてその本を書こうと心に決めたのだった。

第3章

本が膝に落ちるに任せ、静かに流れる川を見つめた。ゆっくり動く水のすさまじい量は、不可侵な平和のたぐいまれな感覚を与えてくれた。夏に緑の葉がゆっくりと地面に落ちるかのよう、夜がそっとやってきた。だがふりかかってくる心地よい精神の怠惰に一瞬だけ抗おうとしつつ、私は記憶の中で、ラングーンから受けた印象を整理してみた。

コロンボから乗った船が、蒸気をたてつつイラワディ川を遡ったのは、陽気で晴れた朝のことだった。みんなビルマ石油会社の高い煙突を指さしてくれて、空気はその煙のせいで灰色く霧がかった。だがその煙の向こうに、シュウェ・ダゴンの黄金の尖塔がそびえていた。そして今や、自分の回想がすべて楽しいことに気がついたが、一方で茫漠としている。礼儀正しい歓迎、アメリカ車でコンクリートと鉄の商館が並ぶ混雑した通りをドライブ、それはいやなんということ！ ホノルル、上海、シンガポール、アレクサンドリアの通りと同じで、それから庭園の中の広々とした日陰の家。快適な生活、昼ご飯はあちらかこちらのクラブで、こぎれいな広い道のドライブ、暗くなったらあちらかこちらのクラブでブリッジ、ジン・パヒット、白い亜麻布やボンジーシルクをまとった多くの男性、笑い、心地よい会話。そして夜の中を戻ってディナー用に着替え、そしてまたでかけて、こちらかあちらの歓迎してくれる主人とのディナーへ向かい、カクテル、たっぷりとした食事、蓄音機にあわせてダンス、あるいはビリヤードのゲーム、そしてまたもや大きくひんやりした静かな家に戻る。とても魅力的で、穏やかで快適で陽気だ。でもこれがラングーンなのだろうか？ 波止場近くの川沿いには狭い街路があり、交差する路地が迷路のように伸びている。そしてここに群れをなして中国人たちがすみ、向こうにはビルマ人だ。自動車の中から通過するにつれて、私は好奇心の目を向け、もしこの謎めいた生活に飛び込んで、コップの水を船縁から投げ込んだらイラワディ川に混じって見分けがつかなくなるように、自分自身をこの中に溶け込ませたらどんな奇妙なものを見つけ、どんな秘密を聞かせてもらえるだろうかと思いをめぐらした。ラングーン。そしてこんどは、かくも曖昧で不確実な私の回想の中で、シュウェ・ダゴンは最初の朝にそびえていたのと同じように見事に伸び、黄金に輝いて、神秘家たちの書く魂の暗い夜における突然の希望のように、その活気ある町の霧と煙に抗して輝いているのに気がついたのだった。

ビルマの紳士がいっしょに夕食をと招いてくれたので、彼の事務所に行くときと招き入れてくれた。造花でできた帯で陽気に飾られている。真ん中には大きな丸テーブルがあった。彼の友人多数に紹介され、みんな腰を下ろした。食事は何コースも出てきて、そのほとんどはかなり冷たく、食べ物は小さなボウルに入って出てきたが、大量のソースの中で泳いでいた。テーブルの中心付近には中国茶のボウルがあったが、シャンペンにはたっぷり注がれ、たっぷりすぎるほどで、食後には各種のリキュールがまわされた。みんなとても陽気になった。するとテーブルが取り払われ、椅子が壁に寄せられた。我が愛想のよいホスト

は、妻を連れてきてよいかと尋ね、そして彼女は友人とやってきた。大きな微笑む目をした、きれいで小柄な女性二人がやってきて、恥ずかしげにすわった。だがすぐにヨーロッパ式の椅子の位置が落ち着かないと感じて、床にすわっているかのように、足を身体の下に折ってすわった。私の気晴らしのために娯楽が用意されており、演者たちが入ってきた。道化師二人、オーケストラ、踊り手六人。その一人は、ビルマー全土で賞賛されているアーティストなのだという。踊り手たちは絹のシャツとぴったりの上着を着て、黒髪に花を指している。大きく怒鳴るような声で歌ったので、力が入って首の血管が浮き上がっていた。そして六人はいっしょに踊るのではなく、交替で踊り、その身ぶりはマリオネットの身ぶりのようだった。一方、道化師たちは楽しげな茶々を入れ続けた。道化師と踊り手たちの対話が行ったり来たりして、明らかにひょうきんな内容だったようだ。というのもホストとその客たちは大笑いしていたからだ。

しばらく私はスターを見ていた。彼女は確かに雰囲気を持っていた。仲間たちといっしょに立ってはいるが、何か距離を置いているような効果を出し、顔には親しげながらかすかに尊大な微笑を浮かべ、別次元にいるかのように感じた。道化師たちがその突っ込みで彼女を攻撃すると、微笑みつつ気のない様子で答えた儀式の中で自分に与えられた役回りをこなしてはいたが、自分自身は一切露呈しようとはしなかったのだ。そこで彼女の出演がやってきた。前に踏み出す。そして自分がスターなのを忘れ、女優となった。

だが私はまわりの人々に、シュウェ・ダゴンを見ずにラングーンを去らねばならないのは残念だと語っていた。というのもビルマ人は規制を作っていたからで、それは仏教の信仰が求めるものではなかったが、それに従うのは西洋人にとっては屈辱だった。そして西洋人に屈辱を与えるのがこの規制の狙いだったのだ。ヨーロッパ人はだれも、もはやワット建築には行かなかった。だがそれは壮大な塔であり、この国で最も由緒ある信仰の場所なのだ。そこにはブッダの髪の毛が八本収められている。我がビルマ人の友人たちはいまや連れて行ってやろうかと言うので、私は西洋人のプライドをポケットに収めた。深夜だった。寺につくと長い階段を上ったが、その両側には小屋があった。だがそこに暮らし、信者たちに必要となりそうなものを売る人々は、すでに営業を終えて一部はそこらにすわり、半裸で、ぼそぼそとおしゃべりに興じ、煙草を吸ったり夜食を食べたりしていたし、また多くの様々に見捨てられた人々も眠っていて、一部は低い地元の寝台を使い、一部はむきだしの石の上に横たわっている。あちこちに前日から残った大量の枯れかけた花がある。蓮とジャスミンとひなぎくだ。それがすでにきつい腐敗臭となった香水で空気に強い匂いを与えていた。ついに大テラスにたどりついた。拝殿やパゴダ群はすべて、寄せ集めの混乱で、ジャングルに生える木のような無秩序ぶりだった。設計も対称性もなく建てられているが、暗闇の中で、その黄金と大理石がかすかに輝き、すばらしい豊かさを持っている。そしてそこで、その中から照明船に囲まれた大船舶のように出現し、暗く峻厳かつ見事にそびえたつのがシュウェ・ダゴンだった。照明が落ち着いた光で、それを覆う金箔を照らし出す。それは夜の中、孤立し、印象的かつ謎めいた様子で屹立していた。衛士がはだしで音もなく歩き、老人がブッダの像の前に並んだロウソクの列をともしている。両者とも孤独を強調していた。あちこちで、黄色いローブ姿の僧が小声で呪文を唱えていた。その単調な音が静けさを強める。

第4章

このページの読者に何か誤解なきよう慌てて告げておくと、ここではほとんど情報は得られないであろう。本書はビルマー、シャン州、シャム、インドシナを旅した記録だ。私はこれを自分自身の気晴らしに書いており、そしてそれを読むために数時間をかけようと思うくらいの気晴らしを提供できればと願う。私はプロの作家であり、ここからいくばくかのお金と、ひょっとして多少の賞賛を得たいと願っている。

いろいろ旅はしてきたが、あまりよい旅行者ではない。よい旅行者は驚きという才能を持っている。故郷で知っていることと、外国で見ることとの間のちがいに絶え間なく興味を惹かれている。ばかばかしさの感覚を持っているなら、周りの人々が自分と同じ服を着ていないという事実から絶え間なく笑いのネタを得ることができるし、フォークのかわりに箸で食事をするとか、ペンのかわりに筆で字を書くこともあるとかいったことについて、驚きを決して克服できない。何もかもが物珍しいのでありとあらゆるものに目が向き、記述はその人のユーモア次第でおもしろかったり勉強になったりする。だが私は何でも即座に当然のこととってしまうので、新しい環境でも何も変わったことに気がつかなくなってしまうのだ。ビルマ人が色鮮やかなパソを着るのはあまりに当然に思ってしまうので、かなり意識的に努力しないと、相手が自分とは服装がちがうという観察ができない。リキシャに乗るのは車に乗るのと変わらない自然なことに思えるし、床にすわるのも椅子にすわるのと同じなので、自分が風変わりで通常とちがうことをやっているのを忘れてしまう。旅をするのは、あちこち移動するのが好きだからで、それが与えてくれる解放感が楽しいから、しがらみや責任や義務をうっちゃると気分がいいから、そして未知のものが好きだからだ。しばらくは楽しませてくれて、時には文章のネタを示唆してくれる風変わりな人々に会おうのだ。私はしばしば自分に退屈しており、旅をすることが己の個性の足しとなり自分を少し変えられると思っている。旅から連れ帰る自分は、出発したときに持ち出したのとはちがう自分なのだ。

確かにイギリス帝国の衰亡の歴史家が、どこか公共図書館の棚でこの本に出くわしたら、いろいろ厳しいことを私に言うだろう。「他のところでは観察力がないわけではないことを示したこの作家が、この帝国の実に多くの部分を旅しておきながら、その父祖たちが征服した権力をイギリス人たちがいかに無気力に握っていたか気がつかないとはくというのも、この種のあらゆるものに対する疑念が一瞬たりとも心をよぎったことを示す言葉は一言もないからだ） いったいどう説明したらよいものだろうか？ 当時は風刺家でありながら、大量の役人が背後の銃の力を持ってのみその地位を保ちつつ、支配される人種に対して自分たちがそこに居るのは諸君のその黙許あればこそなのだ」と説得しようとしている光景を見て、嘲笑すべきものを見つけれなかったのだろうか？ もっと重要なことが百もある人々に対して効率性を提供し、それを正当化するために与えた便益は、相手の

求めていないものだったのだ。無理矢理押し入って居座った家の住民が、自分のほうがこの家をもっとうまく切り盛りできると言えば歓迎してくれるとでもいうのだろうか！ この人物はビルマーを旅して、主人たちが支配するのを恐れていたためにイギリスの力が揺らぎ始めているのに気がつかなかったのか？ まったく自信がなく、したがって指揮をはずの相手からまったく敬意を得られない裁判官、兵士、長官たちに出会わなかったのだろうか？ クライヴ、ウォーレン・ヘイスティングスとスタムフォード・ラッフルズを生み出した人種が、いまや自分に与えられた権威を恐れる人々、おべっかと従順さで東洋人を支配しようとする人々、侮辱を我慢して、原住民が使うにはふわしくなく、いずれ主人に刃向かうのに使われるであろう力を与えることで支配しようとする人々を植民地支配のために送り出さねばならないとはどうしてしまったのか？ だが主人であることに良心の呵責を感じる主人とは何なのか？ 効率性について多言を弄しつつも、自分が支配に向いていないという落ち着いた気持ちでいっばいだったために効率よく支配できないのだ。感傷家たちなのだ。帝国の利潤はほしいが、その責任のうち最大のもの、つまり権力を掌握しようとはしなかった。だがこれだけのものを目の当たりにしていたにもかかわらず、この作家はそれを見過ごし、旅のちょっとした出来事だけを書き付け、自分の感情を記述して出会った人々についてのちょっとしたお話をでっちあげているだけでご満足のようだ。この人物が生み出した本は、歴史家にとっても、政治経済学者にとっても哲学者にとってもまったく無価値でしかあり得ない。忘れ去られたのも当然だ」

私はイギリス帝国の衰亡の歴史家を鼻でせせら笑う。当方としては、彼がその大作を書く時期がやってきたら、それを共感、正義、寛大さをもって書いてほしいという願いを敢えて述べておこう。修辞は控えてほしいと思うが、感情を抑えても彼の外になるとは思わない。生々しく、しかし尊厳を持って書いてほしい。各時代がしっかりした足取りで先に進んでほしい。その文は、金槌で金床を叩いたときのように、鳴り響いてほしい。文体は重々しく、しかし尊大ではなく、華やかながら虚飾や無理はなく、整って雄弁でありながら落ち着きあるものであるべきだ。というのも何のかの言っても、結局ありとあらゆる苦勞を注ぎ込んでいいだけの主題を手に行っているのだから。イギリス帝国は世界史の中で、一瞬たりとも壮大さを失ったことはないのだ。

第5章

パガンについた時には小雨で空は厚い雲に覆われ暗かった。遠くに、この地の有名なパゴダ群が見えた。それらは巨大かつ遠く謎めいてそびえ、すばらしい夢の漠然とした記憶のように、早朝の霧の中にそびえている。川の蒸気船は、目的地から数キロ離れたびしょ濡れの村で私を下ろし、残りの道中を運んでくれる牛車を召使いが探しにいく間、私は雨の中待っていた。見つかったのは、固い木製車輪でスプリングのない牛車で、ココナツ製のマットが敷かれている。中は暑くて息もできないが、雨が勢いを増してしっかりした長雨になったので、雨宿りできるのはうれしかった。私は全身を横たえ、それに飽きるとあぐらをかいた。牛の歩みはのろく、慎重で、以前に通った牛車の作ったわだちを押し分けるように進むときには揺すられて投げ出され、ときどき大きな石の上を通るときにはすさまじい衝撃が伝わってきた。周遊小屋に着いた頃には、袋だたきにあったような気分だった。

周遊小屋は川岸に建ち、かなり水に近く、まわりをぐるっと大きな樹木やタマリンド、パニヤン、野生のスグリなどが囲んでいる。木の階段を上ると広いベランダに出るが、そこが今であり、その背後にはいくつかの寝室があって、それぞれに洗面所がついている。その一室に別の旅行者がいることに気がついた。そしてちょうど宿の検分を終え、その監督をしている色黒の男に食事について尋ね、そこにどんな漬物や缶詰や酒があるかを頭に入れたとたんに、日よけ帽とレインコート姿の小男が雨をしたたせながら登場した。びしょぬれのコートを脱ぐと、すぐに私たちは腰を下ろし、この国でランチと呼ばれる食事でありついた。どうやらチェコスロバキアらしく、カルカッタの輸出業者に雇われており、休暇にビルマーの見物にやってきたのだった。背が低く乱れた黒髪、大きな顔、目立つかぎ鼻、金縁めがねをかけている。詰め襟上衣が太った身体にぴったり貼り付いていた。明らかに活発で元気な観光客らしい。というのも、雨でも朝には外にでかけるのをやめなかったからで、なんでもパゴダを七つは回ったという。だが食事中に雨はあがり、やがて太陽がまぶしく輝いた。私たちの食事が終わるがはやいか、彼はまたもや出かけた。パガンにパゴダがいくつあるかは知らない。高所に立つと、見渡す限り無数のパゴダが広がっているのだ。それも墓地の墓石並に密集して並んでいる。規模も、保存状態も様々だ。その堅牢さと規模と偉容は、その周辺のおかげでなおさら驚きだ。というのもかつてここに広大で人口の多い都市が栄えていたことを物語るのは、そのパゴダだけだからだ。今日そこにあるのは、取り残されたような村だけで、あるのは幅の広い荒れた道に大樹の並木ばかりだ。きちんとしたこぎれいなマット敷きの家では、漆職人が暮らしている。というのもパガンはいまや、古代の栄光を忘れて、いまや慎ましくこの産業で栄えているからだ。

だがこれらのパゴダのうち、唯一アーナンダだけがいまだに信仰の対象となっている。

ここでは四体の巨大な金箔貼りの仏像が、巨大な部屋の中で金箔貼りの壁を背に立っている。それを一体ずつ、金箔張りの拱道を通して見物する。その輝く薄闇の中で、仏像は不可思議に見える。一体の前で、黄色いローブをまとった托鉢僧が、甲高い声でこちらには意味のわからない詠唱を行っている。だが他のパゴダはだれもいない。その参道の裂け目には草がはえ、ひび割れには若い木が根を張っている。鳥の避難所でもある。その頂点を鷹が旋回し、小さな緑のオウムが軒でさえずっている。まるで異様で巨大な花が石になったかのようだ。あるパゴダでは、建築家が蓮の花をモデルにしている。ちょうどスミス広場のセントジョンズ教会の建築家がアン女王の踏み台をモデルにしたようなものだ。そこにはスペインのイエズス派教会ですら謹厳で古典的に見えるほどのバロック的な華やかさがある。突拍子もないもので、見ると微笑してしまうが、その過剰さは魅惑的だ。まったく現実離れしており、みずばらしいのに奇妙で、それをそもそも考案できた幻想の前に人はたじろいでしまう。インド神話の気まぐれな神がその無数の手を使って一夜にして造り上げた産物のように見える。パゴダの中では、仏像が瞑想してすわっている。その巨大な像からは金箔ははるか昔にはげ落ちてしまい、その像自体も崩れ去ろうとしている。入り口を守る架空の獅子たちは、その台座の上で腐りかけている。

不思議で憂鬱な場所だ。だが私の好奇心はパゴダを半ダースまわっただけで満たされたし、チェコスロバキア人の精力ぶりと比較することで己の怠惰さを責めるような真似はしなかった。彼はパゴダを様々な種別に分類し、その特徴にしたがってノートに記録していた。彼にはパゴダについての理論があり、彼の内心では、それはある理論を支持または議論を裏付けるべく、きれいに記されているのだ。崩壊しすぎて、その入念かつ熱烈な注意を向ける価値がないようなパゴダは一つたりとてない。そしてタイルの造りや形を検分すべく、彼は壊れた場所に山羊のようによじ登る。私はといえば、周遊小屋のベランダに怠惰にすわり、目の前の光景を眺めるほうがよかった。正午の真っ盛りの太陽は、風景からあらゆる色を焼き払い、かつては人間が忙しく暮らしていた場所にはえる野生の木々や灌木が、色あせて灰色に見える。だが日が落ちるにつれて、世事によりしばらく抑えられていた人格を彩る感情のように、色彩がじわじわと戻り、木々や灌木は再び瑞々しく生きた緑となる。日は川の向こうに落ち、西の赤い雲がイラワディ川の静謐な腹部に映っていた。水面にはさざ波一つない。もはや川は流れてさえいないようだ。遠くでは孤独な漁師が丸木船から生業にいそしんでいる。その少し脇ながらも全景が見えているのは、パゴダの中で最も美しいものの一つだった。夕日の中で、その色彩はクリーム色と栗毛がかった灰色で、博物館の古装束の絹のような柔らかさだった。見て心地よい対称性を持っている。一角の尖塔は、他のすべての角にある尖塔に反復されている。そして華美な窓が、その下の華美な戸口に反復されている。装飾にはある種の大胆な暴力があり、まるで精神の幻想的な頂点をきわめようとして、その必死の闘争に全身全霊で没頭しているため、遠慮や趣味のよさなどにかまけていられないとでもいうようだ。だが同様にそれはその瞬間に、一種の威厳を持っており、それが建っている孤立にも威厳があった。それはあまりに大きな重荷をもって大地にのしかかるかのようだった。それが何世紀も立ち続けてきて、イラワディの微笑のような屈曲を平然と見下ろし続けてきたのだと思うと感慨深い。鳥たちは木々で騒々しくうたっていた。コオロギが鳴き、カエルたちがゲコゲコと騒ぐ。どこかで少年が粗雑なパイプで悲しげな曲を吹いており、集落では現地人だちが騒々しくしゃべっている。東洋には静けさはない。

チェコスロバキア人が周遊小屋に戻ってきたのはこの時だった。とても暑くほこりまみ

れで、疲れていたが幸せだった。というのも彼は何も見落とさなかったからだ。彼は情報の鉱山だった。パゴダを徐々に夜が包み始め、いまや木舞と石膏で作ったかのように安っぽく見え、植民地の産物を展示するパリの展示室で見かけても驚かないようなものに見えた。それはこのきわめて田舎の風景の中で奇妙なまでに洗練された建物だった。だがチェコスロバキア人は、それがいつどの王さまに建てられたかを話してくれて、そのまま勢いづいて、パガンの歴史を語りはじめた。彼は記憶力がよかった。事実をしっかりと並べたて、あまりに幾度も繰り返すすぎた講演を行う講師のような流暢さでそれをまくしたてた。だが私は、彼の教えてくれる事実を知りたくなかった。ここにどんな王が君臨したか、どの王がどんな戦いを経て、どんな土地を征服したかなど、私に何の関係があるというのか？ 王様など、寺院の壁に長々と並んだ浅いレリーフの列として見るだけで私には十分だった。その神々しい態度で玉座に座り、隷属させた民族の施設から献上品を受け取ったり、あるいは無数の槍をたずさえ、戦闘の混乱の中で馬車にのり疾走する絵姿を見るだけでいいのだ。私はチェコスロバキア人に、手に入れた知識をどうするつもりなのか、と尋ねた。

「どうするって？ 何も」と彼は答えた。「私は事実が好きなんだ。物事を知りたい。どこかへ行くときには、いつもそれについて書かれたものをすべて読む。その歴史、動植物、人々の慣習や習俗を学び、その芸術と文化を十分に理解するんだよ。訪問したどの国についても、標準となる本が書けるね。私は情報の鉱山なんだ」

「私もまさにそう思っていたどころです。でも、自分にとって何の意味もない情報なんて、持っていても仕方ないじゃありませんか。情報のための情報というのは、壁にぶちあたる階段のようなものだ」

「賛成できませんな。情報はそれ自体として、針のように拾い上げてコートの襟の折り返しに入れたり、切ったりせずにほどこいて引き出しにしまっておく糸のようなものだ。いつ役に立つかもしれない」

そして、いまの例えが思いつきでないことを示すため、チェコスロバキア人は詰め襟上衣スティンガシフター（襟はない）の底の部分を折り返してみせると、そこには針が四本きれいに並んでいるのだった。

第6章

パガンからはマンダレーに生きたかったのも、またもや蒸気船に乗り込み、そして到着の数日の前に船が川辺の村に停船したとき、上陸しようと腹を決めた。船長は、そこには小さなクラブがあって、そこに落ち着けばいいだけだと言う。その人々は、見知らぬ人物が蒸気船からそんなふうにはぐらりと立ち寄るのに慣れっこで、そのクラブ書記官はしごくまっとうな人物だとか。ブリッジの相手だって見つかるかもしれないとのこと。私は他にやる事が一切なかったので、棧橋に待っていた牛車の一つに乗り込んで、クラブに連れて行かせた。ベランダに男がすわっていて、近づくとうなずいて、ウィスキーソーダがいいか、それともジン&ピターズがいいか尋ねた。何も飲まないかもしれないという可能性など、思いつきもしなかったようだ。私はロングのドリンクを注文して腰を下ろした。相手は背が高く、やせた、日に焼けた人物で、大きな口ひげをはやし、カーキ色のショーツとカーキ色のシャツを着ている。名前はわからなかったが、しゃべっていると別の人物がやってきて、書記官ですと名乗り、わが相棒にジョージと呼びかけた。

「奥さんから連絡はあった？」と書記官はジョージに尋ねた。

相手の目が輝いた。

「ああ、この郵便で手紙がきたよ。何とも暇なようだね」

「心配するなって書いてきたのか？」

ジョージはくすくす笑ったが、その中にすすり泣きの影があると思ったのは見間違いだろうか？

「実のところ、書いてきたよ。だがそう言われてもね。もちろん彼女が休日をほしがっているのは知っているし、それが得られたのはよかったと思うが、でも旦那にとっては悪魔のようにつらいことだよ。ジョージは私に向き直った。「いやね、私が女房と離ればなれになったのはこれが初めてでして、彼女がいないと私は迷子のイヌみたいなんですわ」

「結婚してどのくらい？」

「五分」

クラブ書記官は笑った。

「バカ言うなよ、ジョージ。結婚して八年だろ」

しばらくしゃべるとジョージは腕時計を見て、夕食前に着替えなければと言って立ち去った。書記官は彼が夜の中に消えるのを、親切でなくもない皮肉な笑みを浮かべつつ見守った。

「みんな、あいつが今じゃ一人きりなもんで、できる限り尋ねてやるんですよ。奥さんが家に帰ってからひどく落ち込んでいるもので」

「奥さんとしては、旦那がそんなに彼女に夢中だと知って大喜びでしょうね」

「メイベルは大した女ですよ」

書記官はボーイを呼んでもっとドリンクを注文した。このもてなしのいい場所では、何か飲むかなどとは尋ねない。それは当然のことだとされるのだ。そして彼は長いすにすわり、両切り葉巻に火をつけた。ジョージとメイベルの話をしてくれたのだ。

二人は、休暇でジョージが故郷に戻っていたときに婚約したのだった。そして彼がビルマーに戻ると、六ヶ月後に彼女も追ってくるようになっていた。だが次から次へと問題が生じた。メイベルの父親が他界し、戦争が起こり、ジョージは白人女性にはふさわしくない地区に送られた。だから彼女がやっと出発できるまでに七年かかった。結婚の準備万端に整え、彼女が着いた翌日にそれを実行するはずで、ラングーンまで彼女を迎えにいった。船が到着するはずの朝、ジョージは自動車を借り手、船着き場まで運転していった。そして棧橋を足早に向かった。

そのときいきなり、何の前触れもなく、不安に襲われた。メイベルには七年も会っていなかった。顔も覚えていない。まったく見知らぬ相手だ。みぞおちが沈み込むような気分で、膝ががくがくする。無理だ。本当に申し訳ないが、どうしてもできない、本当に結婚なんかできないと言わなければ。だが、七年も婚約して待たせ、結婚しようと六千キロも旅してきた女の子に、どうしてそんなことが言えようか。それだけの度胸もなかった。ジョージは絶望の勇気にとらわれた。まさにその棧橋に、シンガポールに向かう船が停まっていた。ジョージはメイベルに慌てて手紙を書き、何の荷物もなく着の身着のまま飛び乗った。

メイベルが受け取った手紙はだいたいこんな具合だった。

最愛のメイベル、

急に仕事が入って呼び出された。いつ戻れるかわからない。イギリスに戻ったほうが賢明だろう。こちらの予定はまったくわからないので。

ジョージより愛をこめて

だがシンガポールにつくと、電報が待っていた。

了解。ご心配なく。愛をこめて。メイベル。

恐怖のおかげで機転がきくようになった。

「なんとまあ。あいつはオレを追っているようだぞ」とジョージ。ラングーンの船舶事務所に電報を打ってみると、確かにいまシンガポールに向かう船の客員名簿に彼女の名前がある。一瞬たりとも無駄にはできない。ジョージはバンコク行きの列車に飛び乗った。だが落ち着かなかった。バンコクに向かったことはすぐにわかってしまうし、自分と同じくらい簡単に彼女だって列車に乗れるのだ。運のいいことに、フランスの不定期貨物船が、翌日サイゴンに向かって出港するところだった。サイゴンなら安全だ。そこに行ったことなどわかるはずがない。わかったにしても、もうそろそろ彼女も見当はついたはずだ。バンコクからサイゴンまでは五日かかり、船は汚く狭く不快だった。到着してホッと、リキシャでホテルに向かった。宿泊者名簿に署名すると、即座に電報が渡された。二行だけ。「愛をこめて。メイベル」それだけで全身に冷や汗が吹き出した。

「香港行きの次の船はいつ？」と彼は尋ねた。いまやその逃走は真剣なものとなった。香港に船出したが、決してそこにとどまらなかった。マニラへ向かった。マニラは不吉

だった。そのまま上海へ。上海は気忙しかった。ホテルから出るたびに、まっすぐメイベルの腕の中に飛び込むような気がした。いやいや、上海では絶対にダメだ。となると横浜に行くしかない。横浜のグランドホテルでは電報が待っていた。

「マニラでは行き違って残念。愛をこめて。メイベル」

ジョージは額から汗を垂らしつつ、船荷情報を調べてた。いま彼女はどこにいる？ 彼は上海に引き返した。今回はまっすぐクラブに向かい、電報はないかと尋ねた。そして手渡された。

「間もなく到着。愛をこめて。メイベル」

いやいや、そう簡単につかまるジョージではなかった。すでに計画はあった。揚子江は長い川だし、揚子江の水位は下がり始めていた。重慶行きの最終蒸気船にちょうど飛び乗れば、ジャンク船以外は翌春までだれも航行できない。ジャンク船の女一人旅などあり得ない。彼は漢口に出かけ、漢口から宜昌までは別の船に乗り換えて、宜昌からは急流の中を重慶に向かった。だがいまや必死だったジョージは、それで安心する気はなかった。四川省の都、重都という場所があり、四百マイル離れている。陸路でしかたどりつけず、道中は追いはぎだらけ。そこまでいけば安全だ。

ジョージは担ぎ椅子と苦力^{クーリー}たちを集めて出発した。ついにその孤立した中国都市の銃眼模様城壁が目に入って、彼は安堵のため息をついた。その城壁からはチベットの雪山が見える。

やっと落ち着ける。ここならメイベルに見つかることは決してない。たまたまその領事が友人だったので、そこに身を寄せた。ジョージは豪華な家の快適さを楽しみ、アジア全土のつらい逃走のあとで何もしないのを楽しんだし、何よりも聖なる安全に興じた。一週、また一週と怠惰に過ぎていった。

ある朝、ジョージと領事は中庭で、中国人が検分のために持ってきた骨董品を眺めていたが、そのとき領事館の大門に大きなノックが響いた。門番がそれをさっと開く。苦力^{クーリー}四人がかついだ輿が入ってきて進み出ると、地面に置かれた。メイベルが出てきた。身ざれいで汗もかかずにさっぱりしている。その外見を見ても、二週間にわたる旅の直後だとうかがわせるものは皆無だった。ジョージは凍り付いたようだった。そして死んだように蒼白だった。彼女が近づいた。

「こんにちわ、ジョージ。今度もすれちがいかと気が気じゃなかったわ」

「こんにちわ、メイベル」ジョージは口ごもった。

何と言っていいかわからなかった。きよろきよる見回した。戸口との間には彼女が立ちまわっている。そして青い目でジョージにほほえみかけた。

「ちっとも変わってないのね。男の人って、七年もすればひどいことになるから、あなたもデブでハゲになったんじゃないかと恐れてたのよ。心配だったわ。これだけ待たされたあげく、結局どうしても結婚する気にならなかつたら、ひどいことですからね」

彼女はジョージのホスト役に向き直った。

「領事さんですか？」

「そうです」

「よかった。お風呂を浴びたらすぐにこの人と結婚しますから」

そして、そうした。

第7章

まず何よりもマンガレーは名前だ。というのも、歴史上の何らかの偶然や楽しい連想により、その名前が独自の魔法を持つような場所があるのだ。賢い人はひょっとすると、決してそういう場所を訪れようとはしないのかもしれない。その名前が引き起こす期待が満たされることはまずないからだ。名前は独自の命を持っており、たとえばトレビゾンドは貧困にあえぐ村でしかないのに、その名前の華やかさはまともな思考力の心すべてに、帝国のような罨を仕掛けてしまう。そしてサマルカンド：この名前を書きただけで脈がはやまり、満たされぬ欲望に心痛めぬ者がいるだろうか。イラワディという名前自体ですら、敏感な者たちにその広大で濁った流れの空想を伝える。マンガレーの街路は混雑し、ぎらつく太陽を浴びせられ、幅広でまっすぐだ。路面電車がそこを、乗客の群衆を乗せてゴロゴロと走る。乗客たちは座席や通路いっぱい、熟れすぎたマンゴーに群がるハエのように乗降口にあふれて大量にしがみついている。家屋にはバルコニーやベランダがあるが、邪悪な時代を迎えた西部の町の大通りにある家のような、だらしない様子だ。狭い路地もなっければ、空想が空想を絶するものを求めてさまよえるような脇道もない。かまわない。マンガレーにはその名前がある。この美しい言葉の下がる律動は、ロマンスの明暗をその身にまどってきたのだ。

だがマンガレーには要塞もある。要塞は高い城壁に囲まれ、城壁のまわりには濠がある。要塞の中には王宮があり、いまや取り壊されたがかつてはティーボー王の政府事務所や大臣たちの住居があった。城壁には等間隔で、石灰で白塗りされた門があり、そのそれぞれの上には一種の望楼が乗っていて、中国庭園の四阿のようだ。そして城壁突端の稜堡にはチークのパピリオンがあり、あまりに華やかでそれが一度でも戦争めいた目的を果たしていたとは信じがたい。壁は巨大な日干しれんが製で、その色は古いバラのようだ。そのふもとには広い草地があって、そこはかなり密集してタマリンド、シナ肉桂、アカシアが植わっている。茶色いヒツジの群れが、頑固さをもって前進し、ゆっくりと、だが一心にみずみずしい草をはんでいる。そして晩になるとビルマ人たちが、彩り豊かなスカートと華やかなハンカチを身につけて、二人や三人ずつここにやってくるのだ。小柄な色黒の人々で、がっちりとした頑丈そうな体つき、顔には何かかすかに蒙古的なものがある。わざと、自分が土の持ち主であり耕作者であるかのような歩き方をしている。すれちがうインド人の間接的な優雅さ、謙遜の優雅さはまったく持ち合わせていない。その姿の洗練ぶりや、物憂げで軟弱な特徴もない。幸せで、楽しげで、愛想がよいのだ。

濠の広い水面に、バラ色の壁や木々に生い茂る葉や明るい服のビルマ人たちがくっきりと映っている。水は静かだが淀んではおらず、黄金の冠をまとった白鳥のようにそこには静謐さがある。その色彩は、早朝と夕暮れには、パステルのような柔らかい疲れた優しさがある。油絵のような頑固な絶対性のない、半透明感があるのだ。まるで光が手品師で、

手すさびに作り出したばかりの色を重ね、そして気のない手で今にもそれを洗い流し去る寸前ようだ。見る者は息をとめる。というのもそんな効果はかりそめのものでしかありえないと思えるからだ。複雑な韻律の詩を読みつつ、調和を満たすあの長く待たされた韻を耳が待ち望むときと同じような期待を持ってそれを眺めるのだ。だが日没に、西空の雲が赤く見事で、城壁も木々も濛も放射光に浸っているとき、そして夜の満月の下で、白い門が銀の光をしたたらせ、その上の望楼が空のシルエットを垣間見せるとき、見る者の感覚への攻撃は打ちのめされるほどのものだ。これは現実ではないと言って自衛してみる。これは忍び寄って不意をつく美ではないし、傷ついた精神を慰め落ち着かせる美でもない。手に持って我がものとし、既知のお馴染みの美の間におけるような美ではない。それは人を完膚無きまでにたたきのめす美だ。そこには穏やかさも抑制もなく、突然見る者を包む炎であり、そして人は揺さぶられてむき出しとなり、それなのに何か不思議な奇跡のおかげで生きながらえるのだ。

第8章

マンダレーの王宮は大きな広場の中に建てられ、低い白塗りの壁に囲まれていて、それが建っているテラスまでちょっとした階段を上る。かつてこの空間には建物が密集していたが、かつて下級の王妃や女官たちが暮らしていたその多くは取り壊され、その跡地はいまや心地よい緑地となっている。

そしてまず出くわすのが長い謁見所、王室、更衣所、他の王室に私用居室。その両側には王や王妃たち、王女たちの居住区がある。王室は納屋のようで、屋根が高い柱に支えられているが、その柱は巨大なチークの木で、雑に整形した工具跡がいまでも見え、それが漆と金を塗られている。黄金ははげで色が薄れている。この加工の粗雑さと、これほどの金箔や漆とのコントラストが、なぜかはわからないが、奇妙な壮大さの印象を与えている。それぞれの建物は、あまりにスイスの避暑別荘のようで、それ自体としては平凡ながら、大量にあつまると、暗い壮麗さを持って人を魅惑する。屋根を飾る彫り物、手すりの付け根と部屋同士の仕切りは雑だが、そのデザインはしばしば優雅さと豪華なエレガンスを持っている。王宮の建設者たちは、実に予想外の方法で、最も不似合いな材料を使って、宮殿のような効果を実現し、東洋の王家が暮らしてもまったく遜色ないと思わせるに至った。装飾のほとんどは、無数の小さな鏡と白や極彩色のガラスのモザイクによる各種のパターン使用で実現されている。これほど醜悪なものはないと言いそうだが（子供時代のマーゲイト棧橋で見かけて、一日の遠足後に得意げに持って帰ったが、後にがっかりする関係へのプレゼントにしかならないようなものを思わせる）でも実に奇妙なことに、印象は豪勢なだけでなく快いものだ。ついたてや仕切りは実に粗雑に彫られているのに、そこに芸術的なガラスのかけらがきちんとして埋め込まれており、安びかものの印象はまったくなく、そのしっかりした土台で暗く輝いて、曇った宝石の秘密の放射光を放つのだ。これはもっと大きな強さと活力を持つ、もっと堅牢な力の野蛮芸術ではなく、野生の、あるいはお望みなら子供の芸術だ。それはある意味でつまらない女々しいもので、その粗野さ（まるでその自信なさげなタッチでアーティストたちはそれぞれのお馴染みのパターンを自分の頭の中で一から作り直していたかのうようだ）こそが、その味わいをもたらしているのだ。ある人々が美のまったくの発端で、混乱したようにおぼつかない手つきで活動している様子が目に浮かぶ。その人々はブッシュマンや子供のように、輝く物体に魅了されるのだ。

王宮はいまや、かつてそこを彩っていた豊かな装飾品や金箔貼りの家具はなくなっている。次から次へと続く部屋を歩くと、借り手をずっと捜し続けている空き家のように思える。だれもそこを訪れないかのようだ。夜が近づくところした金箔張りで宝石を散りばめた無人の部屋は陰鬱で幽霊じみてる。うろつくのも静かにやって、かすかに香りのある沈黙を乱さないようにするのだ。立ってこれだけの空虚を驚嘆して眺めると、ここがしば

らく前は想像を絶する興味と動乱の情熱の舞台だったとは信じがたく思える。というのもここでのロマンスは、存命中の人々の記憶にまだ残っているからだ。この宮殿が、ドラマチックでありながら、私たちにとってイタリアやビザンチンのルネッサンスくらいに縁遠く思える出来事を目撃してからまだ五十年経っていない。私は連れられて、かつては一世を風靡した老女に会いにでかけた。いささかでっぷりした背の低い人物で、普通の黒と白の服を着ており、金ぶちめがね越しに静かでちょっと皮肉な目つきで私を眺めた。彼女の父親はギリシャ人で、ミンドン王に仕えており、彼女もスブラヤット王妃の女官に任命された。間もなく彼女は王の川船のイギリス人船長と結婚したが、その夫は他界し、きちんと間を置いてから彼女はフランス人と婚約した（彼女は低い声で話し、きわめてかすかに外国の訛りがある。まわりを飛び交うハエに困る様子もなく、手はひざの上でしっかりと握られたままだった）。そのフランス人は帰国して、マルセイユで同郷の女性と結婚した。ずいぶん昔のことなので、彼のことはあまり覚えていないという。名前はもちろん覚えているし、とてもハンサムな口ひげをたくわえていたのも覚えているが、それだけだ。でも当時は夢中で愛していた（彼女が笑うと、それはちょっと幽霊じみたくすくす笑いで、その笑いは影でしかなく、笑いの対象も可笑しさの幻影でしかないようだった）。彼女は男に復讐を決意した。まだ王宮への入構証は持っていた。ティーボー王がフランスと結んだ協定の草稿を手に入れたが、そこには北部ビルマのあらゆる影響力がすべてフランスに渡ると記されていたのだ。それをイタリア領事に渡して南部ビルマ総監に渡してくれと依頼し、これによりイギリスのマンダレー進軍を引き起こしてティーボー王の王位転覆と亡命を引き起こしたのだという。劇場においては閉じた扉の向こう側で起こっていること以上に劇的なものはないのだ、と行ったのはアレクサンドル・デュマだったろうか？ その老女の静かで皮肉な目は、その金縁めがねの奥で閉ざされた扉であり、その背後にいまだにどんな異様な考え、どんな不思議な情熱のうねりがあるのか、だれにわかるだろう？ 彼女はスブラヤット女王のことを語った。とってもよい方なのに、みんなあの方のことは本当にひどいおっしゃりよう。あの方が命じたとかいう虐殺の話なんて、どれもとんでもないでっちあげですよ！

「彼女が殺したのはたかだか二、三人だっというの、あたしがちゃんと知ってるんですから」老女は太った小さな肩をすくめた。「二、三人！ 大騒ぎするほどのことでしょうかね？ 命なんて安いものですわ」

私は紅茶をすすり、だれかが蓄音機をかけた。

第9章

熱心な観光客というわけではないが、私はアマラブラにでかけた。かつてはビルマの首都だったが、いまや寂れた村で、タマリンドの木が道の両側に大きく生え、その陰で編織り人たちが仕事に精を出している。タマリンドは高貴な木だ。その幹はざらざらでこぶだらけで、川を下るチークの丸太のように白く、その根は巨大なヘビで地表をけいれんするように暴力的にくねる。だがその葉はレース状でシダのようで、うっそうと生い茂っているため葉の繊細さにもかかわらず濃い影を落とすのだ。老いた農婦のようで、高齢ながら頑強で強壮、羊毛のモスリンにこぎれいに身をくるんでいるのだ。その枝には緑の鳩が止まっている。男女が小さな家の外にすわり、絹をボビンで紡いだり巻いたりして、みんな柔らかい優しい目をしている。その間で子どもたちが遊び、卑しいイヌが道の真ん中に転がって寝ている。この人々は、穏やかで生産的で、幸せで静かな生活を送っているように見える。そしてふと見る者の脳裏をよぎるのは、ここに実存の謎に対する一つの解決策を見つけた人々がいる、ということだ。

それからメンゴンの大鐘を見に出かけた。ここには仏教の修道院があり、立って眺めると尼僧の群れに取り囲まれた。僧たちと同じ形と大きさのローブを着ているが、僧たちのきれいな黄色ではなく、薄汚れた焦げ茶色だ。小柄で歯のない老女たちで、頭は剃っているがインチほどの灰色の髪が生え戻っていて、その小さな顔には深い溝が刻まれてしわくちゃだ。やせた手を差し出してお金を求め、むき出して色の薄い歯茎でなにやらしゃべっている。その黒い目は物欲しげに輝き、微笑はいたずらっぽかった。みんなとても高齢で、人間的な結びつきや愛情は持っていなかった。みんなユーモアある皮肉ぶりで世界を眺めているようだ。ありとあらゆる幻想を生き抜いてきて、悪意をこめて嘲笑するような軽蔑をもって実存をとらえている。人々の愚行を容認したり、その弱さにつきあったりする気はないのだ。彼らが人間のものに対して執着が一切ないのは少しばかりおそろしいものがあった。愛も捨て、離別の悲しみも終え、死はもはや恐怖とはならず、いまや笑い以外の何も残されていない。尼僧たちは大鐘を突いて音を聞かせてくれた。ゴーン、ゴーンと鳴り響く。長く低い音で、ゆっくりした振動を川下に送り出す。それは泥から作られた居場所から魂を呼び起こすかのような荘厳な音で、あらゆる被造物は幻影にすぎないが、その幻影の中に美があることを思い出させようとする。そして尼たちはその音に続き、一斉に下品な笑い声をたてる。ヒヒヒヒ、とそれは大鐘の呼びかけを嘲笑する。まぬけどもめ、とその笑いは語る。まぬけめ、愚か者め、笑いだけが唯一の現実なのだ、と。

第 10 章

コロボを発ったとき、チェントンに行く気などまったくなかったが、船上でそこで五年暮らしたという男に出会った。そこには五日ごとに開かれる重要な市場があり、半ダースの国からの住民と、五十の部族からの人々が集まるのだという。暗くすばらしいパゴダがあり、へきちなので疑問の多い精神が不安から逃れられる。世界中のどこよりも住むならそこだと彼は言う。そこで何が得られましたかと尋ねると、男は足るを知ることを学んだという。背の高い色黒の人物で、へき地で長いこと一人で暮らした人にありがちな、よそよそしい雰囲気を漂わせていた。こうした人々は他人がいっしょだと少し落ち着かず、船の喫煙室やクラブのバーではおしゃべりで親しみやすく、自分の物語をみんなに聞かせたり、ジョークを飛ばして非凡な経験を喜んで語ってくれるが、いつも何かを隠しているように見える。自分の内面に他とは切り離しておく人生を持ち、目つきの一部は、まるで内面に向けられているようで、その隠された人生こそがその人にとって意義を持つ唯一のものなのだとわかってしまう。そして時々、風変わりに見えることの危険や恐れによって一時的に強制された、社会的な杓子定規に対する不満を、彼らの目が思わず物語ってしまう。そのとき彼らは、自分の見つけた現実と再び共に過ごせるような、どこか好みの場所での単調な孤独を渴望するかのようだ。

この人物の話の内容もさることながら、この偶然の知己を得たやり方こそが、私をしてシャン州を横切る旅に駆り立てたのであり、いまその道中についたところだった。ビルマ北部の鉄道終点から、バンコクに到達できるシャム側の鉄道起点までは、六千から七千キロある。親切な人々が手を尽くしてこの探検を私にとって楽なものにしてくれた。そしてタウンジーの駐在事務官は電報で、到着したときに驟馬やポニーの迎えを手配したと連絡をくれた。ラングーンでは必要と思えるものを買い込み、折りたたみ椅子とテーブル、水の濾過器、ランプ、その他よくわからないものまで揃えた。マンダレーからタジまで列車に乗って、そこでタウンジーまで車を借り上げるつもりだった。そしてマンダレーのクラブで会った男がタジ在住で、出発前に一緒にランチ（朝食と昼食を組み合わせたビルマの素敵な食事）を、と誘われた。その男の名はマスターソンだった。三十代初頭、気持ちのいい親しみやすい顔で、黒い巻き毛に少し灰色が混じり、ハンサムな黒い目をしている。奇妙に音楽的な話方で、とてもゆっくりした話方であり、これが、理由はまるでわからないが、こちらに安心感を抱かせた。言うべきことを言うのにこれほど時間をかけ、世界がそれに耳を傾けてくれるくらいゆとりある場所だと館が手要る人物であれば、同輩の人間たちに同情心を抱くだけの人格の持ち主にちがいないと感じるのだ。彼は人の親しみやすさを当然の物と思っており、おそらくそれが可能だったのは、彼自身も親しみやすかっただろうと私は思う。なかなかよいユーモアのセンスを持っていて、もちろんこちらをチクチク突き刺すようなことは言わないが、共感できるくらいの皮肉ぶりだった。それ

は人生の偶発時に常識を適用し、それにより常識のちょっとバカげた面を見ってしまうという、共感できる種類の皮肉なのだ。商売の都合で年の大半はビルマ中を飛び回っており、その旅行中に収集家の癖が身につけてしまった。なんでも余ったお金はすべてビルマのおもしろい品物を買うのに注ぎこんでいるようで、彼が私を食事に誘ったのも、特にそれを私に見てほしいからなのだった。

列車がついたのは荘重だった。事務所にいなくてはならないため、迎えには来られないと彼は警告していた。でもランチは十時で、だから町での用事をいくつか終えたらすぐに家にきてくれという。「くつろいでくださいよ。ドリンクが欲しければボーイに頼んで。こちら仕事も片付いたらすぐに戻りますから」

車庫のあるところを見つけて、かなりおんぼろのフォードの持ち主と交渉し、私と荷物をタウンジーまで載せていってくれるよう交渉した。そして Madrassi の召使いを残して、車内に詰め込めるものはすべて詰め込んで、残りは足代にくくりつけるよう確実に見届けさせ、マスターソンの家にぶらぶらと向かった。高木が日陰を落とす道に面した、きちんとした小さなバンガローで、晴れた日の早朝の光の中では、きれいで落ち着けそうだった。階段をのぼると、マスターソンが合図をよこした。

「予想外に早く終わったんですよ。ランチの準備が調うまでに小物をお見せする時間があります。何か飲みますか？ といってもウイスキーとソーダしかお出しできないんですが」

「ちょっと早すぎませんか？」

「ちょっとね。でも我が家の規則の一つとして、一杯やらずには何人たりとも敷居をまたいではならないんです」

「それではルールに従うほかありませんね」

彼がボーイを呼ぶと、一瞬で小柄なビルマ人がデキャンタ、サイホン、グラスを運んできた。私はすわって部屋を見回した。こんなに荘重とはいえ、外の日差しは暑く、プライドは降りていた。照り返しのきつい道のあとで、その光は心地よかった。部屋は饒いすで快適な調度であり、壁にはイギリスの風景を描いた水彩画がかかっている。ちょっとお上品で古くさく、わが招待者の高齢で未婚の叔母が若き日に描いたのだろうと私は推測した。私の知らない大聖堂の絵が二枚、バラ園の絵が二、三枚、ジョージア風住宅の絵が一枚。私の目が一瞬その絵にとまったのを見て、マスターソンはこう言った。

「それはチェルテナムの我が家でした」

「おや、そちらのご出身ですか？」

そして、彼のコレクションもあった。部屋は仏像や、青銅や木による仏弟子たちの像でいっぱいだった。そして各種の形の箱、道具あれこれ、各種の変わったものがあり、あまりに多くのものがある一方で、ある種の趣味を持って配置されていたので、全体的に快い印象がある。実に美しいものを所有していた。彼はそれを誇らしげに見せて、あれやこれをどうやって手に入れたか、別のものについて聞きつけてそれを探だし、いやがる所有者にそれを手放させるために使った実に抜け目ない手口を語ってくれるのだった。その親切そうな目は、掘り出し物を見つけた話をするときには輝き、青銅の皿に対して公正な対価を受け取らずにそれを手元に残してしまった売り手の非道ぶりを責めるときには、暗い光を帯びた。部屋には花が飾られ、東洋で多くの独身者の家が持つ、あの惨めな感じはなかった。

「ずいぶん快適なおすまいですね」と私。

彼は部屋をさっと見回した。

「前はよかったんですがね。いまは大したことない」

どういう意味がよくわからなかった。すると彼は、長い金箔貼りの木箱を見せてくれた。それはマンダレー王宮で私が感嘆したガラスモザイクで装飾されているが、こちらの加工は王宮のどんなものよりも繊細だったし、それがその宝石のような豊かさといまっつて、イタリアルネサンスの凝った見事さにも比肩するものを醸し出していた。

「数百年前のものだというんですがね」と彼。「久しくこんなものは作っていないそうですよ」

この品は明らかに王宮のために作られたもので、何に使われてどんな人の手を渡ってきたかと思いをめぐらせてしまう。珠玉の品だった。

「中はどんな感じなんですか」と私は尋ねた。

「大したものじゃありませんよ。単に漆を塗ってあるだけ」

彼がそれを明けると、中には額入りの写真が三、四枚あるのが見えた。

「しまった、それを入れてあるのを忘れていた」とマスターソン。

その柔らかく音楽的な声は奇妙な響きだったので、私は彼をまじまじと見つめた。日焼けしていたが、顔はそれ以上に深く紅潮していた。そして箱を閉じかけたところで気が変わった。写真を一枚撮りだして、見せてくれたのだ。

「こういうビルマ娘の中には、若いうちはかなりかわいらしいのもいるんですよ、そう思いませんか？」と彼。

写真には、写真館でありがちな背景に、ちょっと緊張して立っている若い娘が映っていた。パゴダと椰子の木が並ぶ背景だ。彼女は精一杯のおめかしをして、髪に花を挿していた。だが写真を撮られることを気恥ずかしく思っているのはわかったが、それでも引込み思案の微笑がふるえつつ唇に浮かび、大きく荘厳な目もやはりお茶目なきらめきを浮かべている。とても背が低く、とてもほっそりしていた。

「実に魅惑的な子ですね」と私。

するとマスターソンは別の写真と取り出した。そこではすわった彼女の脇に子供が立っていて、その手がおずおずと彼女のひざに載っており、そして彼女は赤ん坊を腕に抱いている。子供は真っ正面をみつめて怖がっているような表情だ。この機械とその背後の男が、顔を黒い布に埋めて何をやっているのか理解できなかったのだ。

「彼女の子供なんですか？」

「そして私の」とマスターソン。

その瞬間、ボーイが入ってきてランチの用意が調いましたと告げた。我々は食堂に入って席についた。

「食事に何が出てくるかわかりませんよ。彼女が出て行ってから、家の中はすべてむちゃくちゃですから」

その赤い正直な顔がむっとりとしたものとなり、私は何と答えていいかわからなかった。

「ぺこぺこですから、何がでてきてもおいしいはずですよ」とあたりさわりなく返しておいた。彼は何も言わなかったが、薄いオートミールの皿が前に置かれた。私は牛乳と砂糖をかけた。マスターソンは一口、二口食べてから皿を脇に押しやった。

「あのろくでもない写真、見なきゃよかった」と彼。「せっかく片付けておいたのに」

あまり詮索したり、この家の主がしたくもない告白を無理強いしたりするつもりはなかったが、何か内心のわだかまりを語るのをとめてしまうほどの無関心を示したいとも思

わなかった。しばしばジャングルの孤立した駐在所や堅苦しい大邸宅、あるいはごったがえす中国都市のさなかの孤独の内に、人はこれまでだれにも語ることがないはずの打ち明け話を私にしてくれた。私は通りすがりの知り合いで、これまで会ったこともなく、おそらくはこの先会うこともないだろう。単調な生活を通り抜ける、一瞬限りの放浪者であり、飢えた衝動により己の心を赤裸々に語りたくなったのだ。私はこのようにして、その人物について十年に及ぶ知己として学べたよりはるかに多くのことを、一夜のうちに(ソーダ何本かとウィスキーを飲みつつ、アセチレン灯の範囲外にある険悪で説明しがたい世界に取り囲まれて)学んできたのだ。人間の性質に興味があるのなら、これが旅行の大きな喜びの一つだ。そして別れ際に(というのもいい頃合いで切り上げる必要があるからだ)ときどき彼らはこう語る:

「馬鹿げた話ばかりで、死ぬほど退屈させたんじゃないかと申し訳なくて。こんなにしゃべったのはは六ヶ月ぶりだ。でも胸のつかえをおろせてよかった」

ボーイはオートミールの皿を下げ、白い魚のフライを一切れずつ給仕した。ちょっと冷めていた。

「ひどい魚でしょう?」とマスターソン。「川魚は、鱒以外は嫌いなんです。ウスターソースまみれにするしかない」

そう言って大量にふりかけてからソースのボトルをこちらにまわした。

「あれは実によい家政婦だったんですよ。彼女がいた頃は鬪鶏まがいに食べまくってましたよ。こんなゴミを出そうものなら、調理人は四半時で追い出されてましたね」

彼はにっこりしたが、その微笑がとても甘いのに気がついた。それが彼をことさら優しく見せている。

「彼女と別れるのはかなりつらくてねえ」

いまや彼が話したいのは実に明らかだったので、私は何のためらいもなく糸口を与えた。

「けんかでもしたんですか?」

「いいえ、とてもけんかといえるようなものでは。五年もいっしょに暮らして、口論すらなかったんです。実に気立てのいい奴だったんですよ。何があっても起こったりしない。いつもコオロギみたいに楽しげでした。一瞥しただけで彼女の唇がほほえみを描くんです。いつも楽しげで。それも無理もないことでしょう。私がとってもよくしてやったんですから」

「そうでしょうか」と私は答えた。

「彼女はここの女主人だった。なんでもほしがるものは与えた。もっと手荒に扱ってやれば、出て行ったりしなかったかもしれません」

「あんまり当たり前のことを言わせないでくださいよ、女心となんとやら、とかね」

彼は謙遜するような一瞥をくれて、その目にひらめいた微笑にはかすかにためらいが見られた。

「こんなことお話しても退屈じゃないでしょうかね?」

「まさか」

「まあ、ある日街で見かけてちょっと気に入ったんです。写真をお見せしましたが、あの写真ではとてもわからない。ビルマ娘についてこんなことを言うのは変ですが、バラのつぼみみたいで、ほら、イギリスのバラではなく、お見せした箱のガラスの花が本物の花に似ているような感じで、東洋の庭園で育てられたバラが何か奇妙でエキゾチックな感じを漂わせているようなんです。どううまく説明していいかわからないかな?」

「それでもおっしゃりたいことはよくわかるつもりですよ」私は微笑した。

「二、三回見かけて、住所をつきとめました。ボーイをやって問い合わせると、彼女の両親は取り決め次第では喜んで彼女をくれるとのこと。値切る気もなかったので、何もかもすぐ決まりました。一家はお祝いの宴会を開き、彼女がやってきていっしょに暮らすようになったんです。もちろんあらゆる点で妻同様に扱い、家を仕切らせましたよ。ボーイたちには、彼女の命令をきけと支持して、もしだれかについて彼女が苦情を言ったらすぐにクビだと申し伝えました。ほら、一部の連中は女の子を召し使い部屋に押し込めておくので、出張に出るとその子たちはひどい目にあわされたりするでしょう。私はね、そりゃひどい話だと思うんですよ。女の子を連れてきていっしょに暮らすんなら、せめて楽しんでもらえるようにしたいじゃないですか。

彼女は実にうまくいって、私は天にもものぼる気持ちでしたよ。家は染み一つない。お金も節約してくれる。ボーイたちがぐすねたりしないよう目を光らせてくれましたし。ブリッジも教えて、信じられないかもしれませんが、実に名手になりましたよ」

「彼女はブリッジが気に入ったんですか？」

「大好きです。人が訪ねてくると、公爵夫人もさながらの大歓待でした。ほら、ビルマ人たちは実に礼儀正しいでしょう。ときどき来賓を迎えるときの自信たっぷりな様子を見て笑いそうになったもんです。ほら、政府高官とか通りすがりの兵隊とか。もし若い下級将校がちょっと引っ込み思案だと、彼女はすぐにそれをうちとけさせました。押しつけがましかったり出しゃばったりすることは決してなく、必要とされるときは忽然と現れて、すべてがうまくいってみんなが楽しんでいるよう最善を尽くしていたんです。ああそうだ、それとね、ラングーンとバモの間のどんな場所でもかなわない、最高のカクテルをミックスできたんですよ。みんな私は幸運だと言ってくれました」

「その通りだと言わざるを得ませんね」と私。

カレーが給仕され、私は皿に米を盛って、チキンをよそい、さらに何十もの小さなつけあわせの皿からあれこれ選んだ。おいしいカレーだった。

「そして赤ん坊も生まれました。三年で三人ですが、一人は六週間で死にました。生き残った二人の写真はお見せしました。へんてこなチビどもですよ？ 子供はお好きですか？」

「ええ。私は新生児について、奇妙でほとんど不自然なまでの情熱を抱いておりますよ」

「どうも私はちがうようなんです。自分自身の子でもあまり深い気持ちがわかない。これって自分が実はかなりろくでもないやつだという証拠なのかとも時々思うんですが」

「そうは思いませんよ。多くの人が子供に向ける情熱は、単にファッショナブルなポーズでしかないと思いますね。親からの愛が多すぎると負担になるし、それが無いほうが子供のためだと私は考えています」

「するとこの子は結婚してくれと言うんです。合法的に、イギリス式にってことですよ。最初は冗談だと思っていました。なんでそんなことを思いついたかもわかりません。ただの気まぐれだと思ったので、黙らせようと思って金のプレスレットをやりました。でも、気まぐれじゃなかった。まったく本気だった。そんなことはあり得ないと言いました。でも女のやり口はご存じでしょう、いったん何かがほしいと決めたら、一瞬たりとも手を休めない。おべっかを使ったりすねてみせたり、泣いたり、同情を買おうとしたり、かなり厳しい状況のときに約束を引き出そうとしたり、こちらが欲情しているときを見計らったり、彼女が病気になったときには、私も寸前までいきました。株の仲買人が市場を見るよ

りも注意深く私を観察したんだと思います。そしていかに自然に振る舞っていても、どんなに何かに没頭していても、彼女はいつも私が無防備になる瞬間を抜け目なく見張っていて、そこで私を攻撃してポイントを稼ぐつもりだったと思います」

マスターソンはまたもや、そのゆっくりした見事な微笑を浮かべてこちらを見た。

「たぶん女ってやつは世界中どこでも同じなんでしょうね」

「そうなんでしょう」と私。

「前から決して理解できないのは、なぜ女ってやつはこっちの意に沿わぬことをがんばってやらせようとするのかってことです。何もしないより、無理矢理何かをやらせるほうがいいと思う。それで子どもがどんな満足感を得るのかまるでわからないんですがね」

「勝利の満足感。意志に反して説得された男は、考えは変わっていないかも知れないが、女はそんなことは気にしない。征服したんです。自分の力を証明した」

マスターソンは肩をすくめた。そして紅茶を飲んだ。

「いや彼女に言わせると、わたしは遅かれ早かれイギリス人の子と結婚して彼女を追い出すことになると思うんです。私は結婚する気はないんだと言いました。すると、そんなことはずっと知っていたと思うんです。でも結婚しなくてもいつか引退してイギリスに戻るだろう、そうなったらあたしはどうなるんだ、と。これが一年続きました。私は突っ張った。すると彼女は、結婚してくれないなら出て行って子供も連れて行く、と言うんです。バカなことを言うな、と言ってやりました。でも彼女は、いまここを出ればビルマ人と結婚できるけれど、数年でだれにも相手にされなくなると言うんです。そして荷造りを始めました。ただのはったりだと思って、その手は喰わないと思ってこう言いました。『だったら行きたいなら行けばいい。でも出ていったら戻ってくるなよ』。彼女がこんな家をあきらめるとは思わなかったし、私からのプレゼントや分け前すべてをすてて、自分の家族のもとに戻るとは思いませんでしたね。彼女の一家は極貧でしたから。でも、彼女は荷造りを続けました。いつも通りに優しく、陽気でニコニコしていました。仲間がうちに来て泊まっていったときも、いつも通り礼儀正しく、朝の二時までブリッジにつきあってくれましたよ。彼女が本気でここを出るつもりだとは信じられず、それでもわたしはかなり怯えていたんです。とっつても彼女を気に入ってましたから。本当にとんでもなくいい子だったんです」

「でも気に入っていたなら、一体全体なぜ結婚しなかったんです？　すごくうまく行ったでしょうに」

「なぜですって。彼女と結婚したら今後ずっとビルマにいることになる。いつの日か私も引退し、そうしたら古い家に戻ってそこで暮らしたいんです。死んでここに骨を埋めたくはない、イギリスの教会墓地に埋葬されたい。ここでは十分幸せですが、ずっとここで暮らしたくはない。無理だ。イギリスがほしい。ときにはこの暑い日差しやげばげばしい色彩にうんざりする。灰色の空と小雨と田舎の匂いがほしい。戻ったら変わり者の太った老人になって、狩りをするだけの余裕があるとしてもそれには歳を食い過ぎているでしょうが、釣りならできる。虎なんか撃ちたくない、ウサギを撃ちたい。そしてまともなコースでゴルフができる。もちろん自分がまったくダメなのは知っていますよ、外地で生涯を送った我々はみんなそうなんです、でも地元のクラブまわりでうろついて、引退したインド生まれのイギリス人たちとおしゃべりができる。足もとにイギリス田舎町の灰色の舗石を感じたい、昨日よこしたステーキが固すぎたといって肉屋と一悶着起こしたい、古本屋をうろつきたいんだ。少年時代の私を知っている人に、こんにちわとあいさつされた

い。そして家の裏に塀で囲った庭を盛ってバラを育てたいんですよ。月並みで田舎くさくて退屈に思われるかもしれないですが、でも私の一家はずっとそういう暮らしをしてきて、私自身もそういう暮らしがしたいんですよ。言わば夢なんです、私にはそれしかなく、それが私にとってのすべてで、それをあきらめられないんです」

彼は一瞬間をおいて私の目をのぞきこんだ。

「ひどい馬鹿者だと思いですか？」

「いいえ」

「するとある朝、彼女がやってきて出て行くといいました。荷物を荷車に積み終えていましたが、その時でも本気だとは思いませんでした。すると子供二人をリキシャに乗せて、さよならを言いにきました。そして泣き出しました。いやはや、私も思わずほだされましたよ。本気で行くのかと尋ねると、はい、結婚してくれない限りは、と言う。私は首を横に振りました。妥協する寸前までいったんですが、たぶん私も泣いていたと思います。すると彼女も大泣きして、家から駆けだして行きました。落ち着くためにウイスキーをタンブラー半分飲み干さなくてはなりませんでした」

「これはどのくらい前のことですか？」

「四ヶ月。最初は戻ってくるだろうと思って、ただ恥ずかしくて第一歩を踏み出せないだろうと思ったからボーイをやって、戻ってくれば受け入れると告げたんです。でも断られた。彼女がいないと家が実に空っぽだ。最初は慣れるかと思いましたが、どうにも空っぽぶりが一向に減らない。彼女がこれほど自分にとって重要だとは気がつかなかった。私の心に自分を結わえ付けたんですよ」

「結婚に同意すれば彼女も戻ってくるのでは」

「あ、そうなんですよ。ボーイにも彼女はそう言いました。ときには、夢のために幸福を犠牲にする価値があるのかと自問するんです。だって、ただの夢ですよ。おかしなものです、私をためらわせるものの一つは、昔知っていた泥だらけの小道の思い出で、その両側には大きな粘土の斜面があって、頭上にはブナの木が垂れているんです。そこには何か冷たい土くさい匂いがあって、それをついぞ鼻孔から追い出せないんだ。彼女を責めるつもりはないんですよ、むしろ感心するくらいです。あれほど芯があるとは思ってもみませんでした。ときには、折れる寸前までいきそうになる。彼はちょっとためらった。「たぶん、彼女が私を愛していると思えるなら、結婚するでしょう。でももちろん、愛してなんかいない。この連中は決して愛さない、白人なんかと暮らしにくる女の子ってやつは。たぶん私が好きではあったでしょうね。でもそれだけ。あなただったらどうしますか？」

「ああ、我がご同輩よ、私にわかるはずがありませんか？ 夢を忘れることがありますか？」

「決して」

その瞬間にボーイが入ってきて、フォード車の Madrassi 召使いがちょうど迎えにきたと告げた。マスターソンは腕時計を見た。

「そろそろ出かけたいんでしょう？ それに私も事務所に戻らないと。私の家庭事情の話で退屈させたんじゃありませんか」

「いいえまったく」と私。

私たちは握手して、私はトーピーをかぶり、そして走り去る車内の私に彼は手を振ってくれた。

第 11 章

タウンジーで数日過ごして準備を整え、ある早朝に出発した。雨期の終わりで曇り空だが、その雲はかなり高く明かった。地方は大きく開けており、灌木があちこちに生えているだけ。だがときどき、その中の巨人として、根を広く張ったバニヤンの木に出くわす。それは地上に立ちほだかり、崇拜されるにふさわしい荘厳さを持っている。自然の盲目的な力に対する己の勝利を知っており、いまや敵の強みを知った大国のように武装平和に安住しているかのようだ。根本には、シャン族がそこに宿る精霊に捧げた貢ぎ物が置かれている。道はゆるい下り坂を拷問のように上り下りしてその両側を走り、高地の平原を延び、ガマの穂を揺らす。その白い茎は汗ばむ空気の中でかすかにそよいだ。人間の背よりも高く、その中を車で抜けると、軍の指揮官が背の高い緑の兵部隊大群を閲兵しているような気分だった。

私はキャラバンの先頭にまたがり、荷物を運ぶラバやポニーはその後ろに従った。だがポニーの一端が、ひょっとして荷運びに馴染みがなかったのか、とても荒れていた。凶暴な目をしている。しょっちゅうラバの間を荒っぽく走り回り、背負った荷物をぶつける。すると先導するラバがその行く手をふさぎ、道ばたの高い草地に追い込んで止めた。両者はしばらくじっと立ち尽くし、それからラバはポニーを静かに列のものといちに連れ戻した。ポニーはかなりおとなしく歩いた。やるだけの騒動はやったので、しばらくの間は何があるともまともに振る舞うことにしたわけだ。群れを先導するラバ的頭脳の中にある発想は、デカルトの思想なみに明確ではっきりしていた。行列の中にこそ平和と秩序と幸福がある。鼻面を前のラバのしっぽにくっつけて歩き、後ろのラバの鼻面が自分のしっぽにくっついていると知ることが美德なのだ。一部の哲学者のように、ラバは唯一の自由とは正しいことをする力だけなのだを知っていた。それ以外の力はすべて名目だけのライセンスだ。なぜと問うなかれ、単に実行して死すのみ。

だが間もなく、私は道の真ん中にてこでも動かずじっとしている水牛と対面することとなった。さて、シャン州の水牛は、中国水牛のように私の肌の色を嫌うことはないし、したがって白人が中国水牛に対してやるように大きくよける必要はないのは知っていた。でもこの目の前の動物が国籍についてきわめて厳密な意識を持っているかどうかは自信がなかったし、その角は巨大で目はとても友好的とは言えなかったので、ちょっと回り道をするのが賢明だろうと考えた。これにより我が隊列が丸ごと、ラバも子ラバも私のような懸念事項など一切持ち合わせているはずもないのに、私の後についてガマの茂みに入り込んだ。今にして思うと、決まりを無意味に守りすぎることで、やたらに無用のトラブルを引き起こすこともあると言わざるを得ない。

大量に暇はあって、気を散らすものはなにもないため、この道中では昔から頭の片隅にあった各種の事柄を考えようと己に誓っていた。本気で何らかの結論を出すべきだと思う

れた無数の主題、まちがいや邪悪、空間、時間、偶然と無常などがある。芸術や人生についても己に語るべきことがたくさんあったが、そうした考えは古いガラクタ店の物体のようにごちゃごちゃで、それがほしいときにもどこから手をつけていいかわからない。ダンスの引き出しの奥に入った小物のように、頭の片隅のどこかにはあって、それが見つかりさえすれば。その一部はあまりに長いこと取り出してほこりを払ったりしていないので恥ずかしいくらいで、新旧入り混じってごっちゃになり、一部はもはや使いようもないからあっさりゴミの山に投げ捨てるべきで、一部は(アン女王式のスプーンのペアで、ディーラーがちょうど競売で見つけてきてくれた四つとあわせるとうまく半ダースになるもののように)ちょうど新しいものにうまく組み合わせる。すべてをきれいにしておこりをはらい、きちんと棚に片付け、秩序だててカタログにして、自分の在庫がどんなものかわかるようにすれば気持ちがいいことだろう。だから田舎のこの道中に、自分の考えをすべて春の在庫整理にかけようと決意したのだった。だが列の先頭のラバは、首のまわりに大音響の鐘をつけていて、それが実に大音量でガラガラ鳴るために、思索がえらく妨害されてしまう。それはマフィン売りの鐘のようで、若き日のロンドンにおける日曜の午後を連想させ、その無人の通りや灰色で寒々とした憂鬱な空を思い起こさせた。ポニーに拍車を当てて、トロットでその陰気な音から逃れようとしていたが、そうしたとたん列の先頭もトロットを開始して、行列全体がその後についてトロットを始める。ギャロップをすると、一瞬でラバやポニーたちは、荷物をガラガラと跳ね上げつつ、私の後についてデタラメなギャロップをしており、マフィンの鐘はすぐ背後で狂ったように鳴り響いて、ロンドン中のマフィン業者たちの死の苦悶を告げるかのようだ。これはまずいと思ってあきらめ、またもやだく足に戻す。行列は速度を落とし、ちょうど私の背後では、列の先頭のラバがあの無人の通りを行ったり来たりして、紅茶にマフィン、マフィンとクランペットと売り歩き続ける。二つたりとも考えをまとめられなかった。ついに私は、その日はもう深刻な思索にふけろうとするのは諦めて、かわりに時間をつぶすべく、ブレンキンソップを発明したのだった。

作家にとって、読者の敬意と畏敬を引き起こすほど満足のいくことはございません。読者を笑わせたら小者だと思われませんが、適切な形で退屈させれば、もう評価は決まったようなものです。昔々、ブレンキンソップなる御仁がおりました。才能皆無ながら、きまじめさと誠実さ、思索の深さと誠意とがあまりに明白だったので、まったく読むに耐えない代物だったのに、それに感銘を受けない者はありませんでした。書評家たちもみんな読み通せはしませんでした。著者の高い志と狙いの純粋性はいやでもわかりました。そして口をそろえて実に熱烈に褒めそやしたので、自分が最先端にいると思込んでいる人々はすべて、自分も是非一冊手元に置かねばと感じたほどです。『ロンドンマーキュリー』紙の書評子は、こんな本がこの己自身にも書くことがかなうならよかったのにと述べました。これがその人物の知る最高のほめ言葉だったのです。ブレンキンソップ氏はこの文法には怖気をふるったものの賛辞は受け取りました。ウルフ夫人はブルームズベリーで鷹揚にほめそやし、オズバート・シットウェル氏はチェルシーで絶賛し、アーノルド・ベネット氏はキャドガン広場でよい評価を下します。蓮っ葉な賢い女性は、自分がエンバシークラブとパンディング式ダイエット法以外のことを考えないなどと思われたくないがために、その本を買い求めました。ランチパーティーにでかける詩人たちは、まるですべてを熟読したかのような口ぶりです。そして志の高い若者がお茶の時間に集まって知見を高めるような、田舎の大都市でも買い求められました。アメリカ版にはヒュー・ウォールポー

ル氏が序文を寄せています。書店はウィンドウにそれを山積みにして、その片側に著者の写真と、反対側には高名な書評からの長い抜粋を載せたカードを展示しました。つまりところその本の名声はあまりに高すぎて、出版社によればこの売れ行きがじきに低下しなければ自分でも読まねばならぬことになるほどだとのこと。ブレンキンソップ氏は有名人となりました。そしてライセウムクラブの年次ディナーに招かれるほどとなりました。

さてたまたま、ブレンキンソップ氏の本がめまいがするほどの成功の絶頂に達したとき、書記官が誕生日のお祝いを授与する人々の一覧を首相に提示いたしました。この王家の高官は不安そうにそれを眺めたものです。

「ずいぶん貧相な連中だな。世間があれこれ文句を言うだろう」

書記官は民主派でした。「どうでもいいではありませんか。世間は勝手に頭から湯気を立てればよいのです」

「芸術文芸方面で何かないのかね」と首相は示唆いたします。

書記官は、王立学会はほとんど全員がすでにナイトを授与されていたし、それ以外のやつらがナイトになったら、いまのナイトたちがとんでもない大騒ぎを展開するだろうと指摘しました。

「枯れ木も山の賑わいとはいかないものなのかねえ」と首相は軽薄ぶって申します。

「いえいえまさか。王立学会での授与者が増えれば、それだけその金銭価値は下がるわけですから」

「なるほど。しかしイギリスには作家はおらんのかね？」と首相。

「調べましょう」とベイリオル学寮出身の書記官は答えました。

そして彼は、全英リベラルクラブで尋ねまして、ホール・ケイン卿とジェイムズ・バリー卿がいると教わりました。が、この二人には山ほどの荣誉が浴びせられていたために、やるならイギリス最高のガーター勲章でも与えるしかないようで、この二人にそんなものを授与したら、ロンドン市長卿はいたくお腹立ちとなることは明らかです。しかし首相は頑固にこだわり続け、書記官は大いに悩んだものです。でもある日、ヒゲを剃らせている時に、ブレンキンソップの本を読んだかと床屋が尋ねたのでした。

「私はあまり本は読まんのですがね、でもうちのバロウズ嬢、ほら、こないだ爪の手入れをさせていただいた子ですが、あの子の話だととにかく神々しいばかりとか」

首相秘書官は芸術や文芸の目下の動きを把握するのも職務のうちと心得ておりましたし、ブレンキンソップの著書が立派な本だというのもよく知っておりました。彼に荣誉を与えれば国家も己自身の荣誉を高め、世間も、さほど名の知られていない臣民の奉仕に報いるような爵位だの貴族の位を、あまり渋い顔もせず受け入れてくれるかもしれせん。しかしながら危険を冒すわけにはまいりませんので、そのマニキュア士を呼びにやったのです。

「読んだのかね」と単刀直入に尋ねました。

「いいえ、正確に言うと、読むと言えるようなことはしてないんですが、爪のお手入れをさせていただく殿方はみんな、それがまったくもってすばらしいとおっしゃいますのよ」

この会話の結果として書記官は、首相の前にブレンキンソップの名前を提示して、その著書について話したのです。

「で、きみ自身はこの本をどう思ったね？」と偉人は尋ねました。

書記官は無愛想に答えます。「読んでおりません。本など読みませんから。でもその本について、私が知らぬことはございません」

ブレンキンソップは、KCVO（ロイヤルヴィクトリア二頭勲章）ではどうかという申し出を受けました。

「どうせやるならきっちりやったほうがいいからな」と首相。

しかしブレンキンソップは、己の性格を裏切ることなく、この榮譽を辞退させて頂きたいと懇願したのでした。さあ話は実に困ったことになってまいりました！ 首相書記官はもう万策尽き果てております。しかし首相は決意の人なのです。いったん何かすると決めたら、どんな障害にも邪魔はさせません。その肥沃な脳の一閃で解決策を思いつき、文芸も結局のところ、誕生日の榮譽に名前を連ねることと相成りました。そして子爵の地位が与えられたのは、ブラッドショー鉄道時刻表の編者だったとさ。

第 12 章

だが、もし静かな道中がほしいのならラバたちを一時間先に出発させねばならないと経験から悟った後でも、思索に選んだ主題にはどれ一つとして考えを集中させられなかった。いささかでも大事となるようなことは何一つ起きなかったが、当方の注意はそれ以外に何百という些末な出来事に気を散らされたのだった。黒と白の大きなチョウが二ひき、目の前をひらひらと飛んでおり、国のために支払った犠牲を喜びある慎みの中で耐えようとする、若き戦争寡婦のようだった。そうした寡婦は、クラリッジでダンスがあり、ヴァンドーム宮殿のドレス屋がある限り、世界は万事快調といつでも誓えるのだ。生意気な小鳥が道を跳ねていて、ときどきこちらに向き直って、まるで銀灰色の精悍な装いに私の注意を向けようとしているかのようだ。チープサイドの駅から勤務先へ足をはこぶ、こぎれいなタイピストのように見える。サフラン色のチョウの群れがロバの糞に群がっており、それはでぶのパトロンのもわりに群がる、イブニング用フロック姿のきれいな女の子たちを思わせる。道ばたには、子供時代の小屋の庭にあったのを覚えているナデシコと似た花が咲き、別の花はもっと茎の長いヒースを思わせる。多くの作家がやるように、私も小さなシャン地方のポニーにまたがってゆっくり進む中で見かけた鳥や花を正確に列挙してこのページを際立たせたいものだと思う。そうすると科学的な雰囲気が出るし、読者たちがそうした部分は読み飛ばすにしても、自分がしっかりした事実を書いた本を読んでいるのだと思えば、ちょっとした自尊心の震えも起こることだろう。*P. Johnsonii* を見かけたと書くと、読者とは不思議に仲間めいた関係となれる。それはほとんどカバラめいた意義を持つ。自分と相手（作家と読者）は万人が知るわけではなく凡庸でもない知識を共有しているのであり、メーソンのエプロンや古いイートン式のネクタイをまとう人々同士のような共感が両者の間には生じる。秘密のことばでやりとりを交わすのだ。ビルマ北部の植物学や鳥類学に関する専門書の脚注に、「しかしモームはシャン州南部で *F. Jonesia* を目撃したと書いている」などとあるのを目にしたら、誇らしく思うだろう。だが私は植物学や鳥類学については何も知らない。それどころか、まったく無知な科学分野を挙げるだけで丸ページを埋められる。黄色いサクラソウは、私にとっては残念ながら、*Primula Vulgaris* ではなく、ただの小さな黄色い花で、そのかすかな香りは雨のにおいと、心が不思議と躍る二月の灰色で湿った朝の匂い、ケント地方の豊かな湿った土の香り、国会議事堂広場にある青銅ローブをまとったビーコンズフィールド卿の銅像、優しい微笑を持ったあの少女の黄色い髪、いまや灰色で刈り上げられた髪の匂いなのだ。

シャン族の一団が、木の下で夕食を調理している脇を通り過ぎた。荷車で自分たちのまわりを囲い、一種の車陣を作っていて、役牛たちはちょっと離れたところで草をはんでいる。そのまま一、二マイル進むと、立派なビルマ人が道ばたにすわって両切り葉巻を刷っているのに出くわした。そのまわりには使用人たちが、荷物をまわりの地面においてい

た。というのもこの人物はラバもなく、みんなこの人物の荷物を人手で運んでいたからだ。一行は棒で小さな火をおこし、昼食の米を炊いていた。この立派なビルマ人と我が通訳がおしゃべりをする間、私は歩みを止めた。チェントンの書記でタウンジーに向かい、政府の役所に仕事がないかを探しにいくところだった。すでに出発して十八日目で、あとたった四日の行程だからほとんど旅は終わったも同然だと考えていた。続いて馬に乗ったシャン人が、まとめようとしていた私の思索に混乱を投げかける。毛深いポニーにまたがっており、鐙に乗せた足は裸足だ。白い上着を着て、極彩色のスカートはまくりあげられ、陽気な乗馬用ブリーチのように見えた。頭には黄色のハンカチを結わえている。この広大な高知を駆け巡るロマンチックな人物だったが、実に華々しい物腰で時空を駆け抜ける、レンブラントのポーランドの旗手ほどロマンチックではない。あれほどの謎めいた雰囲気醸しだし、見ただけで己を誘惑しつつも道を拒絶する、未知のものの敷居に立っているような気持ちにさせるのは、生きた騎手はだれであれ決して達成したことがない。そしてそれは不思議でもなんでもない。というのも自然とその美しさは死んだ無意味なものであり、それに意味を持たせられるのは芸術だけだからだ。

だがこれほど気が散るものが多いと、旅路の果てにたどりついても結局のところ、自分が考えるつもりでいた重要な主題について、一つたりとも考えをまとめきれずに終わるのではないかと危ぶむ他はないのだった。

第 13 章

一日の行軍は、せいぜいが十二マイルから十五マイル、これは驃馬が普通にこなせるだけの距離であり、また公共工事局のバンガローが配置されている間隔でもある。だがそれが毎日の決まり作業となったので、一日中特急列車に乗っていたのと同じくらい、距離をカバーしたという間隔を与えてくれるのだ。目的地に着くと、たった数マイルほどしか移動していなくても、現実にはパリからマドリッドまで移動したのと同じくらい出発点からは遠ざかっているのだ。流れに沿って数日川沿いに移動すると、自分ではかなり大層な距離のように思える。その場所の名前を尋ねると、名前などないことを知って驚くが、よく考えて見ればたった二十五マイルほど移動しただけなのだ。そして昨日馬上で移動した高地と、今日馬上で移動しているジャングルとのちがいは、ある国と別の国とのちがいくらいに印象がちがって思える。

だがバンガローは同じパターンで建っているので、何時間か驃馬に揺られていても（一行は一時間に二マイルちょっとしか進めない）、いつも同じ家にたどりつくように思える。それは道から数ヤード離れた敷地の柱の上に立っている。大きな居間があり、その奥に寝室二つでそれぞれ洗面所がある。今の真ん中には見事なチークのテーブルがある。足台のついた安楽椅子が二つあり、しっかりした飾り気のないひじかけつきの椅子が四脚、テーブルの回りに置かれている。飾り棚があって、その上に一九一八年の「ストランド・マガジン」と、フィリップス・オッペンハイムによるボロボロに読み潰された小説が二冊ある。壁には道路の長手方向断面と、ビルマ狩猟規則、バンガローの中の家具と生活道具一覧が貼ってある。敷地内には召使い小屋、ポニー用の厩舎、コックの家がある。決して見栄えがするものではないし、さほど快適でもないが、質実剛健でつかいものになる。そしてどのバンガローも、それまで見たこともなく、その日以降は二度と見ることもないのだが、朝の旅の終わりにそれが目に入った時には、ちょっとした満足感で身震いしないほうが珍しかった。自宅に帰ってきて、そのきれいな屋根をかいま見たとたんにポニーに拍車をかけ、脇目もふらずに玄関までギャロップするようなものだ。

バンガローは一般に村の縁に建っていて、共同体の範囲内に到着すると、首長がその書記と同伴者である息子が甥、そして長老たちが迎えに待っているのだった。近づくと座り込み、シコーをして^{*1}、コップの水と、マリゴールドいくつか、そして米を少々差し出す。わたしは不安を抱きつつ水を飲んだ。だがあるとき、お盆の上に細い口ウソク八本が並んでいるものを渡され、これは私に対して示せる敬意の中で最高位のものであり、というもこの口ウソクは仏像の前に備えられるものだからという。私は、自分がとてもこんな賞賛に値しない人物だということを意識せずにはいられなかった。バンガローに落ち着

*1 訳注：ビルマの挨拶で、目上の者の前で両手を握りしめて頭を垂れること。

くと、そこで通訳が、首長や長老たちが外に立っていて、習慣である贈り物を差し出したがっていると告げる。漆塗りのお盆に載せて、卵、米、バナナだ。私は椅子にすわって、彼らは私の前に半円形を作ってひざまづいた。首長は、身ぶりをたっぶり使いつつも威厳は失わずに、長口舌をふるった。通訳による翻訳を通じて、自分が決して知らないわけではないフレーズをいくつか聴き取れたと思ったし、何かある旗についての何かは聞き取れたようで、海を横切る手で私が自国にこのはるかなる国からの歓迎だけでなく、その住民からの碎石舗装道路を作って欲しいという至急要請を持ち帰ってほしいと言っているようだ。私はこれほど雄弁ではないにしても、少なくとも同じくらい長い返答をすべきだという気になった。私はさまよう見知らぬ人物でしかなく、そして私の道中を容易にするよう彼らが命令を受けていたせいで、多少なりともこちらを重要人物と誤解してしまったなら、少なくともそういう重要人物のように振る舞わないことで自分自身に対しては公正でいられる、私は政治家ではないし、帝国統治が仕事の人々が口から難なく垂れ流す、帝国の常套句を口走るのはあまりにはずかしかった。もしかすると聴衆に対し、権力を持ちながら彼らを放っておこうとする権力に支配されていて幸運ですねと言うべきだったかもしれない。年に一度、地区の駐在官がまわってきて、村の中では解決できない争いを調停し、みんなの苦情を聞き、必要なら新しい首長を任命して、それ以外は放っておく。人々は自分たちの習俗にしたがって自分たちを統治しており、米を育て、結婚し、子供を作り、死に、好きな神を拝むのに何ら制約はない。兵士も見かけず牢屋もない。だがこうした問題はこちらの得意分野ではないと思ったので、私は彼らをおもしろがらせるというもっと小さな部門に専念することにした。私は決して講演者ではないが（公共の場で無理強いされた公の場での演説は、片手で数えられる）、贈り物として与えられた卵、バナナ、米のお返しに、多少の優雅でユーモアある挨拶を考案するのはむずかしくはなかった。

とはいえ、卵やバナナ、米について四十種類のちがった演説を考えるのは容易ではなく、しかも卵は間もなく新鮮にはほど遠いことを身をもって知らされた。だが毎日同じことを言ったら通訳に軽蔑されると思って、朝にポニーにまたがりながら、頭をひねって歓迎とプレゼントに対する感謝の意を述べる新しい言い方を考案したのだった。一日、また一日とたつうちに、30種類以上のちがう演説を発明して、自分の言ったことを通訳が翻訳するのをすわって見ていると、首長や長老たちに要点が伝わったときにちょっとうなずいたり、冗談を理解したときに身を揺すったりするのを見て、満足感を覚えるのだった。さてある朝、私は突然、まったく新しい漫談を思いついた。とても可笑しいもので、一瞬のうちにはそれをどう演説に取り入れるべきかもわかった。英米のユーモア作家の仕事はつらいもので、というのもウィットの核心は簡潔さよりはポルノグラフィだからなのだが、その観客の謹厳さ（そしてあるいはその感性）のおかげで、それが最も見つけやすい領域以外の場所で笑いを探すしかなくなっているのだ。だが詩人は、ピンダロス風オードの複雑な格に制約されていたほうが、自由詩のゆとりがあるときよりも見事な詩を生み出したりするように、ユーモア作家たちの道に置かれた困難は、しばしば彼らにとんでもないところで予想外の発見をさせるに到っている。タブーがなければ決して探さなかったようなところに、豊かな笑いを大量に見つけたのだ。ユーモア作家を脅かす二つの落とし穴は、一方ではまぬけさであり、もう一方は嫌悪で、そして嫌悪による反発よりもまぬけぶりが引き起こす怒りのほうが大きいというのは、英米のユーモア作家が耐えねばならない残念な事実ではある。

だがこ頃には観客のこともわかってきたし、このジョークは、粗野ではないと願いたい

が、蚊が顔を撫でて、はたこうとするとブーンと飛び去るときのように、卑猥さにかすかに触れる。自分ではとてもおもしろかったし、そしてポニーに乗りつつ、これから向かう村の首長や長老たちが目の前の床で膝をつき、笑いにうちふるえたり転げ回ったりしている様子を思い浮かべるのだった。

到着した。村の長は七十五歳で、三〇年も首長をやってきた。いっしょに甥っ子を連れてきており、こちらはおとなしい若者でやっとひげが生えはじめたばかりで、他には長老たち四、五人と、ちょっと離れて小さくすわっている初期、しわだらけでまばらな灰色の髭を生やした年齢不詳の男性、あまりに高齢でもはや人間とも思えない人物もやってきた。その高齢者は、廃墟へと崩れ落ちつつあるパゴダのようで、間もなく迫り来るジャングルがそれを覆い尽くし、消し去ってしまうように見える。

頃合いを見て私は演説を行い、うまいジョークのところにくると、通訳はくすくす笑って目が輝いた。私は得意だった。そして話し終わると椅子に座り直し、通訳が我が気の利いたことばを翻訳するに任せた。半円を描く聞き手たちは、目を私から通訳に向けて、黒い注視する目で見つめた。我が通訳はよい語り手で、流暢でしかもわかりやすく生き活きた身ぶりの才能を持っていた。いつだってきちんと通訳されていると感じた。これ以上ウィットに富んだ演説をしたことはなかった。だがそれがどうもウケなかったのが驚いた。機知のどれ一つとして報いの微笑すら起きない。みんな礼儀正しく耳を傾けたが、表情の変化を見ても、興味をおぼえたりおもしろがったりしている様子はない。再興のジョークは最後にとっておいて、それが近づいているなと思うと唇に微笑を浮かべ、身を乗り出した。通訳は口を止めた。笑いなし、クスクス声さえない。がっかりしたと言わざるを得ない。首長に儀式は終わりだと身ぶりで示し、彼らはシコーをして、苦労して立ち上がり、一人、また一人とバンガローを出て行った。

私は一瞬ためらった。

「この人たちはどうもあまり賢くないように思えたんだが」私は遠回しに言った。

「これまで会った中でも最大級のパカどもですね」と通訳は答え、その口調には糾弾するような雰囲気があった。「毎日同じジョークを飛ばしているのに、まったく笑わなかったのはこいつらが初めてです」

私はちょっとあっけにと取られた。何かの聞き違いかとも思った。「今何と言った？」

「旦那、なんでいろいろちがったことを言うんですか？ あんな無知な連中のために手間をかけすぎですよ。私は毎日同じ演説をしていて、みんな大いに気に入っています」

私は一瞬黙りこくった。

「じゃあお前にしてみれば、私がかげ算の九九を唱えても関係ないわけか」と間を置いて私は言い、ある程度の皮肉をこめたつもりだった。

通訳はぱっと顔を輝かせて、大量の白い歯をこちらにむき出した。

「おっしゃる通りです、旦那。そしたら旦那もずいぶん手間が省けますね。旦那はかけ算の九九を言って、それから私が演説をやる、と」

最悪なのは、自分がかけ算の九九をちゃんと覚えているか、今一つ自信がないことだった。

第14章

早朝に出発すると、朝露があまりにひどくて滴るのが見えるほどで、空は灰色だった。だがしばらくすると太陽がそれを貫き、空はいまや青くなり、積雲だった雲はいまや、北極のまわりを静かにはなまわる白い海獣たちさながらだ。田舎は人口が希薄で、道の両側はジャングルだ。数日にわたり、広い道を通って快適な高地を進んだ。碎石舗装はされていないものの路面はかたく、牛車の通行で深い轍ができています。ときどき鳩をみかけたり、ときどきカラスを見かけたりしたが、鳥はほとんどいなかった。それから開けた平野を離れると、人里離れた丘や竹林を通過した。竹林は優雅なものだ。魔法の森のような負に気があり、その緑の影のなかには東洋のお話のヒロインとなるお姫様がいるかのようで、その恋人たる王子様が、きちんとその奇々怪々ですばらしい冒険などを実行できそうだ。日が差し込んで、希薄な風がその優雅な葉をはためかせると、その効果は魅惑的なほどに非現実的だ。それは自然の美しさではなく、芝居じみた美しさだ。

とうとうサルウィン川に到着した。これはチベット高原のはるか高地から発する大河の一つだ。ブラマプトラ川、イラワーディ川、サルウィン川、メコン川。これらは並行して南下し、やがてその大量の水をインド洋に注ぎ込む。きわめて無知な私は、ビルマにやってくるまでこの川を知らず、その時点ですら単なる名前の一つでしかなかった。ガンジス河やティベル川、グアダルキビール川といった川と永遠に結びついている各種連想は一切持っていない。その川沿いに歩くことでやっと、それは私にとって意味を持つようになり、意味とともに謎もやってきた。それは距離の尺度でもあり、最初はサルウィン川からあと七日の距離で、次は六日。実に遠いものに思えたし、マンダレーでは人々がこう語るのを耳にした。

「ロジャーズ一家がサルウィン川に住んでなかったっけ？ 渡るときには是非とも尋ねて滞在すべきだよ」

だれかがもっと詳しく述べた。「ああご同輩よ、連中はシャム国境すぐのところにいるんだよ。そこから三週間以上のところには出かけないから」

そして道中で珍しく旅人とすれちがったとき、たとえば通訳が彼としゃべって、私のところにやってきてサルウィン川を三日前に渡ったそうだと教えてくれる。水位は高かったが、下がってきているとか。悪天候なら渡るのはただ事ではない。「サルウィン川の向こう」というのは魅惑的な響きで、地域は薄暗く彼方に思えた。私は次から次へとちょっとした印象を加え、無関係な事実、単語、形容、古い本の図版の思い出なども足して、スタンダールの本の恋人がその相手に好みの宝石を積み上げるようにその名を連想で豊かにして、やがてサルウィン川の思いが想像力を酔わせるようになる。それは我が夢の東洋の川となり、幅広い水が深く密やかに木々の生えた丘を流れ、そしてそこにはロマンスがあり、暗い謎があるので、ここが源流で大洋に流れ込むとはほとんど信じられず、むしろ永遠の

シンボルが未知の水源から流れ出して己を未知の海へと見失うかのように思えてくる。

サルウィン川からは二日の距離だった。そして一日。高地の未知を離れ、ジャングルの間をくねり丘陵地を次々にぬける岩だらけの小道に入った。霧が重く、道の両側の竹林は薄気味悪かった。世界の長い歴史の発端で、絶望的な戦争を戦い、いまや力を失いつつ不気味な沈黙の中で待ち続け、待ちつつ見張っているがその大將はだれも知らないという巨大な軍の色あせた生き霊のようだ。だがときどき、直立してそびえるように、背の高い、すさまじく背の高い木の陰がぼんやりと立ちはだかる。見えない小川が騒々しく水音を立てるが、それ以外は沈黙に取り囲まれている。歌う鳥もなく、コオロギも動かない。なんだかこっそりと移動しているようで、本来はそんなところにいるべきではなく、まわり中を危険が取り巻いているとでもいうようだ。亡霊のような目に見張られているかのように。あるとき枝が折れて地面に落ちたが、あまりに鋭く予想外の音だったので、こちらは銃声のように飛び上がってしまった。

だがついに日差しの中に出てきて、やがて薄汚い村に出た。突然、目の前にサルウィン川が銀色に輝いているのが見えた。私は船首に立った太っちょコルテスのような気分になるつもりでいて、その水面を大いなる疑念をもって見据えてやろうと準備万端だったのに、それが提供してくれる感情はその時点で使い果たされてしまった。それは予想していたよりもごく平凡で、あまり壮大ではない流れだった。実はその場でその時のサルウィン川は、チェルシー橋でのテムズ川くらいの幅しかなかった。乱流もなく、すばやく静かに流れている。

いかだ（丸木船二艘のうえに竹の台が作られている）が水辺にあって、私たちはラバの荷を下ろし始めた。その一頭が突然パニックに襲われ、川のほうに突進して、だれかが止める間もなく飛び込んだ。川に流されていき、この濁った鈍重な水流にあれほどの力があるとは私には予想外だった。川の直線部を、実にすばやく流されていき、ラバ使いたちは叫んで腕をふりまわす。あわれな獣が必死でもがいているのが見えたが、いずれ溺れるのは避けられず、川が曲がってそのすがたが見えなくなったのは救いだった。ポニーや私物とともにいかだで流れを渡されたときにもっとしっかり検分したが、まるで丈夫には見えなかったので、向こう岸についても残念とは思わなかった。

バンガローは川堤のてっぺんにあった。芝生と花に囲まれている。ポインセチアがそれを見事な輝きで豊かにしていた。公共事業局のバンガローにありがちな儉約ぶりは多少ゆるめられており、ラバや私自身の疲れた手ありを休めるべく数日逗留するのにここを選んだのを私はありがたく思った。窓からは丘に閉じ込められた川が、修景水のように見えた。いかだが行ったり来たりして、ラバやその荷を運んでくるのを眺める。ラバ使いたちは、休めるので喜んでおり、私はそのチーフにちょっとした金を渡して一同がごちそうにありつけるようにした。

そして、彼らの仕事が終わり、召使いたちが私の荷物をほどいてから、あたり一面に平穩がやってきた。そして川は、そのくねる縦列に人が一度たりとも乗り出したことがないともいうように無人のまま、その薄暗い距離感を取り戻した。何の音もしない。日が暮れ、水の静けさ、木に覆われた丘の静けさ、夕べの平穩は、三つのきわめて見事なものだった。日没直前の一瞬、木々はジャングルの暗い固まりから己を切り離し、個別の樹木になるように思える。それまでは、森は見えても木は見えない。だがその瞬間の魔法により、樹木は新しい種類の生命を獲得しているように見え、するとそこに精霊が宿っていると想像するのも容易であり、そして暗くなれば移動もできるのではと思えてくる。いつか

はわからないにしても、何か不思議なことがそこに起こりそうで、木々がそのときには不思議な変身を遂げると思えるのだ。息を止めて驚異を待ちうけ、そしてそれを考えただけで、心は怯えたような渴望でかき乱される。だが夜のとばりが下りる。あの瞬間は通り過ぎ、再びジャングルが木々を取り戻す。その様子はまるで世界が、若さという天才を身中に感じている若者たちが精神の大冒険にのりだそうという瞬間にためらい、すると周囲に飲み込まれて人類の膨大な匿名性に再び沈み込んでしまうときのようなのだ。木々は再び森の一部となる。動かず、生気がないわけではないにしても、ジャングルのむっつりした頑固な生で生きているだけとなるのだ。

この場所は実に美しく、芝生や庭木の生えたバンガローは実に家庭的で穏やかだったので、一瞬私はそこにたった一日ではなく、一年間、いや一年間どころか一生暮らそうかという考えをもてあそんだほどだ。鉄道の終点から十日がかりで、外界との唯一の通信手段はタウンジーとチェントンの間をたまに行き来するラバの隊列のみ、唯一の交渉は川向この薄汚い村の住民たちのみ、だから世界の混沌、妬み、意地悪や悪意から何年も離れて過ごし、己の思索、本、イヌと銃だけで、まわり一面は広大で謎めいた豪勢なジャングル。だが残念ながら、人生は年だけでなく時間単位でも構成され、一日には二十四時間あって、一時間を切り抜けるほうが一年を切り抜けるよりもつらいというのはパラドックスでも何でもなし。そして、自分の落ち着かない精神が一週間で先へ進もうとするのはわかっていた。進む先はあてどないのは事実だが、とにかく落ち葉が強い風によりまったく無目的にあちらこちらと吹き飛ばされるように、先へと向かうのだ。だが作家として（残念ながら詩人ではありません！ 単に物語り作者でございます）私は他人のために、自分では送れない生活を送ることができた。これは恋人たちの恋路にふさわしい場面で、その静謐で美しい風景にふさわしい物語を考案しようと私は空想を赴くままにさせた。だが、美の中に必ず何か悲劇的なものがあるというのでもない限りまったく理由はわからないのだが、我が空想の発明品はなにやら異様な型にとびこんでいき、想像力の生み出した希薄な生き霊たちは悲劇に襲われることとなった。

そのとき突然、敷地内で騒動が聞こえ、グルカ人の召使いがその瞬間にジンとピターズを持って部屋に入ってこようとした。これは私が去りゆく日に別れを告げるときに傾けるのが習慣だったものだ。私は彼に、何事かと尋ねた。この召使いは、そこそこの英語をしゃべる。

「溺れたラバですが、戻ってきました」

「生きて？ 死んで？」私は尋ねた。

「ああ立派に生きております。ラバ屋に思いっきりぶん殴られてました」

「なぜ？」

「分をわきまえないまねをしないよう教え込むためです」

かわいそうなラバ！ 擦り傷をさらに広げる重荷と鞍からの自由と、目の前の広い川や向こう岸の緑の丘を見たときの荒々しい興奮。ああ、一度の脱走！ 何日も続いたつらい労働の後のちょっとした気まぐれと、自分の四肢の強さを感じる喜び、川へ駆け下りて、流れの抵抗しがたい力に運ばれ、必死の努力と荒い息、突然の死の恐怖、そしてついに数キロ川下で、安全な岸辺に苦闘してたどりつく。ジャングルの道を駆け出すと、夜がやってくる。まあ、気まぐれも満たされたしそれで気分もよくなったから、そろそろ静かに停泊地に戻って他のラバみんなに加わり、翌日だかその翌日だかにはまたもや荷をかついで静かに隊列で己の役割を果たして、自分の先にいるラバのしっぽに鼻をくっつけて進むつ

もりだった。そして冒険の後で、幸せに急速して戻ってきしてみると、分をわきまえなかったといって殴られる。分をわきまえないと言えるほどの面倒を見せているとも言ように。やれやれ。それでも隠れるだけの価値はあったか。おっと失敬！

第 15 章

またもや出発。一日また一日と単調にすぎるが、それで退屈ということはない。夜明けには雄鳥が大声で鳴き、目が覚める。そして停泊地内の各種の音が、一つ、そして間をおいても一つと、夜の静けさに少し自信なさげにこっそり割り込んでくる。交響楽団である主題の最初の音のある楽器から次の楽器へとひきつぐときのように、それがその日の主題であり人の労働の主題で、停泊地の各種の音が再び眠りに落ちるのを防ぐ。ラバが身を起こしたときにカラカラと鳴る首の鐘や、別のラバが身震いしたときの振動、ロバのいななき。ラバ使いたちの怠惰な動きがあり、そのくぐもったおしゃべり、そして獣に呼びかける叫び声。集まってきた光が部屋にしびこむ。すると召使いたちが動き出すのが聞こえ、しばらくするとグルカ人のボーイ、名前をラング・ラルというが、紅茶を淹れてくれて蚊帳をはずす。私は紅茶を飲み、その日最初のうまいタバコを吸う。会話の断片、比喻や堂々たる一節、登場人物に与えるべき性質の一つや二つ、エピソードなど、すてきな考えが押し寄せてくるし、そこに怠惰に横たわって空想がさまよように任せるのはチャーミングなことだった。だがラング・ラルがひげそりの水を静かにもってきて、それがすぐに冷めると思うと、起き上がらざるを得ない。ひげを剃り、風呂を浴びると朝食ができています。運が良ければ村の首長やダーワン（住み込み管理人）がパイパイをプレゼントしてくれる。この果物を多くの人には毛嫌いするし、確かに慣れは必要だ。でも慣れれば、夢中になってしまうのだ。すっきりした繊細な味わいと、医療上の美德（というのここには驚異的な割合でペプシンが含まれているではないか？）をあわせ持つので、食べることで粗野なる食欲が満たされるだけでなく、心の福祉も同様に面倒を見てもらえるのだ。まるで、ためになり心を高揚させる会話のできる美女のようなものだ。

それからパイプをふかし、頭をはっきりさせるために、片手で持つのに重すぎないくらいの哲学論考を、残念ながらあまりに怠惰に読む。ラバたちの第一陣はすでに出発し、いまや私のベディングが丸められ、朝食に使った食器がそれぞれの箱にしまわれ、すべてが後に残ったラバたちに積まれる。私は彼らを先に行かせる。そしてポニーは柵につないだ状態で一人後に残され、まわりの村やバンガローの外の樹木、椅子やテーブルなどが、私とその一隊の到着により数時間にわたり荒っぽく奪い去られた月並みな急速に戻っていくのを、言わば心の目で眺めるのだった。階段を下りてポニーの縄を解くと、沈黙が、唇に指を当てた狂った老狂女のように、私の横を通して立ち去った部屋にこっそり入り込む。私がいなくなって道路地図はさっきよりしっかりと釘にかかり、そして私がすわっていた長いすは、きしむようなため息をつく。

私はポニーで移動を始める。

ラバたちに追いつくのは、バンガローに近づいた頃で、先はわずかだと知ってラバたちも歩みを早めている。今やせわしない感じで進み、鐘を鳴らして荷物はガタガタ揺れ、ラ

バ使いたちはラバとお互いに怒鳴っている。ラバ使いは雲南人で、日焼けした青銅色の顔をした大柄な連中、ぼろぼろで薄汚れているが、大胆な無頓着ぶりをずっと保っている。彼らは怠惰な足取りをもって、何百マイルもにわたり、アジアを縦横に駆け巡り、その黒い目に映るのは開けた空間と彼方の山の薄い青だ。停泊地でラバたちが、みんな自分の荷物をまず下ろしてもらおうとラバ使いたちを取り囲み、怒鳴ったり蹴ったり押し合ったりが見られる。荷物はくびきに革ひもでつながれているので、下ろすには二人がかりだ。これが終わるとラバたちは一、二歩退いて、下ろしてくれてありがとうとお辞儀をするかのように頭を下げる。それから荷積み用の鞍がおろされ、するとラバは地面に腹ばいになって転がり、背中 of 炎症を楽にしようとする。一頭また一頭と開放されるにつれて、ラバたちは停泊地をぶらぶらと出て行き、牧草と自由を探しに行く。

テーブルの上ではジンとピターズが私を待っており、それからカレーが給仕され、そして私は長いすに飛び乗って眠った。目を覚ますと銃を持って外に出かける。首長は若者二、三人を指名して、鳩やジャングルホロホロ鳥を撃てることを教えるように手配するが、獲物は怯えており、私は射撃が下手で、通常は苦勞しても茂みの中で慌てた動きが起るだけで、空手で戻ってくる。光は衰え始めている。ラバ使いたちはラバを呼び寄せて、夜は停泊地内に閉じ込めるようにする。その呼び声は甲高いファルセット、荒々しく野蛮でほとんど人間のものとは思えない。異様な、怖いとさえいえる叫び声で、アジアと彼らの祖先である神のみぞ知るほど昔の遊牧民族との莫大な隔たりを漠然と示唆するものとなっているのだ。

夕食の準備が整うまで読み続けた。その日、川を渡ったなら骨の多い味のない魚を食べる。そうでなければサーディンカツナだ。固い肉料理、そしてインド人のコックが作れる三種類のデザートのだれか。それから私はソリテアをやる。

トランプを取り出しながら、私は自責の念にかられる。人生の短さと、その間にやるべき無数の重要な事柄を考えれば、こんなことで時間を無駄にするなど軽薄な正確の証拠としか考えられない。精神修養となったり、あるいは文体面で傑作とされ、読めば我々が執筆に使うこの困難な言語学習の進歩につながったであろう本もたくさん携えている。シェイクスピアの悲劇をすべて収めたポケットに入るほど小さな本もあり、道中の毎日、戯曲の一幕ずつ読もうと決意していたのだった。このように私は娯楽と見返りの両方を自分自身に確約していた。だがソリテアのやり方を十七種類知っている。スパイダーをやってみたが、一度も使う機会がない。フローレンスクラブでやっているソリテアもやってみた（ちなみにフィレンツェの貴族パッツィヤストロツィの誰かがそれを達成したときに上がる勝利の叫びといったらすまじいものだ）。そして中でも実にとんでもなくむずかしいソリテアは、フィラデルフィア出身のオランダ紳士が教えてくれたものだ。もちろん完璧なソリテアはいまだ発明されたことがない。これは実現までに長時間かかるはずだ。複雑なものとなり、人のもつあらゆる工夫を動員しなければならないものであるべきだ。深い思考を必要とし、確固たる理由づけや論理の活用、確立の検討を求めるものでなければならぬ。紙一重でピンチを逃れる場面が大量にあるべきで、まちがった札を置いていたらどんな惨劇が待ち構えていたかを知って心臓が冷や汗をかく場面が多々なければならぬ。次にめくるカードにあらゆる運命がかかっていると思うにつけ、緊張の最高の頂点に押し上げられて身震いしたまま放置されるものであるべきだ。不安で手に汗握らせるべきだ。絶対に避けるべき危険や、無謀な勇気でしか克服できないとんでもない困難がなくてはならない。そして最終的に、まちがいをしでかさなければ、機会の前髪を捕まえて、不

安定な運命の首根っこを捕まえたなら、常に勝利がその努力に報いなくてはならない。

だがそんなソリテアは存在しないので、長期的にキャンフィールドという名前を永遠のものとした活動に戻るのが常だった。もちろんこれは通常、抜け出すのがとても難しいものだが、それでも少なくとも何らかの結果は確実に得られ、そしてあらゆる希望が失われたように見えても、いきなり幸せなカードがめくられて、息をつく余裕が与えられるかもしれない。なんでもこのキャンフィールドという立派な紳士はニューヨークのギャンブラーで、トランプの束を五十ドルで売ってくれて、引いた札ごとに五ドルずつくれたとか。この会場は壮大であり、夕食は無料でシャンペンが気前よく注がれる。札のシャッフルは黒人がやってくれる。床にはトルコ絨毯、壁にはメソニエやレイトン卿の絵画、そして等身大の代理石像もあった。たぶんランズダウン・ハウスとかなり似た場所だったのだろう。

はるか彼方のこの場からそれを振り返ると、ジャンル絵画の魅力のようなものがそこにはあり、そして七の札を抜き出して、次に六の札を抜くにつれ、ジャングルのバンガローにあるこの静かな部屋から（まるで望遠鏡のまちがったほうからのぞき込んでいるかのように）ガラスのシャンデリアで明るく照らされた部屋、人々の群れ、タバコの煙による霞と、ギャンブル地獄の緊張感ある張り詰めた悲しげな雰囲気伝わってくる。私はしばし、悪徳や浪費といった問題を抱えたこの大きな世界に捕まっていた。これは東洋には存在しないと人々が一般に思っているまちがいの一つだ。それどころか東洋人は、通常のヨーロッパ人ならあり得ないと思うほどの慎みを備えている。その美德はヨーロッパ人のものと同じではないが、でも東洋人のほうが徳が高いと思うのだ。悪徳を探すなら、ベナレスや北京よりはむしろパリ、ロンドン、ニューヨークをあたるべきだ。だがこれが、東洋人が罪の意識によりわれわれほど抑圧されておらず、したがって長い歴史の過程で便宜的に作り上げた規則を侵犯する必要を感じないためなのか、あるいは東洋の芸術や文学（これは結局のところ、単一の主題を複雑とはいえ単調に変奏したにすぎない）からわかるように想像力に欠けるせいなのか、私などがあれこれ言うべきにも非ず。

床に着く時間だ。蚊帳の下に入り、パイプをつけて、この瞬間のためにとっておいた長編小説を読む。一日中これを楽しみにしていたのだ。『ゲルマンのほう』で、あまりに早く読み切ってしまうのではという恐れのために（一度読んだことがあって、読み終えてすぐにまた読み返すことはできなかったのだ）、一度の三十ページまでと厳しく自分を制限している。その大半はもちろん見事なまでに退屈だが、気にすることがあろうか？ 他のだれに楽しませてもらうよりも、プルーストに退屈させられるほうがまだ。そして三十ページはあまりにすぐに読み終えてしまった。目が行をあまりにすばやく追いつきすぎないよう、目の手綱を引かねばならないかのようだ。ランプを消して、夢のない眠りに落ちる。

だが、たった十分しか寝ていないと誓ってもいいくらいだが、そのとき雄鳥が大音量でなき、私の目を覚ました。そして敷地内の各種の音が、一つ、そして間をおいてもう一つと、夜の静けさに割り込んでくる。集まってきた光が部屋にしのびこむ。新たな一日が始まったのだ。

第 16 章

時間の感覚を失ってしまった。道筋はもはや道路と呼べるものではなく、牛車ではそこを通れない。単なる狭い小道でしかなく、我々は一列縦隊で進んだ。上り坂となり、サルウィン川の支流である川が眼下で騒々しく岩の上を流れている。道は丘陵地を上がったたり下がったり、我々の横切ろうとする山道の中を通り抜け、川と同じ高さかと思えば、次はそのはるか上を通る。空は青だが、イタリアのまばゆく挑発的な青ではなく東洋の青で、それは乳っぽく薄くてけだるい。ジャングルは今や、空想の処女林の雰囲気ですべて備えるようになっていた。高い樹木がまっすぐに、枝もなく八十フィートから百フィートも伸び、太陽のなかでその力を壮大にひけらかしている。そこに巨大な葉をつけた草が巻き付いて、小さい木は花嫁がヴェールで覆われるように寄生植物に覆われていた。竹は高さ六十フィート。野生オオバコがそこらじゅうに生えていた。まるで有能な庭師がそこに植えたかのようで、というのもそれらは意図的に装飾を完成すべくそこにあるような雰囲気だったからだ。それは実に壮大だった。低い葉は破けて黄色でみすばらしい。それは若さの美を妬みと悪意をもって見つめる、邪悪な老女のような。だが上部の葉は、しなやかで緑で、その見事さを誇らしげにさしのべている。若々しい美の傲慢さと冷淡な無関心を備えている。そのたっぴりした表面は太陽を水のように吸収した。

ある日、近道を探して私はジャングルにまっすぐ入る道を進んでみた。主街道にとどまっていたときに見たよりずっと生命に満ちていた。ジャングルホロホロ鳥が通りすぎる木々のてっぺんをかすめ、鳩がまわりじゅうでクークーと鳴き、サイチョウが枝に微動だにせず停まって観察を許してくれた。自然の居場所が動物園のように思える鳥や獣が自由に放たれているのを見たときの驚きは、なかなか克服できるものではない。思い出すのはかつて、マレー群島の南東にある離島で、巨大なモモイロインコがこっちをじっと見ているのを見て、それが逃げたはずのかごを探してしまい、しばらくはここがまさに彼らの故郷であって、一度も閉じ込められたことなどないということに思い至らなかったことだった。

ジャングルはあまり密生してはおらず、太陽は木々の間を大胆に縫って、地面を色つきの幻想的なパターンで覆っていた。だがしばらくすると、自分が迷子になったことに思い当たった。といっても、ジャングルの中で起こりかねないような、深刻で悲劇的な迷子ではなく、ベイズウォーターの広場やテラスでさまようような感じだ。来た道をそのまま戻りたくはなかったし、小道は日に照らされて魅力的だった。ちょっと先まで行ってどうなるか見ようと思った。するといきなり、小さな村に出た。家は四、五軒しかなく、それが竹の防御柵に囲まれている。そんなところに村があるのには驚いた。ジャングルのどまんなかで、主街道から六、七マイル離れているのだから。私と同じくらい住民たちも私を見て驚いていたことだろうが、向こうもこちらもそれが尋常ではないなどと態度で示すよう

なことはしなかった。乾いたほこりっぽい地面で遊んでいた小さな子供たちは、私が近くと散り散りに逃げた（ある場所では、白人を一度も見ることがない少年二人を連れてきてあなたを見せてもいいかと尋ねられ、その二人はその嫌悪を催す光景に恐怖で叫びだしてすぐに連れ去られたのを覚えている）が、女性はバケツの水を運んだり米をついたりしていたが、何事もないかのように仕事を続けた。そして男性たちはベランダにすわり、どうでもいいというような一瞥をくれただけだった。これらの人々はどうやってここまでたどりついたのか、そして何をしているのだろうと私は不思議に思った。自給自足で、まったく自分だけの生活を送っており、そして南海の環礁に暮らしているのとお味くらい外界と切り離されている。この人については、その時も何も知らず、また知りようもない。私とは別の生物種に属するくらいちがっている。だが私と同じ情熱を持ち、同じ希望、同じ欲望、同じ悲しみを持っている。たぶん彼らにとっても、愛は雨後の日差しのようにやってきて、また彼らにとっても、おそらく飽きがくるのだろう。だが彼らにとっては、代わり映えのしない日々が、長い線を相互に何ら急ぐこともなく愕く事もなく付け加える。指定された役割にしたがい、前の父親たちが送ったのと同じような暮らしを送る。パターンはなぞられ、それにしたがうだけでいい。それこそ叡智ではないか、そしてその一貫性に美があるのではないだろうか？

ポニーをさらに先に進めて、数ヤードほどでまたもやうっそうとしたジャングルに入った。上りが続き、小道は小さな激しい小川と交差してまた交差し、それからぐねぐねと下り、丘のまわりを縫い、危機がそこにあまりに密生していて木々のてっぺんの緑の床のように歩けるのではと思うほどだが、突然完全に空が晴れて平野が見え、今日の目的地だった村が見えた。

村の名前はモンピインで、ここでしばらく休もうと決めていた。とても暖かくて、午後には私はシャツ姿で、バンガローのベランダにすわっていた。近づいてくる白人を見て驚いた。タウンジーを発して以来、白人には一人も出会っていなかったからだ。でもそこで、道中のどこかでイタリア人神父に会うだろうと出発前に言われたのを思い出した。立ち上がって迎える。やせた男でイタリア人にしては背が高く、普通の顔立ちと大きくてハンサムな目をしている。顔はマラリアで黄ばんでおり、ほとんど目まで豪華な黒髭におおわれて、それがアッシリアの王さまくらい大胆にカールしている。そして髪もたっぷりしており、黒くてカールしている。見たところ、三十五歳から四十歳というところだろう。身につけた貧相な黒い司祭服はしみがついてすり切れており、それにぼこぼこのカーキ色のヘルメット、白ズボンに白い靴をはいている。

彼は話かけてきた。「おいでになるときいていたもので。まあ考えて見てもください、白人には十八ヶ月も会ってないんです」

英語は流暢だった。

私は尋ねた。「何をお飲みになりますか？ ウィスキー、ジンとピターズ、紅茶かコーヒーならお出しできますが」

彼はにっこりした。

「もう二年もコーヒーを飲んでいないんです。切らしてしまい、それなしでも十分やっていけるとわかったもので。贅沢品だったし、この伝道のお金は実に少ないんですよ。でも欠乏ではありません」

私はグルカ人のボーイにコーヒーを一杯淹れるようにつげ、そしてそれを口にしたら彼は目をうるませて叫んだ。

「蜜の味だ！ 本物の蜜。人はもっといろいろなものを控えるべきですな。本当に楽しむためにはそれしかない」

「二、三缶置いて行かせてくださいよ」

「よろしいんですか？ こちらは庭から少しレタスをおわけします」

「でもこちらにはどのくらいいらっしゃるんですか？」

「一二年です」

彼はしばらく押し黙った。

「兄はミラノで神父をしておりますが、母の死に目に会えるよう、お金を送ろうかといいました。母は高齢ですし、老い先短いんです。私が母の一番のお気に入りだと言われていて、確かに子供時代は甘やかされました。もう一度会えればいいとは思いますが、でも正直申しまして、行くのが怖かった。言ったら、ここで私の人々のところに戻ってくる勇気がなくなるかもしれないと思ったんです。人間の性とは実に弱いものです、そうは思いませんか？ 自分が信用できぬのです」と彼は微笑しつつ、奇妙に哀れっぽい身ぶりをした。「まあいいか、どうせ天国でまた会えますから」

そして彼は、カメラを持っているか尋ねた。新しい教会の写真をロンバルディアのご婦人に是非とも送りたいのだという。そのご婦人の敬虔な寄付があればこそ、その教会を建てることもできるのだ。そこに連れて行ってもらったが、巨大な木造の納屋で、いかめしくむきだした。祭壇の背後には、チェントンの尼僧の一人が画いた、実に醜悪なイエス・キリストの絵が飾ってある。彼はその絵の写真も撮ってくれと懇願した。チェントンについて修道院を訪問したら、その尼に作品がどういう具合に見えるかを見せてあげてほしいというのだ。貧相な会衆のために、小さなベンチが二つあった。彼は誇らしげだった。無理もない。この教会、祭壇、ベンチはすべて自分自身と改宗者たちが作ったものなのだから。居住地にも招いてくれて、自分が面倒を見ている子供たちの教室と寝室になっている慎ましい建物を見せてくれた。確か、六と三十人いるという話だったと思う。そして自分自身の小さなバンガローにも招き入れてくれた。居間はそこそこ広く、教会が建つまではここは礼拝堂としても使っていたのだ。裏には修道院の僧坊ほどしかない小さな寝室があり、そこには小さな木のベッド、洗面スタンド、本棚しかない。そのとなりには小さくて、いささが汚く散らかった台所があった。そこには女性が二人いた。

「ごらんなさい、いまやかなりの御大尽ですぞ。コックに台所女中がいるんですから」と彼。

若い方の女性は兎ツ口で、クスクス笑いつつも苦労してそれを手で隠そうとしていた。神父が彼女に何か言った。もう一人は地面にしゃがみこんで、臼で何かハーブを潰していた。彼は優しくその肩を叩いた。

「二人はここにきて一年近くになります。母と娘なんです。女性は可哀想に、手が奇形で、娘はごらんの通りあのひどい唇です」

女性は夫と、兎ツ口娘以外にも子供が二人いた。でもみんな突然、数週間起きに次々に死んで、村人たちは彼女が悪霊に憑かれていると思ったんで、娘といっしょに文無しで、まったく馴染みのない世界へと追い出したのだった。そこで彼女は、ジャングルの中の伝道師がいる村にでかけた。キリスト教徒は悪霊を恐れないと聞いたからだ。伝道師はよるこんで住まわせてくれた。だがとても貧しくて喰わせることはできなかった。そこで伝道師は、神父のところへ行けといったのだった。道中は五日かかり、雨期の始まりだった。彼女と娘はわずかな所有物をつづ、背中に担げる小さな荷物にしかならなかったが、そ

れを持ってジャングル道を歩き、丘をのぼっては下り、夜は村に出くわせば村で、そういう休憩所がなければ、道端で見つけた岩陰や木の枝の下で眠った。だが通りがかったあちこちの村の人々は、彼女たちの旅をやめさせようとする。というのも神父が子供たちを家に招きいれたら、しばらくしてラングーンに連れ去り、そこで海の聖霊の生け贄に捧げて、お金を受け取っているというのはよく知られていたからだ。二人は縮みあがったが、でもどの村も二人を受け入れてはくれず、神父にすがるしかなかった。二人は道を進み、ついに必死だがパニックに陥りつつも、神父の前に進み出た。神父は外便所に住んでいいと告げ、学校の子供たちの米を料理しなさいと言ったのだった。

居間に入ってすわった。そこはあらゆる快適さをそぎ落とした場所だった。大きなテーブルと木製の椅子が二、三脚あるが、背はまっすぐでむきだしだ。本棚があって宗教書がたくさんあったが、ペーパーバックで湿っている。そしてカソリックの雑誌も大量にあった。目についた世俗的な本としてはあのひどい傑作『いいなづけ』しかなかった（マンゾーニがウォルター・スコット卿に会ったとき、スコット卿がその作品を誉めたので、マンゾーニはウェイヴァリー小説からの影響を認めつつ、それが自分の作品ではなくウォルター卿の作品なのだと言い、それに対してウォルター卿は答えて曰く、それならあれは自分の最高傑作だ、と。でも彼はお世辞を言っているだけだった。「いいなづけ」はほとんど耐えがたいほどの単調さだ）だが神父はイタリアから日刊紙「コリエレ・デラ・セラ」を受け取っており、それが月に一度まとめて届く。そしてそれを一言一句余さず読むのだという。

「もちろんおもしろいからではあるんですが、精神的な訓練としてもやっているんです。というのも能力を衰えさせるわけにはいきませんから。イタリアで何が起きているかすべて知っておりますよ、スカラ座でどんなオペラをやっているか、どんな芝居が上演されているか、どんな本が出ているか。政治演説を読みます。何もかも。そうすれば世界の動向を把握しておけます。心が活発でいられます。たぶん二度とイタリアに戻ることはないでしょうが、もし戻れたら、一度もそこを離れたことがないかのように、すぐに環境に溶け込めます。この種の生活では、一分たりとも自分自身を手放してはいかんです」

話し方は流暢で、声はよく響き、すぐになっこりした。笑い声は大きく心からのものだ。初めてここに来たとき、公共事業省のパンガローに暮らして、地元言葉の学び始めた。それ以外の時間は、いまこうしてすわっている小さな家を建てるのに費やした。それからジャングルにでかけていった。

「シャン人には何もできないんですよ。仏教徒だし、仏教に満足しています。彼らになじむんですね」と彼は、美しい黒い目で恥じ入るような視線をよこし、微笑みと共に語ったことは彼自身にとってもあまりに大胆で、自分自身でもちょっとそれに驚いているのがわかった。「いやはや、仏教が見事な宗教だというのは認めねばなりません。ポンジ・チャウンの僧と、ときどき長い会話をするんです。無学な人物ではないし、彼やその信仰には経緯を抱かずにはいられません」。やがて、影響を及ぼせるのはジャングルの中の小さな離村にいる人々だけだというのがわかった。彼らは聖霊を信仰し、その生活は自分たちを捕まえようと待ち構える、邪悪な力に対する絶え間ない恐怖によりよじれていたからだ。だが村は遠い山中にあり、そこに行くには二十、三十、ときに四十マイルも行かねばならないことも多かった。

「馬に乗るんですか？」と私。

「いえ、歩きます。ポニーが買えるなら敢えて乗らないというつもりはないんですが、

よるこんで歩きます。この国ではたっぷり運動が必要です。歳を取ったらポニーを手に入れるしかないでしょうし、その頃にはそれを買えるだけのお金もあるかもしれませんが、人生の絶頂期にいる以上、神の与えたもう脚で移動しない理由はないのです」

彼の習慣は村にたどりつくと、首長の家について宿を求めることだった。人々が晩に仕事から戻ってくると、彼はみんなをベランダに集めて語りかける。いまや長年たって、四十マイル四方の人々は彼のことを知っており、歓迎していた。時には伝令がきて、まだ訪れていない遠い村にきて、言い分を聞かせてくれと依頼する。

私はジャングルで出くわした、あの迫り来る高密度な緑に閉ざされた、孤立した小さなジャングルの村のことを思い出した。心の目で、そこに暮らす人々が送る生活についてある程度のイメージを描きたいと思った。それを尋ねると、神父は肩をすくめた。

「働くんですよ、男も女も。絶え間なく続く、果てしない労苦の連続です。疑うなかれ、山のジャングル村での生活は楽じゃない。米をまき、想像もつかない時間と苦勞をかけて、そして収穫する。アヘンを栽培して、暇があればジャングルに入ってジャングルの産物を集めます。飢えはしませんが、飢餓から己を救うのは決して休息しないからというだけなんです。

田舎をさまよひ、川に入って渡ったり、粗雑な橋でそれを越えたりして、木に覆われた丘を上がったり下がったり、田んぼの間を抜けたり、竹製の建物の村を次から次へと泊まり歩き、長々と列をなす顔がしなびたり厳しかったりする首長たちと次から次へと話をするこの私は、自分でもどこか古く無限に無人の宮殿の廊下を飾るタペストリーの中の一登場人物のように思えた。その果てしないタペストリーは深い緑で、その中には薄暗く黒い木々とかすかな水流、奇妙な家屋の小村落と、謎めいた新生で曖昧な意味を持つ活動に休みなく従事する影のような人々が描かれている。だがときどき村にやってきて、首長や長老たちが地面にひざまずき、贈り物をくれるとき、その大きく黒い目に奇妙な飢餓感が読み取れるように思えるのだった。私を慎ましく見つめ、まるで長いこと熱心に待ち続けてきたメッセージを私から期待しているかのようだ。彼らを揺さぶるような対話ができたらいいのと思う。渴望しているとおぼしき素晴らしい福音を伝えられればと思う。私は、自分が何も知らない彼方について、何一つ伝えられないのだ。神父は少なくとも何かはかれらに与えることができた。痛む足をひきずって疲れてどこかの村に到着する彼の姿が目に見えなくなった。そして夜がやってきて人々がそれ以上働けなくなると、ベランダの床にすわって、月明かりがあるかもしれないが星明かりだけの中で、闇の中の静かな影である彼らに、奇妙で新しい話を語るのだ。

さほど知的な人物だったとは思わない。個性はもちろんあったし、計算高さもあった。丘陵のシャン人たちが子供を自分のところによこすのは、服を着せて住ませ、食事を与えるからでしかないというのは十分に承知していた。だが仕方ないというように彼は肩をすくめた。しかるべき歳になったら子供たちは自分の丘に戻り、一部は父親たちの野蛮な信仰に戻るだろうが、一部は教えた信仰を維持して、その影響により彼らを取り巻く暗闇に光をもたらすかもしれない。こんな思索にふけるには、神父の生活は多忙すぎたし、彼の心には神秘主義的なところは一筋たりともなかった。その信仰の強さは運動選手の腕が筋肉質なのと同じで、己の宗教の教義をまったく無批判に受け入れるのは、ちょうど私やあなたが紅潮した頬の事実を一瞥だけで受け入れるのと同じだ。伝道師として東洋にくるのは神学生時代からの願いで、ミラノでもそれを目指して勉強したのだという。いっしょにやってきた東洋への伝道師集団十二人が、僧正のまわりにすわっている写真を見せてく

れたときに、すでに死んだ人々を指さした。この人は中国で川を渡るときに溺れ、こちらはインドでコレラで死亡、もう一人はシャン州北部で野生の Was up に殺された。国を船出したのはいつかと尋ねると、干ばつをいれずにその曜日と年月日を述べた。どんな記念日を忘れようとも、これらの尼僧、僧、神父たちにとって、ヨーロッパを発った日は常に舌先にとどまっているのだった。それから、家族の写真を見せてくれた。ありがちな中流階級の下位で、イタリアの安手の写真館のウィンドウでどこでもお目にかかるような集団だ。緊張し、正装して不自然な感じで、父と母が精一杯のおめかしをして真ん中にすわり、小さい子供二人がその足下の床に、左右には娘たち、そして背後には背の順で息子たちが列を作っている。神父は、宗門に入った子供たちを指さしてくれた。

「半分以上ですか」と私は指摘した。

「母はとてもよるこんでいました。母がそううながしたんです」

その母親はがっしりした女性で黒い服をまとい、髪は真ん中で分けていて、大きな柔らかい目を持っていた。しっかり世帯を切り盛りしたようで、売買となれば強硬な価格交渉をしたのはまちがいないだろう。神父は愛情をこめて微笑した。

「すばらしい人物ですよ、母は。子供を十五人生んで、十一人が生きています。聖人で、母にとって善良であることは、オペラ歌手の声がいいのと同じくらい当然のことでした。母が美德を行うのは、アデリーナ・パティがキャラ役のアルトで C を出すのと同じくらい簡単なんです」

そして写真をテーブルに戻した。

その翌々に私が再び出発しようとする、神父は丘陵のところに出るまで同行しようと言うので、私はポニーの手綱を腕にかけて、とぼとぼ歩いて行った。その間に彼は、チェントンの尼僧たちに伝えるメッセージを告げ、そして撮った写真のプリントを忘れずに送ってくれと念を押した。肩には銃を付けていたが、古い武器あたりの獣たちよりは神父自身にとってずっと危険そうに見える。ポコポコのヘルメットをかぶり、黒い司祭服のすそを腰にからげて脚に絡まないようにして、白いズボンのすそを重いブーツにたくしこんだその姿は奇妙なものだった。大股でゆっくり歩き、その足が踏破した距離が容易に想像ついた。だがすぐに彼の鋭い目は木の低い枝にとまったカワセミを見つけた。緑と青でちょっとふるえている美しい鳥、一瞬そこで生きた宝石のように釣り合いをとっている。神父はわたしの腕に手をかけて止まるよう合図し、とてもゆっくり無音で三メートルのところまで忍び足の前進を行った。そして銃を撃つと鳥が落ち、神父は勝利の叫びを上げて飛び出し、拾い上げると肩にかけた脇の袋に投げ込んだ。

「これで米がおいしくなる」

だがジャングルにたどりついて、彼はまた歩みを止めた。

「ここでお別れですね。仕事に戻らなければ」と彼。

私はポニーにまたがり、握手して、出発した。道の曲がり角で振り返ると、彼がまださっきと同じところに立っていたので手を振った。片手を背の高い木の幹において、緑の森林に取り囲まれていた。私は先に進み、たぶん彼はあの大地を拒絶するのではなく陽気なエネルギーで踏みつけるような重い足取りで、まるで大地が仲良しで愛情をこめた暴力を善意に解釈してくれるような足取りで（それは大きく強い犬が、尻を愛情込めてひっぱたくと尻尾を振るようなものだ）おそらくは、一日か二日にわたり私が誘惑して引っ張り出したあの生活へと、とぼとぼ戻っていったのだらうと思う。二度と会うことがないのはわかっていた。自分でも知らない新しい体験に向かっているし、いずれは興奮と鮮明な

変化を持つ広い世界に戻ることになる。でも彼は常にここにどまったままで。

あれからずいぶん時間がたった。そして時に、パーティで女性たちが頬を塗り、首に真珠を巻いて、広い胸をしたプリマドンナがシューマンの歌を歌うのをすわって聴いていた。芝居の初日で一幕終わって幕が下り、大音量の拍手が鳴り響いて、観客が魅惑されて一斉におしゃべりを始めるとき、私はふとあのイタリア人神父のことを思い出すのだ。いまは少し歳を取って髪も灰色がかり、あれからマラリアの発作が二、三度あっただろうから少し痩せ、森林の道に沿ってシャン州の丘陵地を駆け上がり、今日も明日もあの別れた日とまったく同じ、あの神父だ。そしてそれがずっと続くがある日、老いて疲れ果て、あの小さな山村のどこかで病気に倒れ、峡谷に連れ下ろすには弱りすぎていて、間もなく死につかまることになる。みんな彼をジャングルに埋葬し、木製の十字架を飾り、もしかすると（何世代もの信念は彼が教えた新しい信仰より強いので）墓のまわりに小さな石や花の山を作り、その霊が死に場所となった村の人々に悪さをしないようにするかもしれない。そしてときどき思ったのは、最後に親族からかくも遠く離れて、村の首長や長老たちが静かに彼を取り囲み、白人が死ぬのを見て怯えているとき、その正気の最後の瞬間に（その馴染みのない茶色い顔がかがみこむ中）彼は恐怖と疑念にとらわれ、そして死の彼方を見て、そこには無しかないことを見ただろうか、そしてもしそうなら、世界が提供できた美も愛も安楽も友情も芸術も自然の快い贈り物もすべてまったく何の甲斐もなく放棄してしまったことで荒々しい反抗の気持ちを抱くのだろうか、それともそのときですら、自分の苦悶と放棄と忍耐の勇敢な生活がその甲斐あるものだったと思うだろうか、ということだった。信仰で生涯のすべてを維持し支えてきた人物にとって、自分の信仰が真実だったかどうかを最後に知らねばならない瞬間というのは、恐ろしい一瞬にちがいないだろう。もちろん、彼には天職があったが。その信仰は堅牢で、彼にとって信仰は呼吸と同じくらい自然なことだ。奇跡をなす聖人などではなく、苦痛に耐えたり神自身との融合の筆舌に尽くしがたい喜びを感じたりする神秘家でもなく、いわば神の平凡な労働者でもあるかのようだ。人々の魂は、彼の故郷ロンバルディアの農地さながらで、感傷もなく、感情すらなく、粗い部分もなめらかな部分もあわせて受け入れつつ、彼はそれを耕して種をまき、育つ穀物を鳥から守り、日差しを活用して、雨が多すぎるとか少なすぎるとか文句をいい、収穫が少なければ肩をすくめ、豊作なら報われたと理解する。自分自身を他と何らかわらぬ賃金労働者だと考え（だがその報酬は神の栄光と果てしない世界だ）、自分の取り分を稼いだと感じることで、一種の満足感を得る。人々に心を与えつつ、父親がミラノの小商店でマカロニをカウンター越しに売ると同じくらいのことでしかないと考えたのだった。

第 17 章

チェントンへの旅の最後の行程に入った。二、三日にわたり、平らな道で峡谷を通り、隣を清流が流れていた。その岸边には巨大な木が生え、ときどき器用なサルが枝から枝へ飛び移るのが見えた。それから上り坂になった。サルウィン川とメコン川の河床の分水嶺を越さねばならず、やがてかなり寒くなった。一行はどんどん上がっていった。朝には周囲の山岳を霧が覆ったが、あちこちでその先端が顔をのぞかせたので、灰色の海に浮かぶ小さな緑の小島のような。霧を太陽が照らして虹ができて、下界の妖精地域への門につながる橋のようだった。この荒涼とした高地には厳しい風が吹き、すぐに私は骨まで凍えてしまった。ラバの小道はぬかるんでとてもすべりやすく、我がボニーもしょっちゅう足を取られ、私も降りて歩いた。いまや霧が重くなり、視界は目の前数メートルになってしまった。編隊先頭についた鐘はくぐもってもの悲しく、ラバ使いたちは震えながら自分の獣の横をだまってトボトボ歩き続けた。道は隘路また隘路とくねり、曲がるたびに峠についたと思うのだが、でも道はまだ上り続けて果てしないように思えた。すると突然、下り坂になっていた。峠を越したのだ。到達するまでに実に長々とした努力が必要だったのに、気がつきもしなかった。それはちょっと幻滅の衝撃を与えてくれた。だから尽力して何か野望を実現しようとしてそれを実現してみると、それは大したものと思えずに何か大きなことを達成したという感激まったくなしに、そのままどこかいずこへと向かうことになる。そしてひょっとすると、死もそういうものなのかもしれない。ついでに言っておくと、この峠はせいぜいが高度七千フィートほどでしかないのに、それに到達したからといってこんなご大層な回想に値するほどのすさまじい偉業というわけではないだろう。

似たような出来事が、ジョーンズ氏（ジョーンズ、カレーから南方へ君と僕）と共にアルプス越えをしたワーズワース氏にも起こった。だが詩人なのでこう書いた：

.....われわれが若かりうと老いていようとその運命、人間の心であり故郷は無限性とともにもあり、そこにしかないそれは希望とともにもあり、その希望は決して死なない努力と期待と欲望そしてそれを遙かに超えるものが生まれる。

美を達成するために最高の言葉を最高の順番に並べる方法をとにかく知っているとは何とも簡単だ。像はその鼻で六ペンスを拾い上げて木を根こそぎひっくり返せるのだ。

そして私は、チェントンが見えると聞かされた地点にやってきたが、その地方一帯が銀色じみた蒸気に浴しており、目をこらしても何も見えなかった。どンドングネグネと下り、だんだん山の霧から出てくると、太陽が背中に暖かく当たるようになった。午後には平野にやってきた。通ってきた山岳部は暗くて、それを覆う木々には灰色の雲がからまっている。私はまっすぐな道をてくてくと進んだ。道幅は牛にひかせたワゴンが通れるほど広く、両側には、いまや茶色くほこりっぽい刈り株でしかない田んぼがあった。背中に山

ほどかついだり、竹にぶら下げたりして、明日の市場のために町に向かう農民たちとすれちがった。そしてついに、壊れたレンガの門にたどりついた。これはチェントンの門だ。この旅は二十六日間続いたことになる。

ここで治安判事が出迎えてくれた。ずんぐりした人物で威厳を漂わせているが、迎えは親しげで、元気な白いポニーに乗っている。そして他にも何人が役人が、州の首長であるサウブワの代理として迎えに出てきた役人が数名いた。適切なあいさつを交わしてから、町の主要道をポニーにまたがって通り（だが両側の家屋はみんな樹木が生えた敷地に立っていたので、そこは街路という雰囲気ではなく田園公害の道路のようだった）やがて宿舎となるはずの周遊小屋にやってきた。これは長いレンガ造のバンガローで、町の外にある丘の上であり、白塗りで前にベランダがついており、そこから木々の中にチェントンの屋根が見えた。そのまわり中に、取り巻く緑の山岳がある。

第 18 章

小さなシャンのポニーに乗って市にまで下っていった。市は大きい平らな空き地で開催され、屋台が四列に並び、人々はすし詰め状態で押し合いへし合いしている。ほとんどだれも住んでいない地方をあまりに長くさまよってきたので、群集の多様性と色彩には魅了された。太陽が明るく輝く。道端の村々で見た農民たちの服装は青かマルーンといった陰気な色合いで、しばしば黒い服が多かったが、ここでの色彩は華やかだった。女性は身ぎれいで小柄できれいで、平たい顔をしており、浅黒いというより黄ばんだ感じだが、手は美しく、髪に飾ったり細い腰につけたりしている花と同じくらい繊細だった。ロンジーと呼ばれる一種のスカートをまとっている、これは長い絹の布で、それを腰にまきつけてウェストに端を押し込むもので、上部は明るい色の縞模様になっており、下の部分はあわい緑、マルーンあるいは黒で、小さな白いボディスを着て、それがとてもきちんとして慎ましく、その上に綿入りの上着を着ており、スペインのボレロのようにあわい緑かピンクか黒で、袖はきつく、方に小さな翼がついていて、いまにもニコニコしたまま飛び去りそうに思える。男たちも色つきロンジーか、あるいはだぶつとしたシャン族のズボンをはいている。そしてその多くが藁で細かく編んだ、ロウソク消しのような巨大な帽子をかぶっている。その巨大なつばは曲がっており、それが男女の大量の髪の毛やハンカチのうえに、不安そうに乗っかっている。こうした豪勢な帽子が、それをかぶる人々の落ち着いたない動きに伴って何百も左右や上下に揺れ、それが実にすばらしいので、こうした人々が人生の真面目な事柄で忙しいのだとはとても納得できず、むしろ浮かれ騒ぎに興じていて、お互いにすさまじいジョークを飛ばし合っているように見える。

東洋では通例だが、同じものを売る店がお互いに集まっている。屋台は単に、瓦屋根を柱に乗せただけで、天候の穏やかさを物語っており、床は踏み固めた土か、あるいはとても低い木のプラットホームだ。売り手はほとんどが女性だ。屋台ごとに三、四人いて、長い緑の両切り葉巻を吸いながらすわっている。だがクスリの屋台の売り手は実に高齢の男性で、しわくちゃの顔と血走った目をしており、魔法使いのようだった。その商品を眺めて仰天した。乾燥した薬草の山と、青、黄色、赤、緑など色とりどりの粉が入った大きな箱があり、これを取って飲もうとする人物は勇敢にちがいないと思わずにはいられなかった。子供時代に、おとなしく飲めばプラムのジャムをごほうびにあげるといわれて各種の塩を飲むよう騙された（そしてそれ以来、プラムジャムがどうしても食べられない）身としては、シャン族の母親はスプーン一杯の粗いエメラルド色の粉をシャン族の少年に飲ませようとしているのをごまかすときにどういう口実を使っているのか想像もつかない。大きすぎてあれを水で飲み込めるような巨大なものの持ち主がいるものだろうかと自問するような大きな錠剤があった。小さな干物の動物は、地面から掘り出されてそのまま腐るにまかされた植物の根っこのようで、植物の根っこは動物の干物に見えた。だが高齢の薬剤師

たちは得意客不足などに悩むことはなかった。その朝の商売は繁盛していたし、忙しくクスリを計るのに使っている重りは私たちが故郷で使う薄いものではなく、仏像の形に鑄造された巨大な訛りのかたまりだ。ついに我が辛抱が報われ、バンタム鶏の卵並に大きな錠剤を 12 錠買う人を見かけ、その人は一錠を人差し指と親指でつまんで口を開き、中に落とし込んで飲み込んだ。しばらく苦勞があり、一瞬顔がつらそうな表情を浮かべたが、そこで自分の胸を叩くと錠剤は消えた。薬剤師は涙っぼい目でそれを見つめた。

第 19 章

市には食べるもの、着るもの、家の装飾などシャン族の簡素なニーズに必要なものは何でもあった。中国からの絹もあり、中国人行商人は静かに水パイプをふかしつつ、青いズボンとぴったりした黒い上衣と黒い絹の帽子を身につけている。優雅さも欠けてはいない。中国人は東洋の貴族だ。白いズボンと細い身体にぴったりフィットした白いチュニックに、黒ピロードの丸い帽子をかぶったインド人もいる。石けんやボタンと粗悪なインドの絹、マンチェスター綿の玉、目覚まし時計、鏡やシェフィールドからのナイフなどを売っている。シャン人たちは周辺の山岳地帯の部族が持ってきた財や、自分の産業の簡単な産物を持ってきた。あちこちで小さな音楽家集団が屋台にいて、そのまわりに群衆が立ってぼんやりと聞き入っている。その一つでは男三人がゴングを叩き、一人はシンバルを、一人は自分の背丈ほどもある太鼓を叩いている。素養なき我が耳ではその音の混乱の中に何のパターンも聞き取れず、単に粗野な感情への直接的だが決して高揚しないわけではない訴えだけしかわからない。だがしばらくすると別のバンドに出くわし、こちらはシャン人ではなく竹製の長い管楽器を演奏する山岳民族で、その音楽は悲しげで心揺らすものだった。ときどきその漠然とした単調さの中に、切ない旋律の音をいくつか拾えるようだった。あらゆる主張の暴力がそこからはげ落ち、活発な反応へのあらゆる挑戦があり、残っているのは想像力を作用させるためのそれとない示唆であり、心の奥深くに埋まっていた欲望や希望や絶望への参照とでも言うべきか。かつて遊牧民たちが、古代の故郷であった草原でのさまよいの中でキャンプファイアの横で回想した音楽に、ジャングルに散在する音や流れる川の静けさから生まれたような音楽だ。そして私の夢想からすれば（これはもう、作家固有のことだが、実にむずかしく制御されて想像力に群がることばの力によりすっかり活発になっている）これは見慣れぬ厳しい環境の中での困惑、その中でいつやってきたかもわからず、どこへ行ったかもわからない人々が、もの悲しい問いかける叫びと歌をあわせ唄ったもの（これは海の男たちが嵐の中で猥談をすることによりたたきつける波や吹きすさぶ風の不安を追い払おうとするようなものだ）により、世界の孤独に対して慈悲深い人間の仲間という安寧を自らに確認する人々を示唆するものだ。

だが市の通りを埋め尽くした群衆には、愁いもわびしさもまったくなかった。陽気で声高で快活だ。売買しにくだけでなく、友人たちとゴシップをかわして暇つぶしするためにやってきたのだ。それはチェントンのいならず、周囲 50 マイルにわたる田舎一帯にとっての集会場所だ。ここで彼らはニュースを手に入れ最新の物語を聞く。芝居と同じくらい楽しいし、たぶんほとんどの芝居よりまちがいなくずっと優秀だ。多数派を占めるシャン人の中に、多くの部族が独特の服装で混じっていた。小集団で固まっており、まるでこの異質な環境の中で引っ込み思案になり、お互いからはぐれるのを恐れているかのようだった。彼らから見れば、ここは広大で人の多い都市のように思えただろうし、都市住

民に対する田舎者の奇妙な畏敬と軽蔑の混じりあった念により仲間同士で固まっている。タイ族、ラオ族、カウ族、パラウン族、ワ族、その他神のみぞ知る民族。ワ族はこうした問題の専門家たちによれば、好戦的な人々とおとなしい人々に分類されるが、好戦的なほうは山の要塞から出てこない。首狩り族で、ダヤク族のような虚飾からではなく、マンブウェ国の人々のような審美的な理由からでもなく、作物を守るという純粋に効用主義的な狙いからなのだ。新鮮な頭蓋骨は成長する穀物を守り強化するので、春が近づくとそれぞれ村から男たちの小集団がでかけて、有望そうな見知らぬ者を探す。なぜ見知らぬ者かといえば、この地域で道がわからないので、その例もこの世に残した市街からあまりさまよい歩かないからだ。その狩猟シーズンには、この地域への旅行はまったく人気がなくなるとか。だがおとなしいワ族は親しみやすい親切な人々の雰囲気で、その外見はかなりワイルドだが華やかだ。カウ族はひととき目立つが、それは立派な体格と浅黒い肌のせいだ。だが権威によれば、その肌の黒さは大部分が水浴びを嫌うためだと述べる。女性は銀のビーズに覆われたヘッドドレスをかぶり、まるでヘルメットのようなものだ。髪は真ん中でわけられ、ウジェニー皇帝夫人の肖像画で見られるように耳を覆うように下りてきて、中年になるとヘンテコな小さいわくちゃの、ユーモアたっぷりの顔になる。短い上着、キルトとレギンスを着ている。そしてその上着とキルトの間にはかなりの隙間がある。ヘソを見せると女性の顔が実に特徴豊かになることには気がつかずにいらなかった。男性はくすんだ青い服で、ターバンを巻き、そこに若者たちはマリーゴールドの花をさして、自分が独身で結婚したいのだと示す。ずっとそこにさしっぱなしなのか、それとも結婚願望が強くなったときにだけさすのか、とつい疑問に思ってしまった。というのも、おそらくだれも寒く霜の降りた朝に結婚したい気分にはならないからだ。ターバンに花を半ダースさした若者を見かけた。自分の意図が絶対に疑問の余地がないように、というわけか。陽気そうではつつとした様子だったが、娘たちはが彼に示す関心は、あえて告白すると、若者のほうが娘たちに示す関心と大差なかった。もしかすると、娘たちはその熱意が誇張されすぎていると思ったのかも知れないし、そして若者のほうは、言わば新聞に広告を打った以上、それで十分だと思ったのかも知れない。なかなかすてきな人物で、肌は浅黒く、大きな黒い目が大胆にきらめき、そしてせなかを少し丸めて、全身の筋肉が強さに震えるような立ち姿をしていた。農民たちが群衆の中を、止まり木に停まって足を糸で縛られた鳩を持って縫うように歩いている。それを買って、離してやることで功德を積むか、それとも翌日のカレーに加えるのだ。そうした男の一人が通りすぐるところを、そのカウ族の若者は明らかに金銭には無頓着なようで、いきなり衝動的に（そしてその表情豊かな顔を見ると、その考えが頭に浮かんだのは当人にとってもよほど意外だったようだ）鳩を買って、手渡されると、一瞬両手でそれを抱え込み、それはピンクの胸をした灰色のモリバトだったが、ヘルクラネウムの青銅の少年のような身振りで腕を高く広げて鳩を宙に投げ出した。それが素早く飛び去るのを眺め、そのまま飛んで故郷の森に帰ると、若者のハンサムな顔には少年じみた微笑が浮かんだのだ。

第 20 章

チェントンで丸一週間近く過ごした。日々は暖かく周遊小屋はきれいで清潔で広々としていた。あれほど何日も路上でつらい日々を送ってきたので、やることがほとんどないというのは快適なものだった。その気になるまで起きずにいたり、パジャマ姿で朝食に向かったりするの快適だ。朝を本を読んでたらだらすごすのは快適だ。というのも、別に道中の移動を保つために、列車に乗り遅れてはいけないとか約束に遅れてはいけないとかいうことがなくても、それだけで自由だと思えるのはまちがいだからだ。道中では、これをやり、あれをやる時間というのは都市生活をしていて毎朝仕事に行かなくてはならない場合と同じくらいかっちり決まっているのだ。動きは自分の気まぐれで決められるものではなく、行程の長さやラバたちの持久力で決まる。目的地に着くのが三十分早かろうと遅かろうとどうでもいいと思っても、毎朝起床するときにはせかされるし、山ほどの準備が必要で、突然遅れずに出発せねばという妄執にとらわれてしまうのだ。

チェントンが醸し出した感情を、私はきっちり抑えておいた。そこは村で、道中を通り過ぎたものよりは大きかったが、それでも木造家屋が建ち並ぶ、広々とした大きな未舗装道路のある村にはちがいがなく、尋ねておもしろいものを見つけるのには苦労した。市の日以外だと何も無いのだ。主街道では、やせた皮膚病のイヌが数匹見られるだけだ。商店は一、二軒で、女性が両切り葉巻を吸いながら怠惰に床にすわっている。こんな日に客がくるとはまったく思っていないのだ。別の商店では、中国人四人がしゃがみこんで博打をうっていた。それも黙って。ほこりっぽい道には深い轍がついていて、青い晴天から太陽が照りつけている。小さな女性三人が突然、巨大な目をひく帽子をかぶって登場し、一列縦隊で通り過ぎた。竹竿を背負ってそこにいくつかごをぶら下げ、膝を曲げてさっさと歩き、これ以上ゆっくり歩いたらその重荷で沈み込んでしまうとも言うようだ。そして道の空虚さを背景に、彼女たちはすばやくはかないパターンを作り出していた。

しずく僧坊にも静けさがある。チェントンには一ダースくらいあるだろうが、その高い屋根は、巡回小屋の建っている小さな丘から待ちを見下ろすと突出している。それぞれが独自の敷地にたち、その敷地の中には崩れかけたパゴダがいくつもある。巨大な仏像が、その聖なる態度ですわり、他のわずか小さいだけの仏像八体から十体に取り巻かれる大きな広間は納屋のようだが、その屋根を支えるのは巨大なチークの柱で、金箔貼りが漆が塗られ、木の壁も垂木も金箔張りか漆だ。覚者の生涯を描いた粗雑な絵画が軒にかかっている。暗くて荘厳だが、仏像はどれも薄明かりの中、大きな蓮の葉の上で、かつては栄えたが今は無視されている神々のようだが、無視されることにも無関心で、その金箔とモザイクの崩れゆく壮大さの中で苦しみと苦みの終わり、はかなさと八道について考察し続ける。その超然とした様子はほとんどおそろしいほどだ。つま先立ちで歩いて瞑想を妨げないようにして、彫り物をした金箔貼りのドアを背後で閉め親しみのある日差しの中に再び

出てくるときには、ホッと安堵のため息が出る。まるでまちがった家の宴会にうっかり入り込んでしまい、まちがいに気がついてすばやく逃げだし、だれにも気がつかれなかったことを祈るような気分になるのだ。

第 21 章

このはるか遠い地点に私を連れてきた奇妙な偶然について考えていると、ふとこの旅に出るよう誘い出した何気ないことばを口走った、あの背の高い超然とした人物のほうへぼんやりと考えが向いた。その人が残した印象から実際の人物を再現してみようと。というのも、人々に出会うときには、平面としてしか見ず、向こうも一面しか見せてはくれず、そしてぼんやりしたままだからだ。それが全体性をもって存在するには、身も骨も入れてやる必要がある。だからこそ、小説の登場人物は人生の登場人物よりもリアルなのだ。この人物は兵士で五年にわたりロイムウェで軍警所の指揮官を務めていた人物だ。ロイムウェというのはチェントンから数キロ南東にあり、夢の丘という意味だ。

たぶんあまり熱心な狩人ではなかっただろう。というのも、獲物が大量にいる場所に住む人の多くは、ジャングルの野生動物を殺すことに嫌悪感を抱くようになるからだ。やってきて、トラ、水牛、鹿など、あれやこれやの動物を自尊心の満足のために撃つと、それで興味を失うのだ。その生活習慣を観察したこれらの優雅な生き物が、自分と同じくらい生命に対する権利を持っているのだ、ということが自ずと理解されるのだ。一種の愛情を感じるようになり、そして銃を持ちだして村人を脅しているトラを殺したり、ヤマシギやコシギを鍋用に撃ったりするのも、嫌々やるようになる。

五年というのは人の生涯において大きな切れ端だ。彼はチェントンについて、恋人が花嫁について語るような口調で語った。実に強力な体験だったので、永遠に仲間とは一線を画すことになったのだった。寡黙で、英語のようにそこで見つけたことはぎこちないことばでしか語れなかった。閉ざされた村で夜にすわり、長老たちと話したときに心に触れた漠然とした感情は、当人ですら簡単なことばにまとめられたかどうかはわからないし、答えられるのを待ちつつ黙って（貧窮者向け宿泊所の外に冬場に立つホームレスの男たちのように）立っているその質問（彼のような状況と職業の人物にとっては実に目新しく奇妙なものだ）を自問したかどうかもわからない。彼は野生の樹木に覆われた山岳や星空の夜を愛した。日中は果てしなく単調で、彼はそこに漠然とした湿ったパターンを刺繍するのだった。それが何なのか私は知らない。たぶんそれは、彼の戻っていく世界、クラブと酒保のテーブルの世界、蒸気機関と自動車の世界、ダンスやテニスパーティ、政治、興味、賑やかさ、興奮、新聞の世界を、不思議に無意味なものにしてしまったのだらうと推測するばかりだ。その中に暮らし、それを楽しんだにもかかわらず、それはまったく遠いままにとどまっていたのだった。たぶん彼にとっては意味を失っていたのだと思う。その内心には、ついぞ完全には思い出せない美しい夢の思い出があったのだ。

人は社交好きだ。少なくともほとんどの人は。そして仲間と共にあるとしない人物は軽蔑さえる。そいつがふうがわりだと言うにとどまらず、そこに何か卑しい動機があるにちがいないと思ってしまう。その人が我々など必要としないので、プライドが傷つけられ

るから、おたがいにうなずいて目配せし、あんな変な生き方をするのは、たぶん秘密の悪徳にふけるためなんだろうし、自分自身の国に住まないのは、そこにいられないくらいまずいことになるからなんだと言う。だが世間に居場所がないと感じる人はおり、そうした人は仲間を必要とはせず、同輩たちの熱狂ぶりの中にいると居心地が悪いのだ。彼らは不可侵の寡黙さを持っている。感情を分かち合うと恥ずかしいと思う。みんなで歌を歌うのは、それが国歌「ゴッド・セイヴ・ザ・キング」であってもいたたまれないことで、歌うときでもこっそり風呂場で歌うくらいだ。彼らは自給自足していて、どうでもいいというように、そして認めざるを得ないことだが、軽蔑したように肩をすくめる。というも、どうでもいいという形容詞はしばしば悪い意味で使われるからだ。本当にどうでもいいと思っているにしても、彼ら自身はそんなことを「超越している」。そうした人物はこの地の表面いたるところにいる。それは何か誓いで結ばれているのではなく、石壁に閉ざされているわけでもない、巨大な修道院の一員なのだ。世界中をあちこちさまよえば、各種の意外な場所でそうした人々に出会う。イギリス人の老婆が、たまたま偶然自動車で通りがかったイタリアの小さな町の外にあるヴィラに住んでいると聞かされても驚いたりはない。というもイタリアは昔から、こうした真面目な尼僧たちの逃げ場所として好まれているからだ。こうした人々は通常生活には困らず、イタリア十六世紀芸術について豊かな知識を持っている。アンダルシアでぼつんと建つ農家を指さして、そこに何年もある年齢のイギリス人女性が住んでいると聞かされても、当然のことだと思う。通常は敬虔なカソリックで、ときには運転手と罪深い情事にふけているのだ。だが、ある中国都市で唯一の白人が、伝道師ではなくイギリス人女性で、理由はだれも知らないがそこにすでに四半世紀暮らしているとなると、もっと驚かされる。そして別の一人は南太平洋の環礁に住み、またもう一人はジャワ島中心の大きな村公害にパンガローを持っている。彼らは孤独な生活を送り、友だちもなく、見知らぬ者を歓迎しない。同じ人種の人間に何ヶ月もあっても、まるで目に入らないとでもいうように道でそしらぬ顔ですれちがい、そしてもし同国人だからと訪ねてみても、たぶん追い返されるだろう。だが迎え入れてくれたら、銀のティーポットから紅茶を注ぎ、ウスター磁器の古いサラから熱いスコーンをすすめられるだろう。実に丁寧に話しかけ、まるでロンドン広場を見下ろすドロイングルームでもてなしているかのようなのだが、でも立ち去るときには、またお目にかかりたいなどとは一切言わない。

男性のほうがもっと寡黙でもっと親しみやすい。最初は口が堅く、頭の中で会話のたねを必死で探すときの不安そうな表情がわかる。でもウイスキー一杯で心がうちとけ（というもときに彼らもきつい一杯がほしいのだ）すると何でも話すようになる。こちらに会えてうれしいのだが、あまり囃に乗らないようにしなくてはならない。彼らは相手がいるのにすぐ飽きてしまい、無理に話をしなくてはならないことで、苛立ってくる。女性より衰えが早く、きわめて乱雑な生活を送り、身の回りや食事にはまったく気をつかわない。表向きの職業は持っている。小さな店をやっている、別に何かが売れるかどうか気にもしないし、その商品はほこりまみれで八工がたかっている。あるいはやる気皆無の無能ぶりでココナツ農園を経営していたりする。破産寸前だ。ときには形而上格的な考察に没頭しており、私が出会った一人は何年もかけてイマニュエル・スウェデンボルグの著作研究と注釈を行っていた。時には学生で、プラトンの対話などすでに翻訳のある古典作品を、ものすごい手間をかけて翻訳しなおしたり、あるいはゲーテ『ファウスト』のように翻訳不可能なものを訳している。社会の一員としてあまり有用ではないが、その人生は人

畜無害だ。世界が彼らを嫌うなら、彼らのほうも世界を嫌っている。その世界の喧噪に戻ると考えただけで彼らにとっては悪夢だ。だからとにかく放っておいてくれというだけ。彼らが自分たちに満足している様子は、ときに少しばかり苛立たしい。ほとんどの人にとっては人生を生きる価値のある者としているものほとんどを自発的に放棄し、そして自分の逃したものについてまったくうらやんだりしない連中のことを思って屈辱感を覚えな
いたためには、かなりの哲学が必要となる。私は彼らがバカなのか賢者なのか、未だに腹を決めかねている。夢のためにすべてをあきらめているが、その夢は平和や幸福や自由の夢で、そしてその夢があまりに強烈なために、それが現実のものとなるのだ。

第 22 章

だがいい加減ぶらぶらしすぎているので、ある晴れた早朝に、私は隊をひきつれてチェントンから出発した。サウブワの宮廷から役人が同行し、サウブワ領の教会まで案内してくれることになった。でっぴりした紳士で、とても小さいくたびれたポニーにまたがっていた。初日は左右に田んぼの広がる平原を撮ったが、それがまたもや山岳地帯にぐんと下りていった。もはや公共事業省のバンガローは使えなかったが、サウブワは親切にも道中に私のための家を建てるよう命じてくれて、各村落に必要な命令をくださった。一夜を過ごすためだけにわざわざ家を建ててもらおうなど実に御大尽気分で、初日の宿で私は大喜びだった。おもちゃのようではあった。雨が降ったらまちがなくな濡れたし、風が吹いたら風にあたったことだろう。でも好天ならそこは、中年作家が泊まるよりは若い恋人たちのための場所だった。とてもきれいいで清潔だった。というのもその材料となった竹はその朝に切り出されたもので、生きた植物の快適で新鮮な香りがしたのだ。すべてが緑だった。壁も床も屋根も。部屋が二つと広いベランダがあった。壁と床は地面から一メートルほど上がっており、割り竹製だった。支柱と梁は竹を丸ごと使い、屋根はきれいに藁葺きされていた。床は弾力があり、足下に堅い面があるのに慣れている身としては、最初はちょっと不安で慎重に歩いた。でもその下にはしっかりした竹が編まれていて、本当に文句なしの強度があるのだった。一メートルほどのところには山からの急流があり（その日のうちに、その川を浅瀬や即席の橋で半ダースも横断してきた）、その川堤は木が密生している。正面にはちょっと開けた場所があり、牛たちが草をはみ、風景は緑の丘に閉ざされていた。魔法のような場所だった。

ある日、宿泊施設を作れという事前に送られていた手紙が当日の朝についたばかりで、その日の行程の終わりにたどり着いてみると、村人たちは数キロ先の村から集まってきていた。というのもこれはまだジャングルの真ん中で、まだ家を忙しく建設していたのだ。もちろん、その粗雑なナイフで竹を切り割って床を作る素早さと着実さを観察したり、壁を組む器用さや、屋根を葺くときのきちんとした様子を見るのは実におもしろかった。でもそんなことには興味がわかかなかった。私は疲れて腹が減っていた。コックの家を仕上げた夕飯の準備をしてほしかったし、自分も横になって休めるようにベッドを置く場所がほしかった。私は平静と常識を失ってしまった。サウブワの役人を呼びにやり、その手抜き仕事ぶりについて思いっきりしかりつけた。ご主人のところに送り返してやると誓い、我が怒りの想像力が考案できるありとあらゆる罰で脅した。弁解には聞く耳持たなかった。足を踏みならして怒り狂った。さて、これまで私の生涯で、これほどのもてなしを受けるだけの手間をかけてくれた人は他にだれもおらず、世界の僻地にもずいぶん旅をしたが、自分で宿を見つけて泊まる場所が見つければどんなひどいところで一夜をしのいできたものだ。屋根もない手こぎ船で平然と七日にわたり眠ったし、南海群島では風雨の吹き込

む原住民の小屋を、カナカス族の一家と共有したものだ。だれも私のために家を建てようなどとは思わず、しかもこれはジャングルの真ん中で、私はそんな気を遣ってもらう権利などありはしなかったのだ。教訓は、きわめて理性的な人物ですら、すぐに舞い上がってしまうということだ。多少の特権を与えると、気がついたころには自分がいるところで彼はそれが自分の不可侵の権利だと主張するようになる。ちょっと建言を与えると、暴君の役になってしまう。バカ者に制服をあたえて上着に襟章でも一つ、二つ縫い付けてやれば、自分の意志が法だと思い込む。

だが家が完成し、それは緑の草原の緑の家で、急流が緑の川辺の間で騒々しく水を跳ね散らかして流れ、そして食事を終えると、私は自分自身を笑った。チェントンではジンの蓄えが減ってきているのがわかり、紅茶とコーヒーだけで旅を終えねばならないのはいかだったので、グルカ人からラムを買いこんだ。自家製のよいラムだったが、私の口にあわなかった。そこであれほど聞き分けのないふるまいをしたことについての、心底の詫びを証明すべく、私はボトル二本をサブワの役人に進呈したのだった。

第 23 章

探検家の本を読むと、ベルトの穴を最後のところまで引き締めるような事態となって、極度に追い詰められて鹿や水牛を撃ち、食料庫を補充したとでもいうのでない限り、何を飲んだり食べたりしたのか決して教えてくれないのでとても驚く。あるいは水がまったくなくなって、同行する動物たちは死にかけ、そして最後の最後になってまったくの偶然から井戸にたどりつくとか、あるいは実に巧妙な推理によって、夕方に遙か彼方にきらめきが見え、あと数キロ疲れ切って歩けば渴きを癒す氷があるのが見つかる、といった話くらいしか見かけない。そうすると、救われたという表情がその陰気な顔を横切り、そしてひょっとすると感謝の涙が汚れきった頬をつたい落ちるのだ。だが私は探検家などではないし、飲食はかなり重要なことなので、このページで多少のページを割いて耽溺してみよう。チェントンへの道中、あるバンガローのダーワンがへつらうような身ぶりとともに豪華な皿にナプキンをかぶせたものを持ってきてくれた。ナプキンを取り除いて、巨大なキャベツ二つをお納めくださいと懇願するのだ。私はこれを実に快い思い出として頭の中にとどめている。二週間にわたり緑の野菜などまったく口にしておらず、それはサリーの庭園で取れた新鮮な豆や、アルジャントイユの若いアスパラガスにも増しておいしく感じられた。ポニーにまたがり疲れきって村にやってきたとき、アヒルの池を見つけて、そこに太ったアヒルが泳いでおり、その最も越えたものか若いもの、柔らかいものが、翌日にはベークドポテトと大量のグレービーとともに、こちらの汁気たっぷりの夕食になるよう運命づけられている（宿命をだれが逃れられるものか）ことにも気がついていないというのは、実に魅力的な光景であり、魂をすばらしく奮い立たせるものだ。午後遅く日没寸前に、ちょっと散歩に出てみると、敷地からちょっと離れたところで木の間に緑の鳩が二羽飛んでいるのを見かける。それが小道に沿って走り、戯れるようにお互いを追いかけ、おとなしくて友好的で、石の心でも持っていない限りはそれを見て感動せずにはいられない。その生の無垢さと至福に思いをはせる。子供時代に暗記して、母親のところに来客があったときにおずおずと暗唱してみせる、ラ＝フォンテーヌの寓話をぼんやりと思い出す。

二羽の鳩が深く愛し合っていました
 一羽は家で退屈し
 おろかなことに遙かな国へ
 旅立っていったのです。

魅力的な変質者だったローレンス・スターンはこの優美な生き物たちを見て感涙しただろうし、人々の心揺さぶる小文を書いたことであろう。だがこちらはもっと厳しい人間なのだ。そして手には銃があり、射撃は下手ながらこれは標的として簡単だ。間もなく、同行

した原住民がその鳩を手にとっており、一瞬前には生き活きとしていたきれいな小鳥たちが、目の前で死んでいるのを見てもまったく気にせず、なんら哀れみも感じないようだ。太って汗気にあふれたこのハトたちはどんなにおいしいだろう。グルカ人のラング・ラルが明日、丸焼きにしたのを朝食に持ってきてくれるはずだ。

我がコックはテレグ人で、熟年の男だった。顔は黒ずんだマホガニー色で、細く、苦勞による深いしわが刻まれ、濃い髪の毛には白いモノがどんよりと混じっている。とてもやせて背が高く、むっつりした人物で、白いターバンと白いチュニック姿はハツとするほどだった。大股で、揺れるような足取りで歩き、十二から十四マイルの一日の行程を疲れも無理もせずにこなしていた。当初、このひげ姿で立派な人物が敷地内の木をきまじめによじ登り、何かソースに必要な果実をゆすり落としているのを見て私はびっくりした。多くの他のアーティストと同様に、その作品よりは個性のほうがおもしろかった。その料理はうまいわけでも多種多様なわけでもない。ある日は夕食にトライフルをよこし、翌日にはキャビネットブディングだった。これは東洋の主食となるおやつで、ありとあらゆるところの食卓でお目にかかる。京都では日本人が作り、厦門では中国人、アロースターではマレー人、モーラマインではマドラッシ人が作るのを見るたびに、これをはるか昔に東洋に紹介した田舎の教会や海辺の別荘（父親の退役大佐とともに）にいるイギリス人女性たちのみずばらしい生活が偲ばれて、同情で胸が痛む。料理についてさほど詳しいわけではないが、私は大胆にもこのテレグ人にコンビーフハッシュの作り方を教えたほどだ。私のところを辞めたあとでも、この貴重なレシピを他のコックに伝え、いずれイギリス東洋料理の乏しいレパートリーに一品が追加されるだろうと期待したのだ。そうなれば、私は自分の種に対して恩恵をほどこしたことになる。

コックの家がまったく整頓されておらず、掃除も行き届いていないのは気がついてしたが、こういう状況ではあまり目くじらたてるのも賢明ではない。体内で起こっているいろいろ不愉快なことを考えれば、その体内に収めるものがどのように調理されるかについて、あまり小うるさいことを言うのも馬鹿げて思える。新品の針のようにきれいでピカピカの厨房からは、必ずしもすばらしく美味しい食べ物が出てくるとは限らないことは認めざるを得ない。だがラング・ラルがやってきて、テレグ人があまりに汚らしく、彼の調理したものはだれも食べられないと苦情を伝えたときには、私も驚いた。コックの家にもう一度入って自分の目で確かめた。また、コックは酒のせいでおさらひどいことになっているのは嫌でも目についた。あまりに飲んだくれてばかりで、ラング・ラルが自分で調理しなくてはならないことも多いのだという。代替りのコックを雇えるどんな場所からも二週間にかかる所にいたので、私は自分が得意とする悪罵で満足していた（とはいえ、相手があまり理解できないビルマ語に翻訳されねばならなかったのだ、あまり効果はなかったが）、たぶん私が言ったなかで最も手厳しかったのは、コックは飲んだくれるならせめて料理くらいうまくつくれ、というものだったと思うが、向こうは大きく悲しげな目でこちらを見るばかりだった。すくみあがりさえしない。チェントンで彼はとんでもない大宴会をはじめて三日にわたり顔を出さなかった。シャムの鉄道終点到着するまでに四週間の行程があったので、代替りの人物を雇えないかと探したのだが、だれも見つからなかったのだ。そいつが実に自責の念いっぱい悲しげな顔をして再び顔を出すと、私は深く傷ついてはいるが寛大な人物の役割を演じたのだ。そして許してやると、道中は酒はやらないと約束してくれた。他人の悪徳には寛容でなければならない。

さて村を抜ける中で、家が乗っている支柱のまわりを小さな豚が駆け回っているのを見かけたので、チェントンを離れて一週間ほどして、子ブタは日々の食事にうれしい変化をもたらせるだろうと思いついた。そこで次に機会があったら一匹買うよう申しつけ、ある日バンガローに到着したとき、かごの底に小さな黒豚が横たわっているのを見せられた。生後一週間以上には見えなかった。数日にわたり、それはチェントンで飲んだくれコックの助手としてやとった中国人少年により宿泊地から宿泊地へとかごに入ったまま運ばれて、その少年とラング・ラルは子ブタと遊ぶのだった。ペットだ。これは特別な機会のためにとっておこうと思い、ポニーにまたがりつつ、それが作る見事なディナーのすてきな妄想にしょっちゅうふけたものだった。リングソースは期待できないが、ぱりぱりした皮を思っただけでよだれが出たし、肉は甘く軟らかいだろうと自分に言い聞かせた。不安だった私はテレグ人に、調理の仕方本当に自信があるかどうかを尋ねた。彼はご先祖様全員の首にかけて、ブタのロースト方法について自分の知らないことはないと請け合った。そして私はラバや人夫たちの休憩用に一日休息を与え、そして子豚を殺すよう命じた。だがテーブルに出されたものは(人間の希望とは実にはかないものだ!)ぱりぱりの皮もなく、白く柔らかい肉もなく、茶色のできそこないの臭いゴミで、とても食べられなかった。一瞬、わたしはがっかりした。大探検家たちはこんなときに、一体全体どうするだろうかと思った。スタンレーの謹厳な顔立ちが暗くしかめられるだろうか、そしてリヴィングストン博士はそのキリスト教徒としての平静を乱さず保てるだろうか? 小さな黒い子ブタが母親の乳房から引き離されたのは、こんなことのためではなかった。シャン族の村でこのブタを幸せに活かしておくほうがよかった。私はコックを呼ばせた。間もなくそいつは、ラング・ラルと通訳のキュザウに両側を支えられてやってきた。二人が手を離すと、時化で停泊して揺れるスクーナー船のようにゆっくり左右に身体を揺らせた。

「酔っ払ってるじゃないか」と私。

「しこたま飲んだくれてますね」キュザウはタウンジーのラジャの学校に通っており、俗っぽい英語の表現をたくさん知っていた。

(昔々、誰かがヴィクトリア時代人の中で最も有力な人物の人々を訪ねると、執事にこう言われました。

「旦那さまはまだお目覚めではございません」

「おや、朝食の時間はいつだね?」

すると執事は動じることなく答えました。「朝食などお摂りになりません。旦那さまは通常十一時頃に病気になるれます」)

テレグ人は私を見て、私はテレグ人を見た。そのかがやく目には、何一つ理解した様子ではなかった。

「連れて行け。朝になったら賃金をやって、出て行けと言っておけ」

「すばらしい。それが最善かと」とキュザウ。

二人はコックを連れ出し、外の階段ですさまじくガタガタして、ドスンという音が聞こえたが、テレグ人が自分で転げ落ちたのか、キュザウとラング・ラルが放り出したのかは、尋ねるに及ばないと思った。

翌朝、ベランダで朝食を摂っていると、キュザウがやってきて今日一日の指示を受け取るのとゴシップとでやってきた。バンガローはかなり大きな村のはずれにあった。そして通常のシャン族の村で見るとよりも活気と活動が見られた。前日に私が、たぶん予定よりちょっと早めに到着したとき、女性たちはルンギー一枚で、それをぎりぎり胸を隠すこ

ろまでたくしあげただけで、上半身は裸だった。でも今日の彼女たちは、おそらく親切にも私に付与された重要性に沿って、小さな胴着を来ていて、目にそれほど快適ではなかった。いきなりコックがバンガローの正面にあらわれた。方に荷物を持っていて、それを横の地面においた。そして深く荘厳なお辞儀をすると、すばやく荷物を担ぎ上げ、ふりむいて歩み去った。

「賃金と路銀は渡しました」とキュザウ。

「行ってしまうのか？」

「はい旦那。朝一番に出て行くようにとおっしゃいましたから。朝食を料理して、これから出て行くところです」

私は何も言わなかった。私の言葉は法であり、それに最も厳しく縛られていたのは、たぶんこの私自身かもしれない。チェントンまであと十二日で、テレグ人はその行程を毎日歩き、その間にほとんどだれにも会わず、さらにタウンジーまで二十三日。彼はジャングルに入る道を進み、私はそれを目で追った。彼の太股で揺れるような足取りはしばしば私の目を引いた。だがいまや、やつれ果てて、みすばらしい東洋の服装で、ターバンの巻き方もだらしく、実に惨めな感じで、自分の荷物の重みの下で嫌々歩いているかのようだった。私は実は彼が不潔で飲んだくれだろうとどうでもよかったし、子ぶたと同じくらい、缶詰の豚タンでも喜んで食べてきた。いまやとぼとぼ歩く彼はとても小さくか弱く見栄、やがてアジアの広大さの中で視界から消え失せてしまうのだ。あの老人がこのように道の世界に足を踏み出すのを見るのは、どうしようもなくあわれな、いや悲劇的とさえ言えるものがあつた。そのよろよろした足取りに、私は人生に打ちのめされた人物の絶望を読み取ってしまったようだ。たぶんキュザウは私の不穏ぶりを見て取ったのだろう。というのもその率直で寛容な微笑を浮かべつつ、彼はこう言ったのだ。

「ずいぶんとあいつに辛抱なされましたね、旦那。私ならずと前にクビにしましたよ」

「クビを告げたら怒っていたか？」

「ああいえ、そんなことは。あのさまでは自分でも当然だと思っていましたから。あいつは悪いやつじゃないんですよ。盗人で飲んだくれで薄汚れていますが、それだけです。タウンジーに戻ったら別の職を見つけましょう」

第24章

大した出来事のない日々が一日、また一日と、教訓詩の韻を踏んだ対句のように続いた。この地方はあまり人が住んでいない。道中では、カウ族数人以外にはだれにも出会うず、たまに山岳の壁面に彼らの村があるのが見えた。一日の行程は長く、その日の旅の終わりにたどりつくときみんな疲れ切っていた。道路はなく、狭い小道があるだけで、それが木の下にくるとひどいぬかるみで、ポニーたちは水をはね散らかしつつ進んだ。ときにはそれが膝までやってきて、このような速度でしか進めなかった。重労働で惨めだった。低い丘陵を上り下りして、川の脇をぐねぐねとめぐり、そしてその川は、最初はただの狭い清流で簡単に浅瀬を渡れたのに、一日ごとにどんどん幅の広い急流に成長していった。最後に渡ったときには、ポニーたちの腹に水がつくくらい深くなっていた。そしてものすごい水流となり、ときに岩の上を流れる乱流となって、それから穏やかながら急速に流れるようになった。竹の筏を造って、それを兩岸に竹のロープをでつないで、引っ張って渡ったのだった。旅行者が見る熱帯の川のほとんどはとも幅広だが、これは大量の合成な植生が張り出していて、ウェイ川くらい細かった。でもイギリスの川には絶対に見えない。我々がイギリスの川のような、太陽かがやく穏やかさやにこにこしたさりげなさは微塵もないのだ。暗く悲しげで、その流れは人間の抑制なき欲望の邪悪な強度を持っていた。

我々は川辺の巨大な木に囲まれてキャンプを張り、夜にはコオロギや蛙の騒音や鳥の鳴き声は大きくしつこかった。外国では、夜のジャングルは無音だというイメージがあり、作家はしばしばこの話を雄弁に語ってきた。でも彼らが描く沈黙は精神のものだ。それは孤独の感情と人間の世界からの距離と、暗闇や荘厳な樹木や緑の圧迫するような成長からくる畏怖の感覚を翻訳したものだ。でも本当の事実でいうと騒音はかなりのもので、慣れるまではなかなか寝られないほどだ。でも目を覚ましたまま横になってそれを聞いていると、心の中に不思議な不穏さが広がり、それが奇妙なことにおそろしいこの世のものならぬ静寂のように思えるのだ。

だがついにジャングルの端に到達し、道はでこぼこの悪路ながら、牛車が通れるくらいの幅になった。休憩所からは田んぼが見渡せて、遠くにある山岳は青かった。もう何日になるかもわからないくらい通り抜けてきたのと同じ山岳だが、いまやそこには奇妙にロマンチックな雰囲気があった。その深みには魔法があった。開けた地方に再びいることで、心がどれほど変わるかを知らされると驚いてしまう。そういう経験があつて初めて、ジャングルを旅した長い日々のおかげでいかに気持ちが沈んでいたかに気がつくのだ。そしていきなり、仲間の人間たちに対して満足と好意を感じるようになる。

それから巨大で繁栄した、ホワンルクという村にやってきた。そこには広々とした立派な作りの休憩所がある。そしてこれはシャムに到着する前に滞在した最後の場所だった。目の前の山岳はシャムの山岳だ。みんな国境に近づくとつれて高揚感にとらわれたと思

う。こぎれいで小さな村を通過し（シャムに近づくにつれて、これから入ろうとするもっと大きな文明の影響を受けて、村々はもっと繁栄しているようだった）、風変わりな屋根付きの橋を渡って、小さく淀んだ流れにやってきた。これが境界線だ。その浅瀬を渡ると、そこはシャムだった。

第 25 章

若いチークの森にやってきて、その中を通り過ぎて、その晩を過ごす手配をしてある村にやってきた。ここにはきちんとしたしっかりした警察署があり、庭に花がある。当直の下士官は、カーキ色の制服と配下の小さな兵士たちがいても、白人とこんなに大きな旅団を見ていささかひるみ、ここには休憩所がないからと言って、僧坊に行けと言う。それは主要街道から四百メートルほどで、そこまで田んぼを抜けてポニーを進めた。とても貧相で小さな僧坊で、日干しれんがの一種の納屋に仏像が収められ、あとは小さなバンガローに、僧やその弟子たちが暮らしているだけだった。この寺院本体の中に私のベッドとキャンプ設備が設営され、仏像に見下ろされることとなった。僧も小坊主たちも、別にそれで騒ぐようなことはなかった。みんな私の持ち物を興味津々で調べ、動物園で野獣が食べるのを群衆が見物するように私の食事を観察し、晩にソリテアをやっていると、驚きの表情でまわりに立って見物している。しばらくすると、私の複雑な動きの意味がわかってきて、大胆な動きでそろった札を一ダースも、場所があるところにまとめて移動すると、一同から感嘆の小さなため息（まるで地上三十メートルで空中ブランコ乗りが死の跳躍をやったときに、無言の観衆がほめそやすような不安に満ちたすすり泣きをあげるようだ）が上がった。だが人間性の悲しさから、その一人が私のやっていることを多少なりとも理解して、興奮したようなささやきでそれを他の人々に説明したとたん、その全員が興奮の叫びとうれしそうなお身振りで私のまわりに押し合いへし合いしてきた。そして私の腕をつかみ、どの札を動かすべきかを指さしてみせるのだった（そして、シャム語を知らないこの身としては、ダイヤの七の上にハートの六は決して、決しておけないのだとどうやって説明したものか？）。私は力尽くで彼らとその札を動かそうとするのを押さえつけた。自分で十分に考えてから、自分で札を動かすつもりだったのだ。そして私がそうしたときには、その行動は拍手で迎えられた。仏教の僧坊にいる僧だろうとイギリスの首相だろうと、他人のソリテアを見物しているときに口出ししたくなるのを自制できる人間など一人もいないのだ。

八時になると小坊主たちは、唄うような単調な口ぶりで祈りを唱え、一部はその間も両切り葉巻を吸い続けており、そして私はその夜は一人にしてもらえた。寺には扉がなく、青い夜が部屋に入り込んで、仏像はその台座で暗くかがやいた。床は功德を積もうとする女性たちが掃いたのできれいだったが、たぶん敬虔な信者たちが持ってきた捧げ物の米に引かれたのだろう、何千ものアリがいて、おかげでなかなか眠れなかった。しばらく試したがどうしようもないと思って沖挙げた。そして戸口にでかけて夜を見渡した。空気は湿っている。誰かが動いているのを見かけ、すぐにそれがキュザウなのがあった。彼も眠れなかったのだ。私は両切り葉巻を差し出し、二人で寺の階段に腰掛けた。彼はちょっとこのシャム仏教を見下していた。僧たちは、御仏が指示したように托鉢を持って外をま

わったりせず、むしろ信者に米や食糧を持ってこさせるように見えた。キュザウは、ほとんどのシャン族のようにかつては小坊主で、自分は托鉢は欠かさなかったと、得意さを隠せずに語った。そしてくすくす笑った。

「実はいつもまず自宅に行って、きちんと調理された食事を托鉢の底に入れてもらったんです。それを葉で覆って、あちこちを回って托鉢を一杯にしました。それから僧坊に戻り、葉の上のものはイヌになげてやって、自分のうまい夕食を食べたんです」

その暮らしは好きだったか尋ねた。すると肩をすくめた。

「何もすることがなかったんですよ。朝に二時間の作務があって、夜には祈りがありましたが、それ以外は一日中何も。家に帰れる時がきてほっとしました」

転生について話すよう促してみた。

「うちの近くの村に、前世を覚えているという男がいました。死んで十八年たって村にやってきたときに妻を認めて、お金をどこに隠してあったかを告げ、その妻も長いこと忘れていたようなことを思い出させたんです。そして家に入り、鍋の一つがこんな具合に修理されていると語って、みんながそれを見ると、確かに言った通りの修理なんです。女性は泣いて、ご近所みんな驚愕して、全国からみんなその人を見に来ました。新聞にも載りました。いろいろ質問されてもすべて答えました。前世でその村で起きたことはすべて知っていて、みんなその人の言ったことが正しいのを思い出したんです。でも結末はよいものではありませんでした」

「なぜだ、何があった？」と私は尋ねた。

「ええ、その家の息子たちは成人していて、土地も水牛も分割していたんです。それをすべて返したくはなかった。父は生涯を送ったんだし、こんどは自分たちの番だということです。するとその男は裁判にかけると言い、母親はその男の言うことが事実だと証言するぞと言いました。つまりですね旦那、母親はまた立派な若い夫を持ちたいと思ったんですが、息子たちは立派な若い父親なんかほしくなかったの、そいつを脇につれて行って、失せないと死ぬまでぶちのめすと言ったんです。だからそいつは家の金を全部盗って、手当たり次第なんでも持ち出していなくなりました」

「妻も連れて行ったのか？」

「いいえ、連れて行きませんでした。立ち去ることも告げなかったんです。だまって行ってしまった。彼女はとても悲しがりました。そしてもちろん、もうすべてを失ってしまったんです」

両切り葉巻を吸い終えるまで話をして、それからキュザウは立ち上がるとパラフィンを持ってきてくれて、それをベッドの脚に塗ってアリよけにして、私はベッドに戻って眠った。だが寺のドアは真東を向いていて、夜明けで目が覚めると、バラ色と紫の広大な広がりが見えた。それから小柄な小坊主が、餅を四、五个載せた皿を持って入ってきた。かかとですわったその小さなかわいい黄色の姿は大きな目をしており、短い呪文を唱えて、仏像の前に皿を置いた。それとほぼ入れ違いに、皮膚病の犬が明らかに待ち構えていたようにさっと入り込んで、口に餅を一つくわえて駆けだして行った。朝日が仏像の黄金をとらえ、単独では出せないような豊かさを醸し出す。

第 26 章

シヤムを南下するのはゆっくり時間をかけた。国は快適で、開放的でにこやかで、きれいな小村があちこちにあり、どれも垣根で囲まれて、その敷地に果樹やピンロウの木が生えているので慎ましい繁栄の魅力的な雰囲気醸し出している。道路の交通量はかなりあったが、人口の少ないシャン州とはちがってラバではなく牛車を中心だ。平地だと稲作が行われたが、波打つところではチークの森が生えている。チークは見栄え実に軽やかで優雅で息詰まるところのないチークの森に馬で入ると、古いロマンス小説の騎士になったような気分だ。休憩所は清潔でしっかりしている。旅のこの部分で出会った白人はたった一人で、それは北に向かうフランス人で、ちょうど夜に休もうとしたところへバンガローに入ってきたのだった。そのバンガローはフランスのチーク材会社のもので、彼はその従業員であり、まったく見知らぬ相手なのに私がそこに落ち着いたのは当然と思っているかのようだった。礼儀正しかった。この業界にはフランス人は珍しく、その人々はジャングルに出ずっぱりで現地労働者の監督にあたっているが、森林で働くイギリス人よりさらに孤独な暮らしを送っており、だから話し相手ができ喜んでいて、我々は夕食を共にした。がっしりした体格の人物で、大きな肉厚の赤ら顔と、流暢なことばをやわらかく豊かな音の肌理で覆うような優しい声をしていて、ちょうどバンコクでの短い休暇から戻ってきたところで、帽子の数よりは情事の数の方が人は感動するというフランス人特有の思い込みから、そこでの性的な体験についていろいろ話した。粗野な人物で、生まれも卑しく馬鹿だった。だがそこで彼はテーブルの上に転がっている、破れたペーパーバックの本に目を止めた。

「おやおや、これはどこで手に入れましたか？」

バンガローにあったので目を通していたところだと話した。それはヴェルレーヌの詩の選集で、カリエールによるピンぼけながら、興味深くなくもない肖像写真も巻頭についている。

「一体全体だれがこんなものをここに残していったものやら」と彼は言った。

そしてその本を手にとると、さりげなくページを指でめくりつつ、この不幸な詩人の気持ち悪い各種物語をしてくれた。私のすでに知っている話ばかりだった。そこで彼の目は、知った一節を見つけて、朗読を始めた。

’Voici des fleurs, des fleuis, des feuilles et des branches.

Et puis voici mon coeur qui ne bat que pour vous.’

この果実、この花、この葉に枝

そしてこれが君のためだけに打つぼくの心

(ただし実際には、一行目の「果実」と「花」の部分はまちがっている)

そして読みながらその声は切れ切れとなり、涙が目に浮かんで顔をつたい落ちた。

「クソッ、赤ん坊みたいに泣いちゃった」

本を投げ出し、笑いつつちょっとすすり泣いた。私はウィスキーを注いでやった。というのもその瞬間に彼が苦しんでいるこの心痛を、落ち着かせるか少なくとも耐えられるようにするためには、アルコールが何よりだからだ。それから二人でピケットをやった。彼は早めに寝た。翌日は忙しい一日で夜明けから作業開始だったからで、私が目を覚ましたときにはもう姿はなかった。二度と会うことはなかった。

だが、紡ぎ車でゴシップに生を出す女性たちのように元気で素早い日差しの中、馬で進むにつれて、私は彼のことを考えた。人のほうが本よりおもしろいが、でも人はページを飛ばせないという欠陥があるのだと思いついた。よいページを見つけるには、少なくとも全巻を流し読みはする必要がある。そして、棚に戻して気が向いたときにまた読むということもできない。チャンスがめぐってきたその時に読まねばならない。まるで巡回図書館であまりに任期がある本のようで、自分の順番がやってきたら四と二十時間以上は手元に置けないようなものだ。そのときは気分が乗らないかも知れないし、また慌てて読んだために、それが与えてくれたはずの唯一のものを見逃すこともあるだろう。

そしていまや平原が壮大なほどの広がりをもって展開していた。田んぼはもはや、ジャングルから苦勞してむしりとった小さな土地などではなく、一面に広がっている。日々は同時に感動的な何かを持った単調さを持って続いていった。都市の生活では、人々が意識するのは日の断片だけだ。それ自体としての意味はなく、単にあれこれの幼児をこなす時間の一部でしかない。我々が活動を始めた時点では、一日はとっくに始まっており、そしてその自然な終わりなど意に介することなくそれを続けている。だがここでは一日には完全性があり、堂々たる威厳を持って夜明けから日暮れまでそれが展開するのが目に入ってくる。一日はすべて花のようだ。つぼみをつけて華開き、そして後悔もなく自然の道筋を受け入れながら死ぬバラのようだ。そしてこの太陽に浸された広大な平原は、その絶え間なく続くドラマの野外劇が展開するにふさわしい場面だった。星は起きたばかりの大きな出来事、戦闘や地震などの場面に迷い込んだ好奇心旺盛な人のようで、最初は一人ずつおずおずと、それから群れをなしてやってきて、呆然と立ち尽くしたり、何が起きたか痕跡を探そうとしたりする。

道路はまっすぐで平坦になった。あちこちで深い轍ができて、小川が横切るところではぬかるんだりしているが、これならかなりの距離を車で踏破できる。さて山道に行くときには、一日十二から十五マイルをポニーに乗って行くのも結構だが、道が広くて平らだと、こうした旅のやり方は実に苛立たしいものだ。すでに出発してから六週間経っていた。果てしなく思える。するといきなり、自分が熱帯にいるのに気がついた。たぶんちょっとずつ、何事もない日が次々と重なる中で、風景の性質は変わっていたのだろう。だがそれがあまりに微々たるもので、ほとんど気がつかなかったのだ。そしてある昼、村に乗り入れたところで、予想外の友人に出会ったように、厳しくせわしない華々しい南部の香りに出会い、私は喜びで深呼吸した。色の深み、頬に当たる風の熱い感触、目のくらむ、それなのに奇妙にくぐもった光、人々の歩き方のちがいが、その身ぶりの怠惰な広がり、沈黙、荘厳さ、ほこり　これぞ本物で、私の沈滞した気分も高揚した。村の通りの街路樹はタマリンドで、トマス・ブラウン卿の文章のように、豪勢で堂々として自信たっぷりだった。家の敷地の中にはオオバコが堂々とみすばらしく生え、ハズがその墓のような輝きを持つ豊かさを誇示している。ココナツの木はそのだらしない頭で、まるで急にたたき

起こされた背の高いやせた老人のようだった。僧坊にはピンロウジュの茂みが、実に背が高くほっそりと立っており、警句集のように無駄のない精度とむき出しで厳密で知的な露骨さを示している。南部だ。

今日一日の旅程をなるべく早く終わらせようとして、東の空に最初の灰色い光が見えると同時に出発した。日が昇り、背中に暖かくて心地よかったが、やがて熾烈になり十時には耐えがなくなった。この広く白い道をこの世の始めから旅しているような気分なのに、相変わらずそれは果てしなく目の前に続いている。そして見栄えのする村にやってきて、その町の役人であるこぎれいなシャム人が、にっこりと礼儀正しく、自分の広い家に滞在するよう薦めてくれた。そしてその敷地に案内されると、そこで私を待っていたのは、ヤシの木陰で切れ切れの日差しに照らされた、赤く、重厚で、信頼できるが誇示するところのないもの　フォード車だった。私の旅は終わりだ。トランペットの華々しさなしに、静かに、芝居のアンチクライマックスのように終わった。そして翌朝、肌寒い夜明けに、ラバヤポニーをキュザウに託して私は出発した。碎石舗装の道路は建設中で、通れないところではフォード車は牛車道を通った。あちこちで浅い小川をはね散らした。でこぼこで揺すられ、左右に投げ出された。それでもやはり道、それも自動車道で、時速八十マイルというめまいのする速度で走り抜けることができたのだ。人類史上、この道を通じた初めての自動車で、田畑の農民たちは驚愕して我々を見つめた。その中にだれ一人として、この車の中に見えるのが新生活のシンボルなのだと思い当たったかどうか。それは有史以来ずっと送ってきた生き様の終わりなのだ。その習慣や習俗への革命の先鞭なのだ。シュウシュウガタガタと、ちょっと空気の抜けたタイヤではあったがクラクションを決然と慣らしつつやってきた変化なのだ。変化。

そして日没の少し前に、鉄道の終点にやってきた。駅には新しいきれいなペンキ塗り立ての休憩所があり、ほとんどホテルとさえ言えるほどだ。洗面所があり、身体を伸ばせる風呂があり、ベランダには横になれる長椅子がある。文明だ。

第 27 章

バンコクから鉄道で四十八時間のところにいたが、そこに向かう前にロップリと、かつてシャムの首都だったアユダーを見たかった。この東洋諸国では、都市が創設され、大都市となり、そして破壊されてしまい、そのやり方はいまや数世紀にわたる安定に慣れている西洋の旅行者にとってはある種の不安を感じさせずにはおかないものだ。ある王様が、戦争の危険に強いられてかあるいは単に気まぐれを満たすために遷都して新しい都市を造り、王宮や寺院を建てて豊かな装飾をほどこす。そして数世代のうちに政府の中心は、別の危険や別の気まぐれのおかげで、どこかよそに移動し、そしてその都市は放棄されて一時的な栄華をあれほど誇った場所は荒廃に襲われる。ジャングルのあちこちに、あらゆる居住地からはるか遠く、荒廃した寺院が樹木に覆われており、そして暗い緑の中でここにかつては活気あふれる都市があったという唯一の徴は、壊れた神像や壁のレリーフだけで、そして豊かで強力な王国の首都の唯一の名残である貧窮した村々に出くわすだけだ。人の世の儂さをまざまざと思い出させてくれる。

ロップリはいまや、川の片岸に中国家屋が並ぶ細いくねった道でしかないが、そのまわり中には大都市の廃墟があり、あちこち華美な彫刻のある朽ち果てた寺院や崩壊するパゴダが並び、その寺院には聖なる者の壊れた像があって、その中庭には像の頭部や腕や脚のかけらがある。しっくいは灰色で、ロンドンの霧により色あせたようで、レンガからは容易に剥がれ落ち、何か忌まわしい病気を持った老人を思わせる。こうした廃墟には線の優雅さはなく、扉や窓の装飾は、時間により黄金や金属片を奪われて、下品でさもしくなっている。

だがロップリにやってきたのは主に、コンスタンチン・フォールコの大邸宅の名残を見るためだった。フォールコンは、東洋をその活動の場所とした冒険家の中でも最も驚異的な人物の一人だと言えるのではないか。ケファロニア島の旅籠経営者の息子として生まれ、イギリス船で海に逃げ、そして多くの危険をくぐりぬけてシャムにやってきて、王の主大臣の座にのぼりつめた。当時の世界はフォールコンの無限の権力や豪奢やすさまじい富の話で持ちきりだった。イエズス会ペレ・ドルレアンペレ・ドルレアンの小さな本にフォールコンについての既述があるが、これは徳育の本で、フォールコンの未亡人の苦労ばかり無用に詳しく書いている。夫の死後、彼女はシャムの王子からの無礼な攻撃から己の美德を守ろうと苦闘したのだった。その大変な努力において、彼女は聖者のような祖母に助けられた。八十八歳という高齢で、信仰の情熱と活力をまったく失わなかった祖母は、日本の有名な殉教者たちについて何度も語った。その殉教者たちは名誉あることに、その未亡人の先祖なのだ。祖母は彼女に語った。我が娘よ、殉教者となるとは何という栄光でありましょうか！ここであなたは、殉教性が一家伝来の性質だという長所を持っているようですよ。もし殉教を予想するだけの理由がこれほどあるのなら、それにふさわしい行動を採るためには

どんな苦勞も厭うてはなりませぬ！

こうした助言に助けられ、そしてイエズス会の教父たちのしつこい戒めに強化されて、未亡人はほとんど王室後宮ともいうべきものの、宝石まみれの囚人となる誘惑をすべて斥けて、その美德に満ちた生涯を社会的重要性のまったくない紳士の家の皿洗いとして終えたと知るのには満足のいくことである。

ペレ・ドルレアンがこの英雄のキャリアについて、もっと詳しく書いてくれればと願いたくもなる。卑しい地位からこれほどの絶頂に駆け上がった栄枯盛衰は、忘却の彼方から救い出される価値があるのはまちがいない。ペレ・ドルレアンは、フォールコンを敬虔なカトリックで、王様の利益に献身した折り目正しい大臣として画く。だがその王と王朝をまとめて打倒し、怒り狂った愛国シャム人たちがこのギリシャ人を殺すに到った革命の既述は、偉大な国王や各種高官たちが責めを負うことがないように、必要とされる一部の事実だけを並べたように見える。失墜したお気に入りの苦しみは適切なぼかしがかかっているが、死刑執行人の手による彼の死は実に教訓的だ。単純きわまる行間を読むと、それでも強力で輝かしい人物の印象を受ける。コンスタンチン・フォールコンは破廉恥で、残酷で、貪欲で、信念がなく、野心的だった。だが偉大でもあった。その物語はブルタルコス

の生涯の物語のように読ませる。だが彼が建てた大邸宅のうち、残っているのは外周の高いレンガの塀と、基礎のない建物が三、四棟、崩れかけた壁に、ドアや窓の形だけだ。まだ漠然とルイ十四世建築の壮大さを持っている。魅力のない廃墟で、火事で焼け落ちた安普請邸宅群を思わせるだけだ。

川に戻った。細くて淀んでおり、高い土手にはさまれて深く、反対側には密生した竹林があって、その背後に赤い太陽が沈もうとしていた。人々は夕方の水浴びをしている。父親や母親が子供に水浴びをさせ、僧たちはじぶんの身体を洗い終わると、黄色いローブをゆすいでいた。すてきな光景で、あの汚らしい廃墟を見て動揺し困惑した感覚にはありがたいものだ。

私は死んだ骨に生命の服を着せたりする想像力や、同じことについて何度も何度も感情を抱いたりするような能力は持ち合わせていない。『エゴイスト』を毎年一度読む人々や、パリに行くたびにマネの『オランペ』^{*1}を欠かさず環礁する人は知っている。私は芸術作品から一回ある独特のスリルを受け取ったらそれで用済みで、あとは年月が経過して自分が別の人物となり『エゴイスト』に自分がそれまで読んだことのない本を見出せたり、マネの『オランペ』にもいま初めてルーブルに展示されたばかりの絵画を見出せたりするようになるまでは二度と目をやることはない。アユダーは、ロップリ以上のものを何も提供してくれないだろうと思ったので、パスすることに決めた。それにこの安楽ぶりが気に入っていた。休憩所から休憩所へと渡り歩くのをあまりに長く続けて北ので、東洋のホテルという慎ましい快適さに焦がれるようになっていた。缶詰ソーセージや缶詰の梨にいささか飽きてきたのだ。タウンジーを離れて以来、手紙も受け取っておらず、新聞も見っていないので、バンコクで私を待ち受けているはずの巨大な小包を心地よく思い描いていたのだ。

途中で寄り道せずにバンコクに向かうと決めていた。列車はのんびりと、広大で開けたいなかを通り抜け、遠くにはギザギザした青い山岳がある。鉄道の両側は、見渡す限り田んぼだったが、かなりの樹木もあり、だから風景はいささか親しみやすいものだった。米

^{*1} オランピア、なんだが原文の綴りもどこから持ってきたかわからない間違え方なので。

の生え具合はまちまちで、若い緑の苗が小さく束ねてあるものから、穀物がほとんど熟れきって太陽の中で黄色になったものもあった。あちこちで刈り入れをしており、ときどき農民三、四人が列を作って巨大な鎌を持っているのが見えた。たぶん人間の主食の中で、育てるのにこれほどの労働力を必要とし、それから調理にさらに手間がかかるものは他にないにちがいない。線路際の小川では水牛が群れを作り、少年や大きな帽子をかぶった日焼けした小人めいた男の見張る中で、のんびり水浴びしている。田んぼの小鳥たちの群れが、白い輝きを放ちつつ飛び、ときには灰色の鶴が首を伸ばして飛んでいる。途中の停車駅ではいつも、何をするともない人々が群れをなしており、そのパナウンは、まばゆい黄色や紫やエメラルドグリーンで、ほこりと日差しを背景に美しい色彩の散乱を創り出していた。

列車はアユダーに到着した。私は鉄道駅を見るだけでこの歴史的な場所についての好奇心を満たすつもりで（というのも科学の人が大腿骨だけで先史時代の動物を再現できるのであれば、作家だって鉄道駅からありったけの感情を得られてもいいはずではないか？ペンシルバニア停車場にはニューヨークのあらゆる謎が詰まっているし、ヴィクトリア駅にはロンドンの陰気で鬱陶しい広大さがすべてある）、無頓着な目で私は客車の窓から頭を突き出した。だが若者が戸口にとびついてそれをすごい勢いで開けたため、私はほとんどプラットホームに排出されそうになった。この人物は小さな丸いトピーをかぶり、白いドリルコート、黒絹のパナンを半ズボン状にして、黒絹ストッキングとエナメル革のパンプスを履いている。英語は流暢でひっきりなしにしゃべった。私を迎えに寄越されたのだという。そしてアユダーで見るべきものをすべて案内するというのだ。船着き場に遊覧船が待っていて、私を川上りに連れて行くという。そして馬車も命じてあると。そして休憩所はその朝にきれいに掃いて掃除させた。そして最後にこう言う。

「庭園にあるものは何もかも美しいんです」

彼は大きく輝く白い歯でほほえみかけた。真新しい皿のようにすべすべした黄色い顔の若者で、頬骨は高く、輝く目をしている。アユダーに留まるつもりはないと告げる度胸はなかったし、また向こうもそんな暇を与えてくれず、ポーターたちを呼んで荷物を客車から運び出すように命じた。

彼は全力で仕事にとりかかった。何一つ手を抜かなかった。駅からはタマリンドの木が陰を作る広い通りを歩いた。左右には中国の商店があり、光は美しく、人々は魅力的な小さな光景を作っていたので、私としてはよるこんでゆっくりしたいところだった。だが我がガイドはそこには見るものなどない、店ならバンコクに行くしかない、そこならヨーロッパで買えるものなら何でも手に入ると述べた。そして優しくも決然と、私を船着き場に連れて行った。遊覧船に乗り込む。川は幅広で黄色かった。それに沿ってずっと屋形船があり、どれも商店で、ぬかるんだ堤防の上には果樹の間に高床式の家があった。我がガイドは川堤にある壁で囲まれた敷地に連れて行ってくれた。そこはもと王宮で、そのかつては玉座だったらしきところにも入った。というのも廃墟とはいえそこには王の寝台と王の椅子と木彫りの破片が少々あったからだ。ブロンズや石でできた無数の仏頭を見せてくれたが、それはロップリから持ってきたり、アユダーの無数のワットから発掘されたものだ。しばらく道沿いに歩くと、小さな馬車に強情なポニーが待っていた。なんという手配のよさ！一、二キロほどそれに乗って、快適な日陰の道を進んだがその両側には高床式の農民の家があり、それぞれの玄関の外には小さな紙製のパゴダに小さな白い旗が突き刺してあって、その家の住民たちをコレラから守るようになっていた。広大な公園にやっ

てきて、緑の草原と草の生えた広場があり、ピクニックには好都合な場所だ。ここで宮殿や大寺院の残骸や、廃墟となったパゴダを見て、その寺の一つの中では、他のすべてが持ち去られて孤独ながらも無関心な、すわったブッダの巨大なブロンズ像があった。あちこちの木の下で子供たちが遊んでいる。小さなシャム人の男の子たちは、大きな目とカールした髪とお茶目な外見で、とても可愛かった。通りすがりにガイドは、淡い紫の花をつけた茂みを指さした。これを見つけたら、そこには虎がいないと確信できるのだという。

「イギリスに虎はいませんね」と彼は笑ったが、その調子には少し侮蔑がこめられているように思った。

私は謙遜して答えた。

「いないね。我々はあの狭い小さな島で、安全かつ平和な暮らしを送っているんだ。我々が曝されている危険といえはせいぜいが、酔っ払った運転手の無謀さや袖にされた女性の怒りくらいのものだ」

川に戻ると私はシャム人の若者に暖かく感謝をして、こんなにおもしろいものを見せてくれてありがとうと述べてから、それでは休憩所に帰るからという、彼はその輝く目をさらに大きく見開いて、声を甲高く上げ、まだ見せたいものの半分も終わっていないのに、と言う。私はからかうように彼を見て、十分というのはご馳走と同じくらいよいものだとはつぶやいた。彼はそれを聴いて明るく笑った。たぶんこの巧妙な言い回しを私がいまここで思いついたのだと光栄にも思い込んでくれたのだろう。だが十分というのはまったく相対的な概念だという洞察で私を降参させた。私は、もう一つだけ廃寺に連れて行ってもらうことにした。荒廃で荒んでおり、私はまたもや巨大な仏像に、どうでもいいという視線を向けた。そしてまた別の仏像、そしてもう一つ。最後にやっと、また礼拝の対象となっている寺にやってきた。私はほっと安堵のため息をついた。死んだような空疎さを持つ未完成の借家から、人通りの多い通りに出てきたようなものだ。船着き場では、サンパンに乗った女性たちが金箔や紙や線香を売っていた。寺院への通路の両側には小さなテーブルが並び、どれも同じ商品やお菓子かケーキなども売っており、そしてどこも商売繁盛だった。礼拝堂はあまり大きくなくて、聖なる者の巨大な像でほぼ満杯で、階段を上ってドア越しに見ると（目はまだ太陽の光でくらんでいる）、その巨大な金箔張りの像が暗闇の中から浮かび上がるのを漠然と見分けるのは、畏怖の念を呼び起こす。その正面には弟子二人の大きな像があり、祭壇のテーブルは燃える線香だらけだった。過度には大きなチーク製のベッドがあり、そこに僧が二人すわって太いシャム煙草を吸い、お茶を飲んでピンロウジュを嗜んでいる。そこにいる人々が目に入らないかのようだ。一部の人は老若男女問わず、功德のためにブッダのすわる台座の巨大な蓮に金箔を貼っていた。やせぎすの中年女性が、細い知的な顔立ちでひざまづき礼拝して、大きな木製の豆を使って運勢占いをしていた。まずそれを床に投げ出して、それが落ちるのが平らな側かへこんだ側かによって彼女の問いかけに答えるのだ。老人が家族半ダースを引き連れてやってきて、中年女性が豆を使い終わるがはやいか奪い取り、そして事前に決まった儀式の後にそれを地面に投げると、一家全員が心配そうにそれをのぞき込んだ。終わると彼は煙草に火をつけ、残りの一家は立ち上がったが、でも運命が幸運を約束してくれたか不本意な結果だったかは、その無表情な顔立ちのどれを見てもまったくわからなかった。

ようやく我がガイドは、私の訪問に備えて掃き掃除された休憩所に連れて行ってくれた。それは屋形船で、川を見下ろす狭いベランダがついており、黒い木の細長い居室と、その左右それぞれに寝室と洗面所がある。一見してとても気に入った。若きシャム人は、

夕食後に自分の家にきてほしいといい、友人たちも招くというのだったが、でも私は疲れているからとそれを辞し、多くの善意の表現と共に彼は立ち去った。一日は終わりつつあり、そしてついに一人きりでベランダにすわって、私は川の交通を眺めた。物売りがサンパンに乗って、櫂を軽々と操って通過する。その船には鍋やパン、売り物の野菜や小さな七輪で調理されている食べ物が載っていた。農民たちは米を積んで通り過ぎ、しなびた灰色の頭をした老女が、まるで通りを歩いているかのように超然と小さな丸木舟をこぎながら通過していった。休憩所は川の曲がったところにあり、それが係留されている岸辺のところできく方向を変えていた。そこはマンゴーやヤシやピンロウが密生している。日が暮れ、それが赤い空を背景にシルエットとなった。ピンロウはそのみすばらしいてっぺんのため、まるで使い古しの羽ばたきのようなようだったが、夜に真っ赤な空を背景にすると、それはペルシャのミニチュア版のように立派だった。一日の最後の光とともに、シラサギの一群が、理由も順番もなしに脳裏をよぎる脈絡のない思考のように、静謐な流れをぱたぱたと無秩序に飛んで下っていった。闇が訪れ、当初は広い川の向こう側にある屋形船はまばゆく明かりがともっていたが、それが一つ、また一つと消え、あちらこちらで赤い輝きが水面に反射しているだけとなった。一つ、また一つと星が出てきて空一面に輝く。川の交通は途絶え、ごくたまにだれかが帰宅しようと通りすぎるときに、櫂が水を跳ねる柔らかい音が聞こえるだけ。夜中に目を覚ますと、屋形船が少し揺れて貸すかな動きが感じられ、小さく水が渦巻く音が聞こえた。まるで東洋音楽の亡霊が空間ではなく時間の中を旅しているようだ。このたぐいまれな平穏の感覚、その静謐さの豊かさの感覚のおかげで、あれだけの観光に耐えた甲斐があったというものだ。

第 28 章

数時間後、私はバンコクにいた。

東洋の人口の多い現代都市を考えると、多少の不安を覚えないわけにはいかない。どれも似たり寄ったりで、まっすぐな街路、アーケード、路面電車、ほこり、まぶしい太陽、群れをなす中国人、交通量の多さと絶え間ない喧噪を備えている。歴史も伝統もない。画家がその絵を描いたこともない。死んだレンガやモルタルを聖なるノスタルジアで転生させる詩人もなく、自分たちのものならぬすさまじい憂鬱さを与えた者もない。何の連想もなく、独自の生活を送り、まるで想像力のない人物のようだ。厳しく金びかで、ミュージカルコメディの背景幕のように非現実的だ。何も与えてくれない。だがそこを立ち去るとき、何かを見逃したという感覚がやってくる。自分には明かされなかった何かの秘密があるのではとつい思ってしまうのだ。そして、そこにいるときはちょっと退屈していたのに、後で振り返るとせつなく思うのだ。何か絶対に自分に与えてくれるものがあつたはずで、もう少し滞在したり状況が異なったりすればそれが受け取れたはずだと確信してしまう。というのも、受け取るために手を伸ばすことさえできない相手には、贈り物を提供したところで無意味だからだ。だがそこに戻っても、秘密は相変わらず手が届かず、そして結局のところその唯一の秘密というのは、東洋の魔力が自分を包み込んだというだけではないのかと自問することに鳴る。そこがラングーン、バンコク、サイゴンと呼ばれているから、それがイラワディ川、メナム川、メコン川といった濁った大河に面しているから、そこには古代の物語に満ちた東洋が想像力豊かな西洋にかけた魔法の呪文がこもっているのだ。旅行者百人がそこで、自分でもよくわからないが自分を苦しめる質問に対する答を探すが、不本意な結果となり、さらに百人の旅行者がそれを問い続ける。そして都市にきちんとした姿を与えるような形で都市を描写するなど誰にできよう？ それはそこに住むあらゆる人にとってちがった場所なのだ。それが本当な何なのか誰にもわからない。そして、それでも構わない。重要な唯一のこと 私にとって はそれが私にどんな意味を持つかということだけだ。そして金貸しが、あんたはローマを手にすると言ったとき、それは永遠の都についてそいつが言えることをすべて言い尽くしているのだ。バンコク。私は庭師が刈り取ってきた各種の花を大きな山にして、こちらの好きに生けられるようにするのと同じように、自分の印象を目の前に積み上げ、そしてそこからどんなパターンを引き出せるだろうかと自問するのだ。というのも私の印象は長い装飾帯、茫漠としたタペストリーのようなもので、私の仕事はそこからエレガントでありながら同時に感動的な装飾を見つけ出すことなのだ。だが与えられた材料はほこりと暑さと騒音と白さとさらにほこりでできている。この都市の主要道路は新道で長さ二キロ半、両側には低層のみすばらしい家と商店が並ぶが、その商店で売られている商品はほとんどヨーロッパ製か日本製だが、棚ざらしのまま薄汚く見える。乗客でごったがえすのんびりした路電がその通り

の端から端へと通り、車掌は絶え間なく警笛を鳴らし続ける。辻馬車やリキシャが行ったり来たりして鐘をならし、自動車がクラクションを鳴らしている。歩道はごったがえし、絶え間なく人々の下駄の音が鳴る。カランコロンという音で、それがジャングルでかましいセミたちの鳴き声ほどにしつこく単調な音となる。シャム人がいる。シャム人は短い堅い髪をしていて、パナン（これは幅広のもので、たくしこんで袋状の快適な半ズボンにする）を着ており、決して見栄えのする人種ではないが、歳を取ると風格が出る。太るところか痩せてほとんどやつれているかのようになり、はげるのではなく髪が廃炉になって、その黒い目が輝いて、苦勞を重ねた黄色くしわくちゃの顔からのぞく。足取りもしっかりしてかくしゃくたるもので、多くのヨーロッパ人のように膝で歩くのではなく、腰で歩く。中国人もいて、白か青か黒のズボンをはき、それがちょうど足首の上のところまでくるが、それが無数にいる。アラブもいて、背が高く髭が濃く、白い帽子と鷹のような目つきをしている。その足取りは自信に満ちたゆっくりしたもので、その大胆な目を見ると、自分たちが収奪している人々に対する軽蔑と、自分たち自身の狡猾さに対するプライドがうかがえる。ターバンを巻いたインド出身者もいて、黒い肌と、アーリア民族の血が持つきれいで敏感な顔立ちを持っている。インド以外の東洋すべてでそうなのだが、インド人たちは意図的によそ者に見え、その滞在先の人々の間を、まるで無人のジャングル路を歩くかのような歩き方をする。その顔は各種の不可思議な顔の中でももっとも不可思議なものだ。太陽が照りつけ、道路は白く、家は白く、空も白い。ほこりと暑さの色以外は何の色もない。

だが主要街道をはずれると、細街路の網の目に入り込む。暗く日陰で汚らしく途方もない小道で石畳だ。通りに面した無数の焦点は、陽気な看板で、商売熱心な中国人が東洋都市の各種の生業を営んでいる。こちらにあるのは薬局に棺桶屋、両替商に紅茶屋だ。通りに沿って、中国の耳障りな叫び声をあげつつ、^{クーリー}苦力たちが荷物をかついでよたよたと素早く行き交い、屋台のコックが小さな厨房を抱えて、家で食事をするには忙しすぎる人々に熱い夕食を売り歩く。広東さながらだ。ここでの中国人は、シャムの支配者たちがこの奇妙で平らで混乱した都市から造り上げようとしてきた西洋的な首都とは切り離されて無関心に暮らしている。彼らが狙っているものは、こうした不潔な細街路を取り囲む広い街路や、ときに運河の脇を走るまっすくなほこりっぽい道に見られる。そうした道はかっこうよく、広々として堂々たる道で、街路樹が影を落とし、支配力のある玉座を保つだけの野心を持った王が考案した大都市の意図的な装飾だ。だがそこに内実はない。何か書き割りめいたものがあり、したがって日常生活での利用よりは宮廷での野外芝居にふさわしいと感じられるのだ。だれもそこを歩かない。儀式や式典を待っているかのような。それは失墜した王家の公園にある無人の街路のようだ。

第 29 章

どうやらバンコクには三百九十のワットがあるらしい。ワットというのは仏教の僧坊寺院として使われる建物の集合体で、壁に囲まれ、その壁はしばしば銃眼が儲けられて魅力的なパターンを作り、ちょうど都市の城壁のようだ。中の建物はどれも独自の用途がある。主要なものがボテと呼ばれる。それは巨大で広い会堂で、中心に身廊があるのが普通で通路が日本、そしてブツが金箔張りの台座の上に立っている。別の建物はボテととても似ていてヴィハラと呼ばれ、聖なる石で囲まれていないという点がちがう。これは祝宴や儀式や一般人の集会などに使われる。ボテと時にヴィハラは僧坊に囲まれている。それから宿坊、書庫、鐘台、司祭の住居がある。こうした主要な建物のまわりには、重要な順に大小のパゴダがある（それぞれ名前があって、フラ・プラングとフラ・チェディという）。その一部は貴人や敬虔な人々（時には敬虔な貴人かもしれない）の遺灰を収めており、一部は単に装飾目的で、それを建立した人々が功德を積むためだけにある。

だがこうした事実の羅列（これはシャム建築についての本から拾ってきたものだ）では、こうした驚異的な建物を見たときに私を襲った驚愕、呆然自失ぶりとすらいえるものの印象はお伝えできまい。それは世界の他のどんなものともちがっており、だからこちらほうろたえてしまい、そして知っているものの枠組みの中に収めることができない。この陰気な地上にこれほど幻想的なものが存在できると思っただけで、喜びのあまり笑い出してしまう。実に豪壮だ。黄金と白塗りで輝いている。だがけばけばしくはない。鮮明な空を背景に、そのまぶしい日差しの中で、独自の存在を保ち、自然の輝かしさに拮抗してそれを人類の創意工夫と遊びに満ちた大胆さで補うのだ。これを古代クメールの建物から一歩ずつ発展させていった芸術家たちは、自分たちの幻想をめいっぱい追求するだけの勇氣を持っていた。想像するに芸術など彼らにはあまり意味がなく、シンボルを表現したいと思ったのだろう。抑制など知らず、趣味の良さなど意に介さなかった。そして芸術を達成したとしても、それは人間が幸福を実現するのと同じで、それ自体を追求することによるのではなく、全身全霊で日常の仕事においてやるべきことをやることにより実現したのだ。彼らが実際に芸術を実現したかもわからない。こうしたシャムのワットが美を持つかもわからない。美というのはなんでも、節度があり超然としてとても洗練されているそうだから。私にわかるのは、それがとにかく不思議で陽気で奇妙だということだ。その線は無限に傑出しており、学生のユークリッド幾何学における定理の線のようで、その色彩は公開市場における八百屋屋台の野菜の色のように華やかで粗雑で、七叉路の交差点のように、想像力が多くの気ままで予想外の旅を行えるような道筋を拓いてくれるのだ。

王立ワットはワットではなくワットの都市だ。華やかで、回廊とパゴダの色彩豊かな混乱であり、その一部は廃墟で、一部はまっさらに見える。一部の建物は、輝きはまばゆくもいささか荒廃気味で、魔神の台所庭園にある巨大野菜のようだ。タイル製で、奇妙なタ

イルの花で覆われた構造物もある。その三つは巨大だが、多くの小さなものが列をなし、神々の国における村祭りの射的の景品のような。ユーフェウスの一ページのようで、これほど朗々たるバカげた仰々しい擁護を発明した長ったらしい言葉を使いたがる癖によりくすぐり死刑にあうかのようだ。行き先もわからない迷路だ。屋根からまた屋根が生え、そしてシャム建築においては屋根が主要な栄光なのだ。それは三層構造で、てっぺんのが最も急傾斜、低層のものはだんだん平らになってくる。釉薬をかけたタイルで覆われており、その赤と黄色と緑は目にも麗しい。破風は聖なる蛇ナーガで飾られ、その頭が低い軒におかれて、波打つからだが屋根の斜面をのぼり、頂点の角となっててっぺんで終わる。そして破風は像にまたがったインドラやガルダに乗ったヴィシュヌの木の彫刻レリーフで飾られている。というのもブッダの寺院は何のためらいもなく、他の信仰の神々にも居場所を与えるからだ。軒縁の金箔張りやガラスのモザイクと戸口の縦枠とドアと鎧戸の黒と金の漆で、すべてが恐ろしく豊かだ。

巨大で、混雑しており、目をくらませ息をのませ、空疎で、死んでいる。うろつくとしわびしくなる。というのも結局のところそれは自分には何の意味もないからで、驚きの「おお」は引き出されても、感情の「ああ」は決して出てこない。意味がわからない。クロスワードパズルで、奇妙で古くさく多音節の言葉が複雑に絡み合っているようなものだ。そして散策の途中で背の高い欄干の上を見ようと階段を上がり、そこに岩石庭園を見つけると、ほっとした気分でそこに入ることになる。小さな人口の水流を中心に作られ、小さく素朴な端があちこちにかけている。中国絵画の古代の賢者が隠居所を作った岩砂漠のように見え、水辺の人口の岩の上には、石造りの猿や野生のネコや、小さな小人じみた人々がいる。そこにマグノリアが生え、中国の柳と、太った輝く葉の茂みがある。それは心地よく素敵な隠れ場所で、東洋の王様が複合体のはかなさについて、快適かつ平穩に瞑想するに似つかわしい場所だ。

だが、スタットという別のワットがあって、これはこうしたごった煮の混乱の印象はまったく与えない。清潔で掃き清められ、無人で静かで、空間と沈黙こそが大きな装飾となっている。ぐるっと巡る歩廊では金箔張りのブッダがひしめきあって座っており、夜がきてだれにも邪魔されずに瞑想に任されると、その仏像たちは謎めいておりなんとなく意地悪な感じもする。中庭のあちこちには茂みが生え、寸詰まりで折れ曲がった樹木がある。大量のミヤマガラスがいて、飛びながら大声でカアカアと鳴く。ポテは二十の基台にのって高いところに建ち、その白塗りは雨で染みがつき、日差しに焼かれてまだらの象牙色となっている。四角い柱は角の部分に溝が彫られ、少し内側に傾斜して、柱頭は不思議な生え方の花のようで、まるで魔法の庭に生えた花のようだ。それは金銀宝石、エメラルドにルビーにジルコンの幻想的な線條細工のような印象を与える。そして破風の彫刻は、細やかで入念で、岩屋のクジャクシダのように垂れ下がって、屋根を上る蛇は中国絵画における海の波のようだ。戸口は、それぞれの端に三つずつありとても高く、たくさん彫刻を施した木星でもちろん金箔張りであり、窓は密集して背が高いが、かすかに輝く金箔張りの鎧戸を持つ。青空がピンクとなる夕べと共に、屋根、軒の突き出した背の高い急な屋根は、各種のオパールめいた輝きを放ち、もはやそれが人間の職人によるものだとは信じられなくなる。というのもそれはつかの間の気まぐれや記憶や楽しい希望でできているように見えるからだ。静けさと孤独が形をとって目の前に現れようとしている。そしていまやワットはとても高く、とてもほっそりして、驚異的な優美さを持つようになる。だが悲しいかな、その精神的な意義はこちらにはわからないのだ。

第 30 章

これまでの道中で通り過ぎた慎ましい小さな僧坊寺院にもこうしたものがもっとあったように思えた。その木の壁や草葺き屋根や小さな安びか物の仏像で、そうしたところには家庭的なものがあつたが、でも謹厳さもあり、それがゴータマの説いた家庭的ながら謹厳な宗教にはふさわしいように思える。それは、私の勝手な思いだが、都市の宗教というよりは田舎の宗教であり、聖なる者がその悟りを見つけたという野生のイチジクの木がもたらす緑の木陰がつねにそこにつきまとっているのだ。伝説は彼を王子に仕立て上げ、世捨て人になったときに権力や大きな財力や栄光を放棄したかのように思わせた。だが実際には彼は、田舎紳士の良家の子供でしかなかったし、だから世捨て人となったときには、せいぜい水牛何頭かと多少の田んぼをあきらめたくらいだと思う。その生涯は、私がシャン州で通過してきた各地の村の首長たちと同じくらい単純なものだった。彼は形而上学的な考究に情熱を傾ける世界に暮らしていたが、形而上学には手厳しかったし、巧妙なヒンズーの賢者たちによって無理に議論を強いられると、いささか苛立った。彼は宇宙の起源、意味、目的などに関する憶測などまったく取り合わなかったことだろう。「まこと、身の丈六尺ほどながら意識を持ち心を宿した死すべき肉体の中には、世界をその起源があり、その去りゆく先もある」。その弟子たちはブラフマン博士たちに、己の立場を形而上学的な議論で説明するよう強制され、時間がたつにつれて、哲学的な人々の鋭い知性を満たすような信仰の理論を編み出しただろうが、ゴータマはあらゆる宗教の開祖と同じく、要はたった一つのことしか言わなかった。疲れ切り、重荷を背負わされた者たちは全て我が元へ集え、私が休息を与えよう。

世界に現れたほとんどの神々は、人々が自分を信じるべきだといういささか気狂いじみた主張をして、信じられないという人々に対しては（その人がいかに善良でも）恐ろしい罰則で脅した。もたらすはずの大いなる贈り物の提供を妨げる者たちに対して糾弾するときの暴力には、いささか哀れなものさえある。内心奥深くでは、自分に聖性をもたらすのは他人の信仰であり（まるでその神様の頭が不安定な基盤に立っていて、あらゆる信者はそれを支える石でしかないともいうようだ）、彼らが実に熱烈に説きたがるそのメッセージが効力を発揮するには彼ら自身が神になるしかないとも言える。だがゴータマは、自分を試してみてもその結果で自分を判断してくれという医師の主張をただけだった。彼は芸術作りが自分の機能であるからこそ全力で作品を作る芸術家にむしろ似ていて、魂というものを信じないことから必要とされた変更をその信念にもたらしたのだ。というのも誰でも知っているように、ブッダの教えでもっとも重要なのは、魂とか自己とかいうものは存在しないということなのだから。万人は、物質的精神的な性質の寄せ集めだ。ちがった者にならなくては寄せ集めたりはできず、死ぬことなしにちがった者になることはできない。始まりのあるものは必ず終わりもある。この発想は、日が照ってダウン

ズ丘陵を越える道が足の下ではずむ、さっぱりした冬の朝のように爽快だ。カルマというのは（読者諸賢に説明するまでもないだろうが）というのは存命中のその人の行動が、次の生での運命を決めるという理論だ。死ぬときに、人生の欲望に影響されて、その人を形成していた性質の非永続的な集合が再び組み合わさり、別の日永続的な集合を形成する。人は長い因果の連鎖における、現在の一時的な輪でしかないのだ。カルマの法則は、あらゆる行動が結果を持つのだと告げる。それはこの世界の邪悪に関する説明で、心に怒りを抱かせない唯一の説明だ。

以前のページで、親切な読者諸賢に、一日の始めに形而上学的な著作を数ページ精読するのだとお話した。これは朝風呂が身体にとって健康的なのと同じくらい、魂にとって健康的な習慣だ。抽象概念を楽々と逍遥するような種類の知性はないし、自分が読むものをまるで理解できないことも多いが（これはあまり気にはならない。というのも専門の論法家ですら、しばしばお互いを理解できないとグチを言うからだ）それでも読み続け、ときどき私に特別な意味を持つ一節に出くわすのだ。すてきな一節により我が道はときどき明るくなる。というのも昔の哲学者たちは、しばしば非凡なくらい上手に文を書くからで、長期的には哲学者というのは、偏見も個人的な希望も癖もふくめ、自分自身について書いているだけであり、そしてそのほとんどはかなり強健な人格の持ち主だったので、しばしばその著作を読むことでおもしろい人物とお知り合いになるという楽しみが得られる。この気まぐれな方法で、私は世界に登場した大哲学者のほとんどを読み、人生という迷路のようなジャングルをとりあえず切り抜けようとする万人の首をひねらせる事柄について、啓蒙をあちこちでつまみ食いの学ぼうとしてきた。そして邪悪の問題をどう扱うかという方法ほど興味を抱いたものはない。あまり蒙を啓かれたとは言いがたい。最高の哲学者ですら、長期的には邪悪ですら善だということがわかり、したがって悪に苦しむ人々も偏見のない心でその苦しみを受け入れなくてはならないという以上のことは言えていない。困惑して神学者がこれについてどう語っているかも読んで見た。そもそも罪というのは神学の縄張りだし、神学的にはこの問題は単純きわまりない。神様が全能であるならなぜ悪を許容するのか？ 神学者の答は様々で混乱している。心も頭も満足させるものではなく、私はといえば 私は無知だし問いかけをするのは凡人であっても答を理解するには専門家でなければならぬかもしれないので、こうした問題については控えめな物言いをするのだが そうした説明はどれも受け入れられない。

さて、たまたま道中で読むべく持ってきた本の一冊はブラッドレー『見かけと現実』だった。以前にも読んでいたが、むずかしかったので再読したいと思った。でもあまりに分厚い本なので、表紙を破り捨てていくつかの部分に分けて、もう十分読んでポニーにまたがり一夜を過ごすバンガローから離れるときにも、楽にポケットに入るようにしておいた。読み物としてはおもしろく、ほとんど納得はできないものの痛烈で、著者は皮肉の心地よい才能を持っている。もったいぶったところはない。抽象的な話も軽やかに扱う。だが展覧会で見かけるキュビズムの家のように、軽やかでこざれいで広々としてはいるが、線が厳しくあまりに調度に飾り気がないので、暖炉でつま先を温めたり楽しい本を持って安楽椅子に落ち着いたりしている自分を想像できないのだ。でも悪の問題の扱いまでやってくると、ローマ法王が若い娘の形よいふくらはぎを見たかのように、そのとんでもなさには私は文句なく逆上してしまったのだった。書かれていることによれば、絶対者は完璧であり、悪は見かけにすぎず、全体の完成に役立つ者でしかあり得ないという。まちがいは、生命の活力増大に貢献する。悪はもっと高い目的に一役買うのであり、この意味で知

らぬうちに善となっている。絶対的なものはあらゆる不協和音によりさらに豊かとなること。そしてなぜか知らないが、戦争初期の光景がふと記憶に蘇ったのだった。それは十月のことで、まだ我々の感覚も鈍ってはいなかった。寒く凍てつく夜。参加した者は戦闘だと思ったものが起きたが、でも実際にはあまりにどうでもよくて、新聞にはろくに報道もされない程度の小競り合いでしかなく、死傷者は千人ほどでしかなかった。彼らは田舎教会の床に藁を敷いて並べられ、光は祭壇のロウソクだけ。独軍が進軍しており、すぐさま彼らを撤収させねばならなかった。夜を徹して救急車が照明なしで往き来し、負傷者たちははやく連れ出してくれと叫び、中には担架にのせられるときに死んでしまい、ドアの外の死体の山に放り出されて、みんな汚れて血まみれで、教会は血のにおいが満ち、人体の腐臭がした。そして少年が一人、あまりに重傷で移送するまでもないくらいで、それが横たわったまま、両側の人運び出されるのを見て、こう絶叫したのだ。 *je ne veux pas mourir. Je suis trop jeune. Je ne veux pas mourir.* そしてこのように、自分が死ぬまでは死にたくないと叫び続けた。もちろんこれは何の主張でもない。私がこの目で見て、その絶望的な叫びがその後何日も私の耳に響きつづけたという以外何の意義もない、どうでもいい出来事ではない。だが私より偉大な人物、哲学者にして数学者がこの取引とでも言うべきものについて、心は頭にはわからない理由を持っているのだと言うのであれば（そして私のように仏教徒の用語を使うなら複合的なものに捕らわれている状態では）、この光景は形而上学者の細々した理屈に対する反論として十分すぎるものに思えるのだ。でも我が心は、自分に降りかかった悪が私の（といっても私の魂ではない、魂は消えてしまう。他の存在状態における私だ）過去に行った行動の結果だと言われれば納得できる。まわりで見かける悪もあきらめがつく。若者の死も（なによりもつらい）その若者たちを不安と貧困と病気と切ない希望の中で生んだ母親たちの悲しみも、そうした悪が苦しむ者たちのかつて行った罪の結果にすぎないというならば、あきらめられる。この説明は、心も頭も逆上させることはない。私から見てその欠陥はただ一つ。まったく信じられないということだ。

第 31 章

ホテルは川に面していた。私の部屋は暗く、長く並んだ部屋の一つで両側にベランダがついている。風通しはあったが、息詰まる。食堂は巨大で薄暗く、暑さよけのため窓の鍍戸は下りていた。給仕は無言の中国人少年たち。なぜかはわからないが、風味のない東洋料理で胸が悪くなった。バンコクの暑さがたまらなかった。ワットはけばけばしい壮大さで私を圧迫して頭痛がしたし、そのすばらしい装飾は私を倦怠させた。見るものすべてが明るすぎ、街路の群集に疲れ、しつこい喧噪が癪に障った。かなり気分が悪かったが、それが身体的なものか精神的なものかはよくわからなかったので（芸術家の繊細さなるものは疑問だと思う、山ほどのたくいまれで精妙なる思考が、肝油一錠のむだけで消え失せてしまうことも多い）決着をつけるべく体温を計って見た。四十度超だったので私は驚愕した。信じられずに計り直した。相変わらず四十度超。魂のどんな苦悶もこんな熱はおこせない。私はベッドに入って医者と呼ばせた。たぶんマラリアだろうとのことで、検査用に採血し、まちがいないと言ってキニーネをくれた。そういえばシャムを南下する旅の終わり近くに、駐留所指揮官が、是非とも自宅に泊まれと言ったのだった。最高の寢室を与えてくれて、バンコクからはるばる運ばせたニス塗りのリギダマツ材製の巨大なヨーロッパ式ベッドで休んでくれと固執するので、こちらとしても、蚊帳付きの自前の小さなキャンプベッドのほうがいい（かれのベッドは蚊帳なしだ）などと言う勇氣はなかったのだった。ハマダラカはその絶好のチャンスを逃さなかった。

明らかにかなりひどい症状だった。というのも数日にわたりキニーネはまったく効かず、体温はマラリアにありがちなめまいのするほどの高みにまでのぼりつめ、濡れたシーツも氷嚢もそれを下げられなかったからだ。私はそこに横たわり、ぜいぜいと息をついて眠ることもできず、巨大パゴダの形が脳裏に浮かび、巨大な金箔張りの仏像が私を押しつぶした。そのベランダつきの木の部屋は、あらゆる音をわが苛まれた耳に恐ろしいほど聞こえやすくしてしまい、ある朝ホテルの女支配人（愛すべき人物ながら辣腕商売人でもある）がその咽頭音式のドイツ声で医師にこう言うのまで聞こえてしまった。「あの人がここで死なれちゃ困るんですよ、ね。病院につれていってくださいな」。すると医師はこう答えた。「わかりました。でもあと一、二日様子を見ましょう」「まあ、あまりグズグズしないでくださいね」と彼女。

そこで危機がやってきた。汗がだくだく流れ、間もなくベッドがびしょ濡れになり、まるでそこで風呂を浴びたかのようで、そしてそこから快方に向かったのだ。呼吸が楽になった。頭痛もひいた。そしてみんなで私を長椅子にうつしてくれると苦痛もなくなり、実に幸せな気持ちになった。脳もすばらしくすっきりした。新生児なみに衰弱していて、数日はホテル裏のテラスで横になって川を眺める以外に何もできなかった。エンジン式の遊覧船が行ったり来たりする。無数のサンパンが見える。大きな蒸気船や帆船が川を上

り、忙しい港湾のような雰囲気だ。そして旅好きなら、実に小さくおんぼろで薄汚い海洋貨物船を見て感情が昂ぶり、あれに乗ってどこか見知らぬ天地に向かいたいと渴望せずにはられない。早朝、日中の暑さの前だと、風景は陽気で活気に満ちている。そしてまた日没近くにそれは色彩であふれ、近づく夜の背負う影により何か不吉な様相を見せる。蒸気船がゆっくりと到着し、騒々しい鎖の音とともに投錨するのを眺め、そして三本マストのパークが潮にのってゆっくりと川を下るのを眺めた。

理由は忘れてしまったが私は王宮を見損ねていた。でも後悔はしなかった。おかげでバンコクで見つかる各種感情の中で、最も見つかりにくい微かな謎の雰囲気が保たれたからだ。王宮は大きな白壁に囲まれ、そこに奇妙な銃眼がほどこされて、その銃眼は蓮のつぼみが並んだような印象を与える。間隔を置いて門があり、そこに風変わりなナポレオン式衣装を着た衛兵が立ち、それがなかなかおもしろいオペラ的な雰囲気を持っていて、いますぐにも華やかな歌を歌い始めそうだ。晩に向けて、白壁はピンクになり虹色になり、その上に、夕暮れがけばけばしさをその柔らかい輝きで抑えて、王宮やワットや明るい色彩でとがったパゴダの、寄せ集めめいた陽気で幻想的な多彩の屋根が見えるのだ。広い中庭に、入念な装飾の美しい門を思い描かれる。そこに王宮の官吏たちが、生真面目ながら立派な服装で密談に精を出しているのだ。そして小ぎれいに刈り込まれた木が並ぶ歩道や、荘厳で壮大な寺院、黄金や宝石を豊かに使った玉座の間、そして微かな芳香を持つ暗く涼しい居住区に、東洋の多層の至宝が無造作に山積みされているところが目に浮かぶ。

そして川を眺め、ありがたくも椅子に縛り付けてくれる衰弱を楽しむ以外に何もすることがなかったので、私はおとぎ話を考案した。こんな具合だ。

第 32 章

シャムの王様はまず娘を二人もうけ、それを夜と昼と名付けられました。それからまた二人生まれたので、最初の二人の名前を変えて、四人を季節にちなんで春、秋、冬、夏と名付けました。しかしやがてさらに三人生まれて、今度は娘七人を曜日で呼ぶようになりました。しかし八人目の娘が生まれると途方に暮れましたが、あるとき一年の月にすればいいと突然思いついたのです。女王様は、月の名前は十二しかないし、こんなに新しい名前を覚えるのは頭がこんがらがってしまうとこぼしましたが、王様はとても几帳面な方で、何か腹を決めたら自分でどう頑張ってもそれを変えることはできないのです。そこで娘全員の名前を変えて、それぞれ一月、二月、三月（もちろんシャム語ですが）、という具合に呼び、いちばん若い娘は八月と呼ばれ、そして次の娘は九月と呼ばれました。

「残るは十月、十一月、十二月だけですわ。その後はまたやりなおしですわね」と女王様。

「いやそんなことにはならん。というのもどんな男でも娘は十二人もいれば十分であり、可愛い十二月が誕生したら、朕は気が進まぬながらもお前の頭をちょん切らざるを得ないからだ」と王様。

これを口にして、王様はさめざめと泣きました。というのも女王さまのことを非常に気に入っておられたからです。もちろん女王さまも、まるで心穏やかではいらませんでした。というのも自分の頭を切り落とさねばならないとなったら、王様がとても心痛されることをご存じだったからです。それにももちろん、女王様ご自身にとってもあまり気持ちのいいことではないでしょう。しかしありがたいことに、お二人とも気に病む必要はございませんでした。というのも九月がお二人の最後の娘となったからでした。その後女王さまは息子ばかり産み、そして息子たちはアルファベットの文字で呼ばれたので、長いこと心配する必要はございません。まだJまできたばかりでしたから。

さて、シャム王の娘たちはこんな形で名前を変えさせられたことで、性格が徹底的に歪んでしまいましたし、もちろん年配のお姫様方は他よりも名前をしょっちゅう変えさせられたために、性格もおさら歪んでしまわれたのです。でも九月は、九月以外の名前で呼ばれるのがどんなものかを知ることもなく（とはいえ、性格の歪んだ姉上方は彼女をありとあらゆる呼び方で呼んだのですが）、とても優しく魅力的な気質をお持ちでした。

シャム王にはある習慣がございまして、これはヨーロッパでも真似るとよろしいのではないかと思います。誕生日にプレゼントをもらうかわりに、自分が人にプレゼントを贈ったのです。そしてどうやらご当人もそれがお気に召したようで、ある一日にだけ生まれて、誕生日が年に一日しかないのは残念だとよくこぼしていたからです。でもこうすることで、やがて王様は結婚の贈り物をすべて処分できましたし、シャムのいろいろな都市の市長が送った忠義のしるしだの、流行遅れになってしまった古い王冠などもすべて始末で

きたのでした。ある年の誕生日、手元に手頃なものがなかったので、王様はお姫様それぞれに、美しい黄金のかごに入った美しい緑のオウムをお贈りになりました。九羽おりまして、そのかごには、その持ち主たるお姫様の月の名前が書かれています。お姫様九人はそのオウムをとて誇りに思い、毎日一時間（というのも皆さん父君に似て、とても几帳面な心をお持ちだったのです）しゃべる訓練をほどこしたのです。間もなくどのオウムも王に神の栄光あれゴッド・セイヴ・ザ・キング（これをシャム語で言うのはとてもむずかしいのです）と言えるようになり、中には「プリティーポリー」を東洋言語七種類以上で言えるようになったオウムもありました。でもある日、九月姫がオウムにおはようを言いに行きますと、黄金のかごのそこで死んでおりました。姫はどっと涙をあふれさせ、女官のだれが何を言おうとも心は慰められることはありません。あまりにお泣きになるので、女官たちはどうすればいいかわからず女王様に相談し、女王様はまったくもってくだらないバカげたことだと申しまして、夕食抜きでベッドにやるよう命じたのでした。女官たちはパーティーに行きたかったので、九月姫をさっさとベッドに押し込めると、そのまま一人でほったらかしてしまったのです。そしてお姫様はベッドに横たわり、おなかは空いていましたがまだ泣き続けておりましたところ、小鳥が部屋に飛び込んできたのが見えました。そこで親指を口から抜いて起き上がりました。すると小鳥は歌い始め、王様の庭園にある湖や、静かな水面に映る己の姿を見つめる柳の木や、そこに映る枝の間を出たり入ったりする金魚たちのついて美しい歌を奏でました。小鳥が歌い終わるとお姫様はもう泣いてはおらず、夕食抜きだったこともすっかり忘れておりました。

「ととてもすてきな歌ね」とお姫様。

小鳥は会釈いたしました。芸術家はもともとお行儀がよいし、ほめられるのが好きなのです。

「よかったらぼくをオウムのかわりに飼いませんか。見た目はそれほどではありませんが、でもずっといい声をしていると思うんですよ」と小鳥。

九月姫は大喜びで手を叩き、そして小鳥は姫君のベッドの端に飛び乗って、姫が眠るまで歌い続けました。

翌朝目を覚ましますと、小鳥はまだそこにおりまして、目をあけると同時におはようと申します。女官たちが姫の朝食を運び、小鳥は彼女の手から米を食べ、受け皿で水浴びをいたしました。そしてその水を飲んだのです。女官たちは、自分の風呂の水を飲むのはあまり礼儀正しくないのではと申しましたが、九月姫はそれが芸術的な気性なのだと申します。朝食を終えると小鳥はまたもや実に美しく歌い始め、女官たちはとても驚きました。こんなものは聴いたこともなかったからで、九月姫はとても誇らしく、嬉しく思ったのです。

「ではお姉様方八人に紹介しますわね」と姫君。

姫は右手の人差し指をのばして止まり木にいたしまして、小鳥は飛び降りてそこにとまりました。それから女官たちを従えて、彼女は王宮をめくり、順番に姉の姫君方をそれぞれまわりました。エチケットに留意いたしまして、まずは一月姫から、そして次々にまわり最後は八月姫。そして姫君のそれぞれに小鳥はちがう歌を歌い聴かせたのでした。でもオウムたちは、王に神の栄光あれと、プリティーポリーしか言えません。最後に姫は小鳥を王様と女王様に見せました。二人は驚きよろこびました。

「ほらご覧なさい、だからこの子を夕食ぬきでベッドにやったのはよかったですように」と女王様。

「この鳥はオウムたちよりはるかに歌がうまいな」と王様。

「みんなが王に神の栄光あれと言うのをお聴きになるのはいい加減に飽き飽きかと思いましたが。娘たちがなぜオウムにあんなせりふを教えるのか見当もつきません」と女王が申します。

「その気持ちが嬉しいではないか。それに何度聞いても朕は気にならん。だが確かにあのオウムどもがプリティーポリーを言うのは聞き飽きた」

「七カ国語で申しますのよ」と姫君方。

王様は答えました。「確かにその通りではあるな。だがあまりに朕の顧問どもを思わせてしまうのでな。連中は同じことを七種類の言い方で言うのだが、どの言い方であれ連中が言った通りの意味であったためしがない」

姫君方は、すでに申しましたように性格がすでに元々ねじくれておりましたので、これに苛立ちましたし、オウムたちも確かに実に陰気に見えました。でも九月姫は王宮のあらゆる部屋を駆け抜けてツグミのように歌い、小鳥はそのまわりをぐるぐると飛んで、ナイチンゲールのように歌いました。というかその鳥は本当にナイチンゲールだったのですが。

こんな調子で数日続きまして、そこで姫君方八人は頭を寄せあいました。そして九月姫のところへでかけ、彼女を中心に車座となり、由緒正しいシャムのお姫様として足を隠します。

「可哀想な九月ちゃん、きれいなオウムが死んでご愁傷様ですわ。私たちのようにペットの鳥がいらないとは本当におかわいそう。だからみんなでお小遣いを出しあって、あなたに美しい緑と黄色のオウムを買ってあげますからね」

「大きなお世話ですわ」と九月姫（あまりお上品ではございませんが、シャムのお姫様はときにお互い少々短気になるのです）、「すごく魅力的なペットの鳥がおりますし、緑と黄色のオウムなんかもらってもどうすればいいやら困るばかりです」

一月姫は鼻を鳴らし、二月姫が鼻をならし、三月姫が鼻をならしました。そうして姫君方全員が鼻を鳴らしたのですが、それもきちんと立場の軽重を考えて正しい順番でのことです。一巡すると九月姫は尋ねました。

「なぜ鼻を鳴らしたりいたしますの？ お風邪でも召されて鼻が詰まっておいでなのかしら？」

「いいえ可愛い妹よ。ただね、その小鳥が好き勝手に出たり入ったりしているのに、それがご自分の小鳥だなんてバカげた話でしょうに」姉君方は、部屋を見回して、眉をものすごく吊り上げましたので、おでこが完全に消えてしまったほどです。

「ひどいしわですこと」と九月姫。

「あなたの小鳥はどこにいらっしゃるのか、うかがってもよろしくて？」と姫君方。

「義理のお父上を訪ねにでかけましたけれど」と九月姫。

「そして、あなたのところには戻ってきてくれるのかしらねえ」と姫君方。

「いつも戻ってきますよ」と九月姫。

「あら九月ちゃん、悪いことはいわないから、そんな危険は冒さないほうがいいわよ。戻ってきたら、そして言うておきますけれど、それだけでもかなり運のいいことだと思いますけれど、あのがごに放り込んでそのまま閉じ込めておしまいなさい。確実につかまえておける唯一の方法ですからね」

「でも、小鳥さんが部屋の中を飛び回ってくれるのが好きなんですけど」と九月姫。

「後悔先に立たず」と姉君方は恐ろしげに申します。

そして一同は立ち上がり、首を振りながら部屋を辞去いたしまして、残された九月姫はとても不安になりました。確かに小鳥はずいぶん長いこと出かけたきりで、何をしているのか見当もつきませんでした。何か起きたのかもかもしれません。鷹やかすみ網を仕掛ける人間たちがいるので、どんな困ったことになっているものやら。それに、姫のことを忘れてしまうかもしれないし、別のだれかを気に入るかもしれません。そうなったらひどいではありませんか。ああ、小鳥が安全にここに帰ってきてくれればと姫は願いました。それもあの、準備万端で空っぽのまま立っている黄金のかごの中へ戻ってくれば。というのも女官たちはオウムは埋葬いたしました。かごは元のままにしてあったのです。

突然、耳のすぐ後ろでチュンチュンという鳴き声が聞こえ、小鳥が肩にとまっているのが見えました。実に静かにやってきて、本当にそっと下りたので、聞こえなかったのです。

「いったいどうしちゃったのかと思案していたのよ」とお姫様は申しました。

「そう思われるんじゃないかと考えたんですよ。実はすんでのところ、今晚はずっと戻らないかもしれなかったんです。義父が宴会をやっていて、みんなぼくにも残れといったんですが、あなたが心配すると思ったもので」

この状況での発言として、これは小鳥にとって実に不幸なものでありました。

九月姫は心臓が胸の中でドキンドキンというのを感じ、これ以上の危険は冒すまいと決心しました。手をのばして小鳥をつかまえます。小鳥はこれには慣れっこでした。姫は小鳥の心臓が、手のすき間で実にすばやくコトコト鳴るのを感じるのが好きだったからです。そして小鳥のほうも、お姫様の小さな手の柔らかなぬもりが好きだったのだと思います。だから小鳥は何も怪しまず、お姫様がそのままかごの所に運んでいって、投げ込み、扉を閉めたときにも、一瞬何と言うべきかわかりませんでした。でも間もなく象牙の止まり木に飛び乗ってこう申します。

「何の冗談ですか？」

「冗談じゃないわ。でもママのネコが今晚うろついているので、その中にいたほうがずっと安全だと思うの」と九月姫。

「なぜ女王様があんなにたくさんネコを飼いたいのか見当もつきませんね」と小鳥はいささか不機嫌に申します。

「ええ、それはね、あれが特別なネコたちだからなの。青い目をして尻尾も先が曲がっていて、王家の特産品なのよ、言ってることわかるかしら」

「そりゃもう。でもなぜその話をせずにかごに入れたんですか？ こんな場所、気に入らないなあ」

「あなたが安全だと確信できないと、一睡もできなかったはずよ」

「まあこの一回だけならいいですけど。でも朝には出してくださいね」と小鳥。

そしてたっぷり夕食を食べて歌い始めました。でも歌の途中で辞めてしまいました。

「どうしたのかな。なんだか知らないけれど、今晚は歌いたい気分じゃないんです」

「仕方ないわね。だったらおやすみなさい」と九月姫。

そこで小鳥は頭を翼の下に突っ込んで、一分もしないうちにぐっすり寝てしまいました。九月姫も眠りました。でも夜明けと同時に、小鳥が絶叫するのに起こされました。

「起きて、起きて。かごの戸を開けて出してください。地面にまだ露があるうちにひとっ飛びたいんです」

「そこにいるほうがずっとあなたのためなのよ。美しい黄金のかごもあるでしょう。パ

パの王国で最高の職人が作ったもので、パパはこれが気に入りすぎて、その職人さんの首をちょん切って二度と同じものを作らないようにしたのよ」と九月姫。

「出して、出して」と小鳥。

「ご飯は一日三回、女官に運ばせるわ。朝から晩まで何も心配することなく、心ゆくまで歌えるのよ」

「出して、出して」と小鳥。そしてかごの格子の間をすりぬけようとしたのですが、もちろん無理です。そして扉に突進しましたがもちろん開けられません。すると八人の姫君がやって参りまして小鳥を見ました。そして九月姫に、助言を聞き入れるとは何と賢明でしょうと告げました。小鳥だってじきにかごに慣れて、数日もすれば昔自由の身だったこともすっかり忘れるでしょう、とも。姫君方がおいでのときには、小鳥は何も申しませんが、一行が立ち去ったとたん、また叫び始めました。「出して、出して」

「わがままもいい加減にしなさい。そのかごにいれたのは、あなたをとっても気に入ってるからなのよ。あなたに何がよいかは、私のほうがあなた自身よりずっと知ってるんだから。ちょっと歌を歌ってよ、そしたら黒砂糖をあげるわ」

でも小鳥はかごの隅っこに立って、青空を見上げ、少しも歌いません。一日中何も歌わなかったのです。

「すねたって役にたたないわよ。歌をうたってつらいことは忘れたらどうなの？」

「どうして歌えましょうか。ぼくは木々や湖や田んぼで育つ緑の稲が見たいんです」

「それだけのことなら、お散歩につれていきましょう」と九月姫。

そしてかごを手にして外に出て、柳の木が湖畔に生える湖にでかけ、目の届く限り広がる田んぼのふちに立ちました。

「毎日お散歩に連れて行くから。あなたが大好きだし、幸せにしてあげたいだけなの」

「それではダメなんです。この檻の格子越したと、田んぼも湖も柳の気も見え方がぜんぜんちがう」

そこで姫は小鳥を連れて帰り、夕食をあげました。でも何も食べようとしません。お姫様はこれに少し心配して、姉君たちにどう思うか尋ねました。

「ここが我慢のしどころよ」と姫君方はおっしゃいます。

「でも食べないと死んでしまいますわ」と九月姫。

「それはずいぶん恩知らずですわね。あなたが小鳥にとってよかれと思っていることはわかるはずでしょうに。強情を張り続けて死ぬようなら、それは当然の報いだし、いなくなっただけがましよ」と姫君方は申します。

九月姫は、そうなって何がましなのかさっぱりわかりませんでした。相手は八人いてみんな年上なので、何も申しません。「明日になればかごに慣れるかも」と姫は思いました。

そして翌日目を覚ますと、とても快活におはようと叫びました。でも答がありません。ベッドから飛び出してかごに駆け寄りました。そして驚愕の叫びをあげたのです。というのも小鳥がそこに、かごの床に横倒しになって目を閉じて転がっていたからで、死んだように見えました。姫はとびらを開けて、手を差し込むと鳥を持ち上げて外に出しました。その小さな心臓がまだ脈打っているのを感じたので、姫はほっとして涙を流しました。

「起きて、起きて、小鳥さん」

姫は泣き出して、涙が小鳥にかかります。小鳥が目を開けると、もはや檻の格子に囲まれていないのが感じられました。

「自由でなければ歌えないし、歌えなければ死にます」

お姫様は激しくすすり泣きました。

「ならば自由をお取りなさい。あなたを黄金のかごに閉じ込めたのは、あなたが大好きで、独り占めしたいと思ったから。でもそれであなたが死ぬとはちっとも思わなかったの。行きなさい。湖のまわりの木を飛び、緑の田んぼの上を飛びなさい。あなたなりのやり方で幸せになりなさい」

彼女は窓を開けて、小鳥をそっと窓辺に起きました。小鳥はちょっと身震いいたしました。

「行くのも来るのも好きになさいな、小鳥さん。もうこれから二度とかごに入れたりはいしないから」

「来ますとも、大好きですから、お姫様。そして知っている限りの美しい歌を歌いましょう。遠くに行くけれど、いつも戻ってきますよ。決して忘れません」小鳥はもう一度身震いしました。「なんとまあ、ぼくったらこんなに身体が硬くなって」

そして小鳥は翼を広げてすぐさま青い空目指して飛んでいきました。でも小さなお姫様は泣き出してしまいました。愛するものの幸せを自分の幸せより優先するのは、とてもつらいことだからですし、小鳥が見えなくなると、お姫様は急にとても寂しくなりました。お姉様方がこの一件を知るとみんな彼女を馬鹿にして、小鳥は二度と戻ってこないと申します。でも、ついに戻って参りました。そして九月姫の肩にすわりその手から食べ、世界の美しい部分を飛び回って学んだ美しい歌を歌い聴かせたのでした。九月姫は日夜窓を開け放ち、小鳥が気が向けばいつでも部屋に入ってこられるようにいたしました。そしてこれは姫ご自身にとってもたいへんよいことでした。だから九月姫はとても美しく育ちました。そして歳がいくと、カンボジア王に嫁ぎ、白いゾウにのって王の住む都市へとはるばる運ばれていったのです。でも姉上方は窓を開け放して眠ることは決して泣く、したがってきわめて醜く、さらには意地悪になりまして、したがって嫁入りの年頃になりますとお茶を一ポンドとシャム猫をおまけにつけられて、王の顧問官たちにやっつけられましたとさ。

第 33 章

元気が回復すると、親切な友人である BAT 所長が同社の遊覧船でクロン見物に連れ出してくれた。これは運河のことで、バンコクの個性となっている。どうやら数年前まで、王家の許可がない限りだれも陸上に建物を建ててはならず、家は水辺の泥堤防に打った杭の上に立つか、あるいは脇に溪流された浮き棧橋の上にたてられていたようだ。広くて美しいメナム川はこの年の中央高速道だ。それを遡ると、岸辺の要所にワットがあちこちに配置されているのを通り過ぎる。そして王宮の高い壁と、その背後にある密集したすばらしい建物も見える。とても壮大で新しい公共建築。こぎれいで緑の古風で立派なイギリス公使館と、ごったがえした埠頭。それを折れると主要なクロンの一つに入る。それがバンコクのオックスフォード街だ。そしてその両側には屋形船が並び、そこに川のほうを向いた商店があり、人々はサンパンで行き交い、買い物をする。運河の一部は実に広く、船の条項所は川の真ん中であって、おかげで商店は二重、三重に並ぶことになる。小さな蒸気船が、倏約家のバスとなって、乗客満載で素早くポンポンと行き交う。金持ちがロンドンの雨の日に大きな車で通行人に水をかけるように、裕福な中国人は原動機つきの船を飛ばして、その波で小さな丸木舟は危険なほど揺れた。大きなバージがゆっくりと、商品を満載して行ったり来たり漕がれるが、これは商品を卸から小売り店主に渡す、商品を積んだ馬引きのワゴンのようなものだ。そして物売りがいて、これは町の手押し車の物売りと同じで、小さな船で往き来しては魚や肉や野菜を売っている。油紙の黄色い傘の下にすわった女性が、その間をしっかりとストロークで軽々と漕ぎぬける。そして最後に通行人がいる。サンパンに一人で乗っており、何やら用事をこなすか、あるいはピカデリーをぶらぶら歩くように怠惰に行き交っている。慣れない目には、その交通の中をぼさぼさの灰色い髪をした立派な老女が決然とカヌーを操り、一日の買い物を着々とこなしているのを見るのは驚きだ。そして道で駆け回る子供たちのように、少年少女がときにすっぱだかで、ほとんど腰のまわりにぼろきれを巻いただけの姿で、実に小さな丸木舟に乗って蒸気船や原動機船の間をひょこひょこ動き回るので、よく轢かれてしまわないものだと感心させられる。屋形船の上では人々が怠惰にくつろいでいる。男はほとんど半裸で、自分や子供たちの水浴びを行い、あちこちで腕白どもが六人ほど水の中を泳ぎ回っている。

そしてクロンを通り抜けるにつれて、そこからさらに枝分かれする小さな小川も目に入る。そこはサンパンしか通れないくらいの大きさで、それに沿って緑の木や家屋が隠れているのがちらりと見える。これはロンドンの忙しい大通りから伸びている、隠れた中庭や小道のようなものだ。そして大きな町の主要道がだんだん細くなって郊外道になるように、交通も減り、いまやぼつん、ぼつんと屋形船があるだけになる。それは近所の各種需要を満たす雑貨店なのかもしれない。それから土手の樹木が密度を増し、ココナツや果樹が出てきて、ときどき小さな茶色い家に出くわすだけとなる。それは孤独を恐れないシャ

ム人の家だ。農場がもっと広くなり、最初は忙しい通りだったクロンは、郊外を抜ける立派な満ちになり、いまや落ち葉の舞う田舎道となるのだ。

第 34 章

バンコクからは、四、五百トンのほどおみすぼらしい小さな船で発った。薄汚い酒場は食堂を兼ねており、狭いテーブルが二台、端から端まで通っており、その両側に回転式の椅子が置かれている。船室は船底にあり、きわめて汚れていた。ゴキブリが床を歩き回り、いかに穏やかな気質の持ち主だろうと、手を洗いに洗面台にでかけたときに、巨大なゴキブリが平然と出てくればなかなか驚かすにはられない。

我々が下った川は幅広くゆったりとにこやかで、その緑の岸辺は水辺に立った杭の上に建つ小さな小屋が点在している。砂州を越えると、外洋が青く平穩に目の前に広がっていた。それを見て匂いをかいただけで、私は高揚感で満たされた。

乗船したのは早朝で、すぐに自分がこれまで会ったなかでも最も奇妙な人々のただ中に投げ込まれたことがわかった。フランスの貿易商二人にベルギー人大佐、イタリアのテノール歌手、アメリカのサーカス所有者とその妻、そして退役フランス官僚とその妻だ。サーカスの所有者は社交家と呼ばれるものであり、気分次第でそういう人物からは逃げ出したいこともあれば歓迎したいこともあるが、たまたま私は人生にずっと満足しており、乗船して一時間もたたないうちに握手してドリンクを交わすことになり、動物たちを見せてもらっていた。とても背の低い太った人物で、白いがあまり清潔ではない詰め襟上衣は、その腹部の高貴なる大きさの外形をくっきり見せていたが、カラーは実にきつそう
ステインガシフター
で、窒息しないのかと不思議に思うほどだ。きれいに髭を剃った赤ら顔で、陽気な青い目と、短く切ったボサボサの砂色の髪をしている。頭の後ろのほうにぼこぼこのトピーをかぶっていた。名前はウィルキンスでオレゴン州ポートランド生まれ。どうやら東洋人はサーカスに夢中らしく、ウィルキンス氏は二十年にわたりポートサイドから横浜まで、動物たちとメリーゴーラウンドなどと共に、東洋を行ったり来たりしているとか（アデン、ボンベイ、マドラス、カルカタ、ラングーン、シンガポール、ベナン、バンコク、サイゴン、フエ、ハノイ、香港、上海、地名が舌をうまそうにつたい落ち、想像力は日光と奇妙な音と多彩な活動で満たされる）。奇妙な生活を送っているし、それも珍しく、たぶん各種の珍しい体験の機会を与えてくれるのではないかと思えるのだが、ウィルキンス氏で奇妙なのは、まったくごく普通の小男で、カリフォルニアの二級の町で三流ホテルか駐車場でも経営しているにちがいないと思ってしまうという点だった。実は、これはあまりに何度も気がつかされてきたことで、毎回なぜ自分が今さら驚くのかもわからないのだが、人の人生が非凡だからと言ってその人物が非凡になるわけではなく、逆にその人物が非凡であるなら、田舎の代理牧師ほどつまらない生活でさえ非凡なものにしてしまえるのだ。ここでトレス海峡の島に会いにいった隠者の話をするのが適切だと思えばよかったのだが。その人物は難破した船員で、そこにたった一人で三十年暮らしていたのだ。だが本を書いているときには、自分の主題の四つの壁に捕らわれているのであり、私自身のさまよ

う心の楽しみのためにその話をここに置いたとしても、表紙と裏表紙の間に何がおさまるのがふさわしく、何がふさわしくないかという感覚により、結局は削除することになるのが落ちだ。とにかく要するに、その自然や思考との長く親密な交感にもかかわらず、この人物は三十年たってもおそらくその最初の年と変わらない鈍重で鈍感で粗野な人物だったという話だ。

イタリア人歌手が通り過ぎて、ウィルキンス氏によれば、彼はナポリ人であり、バンコクでマラリア発作のために劇団を離れねばならなかったのだが、いまや再合流すべく香港に向かっているところだとか。巨漢で、とても太っており、椅子にどすんとすわると、椅子が不満げにきしむ。トピーを脱いで、長く巻いた脂っこい髪を持つ大きな頭を見せて、その髪にずんぐりした指輪だらけの指を走らせた。

「あまり愛想がよくない御仁でね。葉巻をあげたら受け取ったのに、一杯やろうともしない。何かおかしなところがあっても不思議じゃないね。いやらしいやつだぜ。そう思わないかね？」

それから小柄で太った女性が白い服で甲板にやってきて、ワワザルの手を握っている。サルはまじめくさって女性の横を歩いている。

「こちらウィルキンス夫人」とサーカス団長は言った。「そして一番下の息子。ウィルキンス夫人、椅子を持ってきなさい、こちらの紳士にお目にかかるといい。お名前は存じ上げないが、すでに二杯おごってくれているし、これまでやったのよりましな賽の目を出せないなら、たぶんお前の分も払ってくれるだろう」

ウィルキンス夫人は漠然とした生真面目な表情ですわり、青い海を見据えたまま、レモネードでもいただければありがたいんじゃないかと示唆した。

「まったくお暑うございますね」と彼女はつぶやき、トピーを脱いでそれで自分を扇いだ。

「ウィルキンスは暑さを感じているんだよ。もう二十年も続いている」とその夫。

「二十二年半よ」とウィルキンス夫人は相変わらず海を見ている。

「そして一向に慣れないんだよな」

「これからも慣れないのは知ってるでしょうに」とウィルキンス夫人。

彼女は夫とまるで同じ大きさで、同じくらい太っており、同じ丸い赤ら顔で、同じ砂色の乱れた髪をしている。二人が結婚したのは実にそっくりだからなのだろうか、それとも年月をとにもするうちに、この驚くほどの類似性を身につけたのだろうかとは私は不思議に思った。彼女はこちらに顔を向けることもなく、ぼんやりと海を見続けた。

「動物はお見せしたの？」

「あたぼうよ」

「パーシーのことはどう思ったって？」

「すごいとき」

私は一貫して話題になっているのに、不当にも会話から閉め出されているように感じずにはいられなかったので尋ねた。

「パーシーとはどなた？」

「うちの長男よ。空飛ぶ魚のエルマーもいるわ。オランウータンなの。今朝はちゃんと食事を食べた？」

「きれいに。捕まってるオランウータンとしては世界最大でしてね。千ドルもらっても手放しませんよ」

「そしてゾウはどんなご親族で？」と私は尋ねた。

ウィルキンス夫人はこちらを見もせず、青い目で相変わらず無関心に海を眺めていた。

「親族なんかじゃないわ。ただのお友達」

ボーイはウィルキンス夫人にレモネードを、夫にウィスキー&ソーダを、私にはジントニックを持ってきた。サイコロを振って、私が伝票にサインした。

「振る度に負けるようだとかかなり高くつくでしょうねえ」ウィルキンス夫人は岸边に向かってつぶやいた。

「エグバートもそのレモネードを一口欲しいんじゃないかな」とウィルキンス氏。

ウィルキンス夫人は微かに首をまわして膝にすわったサルを見た。

「ママのレモネードがほしいかい、エグバート？」

サルは小さなキキキ声をあげ、それに腕をまわした夫人はストローを渡した。サルはちょっとレモネードを吸って、十分飲むとウィルキンス夫人の豊かな腹に再び沈み込んだ。

「ウィルキンス夫人はエグバートが本当にお気に入りだね。無理もない。未っ子だから」とその夫。

ウィルキンス夫人は別のストローを取り、考え深げにレモネードを飲んだ。

「エグバートはいいわよ。この子は何も変なところはない」と彼女。

ちょうどそのとき、すわっていたフランスの役人が立ち上がって行ったり来たりしはじめた。バンコクではフランスの大臣と秘書官一、二人、王族の王子が一人見送りに来ていた。そして大量のお辞儀や握手が行われ、船が埠頭を離れると、やたらに帽子やハンカチが振られた。明らかに重要員物だ。船長が彼をムッシュー知事と呼ぶのを耳にした。

「この船の大立て者よ。フランス植民地のどこかの知事で、これから世界一周だとさ。バンコクでうちのサーカス見に来たよ。何を飲むか聞いてみようかね。あの人を何と呼べばいいだろうかね、妻や？」

ウィルキンス夫人はゆっくりと首をめぐらせて、レジオンドヌール勲章のバラ飾りをボタン穴につけたフランス人が行ったり来たりしているのを眺めた。

「呼ぶまでもないわよ。輪っかを見せりゃ嬉々としてくぐろうとするから」

私は思わず笑ってしまった。ムッシュー知事は小男で、平均身長よりかなり低く、小作りできわめて醜い小さな顔をしていて、顔立ちは太く、ほとんど黒人めいていた。そしてぼさぼさの灰色の髪の毛に、ぼさぼさの灰色い眉毛、ぼさぼさの灰色い口ひげをしている。確かに小さなプードルのようで、プードルのような柔らかく知的で輝く目をしていて、その次に彼が横を通ったとき、ウィルキンス氏が呼びかけた。

「ムッシュー、あなた何かとるしますか？」そのアクセントの奇妙さはとても再現できない。「ポイト酒グラスちょっと」そして私に向き直った。「外人どもはみんなポルタ酒を飲むんだ。あれならまちがいないって」

「オランダ人はちがうわよ。あいつらシュナップス以外何も飲まないんだから」とウィルキンス夫人はまだ海を見ている。

立派なフランス人は足を止めて、いささか不思議そうにウィルキンス氏を見た。そこでウィルキンス氏は胸を叩いてこう言った。

「ワタシ、モチヌシのサーカス。ご訪問イラッシャイ」

そして、理由は皆目見当がつかないが、ウィルキンス氏は両腕で輪の形を作り、プードルがそこに飛び込むのを表す身ぶりをしてみせた。それからウィルキンス夫人が未だに膝

にのせているワワザルを指さした。

「ツマのチイサイむすこ」

すると知事の顔がぱっと輝き、奇妙に音楽的で伝染するようにドッと笑った。ウィルキンス氏も笑い出した。

「ウイ、ウイ。ワタシ、サーカスモチヌシ。ポルト酒グラスちょと。ウイウイ。そうでしょ？」

「ウィルキンス氏のフランス語はフランス人はだしだから」ウィルキンス夫人は通過する海に申し伝えた。

「'Mais tres volontiers (はい、ではよろこんで)」と知事はまだ笑いつつ言った。私は椅子を引き寄せ、彼はウィルキンス夫人に会釈しつつすわった。

「そのブードルづらに、この子の名前はエグバートだって伝えといてね」と彼女は海を見ながら言った。

私はボーイを呼び、みんなドリンクを注文した。

「エルマー、あんたが伝票にサインすんのよ。このナントカ氏、三のぞろ目よりマシな目が出せないなら、サイコロ振ってもらっても意味がないから」

「Vous comprenez le francais, madame?」と知事は丁寧に尋ねた。

「おまえがフランス語しゃべれるか、だとよ、妻や」

「あたしがどこで育ったと思ってんの。ナポリかなんか？」

すると知事は、大げさな身ぶりを交えて、あまりにデタラメな英語の洪水をまくしたてたので、何を言っているか理解するのに自分のフランス語の知識を総動員しなければならなかったほどだ。

やがてウィルキンス氏は動物を見に知事を戦争につれていき、しばらくしてみんな、狭苦しい酒場に集まってランチョンを食べた。知事の奥方が登場して、船長の右の椅子に案内された。知事は奥方にみんなの素性を説明し、彼女は優雅にお辞儀した。大柄な女性で、背が高くがっしりしており、たぶん五十五歳くらい、そしてちょっと謹厳な感じの黒いシルクを着ていた。巨大な丸いトピーをかぶっている。その顔立ちは実に大きく整っていて、体つきは実に彫刻のようで、行列などに参加する大柄な女性たちを思わせる。愛国デモで、コロンビアやブリタニアの役を見事に務められたはずだ。その小さな夫の頭上に、小屋を見下ろす高層ビルのようにそびえ立った。知事は気忙しくしゃべり、それも活き活きとウィットに富んだしゃべり方だし、何かおもしろいことを言うと奥方の重厚な顔立ちが和らいで、大きく親しげな微笑になるのだった。

「'Que tu es bete, mon ami (あなたったら、またバカなことを)」と彼女。そして船長のほうを向いた。「うちの人の話はもう聞かないでくださいね。いつもあんな調子ですよ」

実に楽しい食事をして、それが終わるとみんなそれぞれの船室に戻って午後の暑さを眠ってしのいだ。こんな小さな船で、一度乗客仲間の知己を得ると、船室から出たらひっきりなしに彼らと出会うのは避けがたいことだった。唯一超然としていたのは、イタリア人のテノール歌手だった。誰とも話をせず、できるだけ遠くに一人きりですわり、ギターを小さくかき鳴らしていたが、聞き耳をたてないと音が聞こえないほどだった。まだ陸地は見え、海はミルクの桶のようだった。あれやこれやと話しつつ、我々は日が沈むのを眺め、夕食を食べ、そしてまた星空の下で甲板にすわった。貿易商二人は暑い酒場でピケットをやっていたが、ベルギー人大佐はこちらの小グループに加わった。引っ込み思

案で太っていて、口を開くのもちょっとした挨拶だけだった。やがて、夜に影響されて選手で自分がこの海に一人きりだという感覚を与える暗闇に鼓舞されたのか、イタリア人テノール歌手はギターを持って歌い始めた。最初は低い声で、それから少し大きく、やがて音楽に捕らわれて、朗々と歌い始めた。本物のイタリア人の声で、すべてマカロニ、オリブ油と日光で、私が若き日にピアッツァ・サン・フェルディナンドで聞いたナポリの歌を歌い、さらにラ・ボエーム、トラヴィアータ、リゴレットの断片を歌った。その歌は感情をこめてインチキな強調がなされ、そのトレモロはこれまで耳にしたあらゆる三流イタリア人テノールを思わせるものだったが、この美しい夜の開放感の中では、その誇張もこちらをにっこりさせるだけで、内心に怠惰な官能的喜びを感じずにはいられなかった。一時間も歌っただろうか、そしてみんな黙りこくった。それから歌手も静かになったが、身動きはせず、その巨体が薄暗く、明るい空を背景に輪郭だけ見せていた。

小柄なフランス人知事が、大柄な妻の手を握っているのを見たが、その光景は滑稽ながら感動的だった。

「今日は初めて妻に会った記念日なんですぞ、ご存じでしたか」と知事は、たぶん沈黙に耐えられなくなっていきなり口を開いた。というもこれほどおしゃべり好きな生き物にあってはなかったからだ。「そしてまた、彼女が妻になると約束してくれた記念日でもあります。そして、驚くなかれ、この二つの日は同じなのです」

「Voyons, mon ami (あらあらあなた) お友達をまたその古くさい話で退屈させるつもりじゃないでしょうね。まったく本当にしょうがないんだから」

でも彼女も、そのしっかりした大きな顔に微笑を浮かべつつ言い、しかもその口調は、実は自分もまた聞きたいと示唆していた。

「いや絶対におもしろがってくださいるとも、mon petit chou (かわいい人) 知事はいつも妻にこんな調子で呼びかけ、このそびえたつ壮大とすらいえる女性が、小柄な夫にそんな呼ばれ方をするのを聞くのは可笑しかった。「そうでしょう、ムッシュー」と知事は私に尋ねた。「ロマンスだし、ロマンスをお嫌いな方などいませんよね、特にこんな夜には？」

私は知事に、みんな是非とも聞きたがっていると請け合い、そしてベルギー人大佐はその機会をとらえて再び礼儀正しく振る舞った。

「つまりですな、私たちの結婚は、単純明快に便宜上のものだったのです」

「C'est vrai (その通りですわ)。それを否定するのは愚かなことです。でもときには、愛は結婚の前ではなく、後からやってくるんですよ、そうしたらそのほうがいいんです。長持ちしますもの」

知事が奥方の手を愛情込めて握りしめたのは、嫌でも目に入った。

「つまりですな、私は海軍にありまして、退役したときには四十九歳でした。頑健で活発で、是非とも仕事を見つけたいと思っていたんです。探しましたよ。ありとあらゆるツテをたどりました。運のいいことに、政治的に多少力のあるいところがありましてな。民主政府の利点のひとつは、十分な影響力さえあれば、そのままでは見すごされてしまうような長所でも、一般に適切に報われるということなのです」

「まあご謙遜を、可哀想な人」と彼女。

「そして間もなく私は植民地大臣のところへ送られて、ある植民地総督の地位を薦められたのです。私を送り出そうとしていたのはとても遠い地点でしかも寂しいところでしたが、でも生涯を港から港へとさまよって過ごしてきたので、それは別に構わないことでし

た。大喜びで引き受けましたよ。大臣は、一ヶ月後には着任してくれと言います。そこで私は、お安い御用です、老いた独身者で多少の服と本以外は何もないから、と申しました」

「『Comment, mon lieutenant (何と、我が知事どの) 独身なんですか?』と大臣は叫びました。私は『その通りです。そして今後もそのままにいるつもりですよ』と答えました。

『それですと職の話はなしにしてもらわねば、というのもこの地位のためには、どうしても結婚済みでなければならんのです』」

「詳しい話は長くなりすぎますが、要するにですね、我が前任者も独身で、原住民の娘たちを官舎に住ませたために醜聞を引き起こしまして、白人や入植者や官吏の細君方から苦情もきましたので、次の総督は非の打ち所のない人格者であるべきだということが決まっていたのです。私は主張しました。議論いたしました。我が国へのこれまでの奉仕を繰り返し、いところが次の選挙でいかに協力できるかも繰り返し述べました」

「『何とか手はないものですか?』私は絶望して叫びました」

「『結婚なさい』と大臣」

「『Mais voyons, monsieur le ministre (なんですと、大臣閣下) 女性の知り合いなどおりません。遊び人ではないし四十九歳ですぞ。どうやって妻を探せと?』

「『簡単至極。新聞に広告をうちなさい』」

「狼狽しましたよ。何というべきかわかりませんでした」

「『まあ考えてみてくださいよ。一ヶ月以内に奥さんを見つけられたら赴任していただきます。でも妻がなければ職もなし。これは動かせません』大臣はちょっと笑いました。というのも大臣から見ればこの状況はいささかユーモラスなものでしたから。『それと新聞広告を打つなら、「フィガロ」をお奨めしますぞ』」

「私は死にそうな思いで植民地省を後にいたしましたよ。赴任させたい土地は知っておりましたし、そこに住むのは私の性にはぴったりなのも知っていました。気候は我慢できますし、官邸は広々として快適です。知事になるというのはまったく文句のないことですし、海軍将校の年金しか収入がない身としては、給料も捨てたもんでありません。突然、私は腹を決めました。そしてフィガロ紙のオフィスに向かい、広告を考えて、それを掲載してくれと手渡しました。でも申しあげますと、その後でシャンゼリゼを歩きつつ、心は船が戦闘用に艦装されたとき以上に激しく脈打っていたのですぞ」

知事は身を乗り出して、意味ありげに手を私のひざに置いた。

「我が親愛なるムッシュー、決して信じられますまい、四千と三百七十二通の返事がやってきたのです。雪崩のようでした。六通くらいを予想していたのです。手紙をホテルに運ぶのにタクシーを呼ばねばなりませんでした。部屋は手紙であふれたのです。私と孤独を共にしたがって知事夫人になりたがっている女性が四千三百七十二人もいたのです。驚愕いたしました。年齢も、十七歳から七十歳まで様々。非の打ち所のない血筋と最高の育ちの乙女たち、キャリアのどこかでちょっとミスをしたために未婚のままで、いまや状況を正常化したいと考えている女性もおります。夫が実に悲惨な状況で世界した未亡人たちもおります。そして高齢の私にとって慰めとなりそうな子供を持つ未亡人もおります。ブロンドや黒髪に、背の高いの低いの、太ったのやせたの。一部は五カ国語が話せるし、こちらはピアノが弾けます。愛を提供する人もいれば、愛をくれと渴望する女性もいます。中には、しっかりした友情と尊敬の入り混じったものしか与えないというのもしました。財産持ちもいれば輝かしい見通しを持つ者もおります。圧倒されました。怖じ気づきまし

た。そして最後に怒り狂いました。私は情熱的な男なのです。そして手紙や写真すべてを踏みつけにして、泣き出しました。この連中とは誰とも結婚しない。絶望的だ、もう一ヶ月もないのに、その間に四千人以上の結婚希望者と会うなど不可能だ。でも全員に会わなければ、運命が私を幸せにすべく運命づけた唯一の女性を逃してしまったのではという考えに残り一生苛まれるだろうと思ったのです。これは無理だとあきらめました。

「無数の写真や散らかった紙でひどい有様の部屋を出て、気晴らしに大通りに出て、カフェ・ド・ラペに入りました。しばらくすると、友人が通りがかり、うなずいてにっこりしました。こちらにっこりしようとしたのですが、心が痛んでいます。残された生涯を、安い年金でツーロンかブレストに、退役海軍将校として暮らさなくてはならないのだと気がついたのです。ちくしょうめ！ 友人は足を止めて、こちらに来てすわりました。

『何だかずいぶん陰気じゃないか、我が友よ。いつもはこの世で一番陽気な君なのに』

「自分の悩みをうちあけられる相手がいるのはありがたかったので、全て話しました。友人はゲラゲラ笑いました。後から考えると、この話にも可笑しい部分はあるなどは思いましたが、その時には誓って、まるで笑い事などではありません。それを友人に対していささかとげとげしく指摘しますと、友人は精一杯笑いをこらえつつこう言うのです：

『いやしかしだね、ご同輩、本気で結婚したいのかい？』これを聞いて、私は完全に頭にきてしまいました。

『このすこぶるつきのバカ野郎めが。結婚したくないなら、それもいまずぐ二週間以内に結婚したいのでなければ、三日もかけて会ったこともない女性からのラブレターなんぞを読んですごすものか』

『まあおちついてよく聞け。ジュネーブにいとこがいるんだ。生粋のスイス人で、国中で最も尊敬されている一家の出だ。素行は一点のくもりなし、しかるべき歳で、オールドミスなのは過去十五年を寝たきりの母親の看病に費やしたからで、その母親も最近死んだし、教育も高く、*pardessus le marche*（何よりも）醜くはないんだ』

『何とも逸材ではないか』と私。

『そこまでは言わないがね、でも育ちもいいし、君が提供しようとしている地位にはふさわしいぞ』

『君は一つ忘れてる。彼女としては、友人や慣れ親しんだ生活を投げ打って、四十九歳のどうみても美男ではない男について僻地生活を送るような誘因などありはしないだろうに？』

ムッシュー知事殿は話をやめて、肩を突に悲しげにすくめてみせたので、頭がほとんどそこに沈み込んでしまうほどだった。そしてこちらに向き直った。

「私は醜男です。それは認めます。しかも、恐怖や敬意を引き起こす醜さではなく、バカにされる醜さで、最悪の種類の醜さだ。初めて私に会った人々は恐怖ですくみあがりしらない。そのほうが多少は私にとって名誉でしょう。みんな笑い出すんです。聞いてくださいよ、この立派なウィルキンス氏が今朝方動物たちを見せてくれたとき、オランウータンのパーシーが腕を伸ばしてきて、檻の格子がなければ私を腹におしつけて生き別れの兄弟だと宣言したことでしょう。実際、かつてパリの植物園におりましたとき、類人猿が一匹逃げ出したと聞きまして、私は即座に出口に走ったものです。さもないと連中は私を捕まえて、どんなに抗議したところで、そのままサル園に閉じ込めてしまったでしょうから」

マダム奥方は、その深くゆっくりした声で言った。「あなたったら、何をまた。いつも

よりもっとナンセンスの度合いがひどいわよ。確かにあなたはアポロンではありませんし、あなたの地位ではそんな必要もありません。でも尊厳もあるし威風もあるし、どんな女性でも立派な男性と呼ぶ人物ですって」

「話に戻りましょう。私がそう言いましたところ、友人はこう答えたのです。

『女ってやつはわからんからなあ。結婚というのはあいつらにはずいぶん魅力的らしいぞ。訊くだけ訊いてみて損はない。結局のところ、女性にとって求婚されるというのは賞賛だと思われているからね。断りっこないだろう』

『だが君のいとこには会ったこともないし、どうやってお知り合いになれるかも見当がつかない。なんだ、彼女の家に行って、面会して、居間に通されたら、「ジャーン、結婚を申し込みに参りましたよ」などと言うわけにもいきまい。気狂いだと思われて、大声で助けを呼ばれるのがおちだ。それに私はきわめて引っ込み思案で、決してそんな大胆なこととはできない』

『こうすればいい。ジュネーブに行って、僕からチョコレートを一箱届けてくれ。僕の報せを聞きたいだろうから、よろこんで君を迎えてくれる。ちょっとおしゃべりして、見かけが気に入らなければ、そのまま辞去して何の損もない。一方、気に入ったら、本題に入って正式に求愛すればよろしい』

私は必死でした。他に手はないように思えたのです。そこですぐさま店にでかけ、巨大なチョコレートの箱を買って、その晩に私はジュネーブ行きの列車に乗ったのです。到着と同時に、従兄弟からの贈り物をもってきましたとので、是非直接お届けにあがりたいたいと手紙を送りました。一時間で、午後四時によるこんでお目にかかりましょうという返事がきました。それまでの時間を、私は鏡の前で過ごし、ネクタイを十七回結び直したものです。時計が四時を打つと、私は彼女の家玄関に現れて、すぐさま居間に通されました。そこで彼女が待っていたのです。従兄弟は、彼女が醜くはないと申しました。ですから、そこにいたのが若い女性、というかまだ若さを保った女性で、高貴な存在感を保ち、ジュノの尊厳、ヴィーナスの顔立ち、そして表情にミネルヴァの知性を持つ女性だったことで、私はどんなに驚いたことでしょう」

「ちょっと冗談にもなりませんわよ。でもそろそろこちらの紳士方も、あなたの言うことなんかちっとも信用できないのはわかっておいでかと思えますけど」と奥方。

「誓ってもいいが誇張などではありませんよ。私は驚愕してチョコレートの箱を落としそうになったほどです。が、自分にこう言い聞かせました： *la garde meurt mais ne se rend pas*（ここで退いては男がすたる）。私はチョコレートの箱を渡しました。そして従兄弟のことを報せました。彼女はよい気だてでした。そうやって十五分ほどしゃべったのです。それから私は自分に言い聞かせました： *Allons-y*（さあやるぞ）。そしてこう言いました。

『マドモワゼル、実を申しますと、単にチョコレートの箱を渡すためだけに参ったのではないのです』

彼女はにっこりして、明らかにジュネーブにわざわざ来るからには、もっと重要な用事があるはずでしょうと申しました。

『私にあなたと結婚するという栄誉を与えてはいただけないかとお願いに参ったのです』彼女は飛び上がりました。

『でも、ムッシュー、気でもちがわれましたか』

『事実を聞くまでは答をお控えください』と私は割り込んで、相手が口を開く間もなく、

話をすべていたしました。フィガ口紙の広告の話をする、大笑いして涙が顔をつたったほどです。そして私は、申し出を繰り返しました。

『本気ですか？』

『生まれてこれほど本気だったことはありません』

『おっしゃる通り、お申し出はかなりの驚きだったことは否定いたしません。自分が結婚するとは思っておりませんでしたよ、もう盛りを過ぎてしまいましたし。でも明らかに、あなたのお申し出は女性が考えなしに断るべきものでもございませんわね。光栄に思います。何日か考えさせていただけませんか？』

『マドモワゼル、私は実に心細い立場です。でも時間がないのです。結婚していただけないならパリに戻り、私に読まれるのを待つ千五百通から千八百通の手紙熟読を再開せねばなりませんので』

『今すぐにお答えするわけにいかないのは当然ですわ。お目にかかったのはたった十五分ほど前のことなんですから。友人や家族と相談しなくては』

『その人たちに何の関係があるのですか。もうあなたも立派な大人でしょう。事は急を要する。待てないのです。何もかもお話ししました。あなたは知的な女性だ。長々と考えを引き延ばしても、この瞬間の直観に何を付け加えられるでしょうか？』

『まさか今すぐここでイエスカノーかを言えとおっしゃっているではありませんわよね？ とんでもない話でしょう』

『そのまさかです。私の列車はあと数時間でパリに戻ります』

彼女は考え深げに私を見つめました。

『まったくどう考えても正気ではございませんわね。あなたご自身のためにも世間のためにも、どこかに閉じ込めておくべきですわ』

『で、どちらにします？ イエスカノーか？』と私。彼女は方をすくめました。

『Mon dieu (おやまあ) 彼女は一分待ち、私はやきもきしておりました。『イエス』』

そして知事は妻のほうに手を振った。

「そしてこれが彼女です。二週間で結婚し、私は植民地の知事となりました。私は宝石と結婚いたしました。皆さん、実に魅力的な性格で、千人に一人、弾力的な知性と女性的な感性を持つ、見事な女性です」

「あらちょっとお黙りなさいよ、愛しい人」と妻は言った。「あたしまであなたみたいな変人に聞こえるじゃありませんか」

彼はベルギー人大佐に向き直った。

「独身ですか、我が大佐よ。もしそうなら、ジュネーブにおいでになるよう強く推奨いたします。あそこは実に魅力的な若い女性の巣窟（実際に使った用語は une pepiniere でした）ですぞ。妻を見つけるならあそこに如くはありません。それにジュネーブは素敵な年です。一分たりとも無駄になさるな、すぐにあそこにでかけなさい。妻の姪っ子たちへの手紙を託しますので」

話をまとめたのは彼女だった。

「実のところ、便宜上からの結婚では期待も少ないので、失望する可能性も低いんです。お互いについて無意味な要求もしないので、腹をたてる理由もありません。完璧を求めたりせず、したがってお互いの欠点にも寛容です。情熱はとて結構なものですが、結婚の基盤としては適切ではありません。Voyez-vous (つまりね) 二人が結婚で幸福になるためにはお互いを尊重できねばなりません。同じ条件で、興味も似ていなければなりません。

それなら、もし相手がまっとうな人物で、ギブアンドテイクができるのであれば、共存共栄できるのであれば、その二人の結びつきが私たちくらい幸せになれない理由は何もないのです。そこで彼女は口を止めた。「でももちろん、夫は実に実に非凡な人物ではありませんけれど」

第 35 章

バンコクから目的地のカンボジア沿岸のケップまではたった三十六時間の航海で、そこからプノンベンに出てアンコールに迎える。ケップは海を前にした土地で背後には緑の丘陵があり、フランス人が政府役人のための保養所として作ったところだ。そして巨大なバンガローには役人たちとその奥方が大量にいる。それを監督しているのは退役船長で、彼を通じてプノンベンまで車を手配できた。プノンベンはカンボジアの古代首都だが、その古さをうかがわせる物は何も残っていない。フランス人が作り、中国人が暮らすハイブリッドの街だ。アーケードつきの幅広い道があり、そこに中国商店、整形庭園があり、川に面してフランスの川辺街のような木をきれいに植えた岸壁がある。ホテルは大きく汚くお高くとまっており、外にはテラスがあって、商人たちや無数の役人たちが、アペリティフを飲みながら一瞬だけ自分がフランスにいないことを忘れるのだ。

熱心な旅行者ならここで王宮を訪ねるかもしれない。三十年かそこら前に建ったもので、実に長い血筋の王が、王家の外見だけでも保とうとしている。そして王の宝石や、とんがって安びかの黄金の冠、聖剣、聖槍や、ヨーロッパの君主から六十年代に贈られた奇妙で古風な装飾品を見せてもらえるかもしれない。豪華でしっかりした玉座に巨大な白い九つに別れた傘が乗った、玉座の間もを見せてもらえるかも知れない。ワットも見られるだろう。とてもまっさらのピカピカで、大量の金箔と銀の床がある。そして記憶力豊かで鮮明な想像力を持っていれば、王家の虚飾や帝国の盛衰、そして王様たちのひどい芸術センスについてあれこれ思い巡らすかもしれない。

だが真面目な旅行者ではなく、まぬけで軽薄な人物であるなら、ちょっとした物語を楽しむかもしれない。

昔々、プノンベンの王宮で、新任のフランス総督とその妻を迎える大宴会が開催され、王と宮廷の全員が一番華やかな服をまといました。総督の妻は引っ込み思案でこの国についたばかりで、何か言わねばと思い、王が身につけている美しく宝石を散りばめたベルトを誉めたのです。エチケットと東洋的な礼儀から、王はすぐさまそれを外して彼女に与えねばなりませんでしたが、王のズボンを止めているのはそのズボンだけだったので、首相に向き直り、首相のつけているベルトを、多少立派さでは劣りますが、いますぐ差し出させました。首相は自分のベルトをはずして主人にわたし、すぐに隣に立っていた軍事大臣にベルトを要求します。軍事大臣は大式部官に同じ要求をし、それがどんどん大臣から大臣へ、役人から役人へと続きましたが、最後に小さなボーイが、両手でズボンを押さえて王宮から駆けだしてくるのが見られました。というのもボーイはその宴会で最も地位が低く、だれもベルトを与えてくれる人が見つからなかったからだとさ。

だが旅行者はプノンベンを立ち去る前に博物館を訪ねるとよいだろう。というのもここで、おそらく人生で初めて、多くの退屈でありきたりなものに混じって、実にいろいろ考

えさせられる一群の彫刻の例を目にするはずだからだ。少なくともマヤ人や古代ギリシャ人が石から彫りだしたどんなものより美しい彫刻を一つは見るはずだ。だがその旅行者がこの私のように近く of 鈍い人物であるなら、ここで予想外に、自分が何か残りの一生にわたって自分の魂を豊かにするものに出会ったのだということにはしばらく思い至らないだろう。このように人は、小さな家を建てるべく土地を買って、実はその下に金鉱があることを発見したりすることもあるのだ。

第 36 章

アンコール訪問を非凡なまでに重要な出来事としているものの一つ　そうした体験にふさわしい精神状態に入るよう気持ちを整えるもの　は、そこにたどりつくのがすさまじくむずかしいことだ。というのも、まずプノンペンにたどりついたら　それ自体がかなり普通の旅路からははずれた場所だ　蒸気船に乗って、退屈でのろいメコン川の支流をずっと上り、巨大な湖にたどりつく。そこで別の蒸気船に乗り換え、あまり湖が深くないためにこれは平底で、これで一晩中旅することになる。それからまた隘路を通過して、またも淀んだ大きな水面に出る。また夜になってやっとその終点にくる。それからサンパンにのって、とんでもない運河を通りマングローブの茂みを漕いでゆく。満月で、川岸の木々は夜にくっきりシルエットを描き、旅しているのは実物の国ではなく、影絵師の空想世界のように思える。やっとみんなが屋形船で暮らす水上生活者のみずばらしい小村にやってくる。そして上陸すると川辺を運転してココナツやピンロウや調理用バナナの農園を抜け、川はいまや浅い小川になっている（子供時代にヒメハヤを捕まえてジャムのびんに入れた田舎の清流のようだ）。そして遠くに、月光の中巨大かつ黒々とそびえているのが、アンコールワットの大塔だ。

だが本書のこの部分にやってきて、私は失望にとらわれている。アンコールの神殿ほどすばらしいものは世界中どこでも見たことがないが、でもその様子を白黒のページでどう描こうとも、最も敏感な読者にさえ、その荘厳さについての混乱し漠然とした印象以外のものを与えるには一体全体どうしたらいいものか、私にはさっぱりわからないのだ。もちろん言葉の芸術家は、言葉の響きとそれがページ上で与える印象に喜びを感じるものだから、これは千載一遇の機会だ。華やかで官能的、多様、荘厳で調和のとれた散文にとって何たる機会。そして長いフレーズを使ってビルの長い線を再現し、段落のバランスを使ってその対称性を表現し、語彙の豊富さでその豊かな装飾を表現するのは、何と喜ばしいことか！ 適切な言葉を見つけて、それを正しい場所に配置することで、巨大な灰色の石で見たのと同じリズムを文章に与えるのは実に魅惑的だろう。そして非凡で目を見張るような形容詞を思いつき、自分一人が見ることのできた色彩、形態、不思議さを別の形式の美に翻訳できたら何という勝利だろうか。

悲しいかな、私はそうしたことにはちいとも才能がないし　自分にできないからなのはまちがいないが　他人のそれを見てもあまり気に入らない。多少あれば私はかなり活用できるのだ。ラスキンは一ページなら楽しく読めるが、十ページだと嫌々読むことになる。そしてウォルター・ペイターのエッセイを読み終えた頃には、鱗がつり上げられて針を抜かれ、川辺で草の中、しっぽをばたばたさせているときに感じるであろう気分を味わっている。ペーターが、ガラスの小さな破片を一つずつつなぎ合わせてその文体のモザイクを完成させた手腕には感嘆するが、私には退屈だ。その散文、アメリカには二十年前

にならあったジェノバのピロードに木彫り細工だらけの古典邸宅のようで、空いたグラスをおけるような角がないかと必死で探し回ることになる。この種の立派な著述がご先祖様方によって行われるなら、まだしも我慢できる。壮大な文体こそ彼らの本分だ。トマス・ブラウン卿の壮大さには畏敬を感じる。天井にヴェローナのフレスコが描かれ、壁にタペストリーのかかったパラーディオ様式の大宮殿に滞在するようなものだ。居心地良いというよりは威圧的だ。そんな高尚な場所においては、日常的な雑用がこなせるとは思えない。

若かりし頃は、独自の文体を身につけようと大いに苦労したものだ。大英博物館にでかけて珍しい宝石の名前を書き留め、自分の散文に壮大さを与えようとした。そして動物園に出かけて鷺の見え方を観察したり、馬車のが視線を向けたり、馬車の乗り場でうろついて、馬がはみを噛む様子を観察し、機会があればすてきな比喻として使えないかと思った。意外な形容詞を一覧にして、予想外の場所で使えないかとも考えた。だがちっとも役に立たなかった。自分がその手のことには一切向いていないのだということがわかった。人は自分が書きたいようには書けず、書けるようにしか書けない。そして言い回しについての幸せな才能に恵まれた著者を大いに尊敬はするものの、私自身はずっと前からできるだけ平易に書くようにしている。私の語彙はとても少なく、それで何とかやってきたのは、たぶん物事の見方があまり細かくないからというだけなのだろう。たぶん物事のある種の情熱をもって眺め、そしてそれがどう見えたかではなく、どんな感情を私に与えてくれたかを言葉に翻訳することに興味はある。だがそれを書くのに、電報をしたためると同じくらい手短かつむき出しに書ければそれで満足なのだ。

第 37 章

川を上り湖を横切る旅の途中で、フランスの自然学者アンリ・ムオの『インドシナ王国遍歴記』を読んだ。アンコール遺跡についての詳細な記述を行った初のヨーロッパ人だ。読んでいて楽しい。自分と同じような服装、食事、話、思考をしない人々はきわめて変で、完全には人間といえないのだという無邪気な信念を旅行者が抱いていた時代に特有の、痛々しくも率直な記述だ。そしてムオ氏は今日のもっと高度で穩健な旅行者ですら、ほとんど興奮しないようなことまであれこれ記述している。だが明らかにすべての記述が正確というわけではなく、私の手元の一冊も後の巡礼者によりあれこれ鉛筆書きで注釈がついている。その訂正を書き込んだ手は几帳面で、決然としているのだが、この「ちがう」、この「全然ちがう」、この「大間違い」、この「どうしようもない誤り」といった記述が不偏不党の真実に対する欲望から発し、将来の読者を導きたいと願ってのことなのか、それとも単なる優越感によるものなのかは、私にはまったく判断しようがない。だがあわれなムオは多少の筆の滑りを主張しても不当とは言われまいだろう。というのも、旅を終える前に他界してしまい、自分のメモを訂正したり説明したりする機会がなかったのだから。以下はその日記最後の二行だ：

19日 - マラリアにやられる。

29日 - 神様、お慈悲を、ああ……!

そして死の直前に書いた手紙の書き出しは以下の通り。

ルーアンブラバーン (ラオス)

一八六一年七月二十三日

さて我が親愛なるジェニー、いっしょにお話をしようか。まわりのみんなが眠っていて、蚊帳にくるまり横たわる私が家族のみんなをぼんやり思うときに、何をしょっちゅう考えると思うかね？ そういう時、かわいいジェニーの魅力的な声を再び聞いて、また「ラ・トラヴィアータ」「ネルソン提督の死」など、お前が唄うのを聞くのが大好きだったあの歌が聞こえてくるような気がするのだ。するとこの幸せな ああいかに幸せだったことか！ 過去のお土産を前に、喜びと混じり後悔が感じられる。そして私はガーゼのカーテンを開け、パイプに火をつけて、星をながめ、ペランジェの「パートレ」や「老軍曹」を静かにハミングする……

肖像画を見ると顔立ちは開けており、豊かな巻き毛のあごひげと長い口ひげをたくわえ、薄れつつある巻き毛の髪から高貴な額がのぞいている。フロックコート姿でロマンチックというより立派な人物に見えるが、ベレー帽と長い房飾り姿だと、その態度には何

か威勢のいい、天真爛漫な気性の激しさが伺える。六十年代のドラマでなら海賊役でも十分通用したことだろう。

だがアンリ・ムオの勇敢なる視線を受け止めたアンコールワットは、今日の旅行者が実に便利に訪問できるアンコールワットとはまるでちがう代物だった。もしこのとんでもない記念碑が、復元者たちによる作業（これは邪魔しない形で行わねばならない）開始前にはどんな様子だったか本当に知りたければ、森の中の狭い道を歩いてみればかなりよく実感できる。進むと、やがて地衣類やコケにつつまれた巨大な灰色の門に出くわす。その上部の四面には、平然としたシヴァの頭がボロボロのレンガ積みから茫漠と顔を出し、四回繰り返されている。その門の両側には、ジャングルに半分隠されて、巨大な壁の残骸があり、その正面には雑草や水草ががんにがらめになった広い濠がある。そこを入ると広大な中庭があり彫像や、漠然と彫り物がわかる緑の石のかけらが散らばっている。茶色い落ち葉の上をそっと歩くと、それが足の下で実にかすかに押し潰される。ここには頭上にそびえる巨木、各種の茂みや湿った雑草が生えている。それが崩れかけたレンガの間に生え、それを無理矢理こじあげ、その根っこが蛇のように石まみれの土の表面をくねっている。中庭は廃墟となった廊下に取り囲まれ、急で滑りやすい壊れた階段を危なっかしく上り、湿気が滴りコウモリ臭さが充満した通路やヴォールトつきの部屋をめぐる。神々が立っていた台座はひっくり返され、神々は消えている。そして廊下やテラスには熱帯の植物が猛然と生えている。あちこちでは、彫刻された石の大きなかけらが危なげにぶら下がっている。あちこちで、まだ奇跡的に元の場所にある浅浮き彫りには地衣類で包まれた踊り子たちが、永遠の無関心の身振りで嘲笑するように立っている。

何世紀にもわたり、自然は人間の業績戦いを展開してきた。それを覆い、変形させて作り替え、いまや無数の奴隷たちが壮絶な労働で建てたこれらの建物すべてが、木々の間に混乱してもつれあう。まわりの岩に壊れた彫像が描かれたコブラたちの実物がまわりに潜んでいる。頭上高くを鷹が飛び、ギボンたちが枝から枝へと飛び移る。だが緑で暗く、その大量の葉の下にいと、海底をうろついているように思える。

たまたまある日、日暮れ前にこの寺院をうろついていた。というのもその廃墟から、私は自分をさらすとおもしろいような、特異な感覚を受けるからだ。そのとき、嵐に襲われた。北西部に大きな黒雲が集まるのが見えており、ジャングル内の神殿がこれほを神秘的に見えることはないだろうと思ったものだ。だがしばらくすると空気が怪しくなり、見上げるとあの黒雲が突然、森めがけて突進しつつある。いきなり雨が降ってきて、それから雷が響き、それも雷鳴一回ではなく、次から次へと空を揺るがし、それから目もくらむ稲妻が猛然と走っては斬りつける。騒音で何も聞こえず混乱し、そして稲妻に怯えた。雨は温帯のものとはちがいに怒りの怒号のおうな土砂降り、天が氾濫した湖を空にしようとするかのように水をぶちまけている。盲目的で無意識な力で降るのではなく、狙い定めた悪意を持って降っているようで、その悪意は残念ながらあまりに人間的だった。私は怯えきって寺院の戸口に立ち、稲妻が暗闇をヴェールのように切り裂くとき、ジャングルが果てしなく目の前に広がっているのが見栄、そしてこの大寺院もその神々も、この自然のおそろしい力の前には無力に思えた。その力はあまりにむきだしで、あまりに峻厳かつ揺るぎない声で語るの、人類が自分自身と己を脅かして押し潰す力との間のスクリーンとして神々を考案し、それを収める大神殿を建てたというのは容易に理解できた。というのもあらゆる神の中で自然こそは最も強力なものだからだ。

第 38 章

こうしたあれやこれやの元素の騒動に読者諸賢がいささか困惑されているかもしれないので、こんどはその啓蒙のために、いくつか一般的な関心を集める事実を少々記述しておこう。アンコールは大きな都市であり、強大な帝国の首都で、五キロ四方にわたりそこを飾った神殿の廃墟がジャングルに点在している。アンコールワットはその一つでしかなく、他のものに比べて考古学者や復元者、旅行者の関心を集めてきたのは、西洋に発見されたときに荒廃がそれほど進んでいなかったからだ。なぜこの都市がこんなに突然放棄されたのかはだれも知らない。石切場には、未完成の神殿に運ぶための石材が見つかっているというのに。専門家たちはうまい説明を探し続けてきたが、答は出ていない。

神殿の一部はまるで相当部分が意図的に破壊されたように見える。だから、ここの支配者たちが武運つたなくこの国から逃げ出したとき、何世代にもわたりこうした巨大な建物を建てるために命を捧げてきたあわれな奴隷たちが、恨みをこめて血と汗により作らされてきたものを壊したのだ、という説がまことしやかに流布している。これは一説にすぎない。唯一確実なのは、ここに繁栄した人口の多い都市があり、いまやそこには神殿の廃墟がいくつかと、うっそうとした森林があるだけだ、ということだ。家屋は木造で小さな敷地に囲まれ、ごく最近チェントンで見た家と同じで、腐り落ちるのに時間はかからなかっただろう。ジャングルは、しばらくは人々の営みで抑えられていたが、人の無駄な活動の場面に抵抗しがたい緑の海となってどっと流れ戻ったのだ。十三世紀末には東洋最大の都市の一つだった。その二百年後には野獣たちのリゾート。

アンコールワットはきちんと東西を向き、そのてっぺんにある五つの塔の真後ろから太陽が昇る。幅広い濠に囲まれ、それを渡るには板石で舗装された大きな堤道を通るが、濠の静かな水面には木々が繊細に反射している。

美しいというよりは圧倒的な建物で、心に響く美を得るためには、夕暮れの輝きや白い月光のまばゆさが必要だ。灰色でかすかな緑に覆われているが、緑はそれが経てきた数々の雨期によるコケやカビの色だが、日没時には淡黄色で淡く暖かみを持つ。全土が銀色の霧に包まれる夜明けには、この塔は不思議と実体がないような側面を見せる。昼間の厳しい白光の中では書けている、空気のような軽やかさを見せるのだ。一日二回、日の出と日没には奇跡が起き、塔はまったくちがった美しさを獲得する。それは精霊の高い城砦にある謎めいた塔だ。寺院とその付属建築は厳密な様式の平面図にしたがって建てられている。こっこの部分があっちと釣り合いを取り、片側は反対側の繰り返しという具合だ。建築家たちはここではあまり発明の力を行使せず、宗教の儀式が命じるパターンにしたがって建設した。無茶な欲望や鮮烈な想像力はなかった。突然のインスピレーションに屈したりもしなかった。入念だ。規則性と広大さによって効果を出した。もちろん現代の目は、いまや実に容易に建設できる巨大ホテルや巨大アパートなどの大建築によりゆがめられて

おり、アンコールワットの大きさはがんばって想像しないと認識できない。だが当時この寺院を目の当たりにしたのものにとって、これはとんでもない代物に思えたにちがいない。ある階から次の階につながるきわめて急な階段は、ひたすら高さを際だたせる。儀式や行列にふさわしい、西洋の広く立派な階段ではなく、秘密の謎めいた神の御前で急いで昇るための面倒な手段なのだ。それは聖なるものを自分から遠く謎めいた存在に仕立て上げる。塔ごとに階が四つあり、そのそれぞれには大きな貯水池が掘りこまれ、清めの水が入られる、そしてそうした異様な高さにある水は、静けさと畏怖に異様さを加えたはずだ。この宗教では、寺院は空っぽで、神は信者たちがなだめるべく贈り物を捧げる決まった期間以外は、孤独に住んでいる。今やそれは無数のコウモリのすみかであり、空気はコウモリだらけだ。暗い通路と荘厳な部屋のすべてで、そのチイチイという鳴き声が聞こえる。

この建設の平板さは、彫刻家たちに装飾の機会をたっぴりもたらした。柱頭、付け柱、ペディメント、戸口、窓は想像を絶する多種多様な彫刻が豊かに刻まれている。主題はわずかだが、その上に多くの美しい発明が縫い付けられているのだ。ここでの彼らは好き勝手に任され、創造の激烈さをもって、この狭い制約の中に躍動する魂の冒険すべてを押し込んだ。寺院から寺院へとまわるにつれて、何世紀もたつうちに、こうした無名の職人たちは荒々しい強さから完璧な優雅さへと繊維した様子がわかっておもしろい。そして当初は全体など無視して装飾それ自体を目的としていたのに、長いことたつと、自分を全体の計画に従属させることを学んだのもわかる。力強さで失ったものは、趣味の良さで取り返した。どちらが好きかは見る者次第だ。

ギャラリーは浅いレリーフで飾られている。しかも延々とそれが続く。世界的に有名だ。でもそれを表現しようとするのは、ジャングルを表現するのと同じくらい愚かしい。こっちには頭上に国の傘をかかげてゾウに乗った王子たちが、優雅な木々の中を進んでいる。これは心地よいパターンとなって、紙のパターンのように壁の端から端まで繰り返されている。あちらには、戦いへと進軍する兵士たちの長い行列があり、その腕の身振りと脚の動きはカンボジアの踊りにおける踊り手たちと同じ形式化されたデザインに従っている。だがそれが戦闘に参加すると、バラバラになり狂乱した動きとなる。死にかけや死んだ兵士ですら暴力的な態度へと身体をよじらせている。その上では首領たちがゾウや戦車に乗って進軍し、剣や槍を構えている。そして抑制のない活動の感覚、戦闘の混乱と緊張、息詰まる感覚、扇動に無秩序の感覚が生じ、とめどなくおもしろい。空間は隅から隅まで人物や馬、ゾウや戦車で覆われ、そこには秩序もパターンもなく、この混沌の中で唯一目が休めるのは戦車の車輪だけだ。リズムなどない。というのも芸術家たちが求めていたのは美ではなく、動きなのだ。身振りの優雅さや線の純粹さなど意に介さなかった。彼らの狙いは静謐の中で回想された感情などではなく、一切制限のない生きた情熱だ。ここにはギリシャ人たちの調和などまったくなく、濁流のような流れとおそろしく苛烈なジャングルの生の本流があるのだ。それなのに、古代ギリシャ大理石彫刻に匹敵するほど美しいものが少なからずあり、それを見て純粹な美のもたらす熱狂にとらわれない者はよほど退屈な人物なのだろう。だが無念かな、この優れた作品はごく短期間しか作られなかった。というのもそれ以外の絵はおおむね下手でパターンも退屈なのだ。彫刻家たちは何世代にもわたり、奴隷のようにお互いをコピーするだけで満足していたようで、あまりの退屈さだけでもときどき新しいデザインに進出したいと思わせはしなかったのだから不思議に思ってしまう。その入念なドローイングを作成する製図家たちは、その相似性の中に多くの差異を見いだすが、それは百人の手が書き写した散文に見られるような差異でしかな

い。その筆跡はちがっていても、意味は同じままなのだ。そして、これほどの退屈なものの中をわびしくうろつきながら、なぜ人類がある一つの状態に決してとどまれないのかを説明してくれる哲学者がいてくれればと私は願った。なぜ最高のものを知りながら、人類はこんなに安楽に凡庸なもので満足してしまうのでしょうか、と尋ねたかったのだ。状況

それとも天才、個人の天才か？　　が人をしばらくの間高みに持ち上げるが、そこでは呼吸が楽にできないために、落ち着いた低地に人は喜んで舞い戻ってしまうのでしょうか？　人類は水のようなもので、人工的な高さに無理矢理持ち上げることはできても、力を取り除けばすぐさま元の高さに戻ってしまうのでしょうか？　まるで人類の通常の状態というのは、環境に適応した最低水準の文明であり、その状態にのみ時代から時代へと変わらずとどまれるかのように見えるのですが。すると我が哲学者は、塵より高いところに自らを引き上げることができる人種はごくわずかで、それすらごく短期間しかできないのだと語ったことだろう。そしてその人種自身ですら自分の状態が非凡なものだと知っており、獣より多少ましな程度の状態に喜んで退行してしまうのだ、と。だがもしそう言われたら、私としては人間というのが完璧にはなれないものなのかと尋ねただろう。だが彼が次のように言ったとしたら、私は唯々諾々と承知したことだろう：おいで、そんなところでわけのわからんことをしゃべってどうする、昼飯食いに行こう。静脈瘤でもあって、長いこと立っていたので脚が痛み始めたんだらうと私はつぶやいたはずだ。

第 39 章

アンコールで過ごせる最後の日がやってきた。未練たっぷりではあったが、その時点では、ここはいくら長居したところで立ち去るときには必ず未練が残るような場所だということも理解していた。その日は、これまで何十回も見たものを見たが、これほど食い入るように見たことはなかった。そして長い灰色の通路をうろつき、戸口越しに森の光景を目にすると、見たものすべてが新しい美を持つ。静かな中庭は謎めいており、もう少しだけここにとどまりたいと思わせる。というのも、自分が何か不思議でちょっとした秘密を発見する寸前なのだという気がしたからだ。まるで空中に旋律が鳴り響いているのに、音が小さすぎて耳がぎりぎり捉えられないかのようだ。こうした中庭には、振り向けば目に見えるような存在として静寂が宿っているかのようで、アンコールの最後の印象は最初のものと同じ、大いなる静寂だった。そしてこの大いなる灰色の山を実に間近に取り囲むこの生きた森、太陽の中で豪勢かつ陽気なジャングル、ちがった緑の海を見ることで、名状しがたい奇妙な感覚も受けた。さらにまわり一体すべてに、かつては巨大な都市が立っていたのだと知る感覚も、何とも言い難いものだった。

その夜、カンボジア舞踏団が寺院のテラスで踊ることになっていた。我々は炎をともしたいまつ百本を持った少年たちに堤道を案内された。たいまつ材料となる樹脂が空気を刺すような心地よい香水で満たした。彼らは炎の大きな輪を作り、それがテラスの上でちらつき不安定で、その真ん中で踊り手たちはその奇妙な拍子で踊った。楽士たちは闇に隠れてパイプや太鼓や銅鑼を演奏し、茫漠としたリズムカルな神経に障る音楽を奏でた。私の耳はある種期待に震えつつ、自分にとって奇妙な和音が解消されるのを待ったが、最後までそれは実現しなかった。踊り手たちは豊かに輝く色彩のぴったりのドレスをまとい、頭上高く黄金の冠をかぶっている。日中ならそれはまちがなく安っぽく見えただろうが、その予想外の照明だと東洋ではなかなかみつからない豪奢さと謎が生まれる。その平然とした顔立ちは濃く白塗りされており、仮面のようなようだった。その表情の不動性を脅かすどんな感情、どんな余計な思考も許されていなかった。手は美しく、小さく先細りする指をしており、踊りが進行する中でその身振りは入念かつ複雑で、そのエレガンスを研ぎ澄まして優美さを強調した。その手は珍しくすばらしい蘭のようだ。踊りに投げやりなところはなかった。態度は神聖で動きは様式化されている。人形たちが命を得つつも、相変わらず聖性を保っているかのように見えるのだ。

そしてその身振り、その態度は、寺院の石壁にかつての彫刻家たちが刻んだ舞子たちのものと同じだった。千年たっても変わっていないのだ。あらゆる寺院のあらゆる壁で、いまそこで生きた踊り手により目を楽ませているのと全く同じ、繊細な指の優美なひねり具合、まったく同じ細い身体の弓なりが、果てしなく繰り返されている。これほどの長い先祖の重みを背負っているのなら、あの黄金の冠の下で真面目な顔なのも無理はない。

踊りが終わり、たいまつが消され、小さな群衆は三々五々と夜の中に散らばっていった。私はパラペットにすわり、アンコールワットの五塔に最後の一瞥をくれた。

数日前に訪れた神殿が頭に浮かんだ。バイヨンと言う。そこで驚いたのは、これまで見た他の寺院のような統一感がなかったからだ。それは次から次へと重ねられた無数の塔でできており、対称に配置され、それぞれの塔は四面に破壊神シヴァの巨大な頭がある。それが同心円状に何十にもなり、神々の四つの顔は装飾を施した冠をかぶっている。その真ん中には大きな塔があり、顔の上にまた顔が積み重なって頂点までそれが続く。時間と気候によりすべてぼろぼろになっており、つる草や寄生樹がそこらじゅうに生えているので、一見すると形のない固まりしか見えず、もう少し気をつけてみるとようやく、こうした無言の重たい無表情な顔が、粗い石の中からぬっとこちらに飛び出してくる。そして気がつくとその顔がまわり中にある。正面にもあり、脇にもあり、背後にもあり、千の何も見えぬ目に見つめられているのだ。それは太古の時間という遙かな距離からこちらを見つめるようであり、その周りに帯にはジャングルが猛然と生い茂る。ここを通り過ぎる農民は、精霊たちをおどかして追い払うために大声で歌を歌ったりしないのだろうかと思わずに思っただけ。というも夕方になると静寂はこの世のものとも思えず、こうした静謐でありながら悪意のこもった顔のもたらす効果は不気味なのだ。夜が訪れると顔は石の中に再び沈み込み、もはや変わった形の尖塔群が、奇妙に覆われているものでしかなくなる。

だが私がこれを描写したのは、寺院そのものだけのためではない。すでにかなりたぬらいつつも、寺院については十分すぎるほど描写した。その回廊の一つを彩る浅いレリーフのためなのだ。あまり出来はよくないもので、彫刻家たちはどう見ても、形態や線についてのセンスがあまりに不足していたが、それでもこのレリーフはこの瞬間に鮮明に記憶からよみがえるだけのおもしろさを持っている。というのもそれは、作られた頃の日常生活の風景を表しているのだ。鍋に入れる米の準備、調理、漁、かすみ網による鳥猟、村の商店での売買、医師への訪問、要するに一般人の各種活動が描かれている。千年たつて、こうした人々の人生がまるで変わっていないのを知って驚愕した。みんな相変わらず、同じ危機で同じことをやっている。米はまったく同じやり方で突かれたり脱穀されたりしているし、村の商人は同じ皿で、同じバナナと同じサトウキビを売っている。この辛抱強い生産的な人々は、幾世代も前にご先祖たちが運んだのと同じくびきで、同じ重荷を背負っている。何世紀も経ったのにこの人々にはまったく影響しておらず、十世紀の人物が眠り続けてこうしたカンボジアの村のどれかで今日目覚めたとしても、日常生活の取り柄のない雑務ではまったく違和感を感じないだろう。

そのとき思い当たったのだが、こうした東洋の国々で最も感動的で、もっとも畏敬の念をよびさます古代の記念碑というのは、寺院でもなく、尖塔でもなく、大きな城壁でもなく、人間なのだ。記憶を絶する古い慣習を持つ農民は、アンコールワットや万里の長城やエジプトのピラミッドよりはるかに古い時代に属している存在なのだ。

第40章

小さな川の河口で、私は再び平底蒸気船に乗り込み、広く浅い湖を横切って、別の船に乗り換え、別の川を下った。そしてやっとサイゴンにたどりついた。

フランスがこの国を占領してから成長した中国都市はさておき、さらには歩道をうろついたり、ロウソク消しのような幅広のトンがり麦わら帽子でリキシャを引く現地人もさておき、サイゴンはあらゆる点で南仏の小さな田舎町の雰囲気だ。幅広い街路が配置され、見事な街路樹が日陰を作り、そこにある賑やかさは、イギリス植民地の東洋町とはまったくちがった賑やかさだ。楽しそうでにこやかな所だ。第三共和国の派手な様式で建てられた白く輝くオペラハウスがあり、それが幅広の通りに面している。そしてとても壮大で真新しく装飾的なホテル・ド・ヴィルがある。ホテル群の外にはテラスがあり、アペリティフの時間にはあごひげを生やした身振りの大仰なフランス人でごったがえし、みんなフランスで飲む甘くうんざりする飲料、ヴェルモット・カシス、ビル、キンキナ・デュボネなどを飲み、みんな南仏の巻き舌訛りで機関銃のようにしゃべっている。地元の劇場となにやら関係のある陽気で小柄なご婦人方が、ぱりっとした服装と、鉛筆で描いた眉や紅を塗った頬で、この遠く離れた場所に楽しげな洗練の雰囲気をもたらしている。店頭にはマルセイユからきたパリのドレスやリーユからきたロンドン帽がある。小さなポニー二頭が引くヴィクトリア馬車がギャロップで通り過ぎ、自動車がクラクションを鳴らす。雲一つない空から太陽が照りつけ、日陰は暑さで重く濃い。

サイゴンは数日ほどぶらぶらするには十分に快適な場所だ。気ままな旅行者にとって人生が楽になっている。そしてコンチネンタルホテルのテラスで日よけの下にすわり、すぐ頭上で電気扇風機が回り、ちょっとしたドリンクを飲んでから地元の新聞で、植民地のできごとや近所の雑事に関する熱っぽい論争を読むのはとても気分がいい。時間を無駄にしているという後ろめたい気分なしで、広告を熟読できるというのは魅力的だし、そうした精読の中であちこち時間と空間の中を空想をおもちゃの木馬で楽しくギャロップさせる機会を見つけられないというのは、かなり鈍い知性にちがいない。だが私はここには、フエ行きの船をつかまえるまで滞在しただけだった。

フエは^{アンナム}安南の首都で、そこに向かったのは皇帝の宮廷で実施されるはずの、中国正月のお祭りを見るためだ。だがフエは川沿いにあり、その港はトゥーランだ。そのときメサジェリ船 真っ白で快適な船で、暑い地方の旅行に向けたしつらえとなっていて、広々として通気もよく冷たいドリンクも豊富 がある朝二時に私をそこで下ろした。湾の中、波止場から七、八キロに投錨して、私はサンパンに乗り移った。船員は女性二人と男と少年だ。湾は穏やかで星が頭上にびっしり輝いている。夜の中へとこぎ出し、波止場の光は異様に遠く思えた。ボートには水がたくさん入っていて、ときどき女性の一人が漕ぐ手を止めて灯油の空き缶で水を汲み出していた。実にわずかなそよ風があり、間もなくか

れらは竹を編んだ大きな四角い帆をあげたが、風は弱すぎてあまり助けにならないように、行程は夜明けまで続くかのようにだった。私からすれば、永遠に続いてくれてもかまわない。私は竹のマットに横になり、パイプを吸って、ときどきうつらうつらして、目を覚ましてパイプに火をつけなおすとき、マッチの明かりで一瞬、マスト脇にしゃがみこんでいる女性二人の茶色い太った顔が見えた。舵取りの男がちょっと何かを言って、女性の一人が返事をした。そしてまた、私が横たわる船板の下のかすかな水音以外はまったく無音となった。夜は実に暖かく、シャツ一枚とカーキ色のズボン以外は何も着ていなかったが寒くはなく、空気は花の感触のように柔らかかった。夜の中に長い上手まわしをして、それからゆっくりと河口への進路を見つけた。投錨した漁船や、静かにゆっくり流れに乗り出す船の横を通る。川岸は暗く謎めいていた。男が一声かけると女性二人は間抜けな帆を下ろし、またもや漕ぎはじめた。波止場にやってきたが水が浅すぎて、岸まで苦力^{クーリー}におぼわれていくしかなかった。これは昔から、とても怖いし尊厳のないやり方のように思え、私は自分には似つかわしくないと知っている形^{クーリー}で苦力の首にしがみついた。ホテルは道を渡ったところで、苦力^{クーリー}たちが私の荷物をついだ。だがまだ五時にもなっておらず、暗くて、ホテルではだれも起きていなかった。苦力^{クーリー}たちはドアをどンドン叩き、やっと眠たそうな召使いが空けてくれた。残りはみんな、ピリヤード台や床でぐっすり眠っていた。部屋とコーヒーを頼んだ。ちょうど新鮮なパンができたので、カフェオレと釜から出てまだ熱いロールは、湾を横切る長旅のあとでは実にありがたく、これまで滅多に食べる幸運を得られたことのないすばらしい食事とは相成った。通された部屋は汚いむさ苦しい小さなもので、蚊帳は汚れて破れ、シーツも最後に洗濯されて以来、何人の行商人やフランス政府役人が寝たか見当もつかないほどのものだ。でも気にしなかった。これほどロマンチックは状態でどこかに到着したことはいまだかつてないように思え、これぞ記憶に残る体験の序曲にちがいないと思えて仕方なかった。

だが、中には到着が唯一の見所という場所がある。精神の最もすばらしい冒険を約束しておきながら、出てくるのは三食と去年の映画だけ。それは個性に満ちて興味をそそられ興奮させる顔を持つのに、親しく知り合うようになると、その顔が単に下卑た魂の覆いにすぎないことがわかる人物のようなものだ。トゥーランとはそんな場所だ。

ある午前中を、クメール彫刻のコレクションがある博物館を訪ねるのに費やした。ご記憶かもしれないが、プノンペンについて書いたとき、そこで見るべき彫像について不思議と饒舌になった（といっても、他人の大仰なおしゃべりがあまり好きではなく、誇張表現に気が進まない人物にしてはということだが）、それがクメール作品で、またも思い出していただく（あるいは私のようにインドシナに行くまでクメール人もその彫刻も存在すら知らなかったのであれば、いま初めて述べさせていただくと）クメールは強大な帝国であり、インドシナの原生部族と、これまた広大で強力な帝国を作り上げた中央アジア平原からの侵略民族との子孫だ。インド東部からの移民がサンスクリット、ブラフマン教など故郷の文化を持ち込んだ。だがクメール人は精力的で、創造的な本能を持ち、このため異人たちがもたらした知識を独自のやりかたで使えたのだ。彼らは壮大な神殿を建てて彫刻で飾り、確かにそれはインドのものに基づいてはいるが、でもその最高のものは東洋の他のどこにも見られないほどのエネルギーと大胆な作風、豊穡さと見事なまでの想像力を持っている。プノンペンにあるハリハラ像^{*1}は、彼らの天才ぶりがいかにすごかったかを

*1 フランス当局がこの神につけた名前に私はいささか首をかしげている。昔から、ハリとハラはそれぞれ一

証明している。それは優雅さの奇跡だ。古代ギリシャの彫刻や、メキシコのマヤ彫刻を思わせるが、まったく独自の性質を持っている。ああした初期のギリシャ作品は朝露のような新鮮さを持っているが、その美にはいささか空疎なところがある。マヤの彫刻は何か原始的なものがあり、崇拜よりは畏怖を引き起こす。というのもそこにはまだ、洞窟の暗いくぼみに魔法の絵を描いて、恐れていたたり狩ったりした獣たちに苦悶をかけようとした原始人のタッチが残っているからだ。だがハリハラには、古代と洗練との力強く謎めいた結合がある。そこでは原始の率直さが、文明の複雑さにより加速されている。クメール人は、いきなりその想像力を捉えたこの技芸に、思索という長い遺産をもたらしてくれた。まるでエリザベス朝のイギリスに、晴天の霹靂のように油絵芸術がやってきたかのようだ。そして芸術家たちが、シェイクスピアの演劇や宗教改革での宗教紛争やスペイン艦隊を心に宿したまま、チマプーエの手つきで絵を描き始めたかのようだ。ブノンペンで彫刻を作った彫刻家の心の状態には、何かこのような変化が起こったはずだ。力強さと単純さと見事な線を持ちつつ、無限の感動を招く精神的な性質も持っている。美だけでなく知性もあるのだ。

こうしたクメール人の偉大な作品は、この強大な帝国とその活発な人々の名残が、ジャングルの中に散在するいくつかの廃墟となった寺院や、あちこちの博物館に散在する壊れた彫像いくつかしかないことを考えると、なおさら特異な痛ましさを持つようになる。その力は破壊され、人々は散り散りとなり、水くみや木こりとなり、死に絶えた。そしていま、残った者たちは征服者に同化させられ、その名前を残すのは彼らが入念に作り出した芸術の中だけ。

般にシヴァとヴィシュヌとして知られる神のなまえであり、ある神をハリハラと呼ぶのは一人の立派な人物をクロスアンドブラックウェルと呼ぶようなものではないかと思えたのだ。だが専門家の方が私より詳しいはずなので、この彫刻については彼らがつけた名前に一貫して準じている。

第41章

フエは快適な小さな町で、イギリス西部の聖堂都市のようなのんびりした気分がある。帝国の首都とはいえ威圧的なところはない。広い川をまたがって建てられ、橋がかけていて、ホテルは世界最悪の一つだ。すさまじく汚くて、食事は悲惨だ。でも植民者がほしがるものは、キャンプ設備から銃、女性の帽子や男性の古着から缶詰イワシ、パテ・ド・フォワグラ、ウスターソースまで何でも手に入る雑貨店でもある。だから飢えた旅行者は、料理の不適切さを缶詰で補えるというわけだ。町の住民はここにコーヒーとフィネを飲みに来てくるし、晩には夕食にくるし、兵舎の兵たちはビリヤードをしにくる。フランス人はしっかりした、かなり派手な家を建てたが、あまり気候や環境に配慮しなかった。それはパリ郊外にある隠居雑貨屋の邸宅のようだ。

イギリス人が植民地にイギリスを持ち込むように、フランス人もフランスを持ち込む。そしてイギリス人はその周辺からの隔離ぶりを批判されるが、それはご近所と比べて突出しているわけではないと答えればすむ。だが最も鈍感な観察者ですら、この両国が自分たちの占有した国の原住民に対する態度の点でおおきくちがっていることは気がつかずにいられないだろう。フランス人は内心奥底で、万人は平等で人類皆兄弟と信じ込んでいる。それを少し恥じており、こちらが嘲笑すると、急いで自嘲する。だがそういうもので、当人にはどうしようもないのだ。原住民が、黒人だろうと茶色だろうと黄色だろうと、自分と同じ粘土からできており、同じ愛憎や苦楽を持つのだと感じずにはいられないし、相手が別の生物種であるかのように扱うよう自分に無理強いできないのだ。自分の権威に対する侵犯は一切許さないし、現地人が自分の重荷を軽減しようとする試みにはすべて厳しく対応するが、人生の普通のできごとにおいては見下すことなく現地人と仲良くして、優越感なしに博愛主義的だ。そして相手に自分固有の偏見を教え込む。パリが世界の中心だということで、だからあらゆる若い安南人の野心は、生涯で一目パリを見ることだ。フランス以外には芸術も文学も科学もないと信じ切っていない若者にはほとんど出会わない。だがフランス人は安南人たちといっしょにすわり、食事も酒も共にして遊びもする。市場では儉約家のフランス人女性が買い物かごを腕に、安南人の主婦と袖すりあわせ、同じくらい熾烈に値切っているのに出くわすだろう。自分よりうまく切り盛りして維持管理も立派にやる相手ではあっても、他人に自分の家をとられるのは誰しもいやなものだ。エレベータをつけてもらったとしても、屋根裏で暮らすのは嫌なのだ。そして安南人だってビルマ人同様に、知らない連中が自分の国を掌握しているのはいやだろう。でもビルマ人はイギリス人に敬意を示すだけだが、安南人たちはフランス人を崇拜している。いずれこの国々の人々がまちがいなく自由を回復したとき、こうした感情のどちらが優れた果実をもたらしたかを見たとおもしろいだろう。

安南人は見た目が麗しく、とても小柄で、黄色い太った顔とかがやく黒い目をしてい

て、服装もこぎれいだ。貧乏人は豊かな土の色である茶色と、脇にスリットの入った長いチュニックにズボンをはき、ウェストにはアップルグリーンかオレンジのガードルを巻いている。そして頭には大きい平らな麦わら帽子か、きれいに折の入った小さな黒いターバンを載せている。金持ちも同じこぎれいなターバンに白いズボン、黒い絹のチュニックを着て、ときどきその上に黒いレースのコートを着ている。非常に優雅なコスチュームだ。

だがこうした土地のすべてで人々の服装が我々の目を引くのはそれが奇異だからだが、それぞれの国内ではみんなきわめて似た服装をしている。彼らの着る制服で、華々しいことも多く、いつも気候に適してはいるが、でも個人の趣味を発揮できる余地は少ない。だから東洋国の原住民がヨーロッパを訪ね、身の回りの意匠の気の遠くなりそうで鮮明な多種多様ぶりを見たら驚愕するだろうと思わずにはいられない。東洋の群衆は市場の花売りが提示するヒナギクの花壇のようで、まばゆいが単調だ。でもイギリスの群衆は、たとえばプロムナードコンサートのフロアを上から見下ろしたときにかすかな煙のヴェール越しに見えるのは、ありとあらゆる花で作った花束のようなものだ。東洋ではどこであれ、ピカデリーの晴れた日に見られるほど陽気で多種多様な衣装を見ることは決してない。その多様性は驚くほどだ。兵士、水夫、警官、郵便配達、伝令の少年、燕尾服とシルクハットの男たち、ビジネススーツと山高帽の男たち、プラスフォーズとキャップ姿の男たち、色とりどりの絹と布とピロードの女性たち、そして帽子もあんな形やこんな形。そしてそれ以外にも、行事に応じた服装やスポーツごとの服装、召使いの服装や労働者や騎手や狩人や廷臣の服装もある。たぶんそれを見た安南人がフエに戻ってきたら、同国人の服装がとても退屈だと思うのではないか。

第 42 章

^{アンナム}安南は何世紀にもわたり中国が宗主国で、安南皇帝は天子に使節団を送っていた。中華文明の一部であり、寺はゴータマより孔子を祭るものとして建てられた。濠と壁に囲まれた王宮は実に広大だ。中国式だが、みすばらしく二流な印象だ。くたびれてちょっと陰気な感じがする。灌木の植わったこぎれいな道路を歩くが、その両側には庭園や建物がある。だが庭園はぼうぼうで荒れている。子供がいろいろ加減に手入れしたように見える、雑な茂みや成長の止まった木がある。あまりに無人なので、その背景のどこか見えないところに、妾妃や宦官や官僚たちに囲まれて、フランス配下で統治している皇帝が暮らしているとは信じられないほどだ。それがただのポーズにすぎず、それすら皇帝はなかなか維持できていないようだと感じられてしまう。派手に塗られて黄金で飾られた玉座の間を抜け、皇帝の先祖の書冊が並ぶ長く薄暗い廊下を通り、皇帝にときどき献上された贈り物を飾る部屋を通り過ぎる。フランスの時計やセーブル磁器、中国陶器や翡翠の装飾などが飾られている。だが友人の結婚式に際し、裕福な友人で贈り物など要らない相手なら高価なものを送り、貧乏で物いりな友人なら安物を送るのと同じで、ここでも送り主たちは相手の値打ちを鋭敏に読み取ってそれを鷹揚さに反映させていた。

だがテトの祝宴は華々しく行われた。これは中国正月のお祝いで、皇帝はまたも天子を真似て、官僚たちの拜謁を受ける。私は朝七時に招待状を受け取り、ディナージャケットとかたいシャツしかなかったのでバツの悪い思いをしていたが、王宮の門でフランス市民たちが似たような服装をしており、多くの士官たちが政府を着ているのに出会った。在外総督が乗り付け、その後についてみんな中庭に入った。広い空地で、まばゆく幻想的な制服をまとった兵士たちが列をなし、その正面には官僚たちが階級に応じて二列に並んでいる。右が文官、左が武官だ。その一段下には宦官たちと王宮の楽隊、そして両側にはそれぞれ王のゾウがいて、儀礼式の身なりで、その輿の上に天蓋式傘を持っている人物と比肩するものだった。官僚たちは満州式の服装で、分厚い白い靴底の高いブーツと、巨大な袖がついた、見事な刺繍の絹のローブ、金装飾つきの黒い帽子をかぶっている。ラッパが鳴って、我々ヨーロッパ人たちは玉座の間にどやどやと入った。薄暗い。皇帝はひな壇にすわっていた。黄金のローブを着て、玉座の黄金と、それを覆う天蓋の黄金の背景布に溶け込んでおり、最初はそこに生きた人物がいるとはほとんど気がつかないほどだ。皇帝が立ち上がった。ひな壇の四隅には青い服を着た男性が立っており、儀礼用のうちわを持っていて、玉座の背後にはもっと濃い青の召使いたちが列をなし、王の道具を掲げている。ピンロウの盆、たんつぼ、その他なんだかわからないもの。その少し前に、オレンジの見事な装束の兵士二人が、黄金の剣をまっすぐ立てて持っている。二人は絵のように直立し、右も左も見なかった。皇帝もまた、黄ばんだ細長い顔に何の表情も浮かべず立ち尽くし、まるで絵のようだった。

総督が式辞を読み上げ、皇帝が答辞を読み上げた。甲高い声で、まるで歌うようであり、嘆願祈祷のように聞こえた。ヨーロッパ人たちはホールの脇に退き、皇帝はすわった。玉座の前には低い祭壇があり、この上に皇帝の叔父（小さな老人で、まばらな灰色のひげを生やしている）がいまや赤い絹に包まれた二冊の本に見えるものを置いた。すると皇帝の二人の弟たちが祭壇前の持ち場について、皇帝には向かわずお互いに対面して、同時に演説朗読中は不動のまま立っていた中庭の官僚たちが、彼らのためにしかれた竹のマットの上に進み出たがこれもその階級と地位に応じた順番だった。彼らも皇帝に面することなくお互いに向き合っている。楽隊が演奏をはじめて歌手たちが歌い始めた。これを合図に血族たる王子たちと中庭の官僚たちは向きを変えて皇帝に対面した。コーラスが止まり、王子たちと官僚たちはひざまづいて額を地面にすりつけた。まるで一体のようだ。王宮の門の上にある塔から巨大な銅鑼が鳴り響き、コーラスがまた歌い始めた。すると見事に訓練された兵士のように、官僚たちは一斉に平身低頭した。これが五回繰り返された。皇帝は平然とすわったままで、このお辞儀になんら応えようとはしなかった。黄金の彫像であっても同じだったろう。玉座の間は、前日には実に安ピカに燃えたのに、いまや豪華な衣服とスマートな制服に映えて、荘厳さとは言わないまでも、少なくとも野蛮な華やかさを持っていた。そして官僚全員が三回お辞儀をして、何の儀式もなしに列を崩し、王子たちはにっこりしてフランス人の友人たちと握手をすると、ローブが暑いと文句を言い、皇帝は尊厳も何もなく玉座から降りてきた。そしてさっさと一種の控えの間に入り、廷吏たちと外国人たちが後に続いた。ここでは兵たちが二列で王の傘や各種の杖を掲げ、緑を着た給仕たちの集団が太鼓や横笛を鳴らしてカ一杯銅鑼を鳴らす。甘いシャンパンに、ビスケットと砂糖菓子と葉巻が回された。間もなく皇帝は赤服の男十二人により、パランキーン、これは低くて丸い金箔張りの椅子だが、これに載せられて運び去られていった。儀式は終わった。

晩には王宮のパーティーにでかけた。皇帝と在外総督が、玉座の間の中央戸口で、大きな金箔張りの長いすにすわり、来賓たちがそれを囲んでいた。中庭には無数の小さなオイルランプがともされ、地元のオーケストラが元気よく演奏していた。中国京劇のような幻想的な人々が三人登場し、見事な中国服を着て、グロテスクな踊りを踊った。それから宮廷パレー、つまり美しい古風な衣装を着て十八世紀の東洋絵画を思わせる少年や若者たちの群れが、唄い踊った。肩には提灯を載せ、中に火のついた口ウソクを入れて、複雑なパターンを描いて動き回り、それが皇帝に幸運と繁栄を願う漢字を形成するのだった。踊りと言うよりは教練に近かったが、その効果は不思議できれいだった。そしてそれが退くと他の踊り手たちが出てきた。巨大な雄鳥の格好をした男たちがくちばしから火を噴いたり、水牛や龍の姿で見事な活劇を展開したりする。それから花火になって、中庭は煙と爆竹の騒音で満たされた。

これで演し物の地元パートが終わり、外国人たちはビュッフェの周りに集まった。宮廷楽士たちが西洋の楽器でワンステップの演奏を始めた。外国人たちは踊った。

皇帝は豊かな刺繍をほどこした黄色い絹のチュニックを着て、頭には黄色のターバンをのせていた。三十五歳で他の安南人よりはちょっと背が高く、とてもやせていた。顔は奇妙になめらかだ。とてもか弱そうだが驚くほど存在感があった。パーティで最後に見たのは、皇帝が気楽な様子でテーブルにもたれかかり、煙草を吸いながら若いフランス人とおしゃべりをしている姿だった。ときどきその目は一瞬だけ、征服者たちがへたくそに踊っているのを無頓着に眺めるのだった。

もう遅くなっており、夜明けには車でハノイに向かうことになっていた。いまからベッドに入る意味もなさそうに思えたので、ホテルまでリキシャを走らせつつ、川で一夜を過ごしてもいいのではと自問した。出発前に着替え、風呂を浴び、コーヒーを一杯飲むだけの時間があればいい。リキシャの少年に何がしたいかを説明すると、川につれていってくれた。橋のすぐ下に船着き場があって、サンパンが半ダースも係留されている。中にその所有者たちが寝ていたが、少なくとも一人の眠りは浅く、私が石段を下りるのを聞きつけて目を覚まし、くるまっていた毛布から顔をのぞかせた。リキシャの少年が話をすると、彼は起き上がった。そして同じ船で寝ていた女性に呼びかけた。私は船に乗った。女性は縄を解き、我々は流れに乗りだした。これらの船は、竹のマットでできた低く丸い日よけがついており、その下ではギリギリすわって身体を起こせる程度の高さだ。鎧戸で囲うこともできるが、正面は開けておくように命じた。夜を眺められるようにするためだ。天の高みには星がきわめてまばゆく輝き、まるでそこでもパーティーが開かれているかのようだ。男は中国茶のポットとコップを持ってきた。それを少し注いでパイプに火をつける。船はととてもゆっくり進み、静寂を破るのは櫂が水を切る音だけ。この先何時間も、この満足な状態を楽しめるのだと思ううれしかった。そしてヨーロッパにまた戻り、石造りの都市に閉じ込められたら、この完璧な一夜と魔法のような孤独をどんなに楽しく回想することだろうと思った。それは記憶の中でも最も忘れがたいものとなるだろう。またとない機会だし、過ぎ去る一瞬一瞬をつかみ取らねばと自分に言い聞かせた。一瞬たりとも無駄にできない。自分のための宝石を敷いているのだ。そして、これからどんなことを思索しようかと考え、その年初めての薫り高いイチゴを一心に味わうときのように味わうはずのメランコリーを思った。そして愛について考え、お話を考えつき、芸術や死といった美しいものに思いを巡らせるのだ。櫂がとでもそっと水面を打ち、ボートが滑るように動くのが感じられる。ひたすら眺めて、自分を襲うすばらしい感覚すべてを楽しもうと私は決意した。

突然、ドスンと衝撃を感じた。何だろう？ 外を見ると、真っ昼間だ。ドスンと言うのは、ボートが船着き場に当たった音で、頭上すぐのところに橋があった。

「何と言うことだ、寝てしまったのか」

私は夜通し寝てしまい、お茶のコップが冷たくなって横に置かれていた。パイプは口から落ちていた。あの貴重な瞬間をずっと失って、何時間もぐっすり寝てしまったのだ。私は怒り狂った。東洋の川で一晩をサンパンで過ごす機会など、もう二度とないかもしれないし、いまや自分に約束したあのすばらしい思考や昼いなく感情は決して得られないだろう。船代を払い、晩の服装のまま階段を駆け上がってホテルに向かった。雇った車が戸口で待っていた。

第 43 章

ここで本書は終わりにするつもりだった。というのもハノイではそれ以上興味を惹くものが何も見つからなかったからだ。トンキンの首都で、フランス人はそれが東洋一魅力的な都市だと言うけれど、でもその理由を尋ねると、答はそれがフランスのモンペリエやグレノーブルといった町にそっくりだというものなのだ。そして香港行きの船に乗るために出かけたハイフォンは、商業都市で退屈だった。確かにここからアロン湾を訪れることはできる。これはインドシナ屈指のゼーエンシュヴュリュディッヒカイテン（景勝地）の一つだが、私は景勝に飽き飽きしていた。カフェにすわっているだけで満足だ。というのもここは暑すぎず、熱帯の服から抜け出して「イ・イルストラシオン」誌のバックナンバーを読んだり、あるいは運動のためにまっすぐで幅広の道をさっさと歩いたりできるのがうれしかった。ハイフォンは縦横に運河が走り、ときにはその多様な生活が垣間見えて、水上に並ぶ現地の工芸品は多彩で魅力的だった。ある運河は両側に背の高い中国式家屋が建ち並び、すてきなカーブを描いていた。家はどれも白塗りだが、その白塗りがはげで染みがついている。灰色の屋根が淡い空を背景にすてきな対比となっている。その光景は、古い水彩画のような色あせた優雅さを持っていた。どこにも強調点はない。柔らかくちょっと疲れたようで、かすかなメランコリーを引き起こす。なぜかはまるでわからないが、ふと若い頃に出会った老女中を思い出した。ヴィクトリア時代の遺物で、黒い絹のミトンをはめ、貧困者のためにクローシェ編みのショールを作っていた。未亡人には黒のショールを、既婚者には白のショールを。若い頃にはつらい思いをしたというが、それが病気のせいだったか、かなわぬ恋のせいだったかは、誰も正確には知らなかった。

だがハイフォンには地元新聞があり、小さな薄汚れた一枚新聞で、活字はすり減ってインキが指につくようなやつだが、そこには政治論説、無線によるニュース、広告や地元情報が載っている。編集者は明らかにネタに困っていて、ハイフォンに到着したり発ったりした人々の名前を、ヨーロッパ人、地元民、中国人を問わず印刷しており、私の名前もその中に混じっていた。船が香港に出発する日の前日の朝、ホテルのカフェにすわってランチの前にデュボネを飲んでいると、ボーイがやってきて紳士が面会に来たという。ハイフォンには知り合いなど一人もいなかったのだから、誰だと尋ねた。ボーイは、イギリス人でここに住んでいる人だというが、名前は知らなかった。ボーイのフランス語は実に乏しく、何を言っているのかなか理解できなかった。不思議には思ったが、でも訪問者を案内するように告げた。一瞬後、ボーイは白人男を従えて戻ってくると、私のほうを指さした。男は私を認めてこちらに歩いてきた。とても背の高い人物で、百八十センチは優にあり、いささか太ってでっぷりしており、きれいにひげをそった赤ら顔で、実に色の薄い青い目をしている。とてもみすばらしいカーキ色のショーツをはき、襟ボタンを外した詰め襟上衣を着て、ボコボコのヘルメットをかぶっている。一見してすぐに、これはここ

で食い詰めた浮浪白人で金を貸せとせがむつもりだなと思い、いくらくらいで追い払えるだろうと思案したのだった。

私のところにくると、男は大きな赤い手を差し出した。割れた汚い爪をしている。

「私のことを覚えちゃいまいでしょうなあ。名前はグロスリー。あんたとセントトマス病院にいたんだよ。新聞で見てすぐにあんたの名前に気がついて、訪ねて見ようと思ったんだよ」

私はこんな人物はまるで思い出せなかったが、すわってくれといい、何か飲むかと言った。その外見から、最初は十ピアストルくらいせがまれて、五やればいいかなと思ったが、いまやどうも百くらい要求されて、五十ですめば幸運ということになりそうだ。借金常習者はいつもほしい金額の倍を申し出るし、言い値通りに出すとかえって不満に思ってしまう。というのもそうなると、もっと大金をせがめばよかったと悩んでしまうからなのだ。するとこちらにだまされたように思ってしまうわけだ。

「医者ですか？」と私は訪ねた。

「いやいや、あのろくでもない場所には一年いただけだよ」

日よけヘルメットを脱いで、モップのような灰色の髪を見せたが、ブラシが是非とも必要だ。顔は奇妙にまだらで、あまり健康的には見えなかった。歯はひどい虫歯で、口の端には隙間が見えた。ボーイが注文を取りに来ると、ブランデーを頼んだ。

「ボトルごと持ってこい。ラ・ポテイユ。わかる？」そして私に向き直った。ここにはもう五年もいるが、なぜかフランス人とは馬があわんね。トンキン語はできる」そして椅子を倒すと私を見た。「あんたのことは覚えてるんですよ。昔はあの双子とつるんでたじゃないか。何という連中だっけ？ 私はあんたよりは変わっただろうな。人生最良の時期を中国で過ごしたもんでね。ひどい気候なんだぜ。人をずいぶんな目にあわせてくれる」

相変わらずこの人物をまるで思い出せなかったので、はっきりそう言ったほうがいいと思った。

「同期ですか？」

「そう。九二年」

「とんでもない昔ですね」

毎年、六十人ほどの少年と若者が病院に入る。ほとんどは引っ込み思案で、自分が参加しようとしている新しい生活に困惑していた。多くはロンドンも初めてだった。そして少なくとも私にとっては、彼らは白いシャツを特に理由も感動もなく横切るだけの影にすぎなかった。一年目で、何人かはあれやこれやの理由で脱落し、二年目には残った者たちがだんだんと人格の発端のようなものを持ち始める。それはその人物だけでなく、いっしょに受講した講義、ランチョンで同じテーブルにすわって食べたスコーンやコーヒー、同じ解剖室で、同じ台で行った解剖、シャフツベリー劇場のピットから一緒に見たも『ベル・オブ・ニューヨーク』も含んだ人格となる。

ボーイがブランデーのボトルを持ってきて、グロスリー、というのが本当の名前なら、彼は自分のグラスに並々と注ぎ、それを一気に水もソーダもなしに飲み込んだ。

「医者稼業は我慢できなくてね。投げ出したよ。家族に愛想をつかされて中国にきたんだ。百ポンドやるからあとは自分で何とかしろと言われてね。こっちも逃げ出せて心底ありがたかったぜ、いやほんと。たぶん向こうがこっちに愛想つかしてたのと同じくらい、オレも向こうに愛想つかしてたんだろうな。それ以来、向こうとは連絡もないがね」

すると記憶の深みからどこからともなく、かすかなヒントが言わば意識の縁に忍び込んできた。まるで潮が満ちると水が砂を運び上げてきて、そしていったんは引くが、次の波と共にもっと大きな規模となって戻ってくるように。最初はまず、なにやら新聞に載ったどうでもいいちょっとした醜聞が脳裏にひっかかってきた。それから少年の顔が見え、そしてだんだん事実が頭に浮かんできた。そうだ、今思い出した。当時は確かグロスリーとは呼ばれていなかったと思う、単音節の名前だったと思うが、でもその点は自信がない。とても背の高い若者で（もうかなりはっきり思い出した）、やせて、ちょっと猫背で、たった十八歳で強さに見合わない早さで背が伸び、かがやく茶色の巻き毛をしていて、かなり顔立ちも大きく（いまではそんなに大きく見えないのは、顔が太ってぼっちょりしているからかもしれない）、濃いピンクと白の、女の子のように妙に新鮮な肌あいをしていた。たぶんそれをとてもハンサムな少年だと思う人々、特に女性はいただろうと思うが、我々にとっては不器用でもじもじした無骨者だった。さらに、しばしば講義をさぼっていたのも思い出した。いや、私が覚えていたわけではない。講義室には生徒が多すぎて、誰が出席で誰が欠席かなど思い出せない。覚えていたのは解剖室で、私の隣の解剖台で脚の担当だったが、それにほとんど触れていなかった。同じ死体の別の部位を担当していた連中がなぜ彼のサボリ具合に文句を言ったのかは覚えていない。たぶん何かしら気に障ったのだろう。当時、ある「部位」の解剖についてはかなりのゴシップがあり、三〇年の時を超えてそれが思い出された。誰かが、グロスリーはすごい遊び人だと噂を立てたのだ。鯨飲のひどいプレイボーイだという。こうした少年たちはほとんどがとても単細胞で、病院に家や学校で身につけた思い込みを持ってきた。きまじめな連中もいてショックを受けていた。他のまじめに学業に取り組む連中はせせら笑い、そんなことでは試験に合格しないぞと言った。でも相当数は、興奮して感銘を受けていた。彼のやっていたことは、勇気さえあれば自分たちもやってみたいことだったからだ。グロスリーにも崇拜者はいて、彼を囲む小集団が口をあぐりあけて、冒険物語に聞き入っているのがよく見られた。ごく短期間で引込み思案ではなくなり、事情通じみた雰囲気をも身につけた。それはこのピンクと白い肌の、頬のなめらかな少年だとかなり滑稽に見えたはずだ。男たち（と彼らは自称していた）は彼の活躍を語り合った。かなりの英雄になったわけだ。博物館を通り過ぎて、真面目な学生が二人解剖学の復習をしていると、嘲笑的なことを言う。近所のパブでは常連で、女給たちとも顔なじみだった。今にして思えば、田舎からきて両親や学校教師たちの監督から逃れた彼は、自分の自由とロンドンのスリルにとらわれてしまったのだろう。その蕩尽ぶりは、まったく人畜無害なものだった。若さの衝動のためだけが原因だった。舞い上がってしまったのだ。

だがみんなとても貧乏だったので、グロスリーがどうやってその派手な娯楽の支払いを行っているのかわからなかった。その父親が田舎医師なのはみんな知っていたし、毎月の小遣いがいくらかもみんなざぱり知っていたように思う。パヴィリオンのプロムナードでひっかける娼婦や、クライテリオンパーで友人たちにおごるドリンクの代金としては不十分だった。みんな畏怖に満ちた調子で、あいつはすさまじい借金潰けになっているにちがいないと話し合ったものだ。もちろん何かを質入れすることはできるが、経験から言って顕微鏡ではせいぜい三ポンド、骸骨でも三十シリングしか得られないのは知っていた。でも彼は週に最低でも十ポンドは使っているはずだった。みんな金銭感覚があまりなかったので、これでも我々にしてみればすさまじい豪奢な散財だ。ついに友人の一人がその謎を明かした。グロスリーは金儲けのすばらしい手口を見つけたのだ。みんな夢中になり感銘

を受けた。誰一人としてそんな巧妙な仕組みを思いつきはしなかっただろうし、思いついても実行するだけの勇気もなかっただろう。グロスリーは競売にでかけるのだ。もちろんクリスマスティーズなどではないが、ストランドやオックスフォード街の競売、それもプライベートハウスの競売で、安値で出ていて持ち運びの容易なものを何でも買った。そしてその買い物を質屋に持っていき、自分の支払った金額より十シリングか一ポンド高い金額で質入れする。これは、週に四、五ポンドくらいの金になり、そして彼は医学なんかやめてこれを生業にするんだと言っていた。同級生はみんな、それまで一ペニーたりとも稼いだことはなかったので、グロスリーに心底感心したのだった。

「なんとまあ賢いやつだ」とみんな。

「あれほど鋭いやつはいないね」

「ああいうのが将来大金持ちになるんだよ」

みんな知ったかぶりばかりで、十八歳のときに人生について知らないようなことは、そもそも知る価値のないことなのだと思います。残念ながら、捜査官に質問を受けたときにはみんなあまりに緊張しすぎて、答がすっぱり頭から消えてしまい、看護婦があとで答を手紙にするよう頼んだときにはみんな真っ赤になった。聞こえてきた話では、学長がグロスリーを呼びつけ、こってり油をしぼったそう。そして学業をこれからもないがしろにし続けるなら各種の懲罰を科すと脅した。グロスリーは頑固だった。学校ではもうその手のことはたくさんだといい、馬面の宦官野郎にガキ扱いされたくないと言う。みんななくたばちまえ、十九歳で自分はやり手なんだし、お前らに教わることもなかもうない、と。学長は、君は身体をこわすほど飲んでると聞いたと言った。うるせえ、自分はこの年の誰にも負けにくいくらい飲める、先週土曜もつぶれるまで飲んだし、来週だって酔いつぶれる予定で、それが気に入らないんなら、別のことをやってやるんだ、と。グロスリーの友人たちは、そんな侮辱を受けてだまっていられるかと心底同意していた。

だがついに鉄槌が下り、それがみんなに与えたショックはよく覚えている。確かグロスリーの顔を二、三日見ていなかったが、すでに病院にはますます不定期にしか顔を出さなくなっていたので、何か思ったにしても単にまた羽目を外してるのかと思っただけだったろう。一日かそこらでまた顔を出すよ、蒼白だろうが、どこかで女の子をひっかけてすてきな時をすごしたとかいう、すばらしい話を聞かせてくれるはずだ、と。解剖学の講義は朝九時からで、そこに遅刻しないようにするにはかなり急ぐ必要があった。この日、講師は自分の明晰な英語と見事な雄弁ぶりに目に見えて酔いしれつつ、人間の頭蓋骨のどこやらの説明をしていたのだが、それに注意を払う者はほとんどなかった。というのも生徒席の間では興奮したひそひそ話が交わされ、新聞がこっそり手から手へと回覧されていたのだ。いきなり講師は話を止めた。彼は術学的な皮肉を使った。そして自分の生徒たちの名前を知らないふりをした。

「どうやら私は、新聞をお読みの紳士をお邪魔しているようですな。解剖学はきわめて七面倒くさい科学であり、王立外科大学の規制のために、試験に合格できるくらいの関心をこちらに向けて頂くようお願いせねばなりません。しかしこれが無理だと思われる紳士がおいででしたら、外で自由に新聞の検討をお続けいただいてもかまいませんぞ」

この叱責が向けられた少年は、髪の付け根まで真っ赤になり、恥ずかしさのあまり新聞をポケットに突っ込もうとした。解剖学教授はそれを冷たく観察した。

「残念ながら、その新聞はポケットにはいささか大きすぎはしませんかな。よろしければ、こちらにお渡しいただくとありがたいのだが？」

新聞は列から列へと手渡されて講義室の一番底までやってきた。そしてかわいそうな若者に引き起こした困惑を意に介せず、高名な外科医はそれを受け取ってこう尋ねた。

「その新聞に、くだんの紳士殿がかくも夢中なる興味を覚えるような如何なる記事が載っているのかがええますか？」

それを手渡した学生は、無言でみんなが読んでいた一節を指さした。教授はそれを読み、みんなそれを黙って見守った。教授は新聞を下において講義を続けた。見出しは「医学生逮捕」というものだった。グロスリーは借金で商品を買ひ、それを質入れしていたのだった。どうやらこれは起訴犯罪であり、裁判官は彼を一週間再拘置していた。保釈は認められなかった。どうやら競売で物を買って質入れするのは、長期的には期待したほどの安定収入をもたらさず、自分で買い入れの元手を出さなくてよいものを質入れするほうが利潤が大きいと思ったようだ。講義が終わったとたん、みんな興奮してこの話でもちきりとなり、こう言わざるを得ないのだが、自分ではなんら財産を持っていなかったし、財産の神聖さについての感覚がまったく欠落していたために、彼の犯罪をあまり深刻なものとする者は誰一人としていないのだった。だが若者は自然とおそろしいものに惹かれるもので、二年の重労働から七年の懲役まで、彼が重い刑を宣告されると思わない者はほとんどいなかったのだ。

なぜかは知らないが、グロスリーがどうなったかどうやらまったく覚えていない。確か学期末近くに逮捕されて、審判が再開したのはみんなが休暇に入って帰省してからだったかもしれない。それが警察法廷の裁判官に不起訴扱いとなったか、それとも裁判にまで行ったのかは知らなかった。短期の収監、確か六週間くらいの刑になったような印象があった。というのかなり額の額は動かしていたからだ。でも、彼は姿を消してしまい、しばらくすると話題にももたれなくなったのは知っていた。私にしてみれば、あの事件をこれほどの年月が経ってからかくも鮮明に思い出せるほうが不思議だった。まるで古いスナップ写真のアルバムをめくりつつ、まったく忘れていた場面の写真を一度に見せられたかのようだ。

だがもちろん、この巨漢で灰色の髪とまだらの赤ら顔をした高齢者を見ただけでは、あのやせたピンクの頬の少年など認識できるわけがない。六十歳に見えたが、ずっと若いはずなのは知っていた。あれから何をしていたんだろうと思った。大して羽振りが良くなったようには見えなかった。

「中国では何をしていたんだい？」私は尋ねた。

「潮待ち人だよ」

「おやそうかい」

大した役職ではないので、その口調に驚きがにじみ出ないよう気をつけた。潮待ち人というのは中国の税関に雇われて、各種条約項で船やジャンク船に乗り込むのを仕事とする従業員で、確かその主要な任務はアヘン密輸を防ぐことだったと思う。通常は現役を退いた海軍の退役水兵や下士官たちだ。揚子江の上流各地で、連中が乗船するのは見かけた。水先案内人や機関士とは仲良くするが、航海士にはいささかそっけない扱いを受ける。ほとんどのヨーロッパ人よりは中国語を流暢にしゃべるようになり、中国人女性と結婚することが多い。

「イギリスを離れたときには、一山あてるまでは戻らんと誓ったもんだよ。で、結局あたらなかったな。当時は誰でも喜んで潮待ち人してくれたから、誰でもって白人はってことだけど、何も聞かれなかったよ。誰でもかまわなかったんだ。この職に就けてすぐく

嬉しかったなあ、いやね、雇ってもらったときにはもう文無しだったから。もともとは単につなぎの仕事のつもりだったんだが、そのまま続けたよ、性に合ったんだな、金儲けしたかったし、潮待ち人はやり方さえ心得ていれば、一儲けできるのがわかったんだよ。中国税関には二五年の相当部分を過ごして、辞めた時には、たぶん税関局長どもだってオレの懐にあったくらいの金がもらえたら大喜びだったろうよ」

彼は小ずるい意地悪な目つきでこちらを見た。言わんとしているところは見当がついた。だが確認しておきたい点の一つがあった。百ピアストルをせびられるのであれば、小出しにせず一気にやってほしかったのだ。

「その金はなくさなかつただろうね」

「そりゃもちろん。上海に全部投資して、中国を離れるときにはアメリカ鉄道債に全額注ぎ込んだ。安全第一がモットーだからな。犯罪者のことは知りすぎているから、自分ではそんな危険は犯さないんだ」

その答が気に入ったので、このまま残っていっしょにランチョンでもどうかと尋ねた。

「いや、遠慮しとく。もともと昼飯はあまり食わないし、どのみち家で食事が待ってるんだ。そろそろ行くよ」と立ち上がって私を見下ろした。「でも、そうだ、今晩うちを見物にこいよ、な？ ハイフオンの女の子と結婚したんだ。赤ん坊もいる。ロンドンの話ができる相手はなかなかいないし。夕食にはこないほうがいい。うちでは地元の飯しか食わないし、そんなの興味ないだろ。九時くらいでどうだ？」

「わかった」

すでにハイフオンを翌日出発する予定だとは話していた。彼はボーイに紙切れを持ってこさせて、住所を書き付けた。そして、十四歳の少年の手の上で、苦勞しながら書き留めた。

「ポーターに頼んで、リキシャの子に場所を説明してもらってくれ。オレがいるのは三階だ。呼び鈴はない。ノックしてくれ。じゃあ、また後でな」

彼は出て行き、私はランチョンのために屋内に戻った。

夕食後、リキシャを呼んで、ポーターの助けを借りて少年に行きたい場所をわからせた。すぐに、あのカーブした運河に沿った、ヴィクトリア朝の色あせた水彩画のように見える家の並んだ場所に向かっているのがわかった。その一つの前で止まり、少年はドアを指さした。実におんぼろに見え、あたりもあまりにむさ苦しかったので、ためらってしまい、少年がまちがえたのではないかと思った。グロスリーが現地人の居住区のこんなに奥深くに暮らし、しかもこんなボロ屋に住むとは考えにくかった。リキシャ少年に待つように告げ、ドアを開けると急階段が目前にあった。あたりには誰もおらず、通りは無人だった。もう真夜中を回っていたかもしれない。私はマッチを擦って、よろよろと階段をのぼった。三階につくと、もう一本マッチをともし、目の前に大きな茶色いドアがあるのを見つけた。ノックすると、ちょっとしてから小さなトンキン人女性が口ウソクを持ってドアを開けた。土茶色の貧困層の服を着ていて、頭にはきつい小さなターバンを載せている。唇とそのまわりの皮膚はピンロウで真っ赤に染まり、口を開けると、こうした人々を実に醜くしてしまう黒い歯と黒い歯茎をしているのがわかった。現地語で何かを言ったが、するとグロスリーの声が聞こえた。

「入れよ。来ないんじゃないかと思い始めてたぜ」

小さな暗い控えの間を通り、明らかに運河を見下ろす大きな部屋に入った。グロスリーは長いすに横たわり、私が入ると身を起こした。脇のテーブルに乗せた灯油ランプの明か

りで香港の新聞を読んでいたのだ。

「すわれよ。脚をのぼしてくれ」

「君の椅子を奪っちゃ悪いだろう」

「いいから。オレはこっちにすわる」

台所から椅子を持ってきて、そこにすわって椅子をこちらの端にのせた。

「あれが女房だ」と、私の後について部屋に入ってきたトンキン人女性を指さした。「それと角にいるのが子供」

その視線をたどると、壁際に竹のマットに乗せて毛布に覆われた、眠る子供が見えた。

「起きてるときは実に元気なガキなんだぜ。見てもらえたらよかったんだがな。間もなく二人目ができる」

彼女を見ると、その発言が正しいのはわかった。実に小さくて、手足も小さいが、顔は平らで皮膚は泥のようだ。引っ込み思案のようだが、人見知りしていただけかもしれない。彼女は部屋を出て、すぐにウィスキーのボトルとグラス二つとサイホンを持ってきた。あたりを見回した。黒いむき出しの木材の背後には仕切りがあって、たぶん別の部屋を隠しているのだろうと思った。そしてその仕切りの真ん中に画鋏で貼ってあるのは、イラスト紙から切り抜いたジョン・ゴールズワージーの肖像だった。謹厳で穏やかで紳士らしい肖像で、いったいそんなところで何をしているんだろうと思った。他の壁は白塗りだが、白塗りもむらがあり染みだらけだった。そこに画鋏で留めてあるのは、『グラフィック』や『ロンドン画報』のページから切り抜いた写真だった。

「オレが貼ったんだよ。そのほうが家らしくなると思ってな」

「なんでゴールズワージーを？ 彼の本を読むのか？」

「いや、本を書いているとは知らなかった。顔が気に入ったんだ」

床にはぼろぼろでみすぼらしいラタンのマットが一枚か二枚あり、隅には『香港タイムズ』が山積みになっていた。唯一の家具は手洗いスタンド、台所用の椅子が二、三脚、テーブルが一つ二つ、大きなチーク材の現地式ベッド。わびしく薄汚かった。

「そんなに悪くないだろ、え？ おれにはこれで十分だ。ときどき引っ越そうと思うんだが、もうたぶん二度と引っ越さないだろうな」そう言ってグロスリーはくすくす笑った。「ハイフォンには四十八時間のつもりで来て、そのまま五年いるんだ。実は上海に向かう途中だったんだよ」

彼は黙っていた。何も言うことがないので、私も何も言わなかった。すると、小さなトンキン人女性がなやら彼に話しかけ、もちろんその中味は理解できなかったが、彼が言い返した。そしてまた、一、二分だまっていたが、何かこちらにたずねたい様子でこちらを見ているように思った。何をためらっているのかわからなかった。

「東洋旅行でアヘンはやってみたか？」彼はついに、さりげなく尋ねた。

「ああ、一度シンガポールで。どんなものか試したいと思ったんだよ」

「どうだった？」

「正直言って、あまりすごいことは起きなかったんだ。きわめて精妙なる感情がくると思っていたよ。幻覚とかね、ほら、ド＝クインシーのやつみたい。でも感じたのは肉体的な気分のよさで、トルコ風呂に入って涼み部屋に横になっているときと同じような感覚で、それから心の働きが奇妙になって、考えることすべてがきわめて明晰に思えたよ」

「そうだろう」

「本当に二足す二は四で、それについては一分たりとも疑問がないように感じたんだ。

でも翌朝 いやひどかった！ 頭がくらくら。すさまじく気分が悪く、一日中寝込んで、ひたすら吐き続けて、そして履きながらみじめな思いでこう考えたんだ：こんなことが楽しいと思う連中がいるのか、と」

グロスリーは椅子で身体をのばして、低い陰気な笑い声をあげた。

「悪いブツだったんだろう。あるいは吸い過ぎたか。

あんたがカモなのを知って、すでに使用済みの吸いさしをよこしたんだろう。あれは誰でも吐き気を催すからな。ここでもう一度試したらどうだい？ ここにあるブツはまちがいなくいいぜ」

「いや、一度で私は十分」

「一、二服させてもらっていいかな？ こういう気候だと吸ったほうがいい。赤痢にならずにすむ。それにいつもだいたいこんな時間にちょっと吸うもんで」

「どうぞ」と私。

再び女性に話しかけると、彼女は声をあげて、何か耳障りな調子で呼びかけた。木製の仕切りの向こうから返事があり、一、二分すると老婆が小さな丸いお盆を持って出てきた。しなびて高齢で、入ってくるときにその染みのついた口でへつらうような微笑をこちらに向けた。グロスリーは身体を起こしてベッドのほうに移ると横になった。老婆はベッドにお盆を下ろした。そこにはアルコールランプ、パイプ、長い針、小さな丸いアヘン箱が乗っていた。老婆はベッドの上にしゃがみ、グロスリーの妻もベッドにあがって、脚を身体の下に折り込み、背中を壁にもたせかけた。老婆がその麻薬の小さな錠剤を針にさし、くすぶるまで炎であぶり、パイプに差し込むのをグロスリーは見守った。老婆がそれをグロスリーに手渡し、そして彼は大きく吸い込むと、煙をしばらく肺にためて、それから濃い灰色の煙として吐き出した。そしてパイプを老婆に戻すと、彼女はもう一本作り始めた。だれも何も言わない。グロスリーは三本を立て続けに吸って、深く座り直した。

「ああやれやれ、これで気分がよくなった。かなり落ち込んだ気分だったもんでな。こいつはすばらしいパイプを作ってくれるよ、このパパアはな。本当にいらぬのか？」

「本当に」

「好きにしてくれ。じゃあお茶でもどうだ」

そして妻に何か言うと、彼女はベッドから駆け下りて部屋を出た。そして間もなく小さな陶器のポットに茶を入れたものと、中国のボウルを二つ持ってきた。

「ここではみんな吸うんだ。やりすぎなければ害はない。オレは一日二十から二十五本しかやらん。そのくらいにしておけば何年も続けられる。フランス人の中には一日四十とか五十とか吸うのもいるが、それはやりすぎだ。オレは絶対やらんね、ただし時に大盤振る舞いしたいときは別だが。でもおれには何の害もないと言わざるを得ない」

二人で茶を飲んだ。色の薄い、かすかな香りで雑味のない茶だ。それから老女がまたパイプを詰め、またもう一本詰めた。彼の妻は戻ってきてベッドにのぼり、彼の足下で身を丸めると眠った。グロスリーは一度に二、三本吸い、吸っている間には他のことは意に介さないようだったが、でもその合間には饒舌だった。何度かもう失礼すると言ったのに、行かせてもらえなかった。時間はどんどん過ぎた。彼が吸っている間、何度か私はうつらうつらした。彼は自分のことをすべて語った。次から次へと。私が口を開くのは、相づちをうつときだけだった。彼の話のままお伝えすることはできない。何度も行ったり来たりしたからだ。ガラガラした話しぶりだし、話の筋が通っておらず、まず後のほうの話をしてから、最初のほうに戻りという具合で、だからこちらで並べ替えてやらねばならぬ

かった。ときどき、しゃべりすぎたのではないかと恐れて、彼が何かを隠そうとするのに気がついた。ときには嘘をついて、こちらに向けた微笑や目つきから真相を察しなくてはならなかった。自分の感じたことをあらわすことばが見つからず、俗語的な比喻や陳腐で下品な言い回しから言いたいことを再現しなければならなかった。そしてずっと私は、こいつの本名は何だったかを自問し続けた。もうすぐそこまで出かかっているのに、思い出せないのが苛立たしかったが、それでもそれがわからないからといって何がいけないのか、私にはまったくわからなかった。当初彼は私を怪しんでいた。どうやらこの長年にわたり、ロンドンにおけるハメ外しと収監は、彼の心を苛む秘密だったらしい。いつもいづれ誰かがそれをつきとめるのではという恐れにとらわれ続けてきたのだ。

「変だよなあ、あんたがいまだに病院でのオレのことを思い出せないってのは。物覚えがかなり悪いんだろ」と彼は意地悪な目つきでこちらを見た。

「待ってくれよ。もう三〇年近くも前だろう。その後何千人も会ってるんだから。私が君を覚えている義理もないし、君が私を覚えている義理だってないはずだ」

「そりゃそうだ、確かにないな」

それでなぜか安心したようだ。やっと十分に吸ったようで、老女はこんどは自分用に衣服詰めて吸った。それから子供が寝ているマットのところに言って、その横に寝転んだ。あまりに身動きしなかったから、そのまま一気に寝てしまったのだろう。やっとその場を辞去したときには、リキシャの少年は足台で寝てしまっており、あまりに熟睡していたので、揺り起こさねばならなかった。自分の居場所はわかっていたし、空気と運動がほしかった。だから少年には数ピアストル渡し、歩いて帰ると告げた。

私が持ち帰ったのは不思議な物語だった。

グロスリーが中国での二十年について話すのを聞くのは、一種おそろしいことだった。金はあって、いくらかは知らないが、話しぶりからすると一万五千から二万ポンドというところか。潮待ち人としては大金だ。まともなやり方で手にできる金額ではないし、この稼業についてはあまり詳しくないものの、突然だまったり、下卑た笑いをうかべたりほめかしたりするのを見ると、たぶんそれなりの実入りが期待できるのであればどんな取引だろうとためらったりはしなかったらしい。たぶんアヘンの密輸以上に実入りのいい稼業はなく、その地位を利用すれば安全に儲かる形でそれが実施できたのだろう。どうやら上司たちはグロスリーを疑うことも多かったが、でも処分を下すだけの悪行の証拠は手に入らなかったらしい。だから港から港へと異動させるだけで済ませていたが、彼はくじけなかった。見張られていたが、でも賢かったのをつかまらなかった。自分の悪行について話しすぎるのを恐れる気持ちと、自分の巧妙さを自慢したい欲望とで引き裂かれているのがわかった。彼は中国人に信頼されていたのだと自慢した。

「オレが信頼できるとわかったようで、それがオレにとってもやる気のもとだったよ。中国人を裏切ったことは一度もない」

それを考えると、彼は正直者の満足感で満たされたのだった。中国人は、彼が骨董品に目がないと知って、ちょっとしたものをあげたり、買ってもらいにきたりするようになった。それがどうやって手に入ったかなどと尋ねたりはせず、安値で買った。そしてよい品が入ると北京に送ってかなりの利潤で売り払った。思えば彼の商売の皮切りは、競売品を買って質入れすることだった。二十年かけて、みすばらしい横流しとセコいごまかしにより、彼は一ポンド、また一ポンドとため込み、そして稼ぎは全額上海に投資した。儉約生活を送り、給料の半分は貯金にまわした。無駄遣いしなくなかったので決して休暇も取ら

ず、束縛から自由でいたかったので中国女にも手を出さず、酒も飲まなかった。突き動かす野望はたった一つ、イギリスに戻って少年時代の自分から奪い去られた暮らしを生きることだった。求めるものはそれだけだった。中国の生活は、夢の中のような生活だった。身の回りの生活は一切気にとめない。その色彩も奇妙さも、喜びの可能性も、彼にはまったく何の意味もなかった。目の前には常にロンドンの幻影があった。クライテリオンバーで、片足をレールに載せて立つのだ、エンパイアとパヴィリオンのプロムナード、拾った娼婦、音楽ホールでの半喜劇とゲイエティでのミュージカルコメディ。これが人生と愛と冒険だった。これがロマンスだった。これが彼の全身全霊で渴望しているものだった。これだけの年月を隠者のように過ごしつつ、目指すのはただ一つ、再びあれほど下世話な人生を送ることだというのは、確かなかなかすごいものがある。人格の強さにはちがいない。

「つまりな、休暇でイギリスに戻ることができたにしても、行かなかっただろうよ。二度と戻ってこないですむまでは行きたくなかったんだ。それにやるならばっちり決めて帰りたいかったんだよ」

空想では、毎晩イブニング用の正装をして、ボタン穴にクチナシを刺して出かけるのだ。そしてロングコートと茶色の帽子とオペラグラスを肩にかけてダービーに行く。女の子たちを値踏みしては、気に入ったのを選びだす。ロンドンに到着した晩には泥酔すると決めていた。もう二十年も酔っぱらっていないのだ。この仕事ではそんなことはできなかった。いつも周囲に気をつけていなければ、帰国の船上でも酔わないように注意した。ロンドンに着くまでまつのだ。すごい一夜になるぞ！二十年も夢見てきた一夜だ。

なぜグロスリーが中国税関を辞めたかは知らない。だんだん立場がまずくなってきたのか、それとも契約が切れたのか、あるいは事前に決めた金額を貯め込み終えたのか。だがついに航海した。二等船室だ。ロンドンに着くまで散財する気はなかった。ジャーミン街に部屋を借りた。いつもそこに住みたいと思っていたからだ。そしてまっすぐ仕立屋にいて、服を注文した。最新流行のものを。それから街巡りをした。記憶とはちがっていて、ずっと交通量が多く、彼は混乱してちょっと戸惑った。クライテリオンに行ってみると、自分がとぐるを巻いて酒を飲んだバーはもうなかった。レスター広場には懐具合がいいときに食事をしたレストランがあったのに、見つからなかった。たぶん取り壊されたのだろう。パヴィリオンに行ってみたが、女はもういない。いささか辟易して、そのままエンパイアに向かったら、プロムナードは壊されたのを知る。これはかなりショックだった。わけがわからなかった。とはいえ、二十年も経てば変わるのも覚悟しなければならぬし、他にすることがなくても、飲んでもくれることはできる。彼は中国で何度かマラリアにかかり、気候の変化でそれがぶりがえしたようで、あまり気分がよくなく、四、五杯飲んだらもうベッドに入るのがやっとだった。

その初日は、その後続いた多くの日々の鳥羽口でしかなかった。何もかもダメだった。あれもダメ、これもダメと語るうちに、グロスリーの声はすねたようになり、苦々しげになった。昔の場所は消え、人々は代わり、友人もできず、不思議に孤独だった。大都市でそんなことがあるとはまったく予想外だった。それがいけないんだ、ロンドンではだかくなりすぎた、九〇年代初期のような陽気で親密な場所ではなくなっていた。バラバラになってしまったんだ。女を何人が買ってみたが、昔知っていた子たちほどよくはなく、以前のようにおもしろくはなく、また向こうも彼を変なヤツだと思っていることにもだんだん気がつき始めた。四十をちょっと越えたばかりなのに、ずいぶん老人だと思われていたのだ。バーでたむろする若者たちに水を向けたら、あっさり無視された。だいたいこの若い

連中は酒の飲み方も知らない。お手本を見せてやろう。毎晩へべれけになった。このろくでもない場所では他にすることがなかったからだが、でも何ということか、翌日はものすごく気分が悪くなる。たぶん中国の気候なんだろう。医学生だった頃は毎晩ウィスキーをボトル一本空けても、翌朝はびんびんしていたのに。だんだん中国のことばかり考えるようになった。自分が気がついているとも知らなかったいろいろなことが思い浮かんだ。あそこでの人生は悪くなかった。あの中国娘たちを遠ざけていたのは愚かだったかも、なかにはずいぶんきれいでかわいいのもいたし、ここのイギリス娘どもみたいにお高くとまってない。自分ほどの金持ちなら、中国ではお大尽暮らしができた。中国娘をつれてクラブに行けば、すてきなやつらがたくさんいて、酒を飲んでブリッジをしてビリヤードもできる。中国の見せや、通りの行列あれこれや、荷物をかついだ苦力たちやジャンク船のいる港や、岸辺にパゴダのある川を思い出した。おかしなものだ、中国にいるときは、中国なんかどうとも思わなかったのに、今はもう頭から追い出せない。妄執になってしまった。ロンドンなんか白人の居場所じゃないと思い始めた。すっかりダメになってしまった、要するにそういうことなんだ、そしてある日、中国に戻ったほうがいいんじゃないかとふと思いついた。もちろんばかばかしい話だ、ロンドンですてきな時間を過ごすためだけに二十年も泥のように働いてきたんだし、中国に行って暮らすなんて馬鹿げてる。これだけ金があれば、どこでだってすてきに過ごせるはずだ。でもなぜか、中国のことしか考えられなかった。ある日、映画に行くとき上海の場面が出てきた。それで決まった。もうロンドンはたくさんだ。大嫌いだ。出て行こう、二度と戻ってくるまい。故郷に帰って一年半たったが、それは東洋での二〇年より長く感じられた。マルセイユを出る船に乗り込み、ヨーロッパ大陸の岸辺が海に沈むのを見て安堵のため息をついた。スエズについて初の東洋に触れると、自分の行動が正しいと確信した。ヨーロッパは終わりだ。東洋しかない。

ジブチで上陸し、コロンボとシンガポールでも上陸したが、サイゴンでは船は二日停泊したのに、船上にとどまった。かなり飲んでおり、いささか気分が悪かったのだ。でもハイフォンにたどりつき、四十八時間停泊することになると、まあちょっと見物でもするかという気分になった。中国につく前の最期の停泊地だ。彼は上海を目指していた。上海ではホテルに行って、しばらくあたりを見て、女の子を捕まえて自分の家を構えるつもりだった。ポニーを一、二頭買って走らせよう。すぐに友だちもできる。東洋ではみんな、ロンドンみたいに堅物でよそよそしくはないんだ。上陸するとホテルで夕食を摂り、夕食の直後にリキシャに乗り込んで、女がほしいと言った。少年は私がもう何時間もすわっているこの薄汚いアパートに連れてきた。そしてそこに、あの老婆といまや彼の子供の母親である娘がいた。しばらくすると老婆が一服吸わないかという。アヘンはやったことがなく、これまでずっと怖がっていたのだが、いまや断る理由もなさそうに思えた。その晩は気分がよく、娘は実に抱きごちのいい小柄な子だ。ちょっと中国娘のようで、小さくかわいく、人形のようなだ。で、パイプを一、二服吸った。そしてとても幸せで快適に感じ始めた。その晩はずっとそこで過ごした。眠りはせず、とても安らかに横になって、いろいろ考え事をしたのだ。

「船が香港に向けて出航するまでそこにいたよ。そして出航した後もオレはそのまま残ったんだ」

「荷物はどうした？」

というのも私は、まったく無意味かもしれないのだが、人々が人生の理想の面と現実的

な細部とを組み合わせるやり方に興味があるのだ。小説で、文無しの恋人たちが長く高速なレーシングカーに乗って遠くの丘を走ったりするとき、私はいつもその金はどこから出てきたのか知りたくなってしまふ。そしてヘンリー・ジェームズの登場人物たちは、自分の状況を精妙に検討している間に、どうやって肉体の生理的な必要性に対処したのだろうと、私は昔から自問してきたのだ。

「服の入ったトランクーつだけだったからな、昔から着の身着のまま以上のものはほしいと思わなかったんだよ。娘とリキシャに乗って取りにいった。次の船がくるまでのつもりだったんだよ。つまり、ここだと中国にすごく近いから、ちょっと待ってみて慣れてみようと思ったわけよ、オレの言ってることわかるかな、先に進む前にな」

わかる。いまの台詞でこの人物が理解できた。中国の寸前になって、勇気がなくなってしまったのだ。イギリスは実にひどい失望だったので、いまや中国を試してみるのも怖くなったのだ。中国がだめなら何もなくなってしまふ。何年にもわたり、イギリスは砂漠の屋気楼のようなものだったが、でもその魅力に屈してみると、あのがやく水面や椰子の木や緑の草原は、うねる砂丘にすぎなかったのだ。彼には中国があり、それを二度と見ない限りその屋気楼は消えることがない。

「なぜだかそのまま居着いたんだ。ほれ、はっと気がつくといつのまにか年月が過ぎてるだろう。やりたいことの半分もやる時間がないみたいだ。結局、オレはここで快適なんだよ。この婆さんは実にいいパイプを詰めるし、彼女も実に陽気な女でな、あの娘は、そして子供もいる。実に元気なガキだぜ。ここで幸せなら、他のところへ行ったら仕方ないだろう？」

「ここで幸せなのか？」私は尋ねた。

広いむき出しの薄汚れた部屋を私は見回した。まるで快適ではないし、家にいるという気分を与えてくれそうな、どんな小さな私物すらも置かれていなかった。グロスリーは、この曖昧宿でもあり、ヨーロッパ人のアヘン窟でもあるいかかわしい小さなアパートを、そこに暮らす老女ともどもそのまま受け入れ、そして暮らすというよりはそこにキャンプしているだけで、未だにまるで翌日には荷物をまとめて出て行きそうだった。しばらくして彼は私の質問に答えた。

「生涯でこんなに幸せだったことはないな。ときどき、いつか上海に行こうかなとは思うんだ。でもたぶん決していかないだろう。そしてもちろん、神に誓ってイギリスは二度と見たくない」

「ときどきひどく寂しくなって話し相手がほしくならないか？」

「いいや。ときどき中国の貨物船が入ってきて、イギリスの航海士がスコットランドの機関士が乗っていると、乗船して昔話をするんだ。ここにもじいさんがいて、税関にいたフランス人なんだが、英語を話すんだ。ときどき会いに行くよ。でも実は、誰にもあまり会いたくもないんだ。いろいろ考えるんだよ。他人がオレの考えを邪魔するといらいらするんだ。オレは大して吸うわけじゃない、な、朝に腹を鎮めるために一、二服やるだけで、でも夜までは本格的には吸わない。そして夜に考えるんだ」

「どんなことを考える？」

「ああ、いろんなことだよ。時にはロンドンが子供時代にはどんなふうだったかとか。でもほとんど中国のことだな。中国での楽しい時間や金儲けした手口や、かつての知り合い、それに中国人たち。かなり危ない橋もときどき渡ったが、いつも結局は切り抜けたよ。それと、モノにできたかもしれない女の子たちがどんな具合だったろうかと思うん

だ。一人、二人手元に置かなかったのはいまでは後悔しているよ。すごい国だなあ、中国は。あの店がいいよな、老人がしゃがみこんで水パイプを吸っててさ、それとあの店の看板。それに寺院。ああまったく、あれこそ人の住むべき所だよ。あれこそ人生」

　　蜃気楼が彼の目の前に映し出された。幻影が彼を捉えていた。彼は幸せなのだ。その最期はどうなるだろうかと思った。まあ、それはまだ先の話だ。生涯初めて、彼は現在を手中に握っていたのかもしれない。

第44章

ハイフォンから香港へは貧相な小さい蒸気船に乗った。これは沿岸部をあちこちフランス領の港に停まりながら、荷を積み卸しする船だった。とても古く汚い船だ。私以外の乗客はたった三人。二人は海南島に向かうフランスの伝道師たちだ。その一人は大きな四角い灰色のひげを生やした老人で、もう一人は若く、丸い赤ら顔で、ひげが小さくまばらな黒い固まりになって生えている。この二人はもっぱら一日中聖務日課書を読んで過ごし、若いほうは中国語を勉強していた。そしてあと一人、エルフェンペインというユダヤ系アメリカ人がいて、こちらは靴下の行商をしていた。背の高い人物で、がっしりして力強く、身振りはぎこちなく、長く黄ばんだ顔に、大きくまっすぐな鼻と黒い目をしている。騒々しい大声。攻撃的で短気。船を罵り、航海士を罵り、ボーイたちを罵り、食事を罵った。何一つ満足しない。しょっちゅう怒りで声を荒げているが、その理由は見本品の箱がきちんと配置されていないとか、熱い風呂がないとか、ソーダがぬるかったとか。彼は肩にチップのついた（ケンカを売られやすい）人物だった。誰もが自分を小馬鹿にしたり傷つけたりしようという陰謀に参加しているかのように思えたので、絶えず船長や航海士をぶん殴ってやると脅し続けていた。船で英語を話すのは私だけだったので気に入られたらしく、甲板に五分もすわっていれば隣にすわり、最新の苦情を話してくれるのだった。ほしくもないドリンクをおごってくれて、拒否するとこう叫ぶ。おいおい、何だよ、つきあえよ、そして勝手に頼むのだ。困惑したことに、何かと私を兄弟呼ばわりする。嫌なヤツだったが、ときどきおもしろかったのは認めざるを得ない。同じユダヤ人たちについてきわどい言い回しであれこれ悪口を言うので非常に楽しかった。ひっきりなしにしゃべり続けた。一分たりとも一人でいるのを嫌い、こっちがつきまとわれて嫌がるなどとは思えない。だが一緒にいると、絶え間なく機嫌を損ねる種を探し続けるのだ。こっちの痛いところに遠慮なく突っ込み、それをかわしただけでも馬鹿にされたと思ひ込む。だから一緒にいるとえらく疲れる。こういうユダヤ人を見ると、ポグロム^{*1}もうなずける。彼に平和会議での小話をした。ある時、ムッシュー・パデレフスキーはウィルソン氏とロイド＝ジョージ氏とムッシュー・クレマンソーに対し、ダンツィヒはポーランド領だと強硬に主張していたという話だ。

「ポーランド人がダンツィヒを獲得できなければ、その失望はきわめて大きなものとなり、暴動がおきて、ユダヤ人たちを虐殺することでしょう」とパデレフスキー氏。

ウィルソン氏はむずかしい顔つきをして、ロイド＝ジョージ氏は首を振り、クレマンソー殿は顔をしかめた。

「だがポーランドがダンツィヒをもらったらどうなるね？」とウィルソン氏。

*1 東欧やロシアでのユダヤ人虐殺。

バデレフスキー氏の顔が輝いた。そしてその獅子のようなたてがみを揺すった。

「ああ、そうなれば話はまったく別です。彼らは大いに熱狂し、熱狂のあまり暴動が起きて、ユダヤ人たちを虐殺することでしょう」

エルフェンベインは、ちっともおもしろがらなかった。

「ヨーロッパはダメだな。オレに任せてくれたら、ヨーロッパなんか丸ごと海に沈めてやる」

そこで私はアンリ・デプリスの話をした。生まれはルクセンブルグ大公国だった。大人になってからの思索の結果、彼は行商人になった。これでもエルフェンベインはおもしろがってくれなかったのだから、サキのためにため息をつきつつ、私もやめた。この百パーセントアメリカ人の意見を容れて、イギリス人にはユーモアのセンスがないという見解を諦めて受け入れざるを得ずまい*2。

食事時になると、船長がテーブルの上座に座り、司祭二人がその片側に、そしてその向かいにエルフェンベインと私がすわった。

船長はボルドー出身の陽気で小柄なごま塩頭の人物で、年末に引退して、自分のぶどう園で自分のワインを作るのだという。

「Je vous enverrai unfit, mon pete (一本お送りしますよ、神父さん)」と彼は老神父に約束した。

エルフェンベインは流暢だが下品なフランス語をしゃべった。そして言葉尻をとらえてこだわった。何はなくとも元気だけはある。フランス人たちは礼儀正しく振る舞ったが、心底彼を嫌っているのはすぐにわかった。多くの発言は異様に気遣いに欠け、給仕のボーイを呼ぶときに卑猥な言い回しを使ったときには、司祭たちは鼻の頭を見て聞こえないふりをした。だがエルフェンベインは議論好きで、あるランチオンでは宗教の話しを始めた。そしてカトリック信仰について、どう見ても趣味がいいとはいえない各種の発言を始めた。若い司祭は顔を紅潮させて何か言いかけたが、年配の司祭が何か小声で言ったので黙った。だがエルフェンベインが直接問いかけると、老人は穏やかに答えた。

「こうした問題では誰も無理強いなどできません。みんな自分が好きなように信じればよいのです」

エルフェンベインは長々と論をぶったが、誰もそれに答えなかった。でも意気消沈した様子はなかった。後で、連中は自分議論に答えられなかったのだと私に語る。私は答えた。

「答えたくなかっただけだと思いますよ。とても無礼で粗野で礼儀知らずなやつだと思っただけじゃないんですか」

「オレが？」彼は驚愕して叫んだ。

「だって向こうは何も悪いことをしていないし、生涯を神様への奉仕だと思っているものに捧げてきたんですよ、それをあなたは嬉々として侮辱したじゃありませんか」

「侮辱なんかしてないよ、合理的な人間として論点を挙げただけだ。議論を始めたかったんだよ。向こうさんの気持ちを傷つけちゃったかなあ？ だって、絶対そんなことしたくないじゃないか、なあ」

その驚きぶりがあまりに心からのものだったので、私は笑ってしまった。

「あなたは向こうが最も聖なるものとして信仰しているものをせせら笑ったんです。た

*2 訳注：アンリ・デプリはサキの短編。

ぶんとても無知で無教養な人物だと思ってますよ。あるいは意図的に侮辱しようとしたんだと思ってるんじゃないかな」

驚きでアゴが落ちた。たぶん当人は本当に、自分が楽しくひょうきんなつもりでいたのだろう。そして、聖務日課書を読んでいる老司祭のほうを見てから、歩み寄った。

「神父さん、こちらの友人が言うには、オレの発言であんたたちの気持ちを傷つけたそうなんだが。オレはそんなつもりはまったくなかったんだよ。気を悪くするようなことを言ったなら、是非ともお許しいただきたい」

司祭は顔を上げてにっこりした。

「気になさいますな、ムッシュー。何事ありませんから」

「なんとか埋め合わせをせにゃならんと思うんだよ、神父さん。だからもしよろしければ、お宅の救済資金に寄付をしたいんだがね。ここにたくさんピアストルがあって、ハイフォンで換金する暇がなかったんだよ。だからこれを受け取ってくれたらこっちもありがたいんだが」

神父が返答するよりはやく、彼はズボンのポケットから札束や銀貨を一握り取り出すとテーブルに置いた。

「しかしこれはあまりにご厚意が過ぎます。大金ではありませんか」と司祭。

「持ってってくださいよ、オレは使いようがない。香港で換金したらひどいレートで損をするだけだ。受け取ってくれたらこっちのためにもなる」

本当に大金で、司祭はいささか後ろめたいような顔つきでそれを見つめた。

「当布教団はとても貧しいのです。たいへんありがたく存じます。御礼のしようもございません。もう何をすればいいのやら」

「そうだな、オレは無神論者だがね、神父さん、でも次のお祈りのときにオレの名前も覚えといて入れてくれてもパチは当たらねえと思うぜ、それとお袋の名前、レイチェル・オーバーマイヤー・カハンスキーってのも入れといてくれたら、それでだいたいおあいこって感じかな」

エルフェンベインはどたどたと、私がすわっているテーブルの端に戻ってきた。私はコーヒーと一緒にブランデーを一杯飲んでいた。

「埋め合わせはしたよ。精一杯のことだよな。なあ兄弟、トランクの一つに男性用ガーターがかなりあるんだがね、オレの特等船室にきたら、一ダースほどあげるよ」

その行商で彼はバタヴィアから横浜まで行き来しており、あの会社、この会社と行商を続けてすでに二十年になる。

「教えてくださいよ、ずいぶんいろんな人に来てきたはずですよ、それで人類についてどうお考えですか？」

「ああ教えてやるとも。みんなゴロツキだな。みんなが親切にしてくれるのには驚くよ。病気とかそんなのだと、まったくの見知らぬ人が実の母みたいに看病してくれるんだ。白人、黄色、茶色、みんな同じ。驚くほど尽くしてくれる。でもみんな馬鹿で、大馬鹿者ばっかなんだ。無^{かぶら}ほどの脳味噌もないんだぜ。自分の故郷の街ですら道を教えられない。人類についてのオレの意見を一言で聞かせようか、兄弟。心はまっとうなんだがね、おつむがまるっきり非効率な器官なんだよ」

こんどこそ本書はおしまいだ。